昭和58年1月20日 第3種郵便物認可 平成元年9月1日発行第84号（毎月1回1日発行）
ミュージシャン参加の生活必需マガジン
ARENA37℃
アリーナ サーティセブン
BUCK-TICK
UNICORN
JUN SKY WALKER(S)
LÄ-PPISCH
RED WARRIORS
De-LAX
THE POGO
THE STREET BEATS
ZIGGY
UP-BEAT
KENZI & THE TRIPS
JUSTY NASTY
KUSU KUSU
カステラ
THE ALFEE
RANMARU(THE STREET SLIDERS)
ROGUE
REBECCA
FENCE OF DEFENSE
THE PRIVATES
ROCK'N ROLL SPECIAL
SEPTEMBER 1989 NO.84
9
BINETSU
¥570

Written by 松浦靖恵、佐伯明(P11〜P13)
Photo by 植田信

VOCAL
延原達治

他に趣味ないから、一人で本読むかレコード聴くか…。地味な奴だよね(笑)

――最近、興味あることは?

参院選に猪木が立候補したことですかね。

――マジ?

うん。あれはね、マジに興味あるんだよね。オレ、本気で1票入れようかなと思ってんだよ。

――アントニオ猪木の立候補は別としても、新聞を読んだり、世の中の情勢が気になったりする方なの?

気になるんだよ、これが。新聞はとにかくスミからスミまで読んじゃうし、雑誌とか週刊誌とかほとんど読んでるんだよね。

――文字が好きなのかな。

うん。それは言える。ツアーの移動中とかホテルでボケーッとしてる時とか、よく読んでるもん。

――今、何を読んでる?

「反骨」っていうの読んでる。おもしろいっていうかさ、オレって何か表に出て脚光をあびてるような英雄話よりも、その裏で動いてる、地味な存在なんだけどなくてはならなかった人の話って魅かれるんだよ。

――スケジュール的にもよく読むような時間があるよねっていうくらい読んでるでしょう?

うん。なんかね、読んでないと落ち着かないんだよ。音楽とはまた別なんだけど。週刊誌はほとんど全部読んでるし、単行本でしょ、週刊プロレス、ベースボール・マガジン、新聞etc…。本当によく読んでる時間があると思う。

――で、音楽もでしょ?

そうなんだよ。基本的に〝ながら族〟ができないから。好きな音はいつも聴いていたいしね。オレさ、家にいるの好きだし、他に趣味もないから、本を読んでるかレコードを聴いてるかなんだよ、結局。地味だねぇ―。

――好きな作家は?

堺屋太一。落合信彦。

――ジャーナリスト系統だ。

うん。ルポルタージュもんって好きだから。あとは生きざまもの(笑)。真実を追求していくとかさ、歴史の影で生きてきた人とか。「反骨」もそうなんだよ。スポット・ライトも当たってない人なんだけど、実はその人物がいなかったらっていう人の生いたちをつづったものとか好きだよね。

――月に本代っていくらくらいかけてる?

レコードと本ぐらいなんだよ、金を使うのって。だからそんなに金をかけてるとは思わないんだけど、そうだねぇ、だいたい1~2万円くらいじゃないかな。

最近気に入ってたのは、ボブ・マーリーの訳詞が全部載ってるのがあって、それに何十人かの作家が絵を書いてるのね。絵本みたいなんだけど、それはオススメだよ。

――自分で本屋で見つけてくるの?

うん。レコード屋と本屋は何時間いてもあきないんだよね。出て来ないもん。

――ひとりでいるのが基本的に好きなのかもしれない…!?

苦にならないんだよ。ただ何もしないでジッとしてるのはダメだけど。あとはねぇ、昔っから映画が好きだった。これもひとりで見に行くのが苦になんないから、時間があって、見たいのがあったら映画館に飛び込んじゃうんだよね。

――最近、見た映画は?

「Aサイン・デイズ」

――石橋凌さんの映画。

そうそう。あとはビデオを借りて見てるね。

――アリーナ37°Cでは2年半も連載をやってるけど、文を書くのも好き?

好きなんだろうねぇー。バカバカしい話しか書いてないんだけど(笑)。

――ちなみに原稿料は?

オレ、知らないんだよ。マネージャーの並木が横領しているという噂もある(笑)。まぁ、やめてくれってケニーが言ってもやり続けようと思ってるから、ケニー、覚悟しとけよ、なんつって(笑)。いやぁ、いつも〆切り守んなくてゴメンな。

●**本名** 延原達治 ●**生年月日** 1963年10月26日 ●**星座** さそり座 ●**血液型** AB ●**出身地** 岡山県岡山市 ●**身長** 169・5cm ●**体重** 51~52kg ほとんど変らないでやんす ●**最終学歴(笑)** 東京都立蒲田高校卒 ●**趣味** オレはいい趣味してるよ…って答えじゃないか、ジャンジャン(笑)。趣味はねぇ~、いちばん基本なのはレコードかな。知らないうちにいっぱいになっちゃったね。好きな音ってどんどん集めたくなるっていうか、聴きたくなっちゃうんだよ。あとは水そう関係かな。でも最近は森原がガンバッてるから、私は細々とやっておりますですヨ。あと、プロレス。これは昔から好きだね。●**クセ** オレ、いばっちゃうのがクセかもしれない(笑) ●**コンプレックス** Be My Babyなんっつってね(笑)。昔はもっと背が伸びないかななんて思ってたけど、今はですねぇ、このオレの存在自体がコンプレックスとでも言っておきましょーか。●**性格** 極端だよ。明るいのと暗いのと。ホントはひとりでいるのが好きなのかもしれないけど、ひとりじゃいられないワケ。で、別に誰かそばにいてもその人と何かするわけじゃないんだけど、誰かいたらいいなって。不思議なバイオリズムがあるんだけど、ものすごくはしゃぐ時とどうしても打ちとけない時があるのね、人に対して。で、本当はいつも人に対してニコニコ接していたいのに、それがコントロールできないわけ。それがまた自分でイヤダなあなんて思ってたり。結構、無器用なのかもしれない。いじけたり、すねたりするしね。●**特技** バックドロップ(笑) ●**年収(笑)** エンゲル係数128% オレってカワイイ? ●**好きな食べ物&ドリンク** ラーメン ひじき 納豆 リゾット ザリガニ(クロウフィッシュ) お酒はだいたい好きだけど、バドワイザーが特に好き ●**嫌いな食べ物&ドリンク** なまもの 野菜 トマト・ジュース 野菜ジュース ●**自分自身の自慢は?** 日本の国産種なら魚の名前はほとんど言える。好きなんだよね。図鑑を見たりするの。子供の頃からずっと好きでさあ、これは自慢しちゃうよ、オレ。●**好きな女性のタイプは?** 渡辺典子 カトリーヌ・ドヌーブ ●**アリーナ37℃に腹立つ事は?** レギュラー・ページも続行中ですし私は文句は言いませんが、強いて言うとするならば、音楽専科社社長のケニー高橋への仕打ち! 金髪でもいいじゃないか!

最近はカリプソ状態。凝り性だから ハマルとドップリいっちゃうんだ。

手塚稔 GUITAR

——最近、興味のある事は?

最近はね、カリブ海沿いの音楽に凝ってるんですよ。これからの季節にピッタリなんだけど、実は以前からハマッててね。レゲエとかカリプソとか聴きながらボーッとしてるのがすごく心地良いの。

俺って一度ハマるとすごく凝り性だからドップリつかっちゃうんだよね。たとえばボブ・マーリーが好きになったら一度に10枚くらいレコード買ってきちゃったりしてずーっとレゲエ状態になってるしね。今年に入ってからはカリプソ状態だね、ずっとハマってんの。

アメリカ行った時に前から聴いてみようかなと思ってたんだけど、いったい何を買っていいんだかわからなかった〝ソカ〟を、やっと手に入れたのね。そのものズバリのタイトルで『ディス・イズ・ソカ』っていうアルバムなんだけど、それが結構アタリで気に入ってますね。

——昔から凝り性なの?

うん。昔っから。なんかね、ひとつのものにのめり込むと徹底的に知りたくなっちゃうんだよね。でもこれでも落ち着いた方で、昔はとにかくいろんなことに首をつっ込んじゃって、あれもこれもって収拾つかなくなってドツボにハマル状態になってたんだけど、ここ何年かは好きなものや興味を持つものが、ちゃんと自分でもわかってきてるっていうか…、ハマリ込み具合の調節ができるようになったみたい。でもね、その反面あきっぽい性格でもあるから不思議なんだけど(笑)。今までいちばん長くハマッてるっていったらオレにとっては〝音楽〟なんだよね。小学校の時からだから10年くらいになるじゃない? すごいことだよなぁ…なんて自分で自分にビックリしたりして(笑)。

趣味としてはギターがいちばん長いね。家にいても年がら年中ギターを弾いてるし、気に入ったギターはすぐ手に入れたくなっちゃうし…。あとねぇ、今よく演ってんのが民族っぽいものをおいてある店で買ったオカリナとウクレレ。これで「気まぐれロメオ」が弾けちゃうという(笑)。独自のコードをあみ出してるからね、スライド・ギターできちゃうんだよ、オレ。家じゃこんなことばっかやってんの。

——ギターはいっぱい持ってる?

持ってるよ。欲しいって思ったらいてもたってもいられなくなっちゃって、どうしてもそばに置いておきたくなっちゃうんだよ。

——ちなみにどれくらい持ってます?

ちょっと待ってね、数えてみるから。レスポール、ストラト、アコースティック、テレキャス、リッケンバッカーetc…。あれぇ? 何本だっけ!! とにかく20本くらいある。

——楽器にも相性ってあるよね。出逢った時にビビッときて、これは自分が買わなきゃみたいな。

あるある。オレ、ほとんどその感覚だもん。だからさぁ、オレにとってのワガママでね、ひとつの道楽みたいなもんなの、ギターって。ホント、ギターに金を使ってなかったら、オレってずいぶん貯金できただろうなって思うもん(笑)。

——でも、こればかりは止められない…。

誰が何と言おうと止めないだろうね。

——どんなに好きな女の子が言っても?

ハハハッ。これがオレのワガママだ。なんっちゃったりしてね(笑)。たぶんやめないだろうな。ヘソクリためてでも買うと思うよ。

——私とギター、どっちが大事なのなんて言われたらどうする?

スゴイ質問だね(笑)。そりゃあ、比べられるもんじゃないでしょう、ギターと女の子は…。だから…なんて言うんだろう。言われたことないからわかんないけど、そういうようなことを言うような女の子とは最初っから付き合ってないんじゃないかな。

——カッコイイじゃん!

そう!? なんかね、ギターを弾いてないのって、もうオレじゃないって思うんだよ。そういうのすべてひっくるめて手塚稔っていうひとりの男だから…。ちょっとカッコよすぎるけどね。

●本名 手塚稔 ●生年月日 1965年8月29日 ●星座 乙女座 ●血液型 B ●出身地 神奈川県川崎市 ●身長 170㎝ ●体重 45kg〜50kg 平均は47kg ●最終学歴(笑) 高卒 ●趣味 昼間にビールを飲みながら、レゲエなんぞ聴いてボーッとしてる ●クセ 最近、指摘されたクセなんだけど、いつもニコニコしてるくせに鏡の前に座ると急にキザな顔になるんだって。つっぱった顔してるらしいよ(笑) ●コンプレックス 若く見られちゃうんだよね。年相応に見えないっていうのは、なんかたよりないじゃない? 顔にシミとかしわがほしい!! ●性格 根本的にはすごく温厚なんだけど、気まぐれで、ワガママだから困ったもんです(笑)。しかも自己中心的なワガママだから自分の許容範囲の中で許せる時はすごくイイ人なんだよ、オレって。だけどそうじゃない時はとんでもないくらいワガママだよ。申し訳ないくらいに(笑)。あとねぇ、恐るとすぐすねたり、泣いたりするから手がつけられないヤツです ●特技 どこでもよく眠れる ●年収(笑) 女によって変わる(笑) ●好きな食べ物&ドリンク なんでも食べるけど特に玉子料理が好き。お酒 コロナビールとフォアローゼスはよく飲む。飲むと明るくなるんだよね、ド〜ンと(笑)。●嫌いな食べ物&ドリンク 茶わん蒸しに入ってる銀なん おすしの中に入ってるきゅうり なんかねぇー、ヘンなこだわりがあって、サラダのきゅうりは好きなくせに冷し中華にのってるきゅうりはダメなんだよ。歯をみがいたあとに飲むオレンジ・ジュースはまずいよねぇ〜。●タバコ 喫いません ●好きな女性のタイプ その時に好きになった女の子がタイプですね。へへへッ。●自分自身の自慢は? 愛ですね。僕の愛は深くて広い!! ●アリーナ37℃に腹立つことは? プライベーツをいちばん最初にとりあげてくれたのが、な〜んとアリーナ37℃ですからねぇ、この御恩は一生忘れません、なんっつって(笑)。でもホントに腹立つことなんてないよね。アリーナ37℃〝プライベーツ〟担当のケニーってヤツはよくやってくれてるし…。ま、彼も最近はK⊠・GUNSで忙しそうだけど今度はオレたちがその恩を返す番とでも申しましょうか…。K⊠・GUNSのオフィシャル・ファン・クラブの発起人にでもなりましょうか?

BASS 高橋達哉

僕の性格とベースって似てるんですよ。目立たないようで実は目立ってたりして(笑)

――最近、興味ある事は?

結局、ベースなんですよ。今までもそうだったのかもしれないんだけど、リズムに対して、以前よりももっと興味が持てるようになったというか…。

――やっぱりベーシストだからリズムに興味があるのかな。

バンドの中のベースの役割りをもっと考えるようになったし、考えられる余裕も生まれてきたんだと思う。ベースを持つ前にちょっとだけギターをやってたんだけど、最初の頃はギター感覚でベースを弾いてたんですよ。で、それを引きずってた部分が残っててね。ホントはバンドの中のひとつの音としてベースでリズムを弾きたいんだけど、どうも感覚がそれについていかなくて。ベースの位置っていうか…バンドの中のベースがどういう役割なのかハッキリ自分でわかってなかったんだろうって思うんですよ。

――悩んでたんだ。

悩みっていうか…落ち込んではいないんだけど、これなのかな、これでいいのかなみたいな感じで探してたのかもしれない。

――今は?

今年の初めに3rdアルバムのリハーサルが始まった頃かな。あれ!?って、自分でもよく原因がつかめないんだけど、なんか今までとは違うっていう感覚があったんです。プライベーツってテクニックオンリーのバンドじゃないんだけど、あるていどテクニックが身についてきて、それ以上のものを求めるとなると、もっと感覚的なもの…メンバーそれぞれの楽器に対する思い入れとか、こういう音を演りたいんだよねっていう欲とか、言葉ではうまく説明できない部分をもっと自分でわかりたくなっちゃうみたい。で、僕の場合だったらバンドの中のベースのポジションっていうか……ただリズムを刻んでるだけじゃなくてね、もっとバランス的な、感覚的なものとしてベースを弾きたいと思うようになったんですよ。

ベースがね、バンドをいちばん変えられる楽器じゃないかって思えるようになって…。うねりとかサウンドの色付けとか……そういうところに大きくかかわってきてるのがベースだって言えるんです。以前はそんなこと言えなかったのにね。自分でも驚くくらいそういう気持ちになってる。

――今年初めにそういう気持ちが生まれたとしたら、3rdアルバムのレコーディングもツアーも、ずいぶん変ったでしょう?

そうですね。自分で言うのも変なんだけど、ベースってカッコイイ楽器だよなって。そういう楽器を愛着を持って弾いてる僕ってカッコイイって(笑)。もともと僕の性格とベースって似てるなとは思ってたんですよ。目立たないようで目立ってたりして(笑)。それが今年に入ってからもっと身近に感じられるようになったんです。

――もうベースはやめられない、なんて。

そうそう。なんかいつもそばにあるような気がするんですよ、ベースが。

――器材には凝る方ですか?

いやー、安くても僕に合ってればいい楽器なんです。今使ってるのも、なんか性格に合ってて使いやすいし…。好きな音も嫌いな音も自分でちゃんとわかってるから、使いやすい楽器じゃないとかみ合わないみたい。

結局マイ・ベースなんですね。好きな楽器を、好きなバンドで、好きなメンバーで、好きなように弾いてるっていう。

――でもそれがいちばん大事な事ですよね。

でしょ? だからますますマイ・ペースになってしまう(笑)。まぁ、それが僕だから変わりようもないんだけど、無理しなくていいっていうのが僕の性格にピッタリしてるのね。もちろん楽しいばっかりじゃダメなんだろうけど、根本にそういう部分がしっかりあるからこれからいろんな事ができたり、やろうっていう欲が生まれてくるんじゃないかなって。ホントに、ますますマイ・ペースになっちゃって困っちゃうくらいだよね(笑)。

●**本名** 高橋達哉 ●**生年月日** 1963年7月21日 ●**星座** 蟹座 ●**血液型** A ●**出身地** 東京都多摩地区 ●**身長** 177cm ●**体重** 63～64kg あまり体重は変わらないみたい ●**最終学歴(笑)** 東京農工大学工学部機械科中退 3年通って、3年休学して、ついこの間やめました、と(笑) ●**趣味** オートバイが好きなんだけど、今はスクーターに乗ってます(笑)。買いたいバイクはCPフォークIIっていうオールド・タイプのカッコイイバイクなんだけどね。あとはスポーツ関係はやるのも見るのも好き。野球(巨人ファン)。アメフト。ゴルフ中継観戦(笑)。高校まではバスケットボールやってました ●**クセ** う～ん、困ったなぁ…。人にはね、よく揺れるって言われる。嬉しいことがあったり、感動したりすると身体が揺れちゃうの(笑) ●**コンプレックス** これもわかんないなぁ。困ったなぁ。あんまりそういうコンプレックスを感じてないっていうか、わかんないままボーッとここまで育っちゃったみたい。なんにも考えてないんですね、結局(笑) ●**性格** 積極的じゃないから、積極的になんなくっちゃなぁっていつも思ってるんだけど、性格って直るもんじゃないですね。よく成績表に「もっと積極的になりましょう」なんて書かれてたけど、未だにこれだもん(笑)。でもね、学級委員とかよくやってたんだよ。やれやれって言われて、ま、いいかって感じでだけど。お人好しなのかなぁ…。自分じゃよくわかんないけど、あんまり人に対して怒ったり腹が立ったりしないから、それに怒っても俺って怖くないと思うんだよね ●**特技** ないです ●**年収** あまりないです ●**好きな食べ物&ドリンク** 今までメロンパンが好きって言ってたんだけど、行く先々でメロンパンばっかりもらっちゃって少しあきちゃった(笑)。今は焼き肉が好きです。特にカルビ。牛乳はよく飲みます。●**嫌いな食べ物&ドリンク** トマトジュース、アルコール類はおいしいと思わないからあまり飲まないです ●**タバコ** セブンスターメンソール 1日1箱くらい ●**好きな女性のタイプ** よくしゃべる女の子の話をきくのが好き 体型はいいにこした事はないだろうけど、あんまりやせている女の子って、なんかかわいそうになっちゃう。でも、いい子、よい子であれば僕は好きです。●**アリーナ37℃に腹立つ事は?** いやぁー、僕は腹が立ちませんから(笑)。

吉田 学
KEYBOARD

デジタル・ピアノをキャッシュで25万で買ったんだ。それで最近ピアノが好きになってきた(笑)

――最近、興味ある事は？

あんまりひとつの事に対してのめり込む方ではないんだけど、よく考えてみると音楽が俺にとっていちばん長く、いちばん身近にあるものとして、ずっと続いているものなんだよね。もともと好きで始めた趣味みたいなものが、今は仕事になっちゃったわけだけど…。よく趣味が仕事になってつらくない？　なんて言われるけど、俺のこの性格だったらつらかったらとっくにやめてると思う。

だから、もしかしたら未だにこうやって音楽やってることが、俺は仕事って部分に結びついてないんじゃないかって思うんだよ。仕事って感覚ではやってないんだよね、バンドも音楽も。

――それはデビューした当時も同じ感覚だった？

どうなんだろう…。今は特にそう思えるけど、デビューした頃はそうじゃなかったかもしれないとも思う、よく覚えてないんだけど。だから音楽をやめてやるっていうのにはならなかったけれど、今ほどそうは思ってなかったかもしれない。

――どうして？

やっぱり、それまでは全て自分たちだけの世界だったじゃない？　ライヴを演ろうが演るまいが、演りたい時は好きな時に演るし、ホントに好き勝手にやってたから。でも"プロ"になるっていうのは、まわりにいろんなものがかかわってくるわけ。それはもちろんこのバンドのために動いてる事だったり、スタッフだったりするんだけど、だからこそ意見のくい違いも出てくるだろうし、スケジュール的なものも自分勝手にできなくなってくるだろうし…。当初はものすごくめんどくさいって思ってたんだよね。

――でも今は違う、と。

そう。特に最近は全然平気になっちゃったというか…。俺ね、最近ピアノが好きになっちゃったんだよ。

――え!?　それじゃあ今までは？

嫌いだった(笑)。

――ホント？

ホント、ホント。っていうかさ、弾いていくうちにだんだん好きになっていってる自分に気づいたんだよね。

――ここ最近の事？

今年の初めにサンプリング・ピアノを買ったんだけど、それが大きなきっかけになってるみたい。いつも身近にあるから、なんかいつも弾いてたりするんだよね。曲を作ってみたり、なんとなくさわってみたり。それが木目でね、なんかかわいいっていうかさ、人なつっこい感じのするデジタル・ピアノなのね。

――以前から欲しいと思ってた器材だったの？

楽器屋さんに行って見てたら、そこにあってさ、なんだか欲しくなっちゃってポーンとキャッシュで25万円!!

――キャッシュで25万!!

自分でも思いきりいいと思ったね、あれは(笑)。

――楽器が好きになると演奏も変わるでしょ。

そうだね。変ったんじゃないかな。もしかしたら聴いている人にはわからない部分かもしれないけれど、弾いてる方の感覚としてはずいぶん楽になってると思うよ。やっぱり好きになるとああいうのもやってみたいとか、こういう感じにも弾いてみたいとか、いろいろやってみたくなるでしょ？　楽器にふれる時間が増えてくるからね。

――部屋で弾いてる？

弾いてるよ。1930年代に録音されたようなブルースのレコードに合わせてさ、ノイズだらけのヴォーカルとピアノに合わせて一生懸命コピーしてみたり。家にいる時も結局いつも音楽の中にいるんだよね。だから、仕事っていう感覚になれないんだと思う。好きなんだよ、きっと。あとはね、弾けるようになったから自慢したいっていうのあるじゃない？　その上、今はピアノが好きになっちゃったからもっとそういう欲が出てきてる。自分でもそういう感覚が自分の中から生まれてきたのが、ものすごく嬉しかったりするんだよね。

●**本名**　吉田学　●**生年月日**　1964年6月11日　●**星座**　双子座　●**血液型**　A　●**出身地**　東京都台東区　江戸っ子三代目　●**身長**　174cm　●**体重**　66kg　アメリカに行く前は58kgだったんだけど、ぜんぜん元に戻ってくれない。●**最終学歴(笑)**　早稲田大学商学部卒業　●**趣味**　何もやってないっていうか…、趣味が仕事になっちゃったからね。●**クセ**　自分じゃクセってよくわからないよね。なくて七クセなんて言うけど(笑)、髪をよくさわるのがクセかな　●**コンプレックス**　これもよくわかんない。う〜ん、困ったなぁ(笑)。これは性格的なことかもしれないけど、多少"引っ込み思案"なところかな。あとは初対面に弱い。ダメなんだよ、人に合わせることができないっていうか…。高校に入った時それがいちばんひどくてね。それまでずっと地元の学校に通ってたんだけど、高校は山の手の方の学校に行ってて…、それでなんか今までの下町っぽい感じと違うじゃない？　どうも自分とは合わないっていうか。そのせいもあって、あんまりしゃべらなくなっちゃったんだよね　●**性格**　中学までは快活な少年でした(笑)。思いっきりのいい部分と考え込んじゃう部分があるのね。それは自分でもその周期がよくつかめないんだけど。今は上向き状態かな。あとは、人に対してちょっと神経質かなと思ってる。対人関係っていうのがめんどくさいし、好き嫌いが激しいの。一般的に悪い人って言うとおかしいんだけど、インスピレーションでそういう人ってわかっちゃうわけ。外づらがいい人とかうさんくさい人ってダメ。●**特技**　ないよなぁー。そうだなぁ、強いて言えるのは、どこでもいつでもオナラをすることかな(笑)　●**年収(笑)**　そんなにないです。でも株は持ってんの。実家が株式会社なもんでとりあえず配当金がおこづかいていどあるという(笑)　●**好きな食べ物&ドリンク**　天プラ　ナスの天プラは特に好き　ウィスキーならなんでも　●**嫌いな食べ物&ドリンク**　食べるのがめんどくさい食べ物　焼酎　●**タバコ**　種類にはこだわらないけどメンソール系はよく喫う　●**好きな女性のタイプ**　フィーリングが合う人。細い人はどっちかっていうと苦手。性格がサッパリしてる人。結局好きになったらそんなの関係ないんだけどね　●**自分自身の自慢は？**　逆三角形の上半身。胸の筋肉が動く(笑)　●**アリーナ37℃に腹立つ事は？**　あんまり活字を読まないから、アリーナってどんな雑誌かよくわからなかったりして…(笑)。

DRUMS

森原光司

ドラムって言葉だと思ってる。他のパートやお客さんとの語りあいなんだよね。

──最近興味あることは?

ドラムに関してなんだけど、ここにきて以前とは違った感覚が生まれてきてるんだよね。たとえば8ビートってあるじゃない? 今までその8ビートっていうのはひとつだったのね、オレにとって。8ビートをたたく時は、これしかない! みたいな、ガンコにつら抜いてきたたたき方みたいなのがあって…。それしかないから、できなかったりするとあせったり、あがいたりしてたわけ。それがね、8ビートのフィーリングっていうか、違ったたたき方や感情の込め方で、今までとは別の8ビートがたたけるって事に気づいたんだよね。ストレートな8ビートをやってても、他の楽器とのからみでもっと16ビート・フィーリングの8ビートがたたけちゃったりするわけ。

──そう思えるようになったのは何か原因があったの?

ネビィル・ブラザーズをライヴハウスで見たのがきっかけにはなってると思う。それを見て、今まで自分が好きだったミュージシャンがやってきた事を、そこでね、なんだかわからないんだけど理解できたような気がしたんだよね。譜面の上に書き表わせないような、もっと感覚的なことなんだけど…。今までオレが信じてやってきた事が、極端に言っちゃえばひっくり返されちゃった。同じテンポでリズムを刻んでるのに、テクニック的な部分とエモーショナルな部分で、どうにでも変えてしまうことができるんだって。

──ドラムやリズムに対する姿勢が変ったんだ。

そうだね。自分がこういう感じにたたきたいっていうのをハッキリした形でメンバーに伝えられるようになったのが、まず大きな変化かもしれない。

──それはいつ気づいたこと?

ツアーに入る前かな。で、ツアーに入る前にメンバーに話してて、どういう形でライヴに表われてくるかはやってみなくちゃわからなかったんだけど、やってみたらこれが結構、言葉で説明する以上にスムーズに運んでね。やりたい事がバンドでも反映できて、すごく気持ち良かった。

あーっ! そうだ!! ツアーで思い出したんだけど…。

──なんですか!? いきなり。

えーとね、これ絶対に書いておいてほしいんだけどさ、今回のツアーで各方面で…特に若い女性のみなさま、僕が大変御迷惑をおかけしまして、誠に申し訳ございませんでした、と。

──いったい何をやらかしたんですか!?

いやいや(笑)。僕は本当に反省してますので、ここに誌面をお借りして、あやまりたいと思います。ゴメンナサイ。

──あのオ、本当にいいんですか!? 誌面に載せても。

いや、大丈夫です。マジに反省してますから、オレ。

──(笑)。で、さっきのドラマーとしての変化なんですけど…。

今まで一方的にしかドラムを見ていなかったけど、いろんな部分から見れるようになったのね。最終的に出る音は同じかもしれないけど、そこにいくまでの気持ちのあり方が違うから、ひとつひとつの音の説得力が違うと思う。オレね、ドラムって〝言葉〟だと思ってるんだよ。語り合いなのね、他のパートやお客さんたちとの。そういう部分で、いろんな言葉を持てるようになったと思うんだよ。いろんな語りかけができるって。自分しか理解できないしゃべり方をしてたのが、俺なりの方法や方言かもしれないけど、もっともっと多くの言葉を使えるようになった。

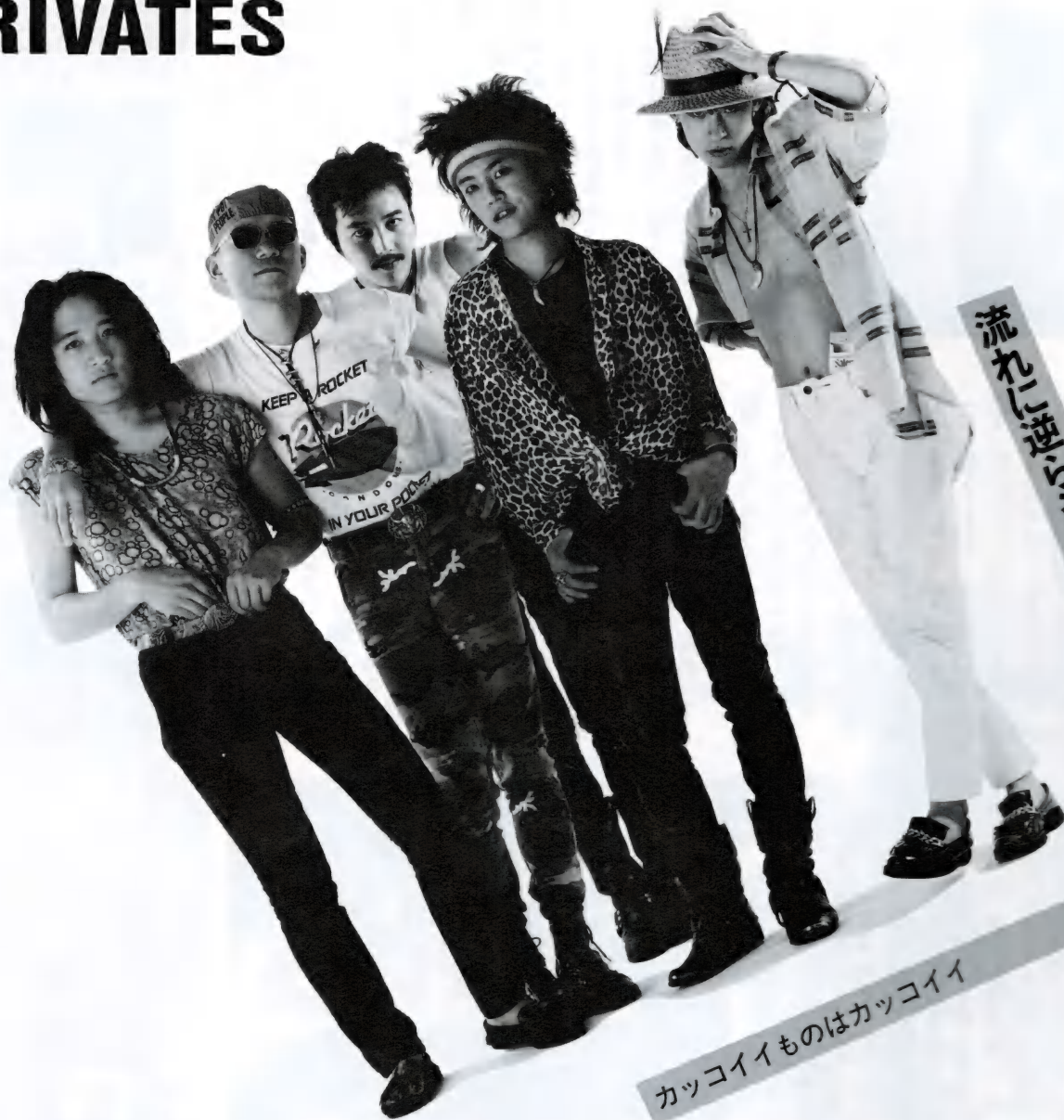
──それはテクニック的な事だけじゃなくて?

精神的なものとテクニック的な事が重なり合った部分で。だからね、今またドラムがものすごくおもしろくなってんの、オレ。ドラムやめようなんて思ったこともあったんだけど、そういう気持ちを忘れちゃうくらい、これからずっとドラムをやっていけるっていう自信が生まれたんだよね。

●**本名** 森原光司 ●**生年月日** 1963年9月5日 ●**星座** 乙女座 ●**血液型** AB ●**出身地** 鳥取県鳥取市 ●**身長** 178cm ●**体重** 59kg(アメリカに行った時に食べすぎ飲みすぎで一時は63kgにまでなってしまったが、ダイエット(!!)をして元の体重に戻った) ●**最終学歴(笑)** 東京商科学院専門学校税理士本科卒業 ●**趣味** 熱帯魚飼育(現在水そう4つ。近々もう1つ増やす予定。飼育歴は2年。以前から飼ってるミドリ亀も大きくなってトイレのバケツから水そうに引っ越し。鳥も大好きで実家にいた頃は50羽くらい飼ってたこともあった。(今は〝めじろ〟が飼いたい) ●**クセ** つめをかむこと(おなかがすくとよくかんでる。)クセじゃないかもしれないけど髪型はよく変える。落ちつきないのかなぁとも思うけど髪型をよく変える人って移り気だって言うから、やっぱり私は移り気なんでしょうか(笑)。今、すごく短いんだけど、今回なぜ切ったかっていうとケンカをして頭にきてたんですね。それでバッサリと切ってしまいました。 ●**コンプレックス** いっぱいある。昔すごく太ってたんだけどその頃、その体型のことでイジメられた心の傷が未だに残っててね。自分自身に対しても、人に対しても、そのくやしさは一生忘れてないんだよね。でもこれってコンプレックスなのかな(笑) ●**性格** ものすごくストレート。思ったことはすぐ口に出しちゃうし…、すぐ腹立つし…。ちゃんと反省するんだけど、ぜんぜん直らない。だけどその反面、何も考えてないようですごく神経質だったりする。あまり血液型で性格を判断できるとは思わないんだけど、やっぱりAB型って二面性を持ってるのかなとも思う ●**特技** 床上手(笑)。オレはムード・メーカーです(大笑い) ●**年収(笑)** 女性によって変わります。ハハハ。 ●**好きな食べ物&ドリンク** 油っこくなければ大丈夫 バーボンのソーダ割り ハーパー大好き! ●**嫌いな食べ物&ドリンク** 不潔そうな人が作った料理 わけのわかんない名前のついたカクテル ●**タバコ** ハイライト ●**好きな女性のタイプ** コンプレックスのある人 あとは一緒にいて楽な人 オレのグチを聞いてくれる人 しかしメンバーいわく、「オレにタイプはない!」んだそうだ ●**自分自身の自慢は?** 今、自分がこうやってやりたい事をやるために犠牲にしてきたすべての事を忘れてないこと ●**アリーナ37℃に腹立つ事は?** 最近ケニー高橋が冷たい(笑)

THE PRIVATES

純粋無垢なヒネクレKING!?

Interviewer : Akira Saeki

流れに逆らうバンド・スタンス

カッコイイものはカッコイイ

ザ・プライベーツというバンドはデビューのときから、実に飄々としたバンドだった。決して不真面目というわけではない。シラけているんでもない。もちろん自暴自棄ではまったくない。
渾身のカッコつけでもどこかに思わず舌をだしてしまうような笑いがあり、スーッと肩の力が抜けた軽やかなナンバーにポツリと落ちる涙のかすかな感覚が交じっていたりした。
彼らのことを〝ヒネクレ者のキング〟と呼ぶには、あまりにも多くの（へつらわない）無垢さを無視するようで心もとない。
大きな流れにはまらないで、流れを突っ切ってゆくバンドのスタンスは、どこから生まれてくるのか？
ニュー・アルバム『スピーク・イージー』で見せた、音楽的に試したいことへのみずみずしい執着は、ザ・プライベーツが身近であると同時に手垢にまみれないバンドであることをも僕らに示した。
メンバー5人がザ・プライベーツの中で飄々としているさまを、伝えよう。

別に歴史なんか作っちゃいないよ。ただアルバム3枚作っただけさ(笑)。

——ということで、ザ・プライベーツもサード・アルバム『スピーク・イージー』をリリースするところまでやってきたわけで、その意味ではある程度バンドの歴史を作って来たとも言えるんだけど、……違う？

延原「歴史なんか作っちゃいないよぉ。」

——じゃ、何を作って来たのかな？

延原「ただレコードをアルバムにして3枚出したっていうだけで。」

——でもザ・プライベーツを結成したときにアルバムだったら何枚ぐらいこういうアルバムを出そう、みたいな計画はなかったのかな？

延原「別になかったよ。どうですか？　メンバーの皆さん？（笑）」

——手塚さんとかはどうですか？

手塚「うーん、あんまり。」

森原「でもさ、ファースト・アルバムのとき〝この曲演ろうよ！〟って言ったら〝それは、3枚目とか4枚目になったらね。〟なんて意見もあったりしたよ。」

——じゃあ、バンド結成時のとりあえずの目標というか、それはなんだったんでしょう？　普通あるもんだよ、〝レコードはこんな感じのを創りたい〟とか〝全国をツアーで廻りたい〟といったようなのが。

延原「ないない。」

森原「強いて言えば、楽器持ってイイ演奏をすること（笑）。あと、ギター持ってキース・リチャードのものまねする。」

——スゴイわ。それは。

延原「ものまねから始まったバンド。」

吉田「ジャドウズか、オレたちは（笑）。」

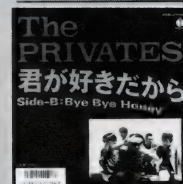
——でもそういうのばっかりじゃ人生渡れないでしょ？

延原「いや、渡ってきたという貴重な人たち（笑）。」
——レコードのために曲を書くとかさ。
延原「今だったらあるけどねぇ、当時はなかった。」
——じゃ結成当時はなにが一番楽しかった？
延原「リハーサルとかね。次のライブのことを考えるのが楽しみだった。ほんと次が楽しみでってぐらいでさ。」
森原「チケットとかポスター、チラシなんかもみんな自分たちで作ってたからね。そういう準備も含めて。」
延原「明日が楽しみって感じ、カッコ良く言うと。それ以外の何物でもないよ。そりゃ、たまにはさ、酒飲みながらトム・ウェイツとか聴いちゃって、〝やっぱり40ぐらいになったらこんな味だしてえな〟とか思う時はあるけどさ。それは漠然と30越えたら顔に出る！　とか言うのと同じ次元であってね。目標が云々みたいなのってないね。」
森原「ノドの調子が悪くなるたびにマジで〝トム・ウェイツみたいに芸風を変えようか？〟って言ってるぐらいだから。」

先の目標なんかよりは、明日のステージの方が切実なんだよ。

——〝プライベーツ・コンツェルンをこう運営させていきましょう〟的な、大袈裟に言えばそんなノリはぜんぜんなかったんだ？
延原「うん。考える要素もないし。レッド・ウォーリアーズのシャケみたいな人がいたらよかったんだろうけどね（笑）。いなかったんだよ、オレたち」
——でもプロダクションとかが決まれば、バンドを演ることに関してある程度図式ができるわけだから、考えざるをえないことも出てくるように思うけど。
延原「だからオレたちはある種目先の、たとえば〝次のツアーは何本やろう〟とか〝こんな場所でも演らせてくれ〟って言うぐらいで精一杯だよね。マネージメント・サイドは〝このツアーが終わったらどこそこのホールで演って〟とか考えるけどそれはそこにいる人が主に考えることであってさ。何かダメなんだよな。みんなで一緒になって目標を〝なんとか会館に向けてガンバロウ！〟になっちゃうとさ。学生みたいなんだよ。オレなんかはむしろ〝あしたステージにたってどうしよう？〟のほうが、切実なんだよね。実際にオレは演る側なんだし。それをおざなりにして、次につなげる云々というよりかはさ。次のライブで何を演るかっていうほうが、重要なんだよね。」
——吉田クンはどう？　大学行っててそのまま就職もせずにプライベーツにはいっちゃって、どうしよう？　このバンド・をこういうふうにしなければ……みたいなことは思わなかった？
吉田「オレ？　オレは思わないよ（笑）。何、ビッグにしようぜ！　とか？」
——将来的なこととか。
吉田「考えられなかった。考えられてたらきっと就職してたよ。」
延原「明日なき暴走。それだけ。」
森原「あの時期、〝将来どうなんだろう？〟とか考えたら、ほんと身動きとれなくなっちゃってたよ。こわくなって。」
吉田「あとはさ、変えようと思って変わるもんじゃなかった。たとえば演ってる音楽とかさ、将来どういうふうにしていこうって考えるとね、曲を売れ線に持ってこうとか、そんなことになっちゃうような気がするんだよね。」
——吉田クンなんかはそれまで持っていた音楽的趣味と違ってたじゃない？　プライベーツの音楽性は。そこですんなりはいっていけたのかな？」
吉田「最初はそうでもなかったんだけど、何か演っていくうちに、どんどん……って感じ。初めは違っても、だんだん深いところを追究していくと一つになって行くじゃない？」
——それに気付きだしたのは、はじめてどのくらい？
吉田「いやー、もともとそうなるかなとか思ってたけど、実際にまとまってきたのはプロ・デビューする少し前かな？」
——高橋の乙ちゃんはどうですか？　乙ちゃんはプライベーツをはじめてどこで観たんだっけ？　ロフトだっけ？
高橋「うん、そう。そのときには、もう大学も行ってないし。」
——けっこうこのバンドに賭ける的なノリじゃなかったの？
乙ちゃん以外「フハハハハ。」
高橋「それはあったかもしれない。」
手塚のショーネン「へえー、ほんと？　賭けてたの？」
——ほらーっ、乙ちゃんが真面目に話そうとしてるのにぃー（笑）。
延原「無理やり言わせてるんじゃないの？（笑）」
——早くゲロせんか！　って（笑）。でもそういうバンドに賭けてたとか言うのは恥ずかしいと思ってる節はない？
延原「いや、ないよそれは。っていうか、ほんとになかったんだよ、今もね。確かに照れもあるのかもしれないけど、その照れの裏がえしとして、結果を目標にするっていうのかな、それが嫌っていうか、

DISCOGRAPHY

君が好きだから

'87年8月26日(1st Single)
①君が好きだから
②BYE BYE HONEY

プロモーション・ビデオの監督を泉谷しげるが担当。
「とにかく走りまくったビデオだった。で、バテると怒られると思ったから必死こいて走ってたんだよね。泉谷にオマエはよくガンバッタと言われました」（延原）
「テレビ朝日の屋上で撮影してた時に、ちょうどスタジオで『徹子の部屋』の撮影をしてたらしいんだけど、オレたちの音が入っちゃって収録できないっていうんで、黒柳のオバチャンがヒステリーをおこしちゃった（笑）」（森原）

REAL TIME BLUES

'87年9月25日(1st Album)
①BLACKBOARD J-UNGLE②DO THE HIP SHAKE！③DEA-R MY FRIEND④誘惑のVELVET NIGHT ⑤TOO MUCH KALEI-DOSCOPE⑥BREA-KiN' GLASS⑦TV C-HANNEL No.5⑧RETURN TO YOURSELF(A-ND MYSELF)⑨RAT DANCE⑩WAITIN'⑪君が好きだから⑫MAYBE TOMORROW

「ツアーから帰って合宿をやって５月からレコーディングが始まったんだけど、とにかくオレたちがマジに神経集中して意気込んでたアルバムだった。オリジナル曲はいっぱいあったから、その中でもこれだ！　って思える曲をセレクトしたんだよね」（延原）
「ジャケットのうしろに牛が写ってます(笑)」（森原）※撮影場所は八ケ岳の近くの美ヶ原高原

FOR SHERRY & RUDE BOYS

'88年１月25日(1st Video)
①TV CHANNEL No.5
②誘惑のVELVET NI-GHT
③SHERRY

「川に流されるシーンはマジに恐かった」（手塚）

STOP BREAKIN' DOWN

'88年6月25日(2nd Single)
①STOP BREAKIN' DOWN②美しき絶望

プロデューサーに元ルースターズの下山淳を迎える。
「実は87年の12月にシングルを出そうっていう話があったんだけど、一度ＮＧになってそのあとに曲作ったり、デモを録ったりしてる間にポコッとできちゃった曲」（延原）
「下山さんってノッてくるとガンガンに自分でもギターを弾きまくっちゃう人でね。次から次へと〝こんなのどう？〟なんて色んなアイディアを実戦してくれんの」（手塚）

LUCKY MAN

'88年9月28日(3rd Single)
①LUCKY MAN
②LUCKY MAN
（オリジナル・カラオケ）
③追憶のハイウェイ ④追憶のハイウェイ
（オリジナル・カラオケ）

「この〝LUCKY MAN〟は2ndシングルを出した頃から次はこの曲をシングルにしたいって一押ししてた曲だった」（延原）

MONKEY PATROL

プロデューサーに下山淳、佐久間正英、土

ダメなんだよね。」
森原「オレなんかは、結果が見えないと不安でしょうがないの。で、そこをワザと考えないようにしたとき、ずっと延原が近くにいた。でね、ひっついていれば、なんとかなるんじゃないかと思った(笑)。」
延原「だから、結果をだすために何をやるかっていうほうが、大事じゃない？ 結局同じことかもしれないけどさ。でも結果をだすために何を？ ってことに、一生懸命になるよね。結果が見えてて、そのために全力をだすっていうんじゃないじゃん？」
——そうするとバンドが転がっていく中で目標みたいなのを立てないのが、ポリシーとか？
延原「いや、演奏でこんな雰囲気を出したいとかそういうのはあるよ。〃きょうはここまで頑張ろう〃とかじゃなくってさ。でもみんな暗黙のうちに音の雰囲気をどう作るか？ という作業に突入して、なんとなくできたらさ、別に《できたな》って会話があるわけでなく、ニンマリ笑って帰る……次の日は次の日でまた別のことを始める。題材はそれこそ生活の中から拾って来る。それは何かのレコード聴いたりとかさ。本を読んだりとかさ。その辺は個々人で違うわけだし。」
——そこはプライベーツのすごいとこだよ。なんとなく分かってても、実際にこれこれこうだよとかさ、相手から言われてそれで納得して進んで行く場合もあるじゃない？
延原「そういうところもあることはあるよ。レコーディングでプロデューサーがついたときとかね。〃ここがダメなんだ！〃って言われたら、じゃあできるまで演ろうと。だから、全部含めたうえで自分達ではOKだと思っていたことが、第三者から見るとそうじゃなかった的部分が出てくるとクヤシイじゃん、やっぱ。」
森原「プロになる前は、そこまで突っ込んで言う人も少なかったしね。積み重ねてきた自分達に自信もあったし。」
——アマチュア時代は、バンドだけでかたまってるから、いろいろ言う人はいないしね？
延原「いやあ、そうでもないよ。レコード会社のヤツとか来るからね。来て、〃リズムが甘いね、チューニングがくるってるね〃って分かって言ってるんだかはしらないけど、必ずいるんだよ、そういうオセッカイ君みたいなヤツが(笑)。でも、アドバイスはアドバイスで取り込んでいけばいいんであって、まあ、無視する強みもあるけど。要はタイミングだよね。バンドに対して一つの見方をすれば、外からの声はすべておせっかいだし雑音になるのを、分かった上で、ね。でもロックンローラーはそういう雑音すら音にしていくよね。」

俺達はいつでも、気分次第で動いてきてるんだよ。その時〃カッコイイ〃ものをね

——こと音楽的な面でいえば、どうなのかな？
森原「今にして思えば、セカンドを創ったときの3人のプロデューサーからは、素直にいろんなことを吸収できたんじゃないかな？」
——やっぱり音楽的な柱になり得たのかな？
森原「っていうか、オレたちにあった柱の補強材になった感じ。ミュージシャンとしてもやってるプロデューサーからの意見だったからね。」
延原「商売っけが絡んだ意見って、えてして正しくないんだよ、演ってる側にとっては。だからデビューして最初の一年は混乱したし、その後抜け出して今まできてる。要するに外から見るとオレなんかの音楽とかやってることとかキャラクターを含めてとっちらかってるように見えるからさ。だから一ヵ所だけを取り出してアーだコーだ言われるのはねぇ……。でも時間とオレたちの生み出してきたことが、そのとっちらかってる間にある隙間を埋めてるって感じはすごくあるんだよね。」
——分かってくれるだろうなっていう自信はありました？
延原「っていうか、自分たちがとっちらかってる意識もあんまりなかったしね。まぁ、そう見えるだろうなぁってことはなんとなく分かったけどね。」
——じゃあ、プライベーツというバンドで実現できる快感は、組んだ当初からそんなに変わって無いのかな？
延原「変わってはいるだろうけれど、何がどう変わったのかはよく分からないね。やってる人間は変わってるからね。逆に考えたくても変わらない部分もあるしなー(笑)。それはもちつもたれつだよ。時期にもよると思うんだよね。いい方向にググーッと全体の流れの中で変わっていくときもあれば、いい方向に行けば行くでまたアンダーグラウンド感覚が頭をもたげてきて、また人とのコミュニケーションがとりにくい方にひっぱられちゃったりするんだ。」
——少年なんかはどう見てる？ バンドで生まれる快感について。
手塚「基本的には変わってないような気もするけど。環境や明日やんなきゃいけない作業もどんどん変わってくるしね。
その都度だよね。」
延原「経験と結果によって変化することはあるからさ。すべてに関して。」
手塚「音楽的な欲はアマチュアのころからあったしね。」
延原「今それがカッコイイなと思ったらそれで行くみたいな。今いいなぁと思っても不満を押さえながら違うことをやるって、それほどなかったね。オレたちは、最終的にいつでも気分次第で動いてきたんだよね。」

屋昌己の三氏を迎える。
「三者三様ですごくおもしろかった。1曲1曲をいちばんいい形でプロデュースしてもらったと思う。だから1枚のアルバムに3人のプロデューサーを起用したってことが変ったことだとは思ってないんだよね。オレたちもそれぞれのプロデューサーのやり方とか知れたし、三人三様の雰囲気もウケちゃったし(笑)」（手塚）

'88年10月16日(2nd Album)
①SUNSET SONRISE～LET'S GO CRAZY②BIRDS WIN③CANNONBALL CITY④追憶のハイウェイ⑤ANYTIME ALRIGHT！⑥美しき絶望⑦いつも…⑧CITY COCKTAIL⑨BREAKIN' SUNSET⑩FASHIONⅡ⑪TURTLE DANCE ⑫STOP BREAKIN' DOWN⑬SHERRY⑭FLASH BACK GREENY⑮LUCKY MAN

PINBALL LOVERS

'89年2月8日（ 4th Single)
①PINBALL LOVERS
②RETURN TO YOUR-SELF
（ライヴ・バージョン）
「実は88年の暮れにレコーディングしていた曲でね。アッという間にレコーディングして、アッという間に終っちゃった瞬間芸（笑)」（吉田）

気まぐれロメオ

'89年5月24日(5th Single)
①気まぐれロメオ
②気まぐれロメオ
（オリジナル・カラオケ）
③HOW YOU DOIN?
④HOW YOU DOIN?
（オリジナル・カラオケ）
「いちばん新しい曲。アメリカに行く前にこのままじゃ曲が足りない！ 出国延期だ!! ってんで急きょ作ったんだよね。ジャカジャカ、イェイイェイ言いながら作ってたらいいのができたという。ま、このいい加減さがロックっていうんですか!?（笑)」（延原）

SPEAK EASY

'89年6月28日(3rd Album)
①STEADY ROLLIN' TRAIN②気まぐれロメオ③FOOL TO CRY④ALL DOWN THE RIVER⑤SWAMP TURKY⑥TIME WAITS FOR NO ONE⑦SHAKIN' DUDE⑧SPEAK EASY⑨LONELY SUMMER NIGHT⑩GONE DEAD TRAIN⑪EVERYBODY SAY YEAH！
「東京でデモテープを録っている時からすごいアルバムになるだろうっていう予感があった。1晩で13～14曲も録っちゃったくらい意気込んでたよね」（森原）
「アルバム・タイトルはずいぶん前から考えてたんだけど、実際でき上がったアルバムを聴いたらピッタリはまってた。こりゃあカッコイイ！ ってそのまんま付けてしまった。有無も言わさず」（延原）
「バラエティにとんでるように聴こえるかもしれないけど、今までずっと演り続けてたり、オレたちそれぞれが好きで聴き続けてきた音楽がすべてこのアルバムに入ってるんだよね」（延原）

SHAPE OF ICE

'89年6月28日(2nd Video)
①君が好きだから
②STOP BREAKIN' DOWN
③LUCKY MAN
④PINBALL LOVERS
⑤気まぐれロメオ

プロモーション・ビデオ・クリップ集。「メンバーのルックスの変歴を楽しんで下さい。うっしゃあ！」（マネージャー並木〈笑〉）

AL!

全員版

KRAZy !?? Vol.1

高橋"乙ちゃん"達哉の KOOL & KRAZY

「サリアン」

私の愛車、と言ってもスクーターである。前に乗っていたリードが壊れてしまい、次は何にしようかと迷っていたのだが、私の目に止まったのは、ピカピカの新型車ではなく、中古の赤いサリアンだったのだ。これは、今ではあまり見かけなくなった、かなり古い型のスクーターなのだ。最近はどこへ行くのにもこれに乗っている。もちろん雨の日にもだ。どこかの街角で、風を切り裂いて走る赤いサリアンを見つけたら、それは私だと思ってくれ。

「ひざ」

高校二年の夏。秋の大会に向けて、毎日私はバスケットボール部で汗を流していたのだが、その時、ひざを痛めて一週間も入院してしまったのだ。この怪我を甘く見てはいけない。ひざの状態が良ければ、私は多分、大学で軽音楽部などには入らず、アメリカンフットボールなどをやっていたに違いないのだ。今でもたまに、ひざがガクッとなって転んでしまう事がある。コンサート中に転んだ事もあり、何もない所でハデに転ぶ私が映ったビデオを、メンバーの人達が何度も見返しては大笑いした事は言うまでもない。と言うわけで私は斜面を歩くのが苦手なのだ。スロープ付きの舞台だったりすると、とても緊張してしまうのであった。

「自分固め」

プロレス好きの延ちゃんが、サニーデ固めに続き、ひさびさにあみ出したオリジナルホールドである。いつも延ちゃんの技の研究の実験台となる私にとっては、嬉しくもあるが、また日々の恐怖がひとつ増えてしまったわけなのである。

「メロンパン」

メロンパンをおかずにして御飯を食べるなどと言う伝説もできるくらいに私はメロンパンが好きだったのだが、最近メロンパンをプレゼントされる事が多くなってしまった。ツアー先では毎日メロンパンを食べているのだ。あんまり毎日食べたので、このところ、メロンパンを避けて歩くようになってしまった。

「ビリヤード」

ツアー先で、コンサートの打ち上げの後に行く事が多い。ハラ君と二人で行く事が多かったのだが、最近は音響のスタッフの人達なども加わっている。ハラ君は、かなり上手なのだが、酔った状態でやるので、私が勝つ事が多く、かなりくやしがっているのだ。

「合同コンパ」

先日、オールナイトフジと言う深夜番組に出演した時の事。出番の前に数人の女子大生とメンバー、スタッフなどがロビーに座ってしばらく雑談をしたのだった。まるで合コンのような雰囲気で、合コン経験のない他のメンバーは、異様に盛り上がってしまい、「これが合コンかぁ。生まれて初めてだあ。」とか、女子大生に向かって、「クラブはマルクス研究会なんですか。」などと言っている人もいたのだ。

「ひげ」

最近一部の人達の間では、私のひげの事が「ダンディーなエロヒゲ。」などと言われているらしい。トホホホホ……。

手塚"少年"稔の KOOL & KRAZY

オレだよ、オレ、手塚だよ。何だかめんどうな事になっちまったぜ。だいたい原稿の締め切りなんてのは延ちゃんぐらいだけにしといてほしいもんだぜ、まったく。オレに何書けっつってんだよな。でもよ、まぁケニーの頼みとあっちゃな、さすがのオレ様も、イヤな顔するわけにゃいかねぇしな。「あぁ全然いいよ、喜んで、モチロン(山下久美子調)」って二つ返事でひきうけたわけだよ。だから別に全然イヤイヤ書いてるわけじゃないし、リハーサルでくたびれているのにイヤだなんて、渋公明日だぜ、なんてコレっぽっちも思ってないんだよ。エライなーオレ。大人なSHŌNENさんだな。あ、でもよ感違いすんなよ、そうオレは最近どうも気に入らねェんだよ。近頃のガキどもはよォ。このオレ様を隣のお兄ちゃんか何かと感違いしてるヤツラが多すぎるぜ。気安く人の家に電話とかしてきたりするんじゃねェぞ。言っとくけどなオレは全然人の良いお兄さんなんかじゃねェんだ。だいたいオレはレッキとしたロック・ミュージシャンなんだ。それもギターリストってヤツなんだぞ、危険なんだぞ。そう、オレがTEENAGERだった頃はよ、そりゃ憧れのミュージシャンを目の前にした日にゃ、もう恐くて恐くて声もかけられなかったもんだぜ。だからよお前らも、街でオレを見かけたりしてもだよ、「ハッ」としてだ、こう両手で心臓の高鳴りを押えて電柱(カオル元気か?)の陰からオレの姿をただただじっと見守るようにしてるってぐらいの気のきいた事のひとつでもしたらどうだいってんだ。

あーイヤダヤダ、このオレ様にこんなムダな怒りを覚えさせるなんてとんでもないヤツラだぜ、まったく。まぁ、こんな事いつまでもここでグダグダ書いたってな、全然話とは関係ない人々にはちと聞き苦しいだけだしな。でもよ今、読んでるヤツの中には他人事なんかじゃないヤツもいるはずだ、テメエら覚悟しておけよ、オレは危険なロック・ミュージシャンなんだからな。覚えておけよ。あー疲れちまったぜ。もうこんな所で気分を変えてだ、楽しい話題にでも移ろうかなと、思っているのだが、ペンを持つこのオレの右手の震えは止まりやしないぜ。まったくふざけたヤツラだぜ。まぁしかしだな、このオレ様もミーハーっていやミーハーだからな。お前らの気持ちもまったくわからねェわけじゃねェけどよ。そりゃブライアンが使ってた白いvoxのギターがほしいとか、昔のブルース・マンの写真を見ながらあんなボトルネックがほしいっつってカルピスのビンでスライドバーを作ってみたりしてるかわいいヤツだからよ。でもオレはブライアン家にもロバート・ジョンソンの家にも電話なんてしたぁ事ぁ一度だってありゃしないんだぜ。あ、でもニューヨーク行ったとき、ここにキースが住んでいるって言われてるビルの前に立って「ハハァ」って拝んできたのはこのオレだ。でもそれとこれたぁ話の次元が違ってもんだぜ。あーあ、オレも早くカリブ海沿いに別荘でも建ててカリプソでも聞きながらのんびりした暮しがしたいぜHONEY。

SPECI

KOOL&

遂に植民地と化したアリーナ
かおくる前代見聞のメンバー
全員スーパー・エッセイ

まずは誤解を解いておこう。私の頭髪は不潔ではない。洗髪しない故にこのようになるのでは無い。実はパーマネントである。ちゃんと週に一度は洗っているし、ムースをつけて、なんとドライヤーもかけているのだ。

「死して屍拾うものなし。」このフレーズ知ってるか？「闇に生き、闇に死ぬ。それが忍者の定めなのだ。○○○、お前を切る!!」○○○には主人公の名称が入ります。「明日をつくる技術の××がお送りします。いたちまーちゅ。」××には提供の会社名が入ります。カツオの声優さんはおばあさんなんだぞ。アニメになる前の実写版のサザエさんは、故江利チエミさんだぞ。ロバくんの中身は愛川欽也さんで、欽ちゃんは勿論コント55号、だが、車だん吉がコント０番地だったのは知らないだろ。トランポリンを使った忍者のコントで出ていた「おこっちゃいけねえ、おこっちゃいけねえよ。」と言ってひっこんじゃう人どこいっちゃったろう。赤忍者はのちの、ケンちゃんだ。そのケンちゃんは確か二代目だが、成長してバンドをやってたんだぞ。

「ボクはちび１、ママはちび２、パパはちび３。」と言ったのは、せんだみつお氏だ。青雲のＣＭソングは森田公一先生だ。ピアノの弾き語りがイカしたぜ。トップギャランはどこへいった。谷啓がリーダーのスーパーマーケットが出てた「笑って笑って60分」はジェリー藤尾親子が司会だった。あの娘さんも成長したなあ。哀愁学園の江藤ヒロトシのキスシーンはちゃんとやってなかったんだぜ。凸凹大学校の校長、故三波伸介のハゲづらと眼

鏡とちょびヒゲはインパクトあった。ガッチリ買いまショウで「10万円７万円５万円運命の分かれ道！」と叫んでたのは、夢路いとし・喜味こいしのどっちだったろう。獅子てんや・瀬戸わんやでつるつる頭はどっちだ？　レッツゴー三匹で、じゅんと長作とあとひとりは誰？三波春夫じゃないぜ。ましてやじゅんとネネでもない。「恋人もいないのにぃ。」と唄ってたのはシモンズ。エレクトリックドラムじゃないぜ。雪路とルリ子の区別がつかなった。たが千恵蔵と義男の違いはわかるぜ。全員集合は一時期中断していたが、その時、クレイジーキャッツが「８時だよ出発進行！」という番組をやっていたという記憶がある。「大人の漫画」は記憶にないが、「クレージーの奥さ〜ん。」っつうのは知ってる。そんな世代です。

などと書いたのを家族の者に読まれたりしたら恥ずかしいなあ。「学もまったくいつまでたっても成長しないんだから。」などと嫌味を言われるのがオチである。だが私は、コンサートの時配られる〝よく見るＴＶ番組〟の欄に、サザエさんとかバカボンとか書くお間抜け少女変体文字さんたちに我慢ならないのだ。断じて私はそいつらに立ち向かうぜ。チキチキマシン猛レースの全車種言えるかい。などとムキになってる私は一番ガキであるような気がしてきた。ウナギイヌですワンワン。

今宵はゴキゲンなのだ。なぜならここ最近すげービデオを何本か手に入れてもうテレビの前にかぶりつきで観ているのだ。そいでもって今日は、日比谷野音であったコンサートに行ってきて、ついにフェアチャイルドのＹＯＵちゃんやら、ゴーバンズの光子様とか川村かおり嬢を見る事ができたのだ。こんな書き方をすると、ただ女性ミュージシャンを観に行ったように思われるが、今日はなんとあの『ロッカーズ』８年振りのオリジナルメンバーのステージを観る事ができたのだ。

思い起こせば、あれは６年前。延ちゃんと初めて会った頃（私が二十歳に成り立ての頃）ロッカーズ、ルースターズ、モッズ等のロの字もルの字もモの字も知らなかった私に、延ちゃんが「こんなのかっこいーよ。」と言って貸してくれたテープを聞いた時のインパクトといったらすごいものがあったなぁ。ただ時すでに遅し、その時には解散していなかったバンドがロッカーズなのであったのだ。冷静に観ようと思っていたのに、全然ダメな私であったのだ。もうスゲーの！　この思いを伝える事ができない自分に腹立しく思いつつ、ぜひＣＤで再発もされたそうなので聞くといいと思うぞなもし。

興奮冷めやらない私はそのまま日比谷線経由東横線に乗り込み、降りたる駅は田園調布駅。そこから歩いて30歩の所にある、若鳥料理の店「平八」にて食したるヒナ鳥の高麗焼（コウライ）なるものに、いたく感動して帰ったのである。それにしても、うまい食べ物は人を感動させつつも発奮させるものだなぁーなどと思ってしまったのである。行くべし。そして、うまい焼鳥でさらに興奮している私は、寿司屋で私の好物である穴子巻きなる寿司をば、みやげに握ってもらい、愛飲する白ワインを買って帰ったのだ。そして家に帰ったら………。

そして家に帰ったら、私の帰りをまちわびた熱帯魚達にエサをやりつつ、いそいそとビデオをセッティングして始まりますは、キース・リチャードの昨年のアメリカツアーのビデオ。あはは。これもまたスゲーでやんの。タイコを叩いているスティーブ・ジョーダンは渡辺香津美の「トチカ」、アリスタ・オールスターズ、ブルースブラザーズ・バンドのタイコを叩いていた頃から好きなタイコ叩きなのだが、キースのバックでシンプルに叩いている姿は美しい（見た目は土人がドラムセットをどつくといった風なのだが）。タイコっていーなーと思ってしまうのだ。ストーンズの曲なども演っていて、チャーリー・ワッツと見比べるととてもおもしろいでやんす。そして次は今から５、６年前のライブ・アンダー・ザ・スカイでやったギル・エバンスオーケストラとジャコ・パストリアスのライブのビデオだ。ジャコといえば天才の名をほしいままに精神的におかしくなって２年前にケンカの後遺症で死んでしまったとんでもないベース弾きなのだが、このビデオは丁度おかしくなりつつある頃のもので、演奏もブッ飛んでいて、観る度にとてもとても勇気と感動を与えてくれる演奏なのだ。森原が今一番聞くミュージシャンでもあるのだ。何んで死んじまったんだぁ〜〜〜。グッスン。

という感じで今晩過している訳だが、こんな生活（野音でビール、焼鳥屋でビールにサワー、家に帰ってワイン、ビール、焼酎、バーボンと飲みつづけている）をしているとやはり体にはよくない訳で、改めなきゃいけないと思いつつ、考えている間にグラスを重ねるという悪循環なのだ。とりあえず最近飲み過ぎの為に太りつつあるので、明日は渋谷公会堂に行ってタイコをどつきまくって、いっぱい汗をかいてやせようと思う今日近頃なのだ（笑）。

延原達治のKOOL & KRAZYは平常通りP44にあるよ。ところで、このページのイラストは全部自筆だって事は、わかってるだろーねぇ（笑）。

1983〜1989 THE PRIVATES BAND HISTORY

1983年12月 THE PRIVATES結成。当時のメンバーは、延原(Vo、G、Harp)、手塚(G、Vo)、森原(Dr、Vo)、川上(B、Vo)
「バンド名は誰がつけたんだか…今となってはナゾにつつまれている(笑)」(延原)らしいが、当時はバディ・ホリー、R・ストーンズ、キンクス等のナンバーのカヴァーバージョンに加え、数曲のオリジナル・ナンバーを演っていた。

1983年12月12日(ちなみにこの日はR・ストーンズのギタリスト、キース・リチャードの誕生日) 目黒鹿鳴館にてステージ・デビュー。飛び入りによる15〜20分の短いステージだった。当時鹿鳴館でアルバイトをしていた延原が勝手に空いているライヴ・スケジュールにプライベーツのライヴをブッキングしていたらしい。
「ぜんぜん知らないバンドの楽器を借りて、ほとんど乱入状態で演ってたんだよね。その頃、デル・ジベットをやる前のISSAYが鹿鳴館で演ってたっけ」(森原)
「当然オレたちのバンドなんて知ってるヤツなんかいないし、オレたちもライヴを演るのが楽しいってだけだったから、とっととやって、とっとと帰っておいしいビールを飲んでた」(手塚)

1984年1〜2月 目黒鹿鳴館、福生UZU、新宿ロフト等でライヴを行う。
「プロになろう！ とかレコードを出したいとか、そういう気持ちの盛り上がりってほとんどなくてね。だけど俺たちって演ってる曲のセンスもいいし、カッコイイからその日の対バンのどのバンドよりもいちばんスゴイんだっていう自信はいつもあった」(延原)
「ウケるとかウケないとかじゃなかった。ライヴをやっているっていう実感だけ」(手塚)

1984年3〜4月 ビデオ・カセット「FRONT LINE」収録のためのレコーディング&ビデオ・クリップの作成を申し込まれる。曲は「今夜はヒルビリー」

1984年7〜8月 「FRONT LINE」収録のビデオ・クリップに不満を持つメンバーは、新たにプロモーション用として4曲をレコーディング。友人の協力を得て、「HEY! Dr」「ファクトリー・ボーイ」のビデオ・クリップ作成。

1984年9月 友人が応募した某"C"レコード会社のオーディションに出演(新宿ACBにて。森原欠席。代わりにブルートニックのDrが参加)
「デビューなんてよォ!! なんて言っておきながらレコード会社の人と話をした時に少年と2人で舞い上がっちゃって…。帰りに反対方向の電車に乗っちゃったんだよね(笑)」(延原)

1984年10月 森原、右足骨折のアクシデントに見舞われる。しかし10〜11月にかけて計5回のライヴをギプスをつけたまま演奏。
「いやー、根性もんですね、ハイ」(森原)

1984年12月 川上(B)脱退。ベーシスト不在のまま活動を続ける。
「行方不明。原因不明。未だ彼は見つからず(笑)」(手塚)

1985年1月 新メンバーとして加瀬(G)、岡本(B。現アンジー)が加入。延原はVoに専念。
「友人&バンド関係の知り合いをバンドに引きずり込んだという」(森原)
すでにオリジナル曲は着々と増え続けていた。「ピンボール・ラバーズ」「シティ・カクテル」etc…。

1985年2月 バンドの自主企画「BREAK-IN SUNSET GIG」スタート。
「表向きの理由は自分たちの手で良質なR&R GIGを低料金で行いたいため、毎月1回のシリーズ・ギグとして毎回ゲストのバンドを迎えて行う…ということだったが、彼らいわく「とにかくライヴが演りたかったんだよねぇ」とのこと。
チケットやチラシのデザインはもちろん、アーティスト写真もちゃんと撮影していた。カメラマン・石川徹さんとは、近所づきあいもあって当時よく写真を撮ってもらっていた。
この頃、メンバーそれぞれがちゃんと機材を揃え始める。免許を持っていた岡本が重宝がられていた。

1985年6月 雑誌「宝島」の主宰するインディーズ・レーベル"キャプテン"よりEP発表の話しがもち上がる。

1985年7月 キャプテン・レコードよりEP発表を決定。デモ・テープとして7曲を録音。その中よりセレクトされた3曲を新たにレコーディングする。
「メジャーとかインディーズとかあんまり関係なかったんだよね」(延原)

1985年8月 九州へツアー。博多スターレンにて行われたイベント「ROCK-N-LIVE」にゲスト出演。その翌日、博多ビブレ・ホールにて「BREAK-IN SUNSET GIG」を行う。初のツアーにもかかわらず、熱狂的な支持を受ける。
「九州のバンドの友だちに誘われて出演した縁故ライヴとでも申しましょうか(笑)。でも俺たちのことなんて知るわけない場所なのにすごい盛り上がったんだよね。酒飲んでゲロゲロ状態だったけど(笑)」(森原)
「ツアーの経費は今までのライヴ・ハウスのギャラをためてたから、それを使った」(手塚)

1985年8月23日 活動が波に乗りかけたように見えたがアクシデント発生。この日のライヴを最後に加瀬(G)、岡本(B)が脱退。9月、新メンバーとして副島(G)、芝田(B)が加入するが、副島は2回のライヴ後に脱退。急拠サポートメンバーとして吉田学(Key)参加。
「延原の師匠(笑)である副島と舎弟の芝田を加えたんだけど、やっぱり長続きしなかったという。原因はお互いのワガママとでも言っておきましょう」(延原)
「で、以前から顔見知りだったオレが誘われたんだけど、サポートっていうか(笑)…そのままズルズルとっていうか(笑)。ちょうど自分のやってたバンドもあきてたし、おもしろそうだなと思ってやり始めたのがきっかけ」(吉田)
11月には吉田が正式加入。

1985年11月10日 キャプテン・レコードよりEP「シティ・カクテル」発表。「シティ・カクテル」「ダイスで殺せ」「NO STEP」の3曲収録。尚レコーディングは旧メンバーによるもの。セールスは2000枚。現在2万円のプレミアが付いているとか。

1986年に入ってからも精力的なライヴ活動を続ける。**3月21日**にシリーズ・ギグ「BREAK IN SUNSET」の総集編として「BRIGHT LIGHT BEAT CITY」を企画。計8バンド集めて目黒鹿鳴館にて約800名を動員。入り切れないファンが続出。

1986年5月3日 新宿LOFTにて初ソロ・ライヴを二部形式にて行う。しかし、またしてもアクシデント。この日のGIGを最後に芝田(B)が脱退。新メンバーとして野山昭雄(G)、松崎太(B)〈現BELL'S〉が加入。
「やっぱ舎弟・芝田にはプライベーツはまかせられないとオレが判断した、と(笑)」(延原)
「岡本と野山は以前オレとバンドをやってたことがあって…。これも顔見知り、縁故関係でつながってるメンバー構成」(森原)

1986年6月18,19日 新宿LOFTにて2DAYS GIG。この2日間を皮切りに全国18か所22回に及ぶ「キャノンボール・ツアー'86」がスタートする。
「メタル系ではインディーズでも全国ツアーをやってるバンドが多かったけど、R&Rっていうかさ、とりあえずロック系では東京ロッカーズとオレたちぐらいじゃないかな。とにかく金のないツアーでした(笑)」(延原)

1986年8月 6曲入りカセット「キャノンボール'86 ブートレッグ」発表。1本700円。限定500本。現在、入手不可能。
「限定500本だっていうんで経費節約ですべて手仕事。印刷所からドサッと送られてきたレーベルをハサミで1枚1枚切って、ちゃんとナンバリングして、みんなでカセット・ケースに折って入れて。ダビングもボロいダブルデッキを何台か持ってきたのはいいけど朝から晩までダビングしっぱなし」(手塚)
「結局ツアーの初日の朝までやった徹夜作業(笑)。身体ボロボロ」(延原)
「このカセットを売ったお金を資金にしてツアーを回ったんだよね」(森原)

Special Thanks : Kyoko Hoshino

1986年9月 またしてもメンバー・チェンジのアクシデント。9月7日のライヴを最後に自己のバンド、BELL'Sに専念するために野山（G）、松崎（B）が脱退。

新メンバーとして高橋達哉（B）加入。

「実はいちばん最初乙ちゃんじゃない違うベーシストを紹介してもらってたんだよね。だけど急にNGになって、そいつの紹介で乙ちゃんがやってきたの」（手塚）

「高岡っていうんだけどさ、今の乙ちゃんがあるのはそいつのおかげ（笑）」（森原）

「第一印象はピンとこねえやつだなぁって思ってたんだよね」（延原）

「アロハ着て、髪が長くて、サーファーみたいだった（笑）」（手塚）

初対面ではあったが、その日のライヴの打ち上げに最後まで参加をしていたという太っ腹の乙ちゃんであった（笑）。

「リハをやったんだけどオレと少年は実はこりゃダメだって言ってたワケ。で、何回か練習をやったあとにケンタッキーに集まって、やめようって言おうとしたんだけど免許を持ってるっていうんで、こりゃあ使える！って採用したといういきさつ（笑）」（延原）

「（大笑い）」（高橋）

「でもそれから30〜40曲くらいかな、ちゃんと練習してきたもんな。こいつ根性あるなと思った」（森原）

「オレなんてやる気みせちゃって今まで演ってた曲を全部表に書いちゃってさ、今日はこの曲とこの曲をやろう！　なんて積極的にスケジュールを立てたりしてた」（延原）

1986年10月12日 渋谷ライヴイン「アニマルビート」にゲスト出演。

延原、CATVのVJを始める。

11月27日 渋谷公会堂「What a Shame」に出演。トリを務める。

12月21日 新宿LOFTにてワンマン・ライヴ。

12月31日 新宿LOFTで開催された大晦日イベント「オールナイト・フェスティバル」に出演。

1987年3月21日 渋谷ライヴインでソロ・ライヴ。「BRIGHT LIGHT BEAT CITY '87 TOUR」がスタート（全13本）。

「乙ちゃんが加入したあたりからデビューの話がまとまり始めたのかな。バンドとしてはカセットを出したあたりからちゃんとした形にはなってて…。少しずつだけどちゃんと観客も増え始めてたし、ソロ・ライヴも200人以上動員できるようになっていった頃だよ」（延原）

「このツアーが今まで以上に超貧乏ツアーでね（笑）。バンドの活動を中心にしてたからいつでもライヴやリハーサルができるようにってアルバイトもやめちゃってて家賃も払えないような生活だった（笑）」（森原）

「かといって、いつデビューできるのかとか事務所とどうするのかなんて全く決まってないワケ。だからどーしようかってことになってね。レコード会社と契約も何にもしてないのに、ちゃんと契約するからって約束して、ワケのわからない契約前の仮契約なんかしちゃって経費を捻出してたという（笑）」（延原）

1987年3月 レコード会社・東芝EMI、所属プロダクション・アミューズに決定。全国ツアー「SHUTTLE DRIVE'87」（全8本）スタート。

1987年8月26日 シングル「君が好きだから」でデビュー。

ライヴ会場のみで告知され、通信販売のみで受け付けされていた1stビデオ・シングル「FOR SHERRY&RUDE BOYS」がこの日で完売。急拠一般発売決定。

1988年1月 大阪、福岡、東京、名古屋にて「CONCERT FOR SHERRY&RUDE BOYS」を行う。東京は1月30日、日本青年館にて初の単独ホール・コンサートを行う。1246名動員。

「初の単独ホールっていっても、あんまり実感なかったっていうのが正直なところ。生意気かもしれないけど、どこでやっても好きなように演るしかないから。ただスタッフとか関係者とか、オレたちにかかわってくる人たちが増えてきたのがちょうどこの頃かな。それまで全て自分たちの手でやってきてたから、ちょっとめんどくせえなっていう気持ちもあったよね」（延原）

1988年3月13日 新宿パワーステーションのオープニング・イベントの一環としてロック・ショウ「SYMPATHY FOR BLUE BEAT」を開催。酸欠者続出。

1988年6月6日 全国ツアー「WHITE ROCK'88 TOUR」スタート（全20本）。

「久々の全国ツアーで嬉しかった。デビューしてから1年近く全国的な展開がなかったからね」（吉田）

「デビューしてから表立ったハデな活動が少なかったけど、今から思うとその1年間ってオレたちにとってもいい勉強になった1年だったと思う。ゆっくりとバンドや音について考えられたしね」（延原）

「この時期、バンドのメンバーとスタッフの間で意見がくい違っていた事も確かにあった。ホールとかライヴ・ハウスとか場所にこだわらずにとにかくライヴを演り続けたいっていうメンバーの意向もあったけど、結局は限られた場所でしかライヴができなくて、なんかギクシャクしたその気持ちが自分自身でイヤだった」（吉田）

1988年6月25日 2ndシングル「STOP BREAKIN' DOWN」リリース。プロデューサーは元ルースターズの下山淳。

「下山淳には当初、このシングルだけに参加してもらう予定だったんだけど、あまりにノリがよくてアルバムでもやってもらおうってことになったの」（森原）このシングルのプロモーション・ビデオの監督は利重剛。

1988年6月28、29、30日 新宿パワーステーション、7月13、14、15日名古屋ハートランド、7月20、21、22日福岡ビブレホール、7月25、26、27日大阪ミューズホールと、各地で3DAYS GIGSを開催。3日間全て違った構成で、延べ60曲以上を演奏し、4ヵ所12本のライヴで、6000名を動員。

1988年8月 プロデューサーに下山淳、佐久間正英、土屋昌巳の三氏を迎え、2ndアルバムのレコーディングがスタートする。

1988年9月28日 3rdシングル「LUCKY MAN」リリース。

「なんといってもプロモーション・ビデオの撮影で行った沖縄ロケでしょう。当初はフィリピン海外ロケの予定だったのに、お盆前でチケットがとれず沖縄ロケに変更になったという情けない前ふりがあった」（森原）

「超強烈ハード・スケジュールの撮影だったけど3日間、ピーカンで真っ黒に日焼け。ロックン・ローラーに日焼けは似合わないと実感したね（笑）」（延原）※監督は利重剛

「この撮影の時から乙ちゃんはヒゲを生やしてます」（手塚）

「みんなで生やそうっていってたんだけど結局そのままなのはボクだけでした」（高橋）

1988年10月16日 2ndアルバム「MONKY PATROL」リリース。

1988年10月27日 渋谷公会堂を皮切りに「MONKY PATROL TOUR」がスタート（全国20本）。

「とにかく渋公のライヴはやりたい放題にやっちゃえっていうんで、いろんなアイディアを出したんだよね。ハデにやろうってオープニングから風船を出したり、万国旗つるしたり。最初なんてクレーン入れようなんて言ってた（笑）」（延原）

1989年1月 延原、単身渡米。3rdアルバムのレコーディングのための下見&武者修行か⁉

「実は延原のいない間に他のメンバーはフェアチャイルドのYOUちゃんをVo.に迎えて、新バンドを結成しよう！って盛り上がってたんですね（笑）」（森原）

「オレのいない間に計画は着々と進んでいたらしいが、そうは問屋が卸さない。しかし、2度とひとりで旅に出るのはヤメようと思った（笑）」（延原）

1989年2月20日 ルイジアナ州ボガルサ"STUDIO IN COUNTRY"に於いて、3rdアルバムのレコーディングを開始。地元の新聞「DAILY NEWS」に4度もとりあげられたり、ボガルサ市長自らスタジオに来訪、ボガルサ市の名誉市民に選ばれたりで話題豊富。そういえばこのレコーディングに突入する直前に、延原が髪の毛をオレンジ色に染める。なんでも"外人"になるつもりだったとか（笑）。ちなみに脱色と染色で16時間もかかったらしい。

1989年3月8日 4thシングル「PINBALL LOVERS」リリース。

1989年3月20日〜 ニュー・アルバムのトラック・ダウンのためニューヨークに渡る。

1989年4月7日 帰国後すぐに全国ホール・ツアー「SHAPE OF ICE」スタート（全30本）。5月14日の渋谷公会堂のチケットは発売後30分でSOLD OUT。7月16日に渋谷公会堂での追加公演が決定。

「SOLD OUTなんて聞いてもマジかよって誰も信じてなかった（笑）」（吉田）

1989年5月24日 4thシングル「気まぐれロメオ」リリース。

1989年6月28日 3rdアルバム「SPEAK EASY」リリース。

「今回のツアーではとにかくバンドの成長が著しかったと思う。テクニック的なことと精神的なことが前よりもグンと良くなってるの。すごく安定しててね。お互いに安心してられるんだよね」（森原）

「バンドのインサイド（内側、内面）の変化を感じる。自分たちとしてシステムをちゃんとふまえた上で、本当に自分たちのやりたいことを把握できてる。バンドとして、すごくいい状態だよね（笑）」（延原）

「当分メンバー・チェンジの予定ナシ、と」（森原）

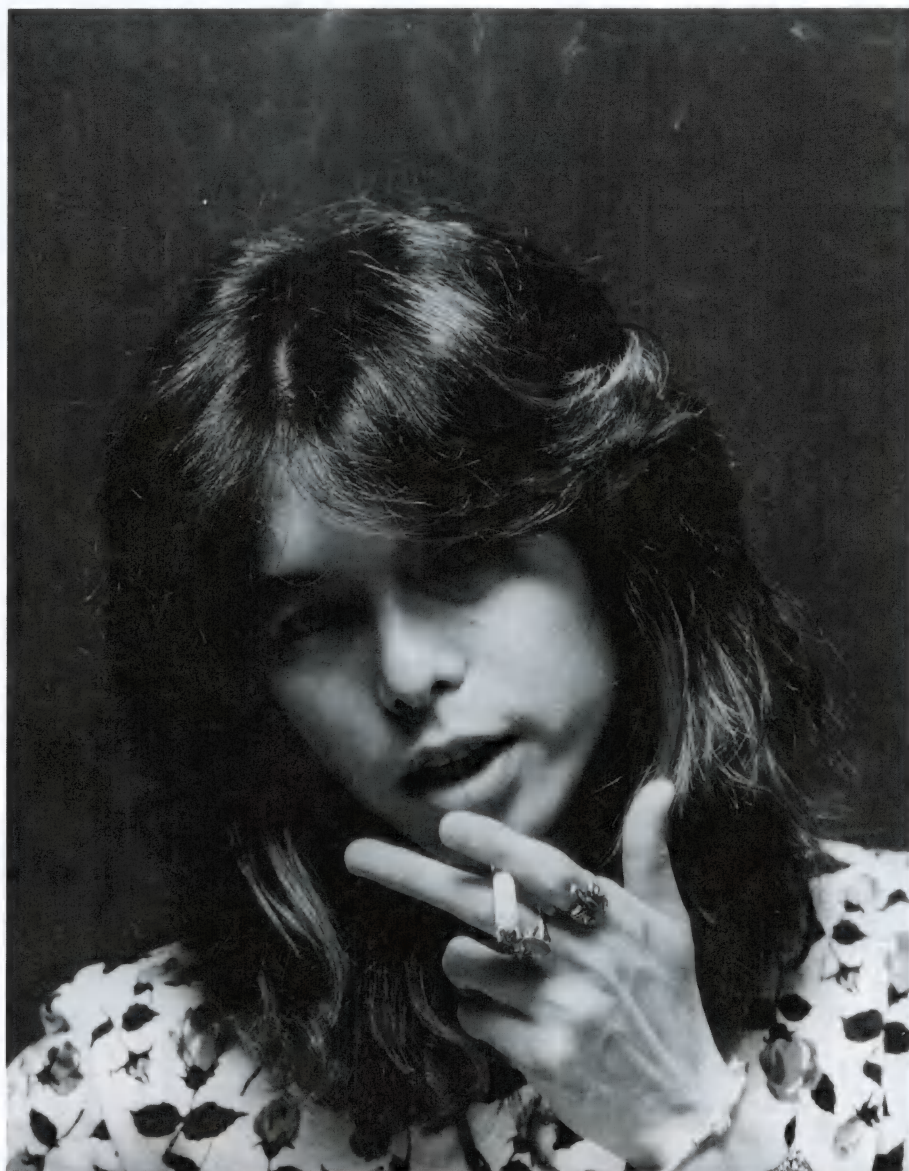
1989年8月10日 ARENA37℃9月号表紙巻頭特集。音楽誌初の表紙となる。

1989年夏 各地のイベントに参加。

9月 から来年リリース予定のレコーディング準備にとりかかる予定。秋には学園祭ライヴ&ツアーがスタートする。
（コンサート・スケジュールP82参照）

※10/25、26　渋谷公会堂2DAYS決定！　9／3チケット発売開始（問い合わせ：ディスクガレージ☎03・5485・3200）

Red Warriors Special

Part-two
ロックに対するシャケの愛情がレッド・ウォーリアーズを誕生させた

文／藤野ともね　撮影／梶木則男

レッド・ウォーリアーズのリーダーでもあり、ギターリストでもあるシャケこと、木暮武彦。彼は、音楽ことロックに関しては、凄いこだわりを持っている。一体、シャケはどういう音楽体験をへて、現在にいたるのか、そして、その中で、かかすことのできない、レッド・ウォーリアーズの結成のいきさつなどをじっくり語ってもらった。

強烈なロック・ミュージシャンらしさ、を感じさせる人が少なくなった気がする。親しみやすいのはいいけれど、スリルがない。これはちょっと違うんじゃないかな、と思う。そんな中で、木暮武彦は最初から言葉ではなくて雰囲気でロック・ミュージシャンであることを主張していた。彼はどういうロック体験を経て来たのだろうか。

「最初にカッコイイなあって思ったのはGSだよね、小学校の時。タイガースが好きだった。それまではポップ・ミュージックには全然興味なくって、歌うのは〝トマトの歌〟とかそんなんで（笑）。それがある日、TVでタイガースを見たらキラキラしてたんだよね。

木暮武彦は最初から言葉ではなくて雰囲気でロック・ミュージシャンであることを主張していた。

まだ昭和40年代だからさ、他が貧乏臭かったじゃない。細長い体形で髪の長い男が4～5人いてそんなの、今まで見たことがなかったからね。でも、まだレコード買ったりはしなかった。その代わり〝シー録音〟をやった。〝シー録音〟っていうのはTVの前にオープン・リールを置いてそのまま録音するの。雑音が入んないように〝シー〟っていってみんなだまる（笑）」

シャケの子供心にインパクトを残したGS（グループ・サウンズ）ブームは数年で終わってしまったけれど、60年代を語る上でGSはハズせない。イギリスのマージー・ビートやビートルズ、ストーンズに影響されて楽器を手にした若者たち（この言い方も古い）、その中で目立ったグループは芸能界で活躍、TVにもどんどん出演し、それまでの歌手とは違うサウンド、ファッションは確かに新しいブームを作り出した。

「その後、従兄の影響で洋楽を聴き始めたんだよね。

註①【モンキーズ】…ビートルズに対抗すべく、コンピューターによって選び出されたメンバーで結成されたアメリカのバンド。専用TV番組による大量露出などメディアを徹底利用した戦略で、一躍人気者となったが作られたバンドのため、その人気は長続きはしなかった。

註②【ショッキング・ブルー】…女性ヴォーカルをフューチャーしたオランダのGSっぽいバンド。バナナラマが後に彼らの「ヴィーナス」をカヴァーして大ヒットさせた。

註③【シカゴ】…現在はAOR路線の彼らも、70年頃には政治的メッセージを打ち出した曲を多くリリースし、中でも「長い夜」は代表曲で大ヒットした。

註④【ダニエル・ビダル】…フレンチ・ポップスのアイドル・シンガー。「オー・シャンゼリゼ」などがヒット。日本人好みのするルックスのせいか、よく来日しTV番組にも出演していた。

註⑤【ママス&パパス】…「夢のカルフォルニア」を大ヒットさせた男2+女2によるフォーク・ロックの味わいを持つポップス・コーラス・グループ。

註⑥【サイモン&ガーファンクル】…ソロでも活躍中のポール・サイモンと俳優でおなじみのアート・ガーファンクルによるフォーク・デュオ。映画〝卒業〟のテーマ曲「サウンド・オブ・サイレンス」など数多くのヒット曲を持つ。

註⑦【ウッドストック】…ニューヨーク郊外のウッドストックで行われた野外コンサート。〝ラヴ&ピース〟をスローガンに40万人が集まった。CSN&Y、ジミ・ヘンドリックス、ザ・フーなどが出演した。

註⑧【オルタモントの悲劇】…カルフォルニア州オルタモントで50万人を集めて行われたローリング・ストーンズのフリー・コンサートで警備側のヘルス・エンジェルス（60年代のアメリカの暴走族。悪魔思想を持つ者が多かった）が客に暴力をふるい、黒人青年を殺した事件。

ラジオも聴いたりして。すごくカッコ良かったね。丁度、小学校5年の時だから1970年なんだよね。やっぱりホラ、70年の頃のムードってあるじゃない、社会全体的な、ポップなムードっていう。で、自然に洋楽って入ってきたの。無理して聴いてるんじゃなくて。言葉はわかんないんだけど、現実的じゃなくて夢があって。それまで聴いていた日本の曲とメロディも全然違うし。

よく聴いていたのは、モンキーズ(註①)のTV番組。再放送だと思うんだけど。あとショッキング・ブルー(註②)、シカゴ(註③)ダニエル・ビダル(註④)あたりかなあ。ママス&パパス(註⑤)、サイモン&ガーファンクル(註⑥)、ビートルズ……。でも、まだロックじゃないよね、ポップスって感じで」

70年というのは何かが始まりそうな、そんな予感が支配していた年だ。ロックシーンでは'69年8月にウッドストック・ミュージック・フェスティバル(註⑦)が行われ、ロックによってユートピアを作る、という幻想が生まれたものの、12月はローリング・ストーンズのオルタモント・コンサートで起こったオルタモントの悲劇(註⑧)により、そのユートピア幻想は終止符を打たれた。

「これがロックだ!って思ったのはレッド・ツェッペリンだね。T・レックスもその前から聴いてたけど、T・レックスはポップスって感覚だった。レッド・ツェッペリンの3枚目に入っている"移民の歌"は衝撃的だった」

70年は、そうした幻想が崩れた後にロックが純粋な音楽として、また産業として成立する年でもあった。レッド・ツェッペリン(註⑨)がその幕明けを作り、ブリティッシュ・ロックが隆盛を極めるのも70年からである。

「これがロックだ!って思ったのはレッド・ツェッペリンだね。T・レックス(註⑩)もその前から聴いてたけど、T・レックスはポップスっていう感覚だった。レッド・ツェッペリンの3枚目のアルバムに入ってる"移民の歌"は衝撃だったよね。この頃から漠然とバンドをやりたいなあって思ったし。それまでも従兄の影響でフォーク・ギターは弾いてたんだけど、ある日、友達がエレキ・ギターを持って俺の家に来たの。それをテープ・レコーダーに突っ込んでさ、音出したんだよね。それからもう、一気だったよね。世界が変わって、これしかない!って」

中学2年でアンプを通したエレキ・ギターの響きを聴くことがなかったら、現在のシャケは存在しなかったといってもいいだろう。

「フォーク・ギター弾いて歌うのは流行ってたからさ、俺もやってたんだけど、やっぱり嫌いだったんだよね。何でこんなに貧乏臭いんだろうなぁ、なんて思ってた(笑)。だから"明星"のポップスの楽譜見たり、レコードに合わせて適当にコード弾いて歌ったりしてた。あと従兄が教えてくれたり。

友達が俺の家に来てエレキ・ギター弾かなかったら、今バンドやってないよ、多分。

最初にバンドを組んだのは中学3年の頃。やっぱり、ディープ・パープル(註⑪)をコピーした。レッド・ツェッペリンはコピーしなかったね。難しいしさ、やろうという気が起きなかった。あとコピーしたのはビートルズ、T・レックスとかね。

一番よく聴いていたのはスージー・クワトロ(註⑫)かな。サディスティックの女王(笑)。あとストーンズ。ストーンズもコピーしようって感じじゃないんだよね。ディープ・パープルはギターがジャン、ジャン、ジャーン(註⑬)ってさ。これだ!みたいな。

中学の時のバンドはクラスの友達と作ったんだけど、学園祭に出て歌ったりもしたよ」

中学に入り、本格的にロックに目覚めていったシャケ。当然、高校時代もドップリとその道につかるようになる。

「高校は私立に入ったんだけど、共学のクラスと男子クラスがあんの。俺、いっつも男子クラスでさあ、暗い高校生活だよね(笑)。今、考えると結構良かったのかもしれないけどさ(笑)。それで学校が暗いもんだから、ますますロックの道へ(笑)。ミュージック・ライフとか買って見るとさ、いろいろわかってくるんだよね。それまでロックは全部同じだと思ってたの。レッ

「最初にバンドを組んだのは中学3年の頃。ディープ・パープルをコピーした」

ド・ツェッペリンもニューヨーク・ドールズ(註⑭)、イエス(註⑮)ピンク・フロイド(註⑯)も一緒くたでさ。でも雑誌の写真をよく見ていると、アリス・クーパー(註⑰)の目の下には何か線が入ってるなとか。だんだん、そういう違いに気付いてくるんだよね。ああ、こういうのはグラム・ロックなんだ、とか。これはプログレッシヴで、これはハード・ロックだとか。だから中学生とか高校生とかそんなもんなんだよね。だけど好きとか嫌いとか、わかるでしょ、すごく影響されやすいし。今、自分でずっとバンドをやってるとさ、聴いてる人間も自分の感覚と同じだって錯覚しちゃうんだけどさ、でも実際に自分の若い時を思い出したり、ファンの手紙を読んでると、ああ、そうか、知らないんだなってわかるんだよね。俺だって、若い頃は全然わかってなかったんだって。

高校の時もバンドはずっとやってた。学校の規則が厳しかったから、闘ってたよ、先生と(笑)。髪の毛も伸ばしてたんだけどさ、天然のウェーヴがもともとあるじゃない、それで先生が"お前、パーマかけてんだろ"っていわれて切られたことがあんの、つかまえられてさ。それで、その後で文句いって証明したんだよ、"俺のは天然パーマだ"って。その後で、本当にパーマかけてさ、文句いえねえだろって(笑)。

高校の時のバンドは中学の時とメンバーはそんなに変わんなかった。俺はギターとヴォーカル。ギター弾きながら歌うのがカッコイイって思っててさ。グランド・ファンク(註⑱)とかそうでしょ。グランド・ファンクはコピーもよくやった。あとバッド・カンパニ

「高校の終わり頃からプロになりたい!と思うようになった。ミュージック・ライフに載りたい!とかさ(笑)」

ー(註⑲)、ディープ・パープル。でも一番コピーしたのは、やっぱりKISS(註⑳)だったね、あの時代は。

コピーするんじゃなくて聴くほう専門っていうのはアリス・クーパーかな。T・レックスはギター・ソロが入ってないから途中でつまんなくなっちゃってさ。最初はガチャガチャやってるだけで面白かったんだけど、ストーンズは高校に入ってからコピーし始めたね。聴き出した頃は"アンジー"とかのホーン・セクションが入ってるやつだからコピーする気がしなかったんだけど、段々昔のものとか聴いていくうちに"ジャンピン・ジャック・フラッシュ"とか"ブラウン・シュガー"とか知って、やろうかって気になるじゃない。

レコードも結構買ったんだけど、友達に自分が聴きたいのを"これ、すごいいいから買ってみなよ"って買わせたり。本当は全然聴いたことないんだけどさ。それで友達の家で聴いて、つまんなかったりして、あー、良かった、自分で買わないで、とかさ(笑)。自分

註⑨[レッド・ツェッペリン]…ブリティッシュ・ロック黄金期の最高峰。イギリスのバンドが、全米ワールド・ツアーを行うようになったのはレッド・ツェッペリンが最初である。彼らの代表曲「天国への階段」は日本でもパンク以前のバンド少年たちの必須アイテムだった。

註⑩[T・レックス]…再びリバイバル・ヒットしているグラム・ロックの代表バンド。マーク・ボラン信奉者は今も数多い。

註⑪[ディープ・パープル]…レッド・ツェッペリンと並んで人気の高かったハード・ロック・バンド。クラシカルなオルガンに重厚さがあった。

註⑫[スージー・クワトロ]…ブラック・レザーのジャンプ・スーツにベースをかかえてシャウトする女性ロッカー。小柄でキュートなルックスとワイルドなロックン・ロールで人気を集めた。

註⑬[ジャン・ジャン・ジャーン]…当時のバンド少年は必ずコピーした名曲「スモーク・オン・ザ・ウォーター」のイントロ。

註⑭[ニューヨーク・ドールズ]…後にセックス・ピストルズで話題をまいたマルコム・マクラーレンがマネージャーをしていたグラム・ロック的なスタイルを持つNYのロックン・ロールバンド。ジョニー・サンダースが在籍していた。

註⑮[イエス]…いわゆるプログレッシヴ・ロックの中でも緻密なサウンドで人気を集めたバンド。

でアルバイトしてまとめて買ったりもしたけどね。車洗うアルバイトしてさ。東芝に勤めてる親戚がいて、その人に頼むと3割引になるの。それで7枚とか8枚とか。

プログレも高校の終わり頃には聴いた。イエス、ピンク・フロイドとか。EL&P（註㉑）も凝ってるやつがいて聴いたんだけど、ギターが入ってないから許せなかったよね。ロック＝ギターだったからね。ひずんだ、ディストーションかましたガーンっていう。

この頃からプロになりたい！と思うようになった。ミュージック・ライフに載りたい！とかさ(笑)。

日本のロックがこの頃、いろいろレコード出し始めたでしょ、カルメン・マキ&OZ（註㉒）、四人囃子（註㉓）、サンハウス（註㉔）とかさ。その中で安全バンド（註㉕）が一番好きだった。カッコよかったよね、日本語の乗せ方が。四人囃子はサウンドはカッコいいんだけど、詞が何か変なんだよ。空が破けてどうのこうの、みたいな。それが洋楽のようにカッコよく聴けな

「俺のバンドが最初コンサートをやったのは埼玉会館。ひどかったよ(笑)。友達集めて無理矢理チケット売りつけて。コピーだけ演奏して」

かったんだよ、歌が始まるとそこだけフォークみたいでさ。でも四人囃子だけはドラムがカッコよかったな。だけど、あの頃の四人囃子は、ああいう詞を今回の俺たちのアルバム（『SWINGIN DAZE』）みたいな感覚でやったんだろうね。それが当時はわかんなかった。だから今、若いコが俺たちの曲をわかんないのも同じなんだよね(笑)。

安全バンドをこの前、久し振りに聴いたんだけどさ、俺、やっぱりすごい影響受けてんだよね。メロディと詞の乗せ方とか。あの頃、日本語は絶対ロックに向いてないっていう固定観念があったじゃない。それが安全バンドはすごく合ってた」

75年頃から、日本のロック・バンドが次々とレコードをリリースするようになった。けれどもシャケは日本のバンドを横目で見ながら、漠然とプロになりたいと思っていた。ロックに対するこだわりが芽生えたのもこの時期だ。

「女が群がってるバンドは嫌だったね。クイーン（註㉖）とかも最初は好きだったんだけど急にミーハー的に人気が出て嫌いになっちゃった。でも、今聴くと凄いんだよね。2枚目（註㉗）3枚目（註㉘）とか狂気のレコードだよね。音の作り方なんか。今、考えるとなんでこれがミーハーだったかわかんないよね(笑)。

KISSもだんだん子供だましに思えてきて、そうするとやっぱりエアロ（註㉙）だ！みたいな。コピーもしたよ。俺ヴォーカル専門でギターのやつ呼んできたりして。コンサート行ったのもエアロスミスが最初。武道館で2階席のはじの方だったけど、もうウワーッてなって何が何だかわかんなくなっちゃって。ああいう時思い出すと、ファンの気持ちってわかるよね。

俺のバンドが最初コンサートをやったのは埼玉会館。ひどかったよ(笑)。友達集めて無理矢理チケット売りつけて。コピーだけ演奏して。でも人前で演奏するのって快感だった。女のコがワーッとなるじゃない。自分の時は女が群がるのはいいの、当り前じゃん(笑)。

高校卒業して大学へ行ったんだけど、それは働くのが嫌だったから(笑)。小さい時から何かになりたいっていうのはずっとあって、野球選手とか画家とか。もっと現実的になってイラストレーターかな、とか。でもギター始めたら、バンド！って感じ。大学入ったら、適当にバイトやりながら、バンドやったり遊んだり」

時代は70年代末期。ロック・シーンにもパンク、ニュー・ウェイヴの新しい動きが起きていた。

「オリジナルを作り始めたのは20の時、結構パンキッシュだった。頂度、シーナ&ロケットとかデビューした頃だった」

「セックス・ピストルズは気持ち良かったよね。クラッシュは暗かったけど、ピストルズって〝来たー！〟って感じで壮快だったじゃない。同時にフュージョン（註㉚）も流行ってさ、クソったれだと思ってた、でもバンドのメンバーがフュージョンやるからっていって離れちゃって孤独だったよね。ケンカしてさ。バカにすんだよ、ロックをさ。子供の音楽だ、とかいって。だけど、でっかいセミアコ持って直立不動でギター弾いて何がいいんだろうって思ってた。

オリジナルを作り始めたのは20の時、結構パンキッシュだった。丁度、シーナ&ロケットとかデビューした頃だったたし。

一発録りでデモ・テープ作って売り込みにも行ったよ。渋谷とか歩いててレコード会社を見つけると飛び込みで〝これ聴いて下さい。俺たちは埼玉で一番有名なバンドです〟って言って(笑)。その中であるイベンターが気に入ってくれて、日比谷野音のコンサートも出たりして屋根裏もワンマンでやったりした。これで手がかりつかめた、と思って学校もやめて家も出ちゃった」

ユカイと出会うのもこの頃のことだ。

「ユカイ君のバンドは後輩バンドだったんだけど、すごくシャープでカッコ良かった。今、みんながユカイ君に感じてるようなことと同じような感じじゃないかな。ヘンなやつだけどね(笑)。一緒にやろうぜってことになって練習したら、そのうち来なくなっちゃってさ」

そして、シャケは次のバンドでプロとしてのスタートをきることになる。

「レベッカを作った時は自信あったよ。時代も変わったしね。パンク、ニュー・ウェイヴも落ち着いてロックは死んだっていわれててさ。俺もその前はフェイセス（註㉛）みたいなバンドやってたんだけどさ、やっぱり今度はただ楽しくやってるだけじゃ抜けだせないな、と思って。洋楽もつまんなくなってきてさ、ハード・ロックもなくなって。ヘヴィ・メタは出て来たけど全然好きになれなかったし。自分でもロックは死んだ、と思ってた。

その頃聴いてたのは、アダム&ジ・アンツ（註㉜）とかプリテンダーズとか。

レベッカを抜ける頃はすごいヤケクソ。日本でバンドをやってると、どんどん吸い取られちゃうんだよ。歌謡曲の波に飲まれていってさ。それを自分でも気付かなくなっちゃって。今、ロック・バンドを日本でやってるやつも気付いてないんだろうね、ロックン・ロールとか言いながらさ。そういう時に昔のミュージシャンの本を読んだり、ストーンズの写真を見たりすると、毒されている自分に気付くんだよね。何で俺はこんなことやってんだろうって気になってさ。回りと意

「レベッカを脱ける頃はすごいヤケクソ。日本でバンドやっていると、どんどん吸い取られちゃうんだよ。歌謡曲の波に飲まれていってさ」

見も合わなくなるし。それで俺は売れるとか売れないとか考えないようにしようと思った。反抗だよね、やっぱり」

ロックに対するシャケの愛情がレッド・ウォーリアーズを誕生させた。

「やっぱりユカイ君とやりたい、と思ってさ。それが

註⑯［ピンク・フロイド］…プログレッシヴ・ロックの代表バンド。サイケデリックを進化させた高度なスタジオ・ワークによる革新的なサウンドを作り上げた。

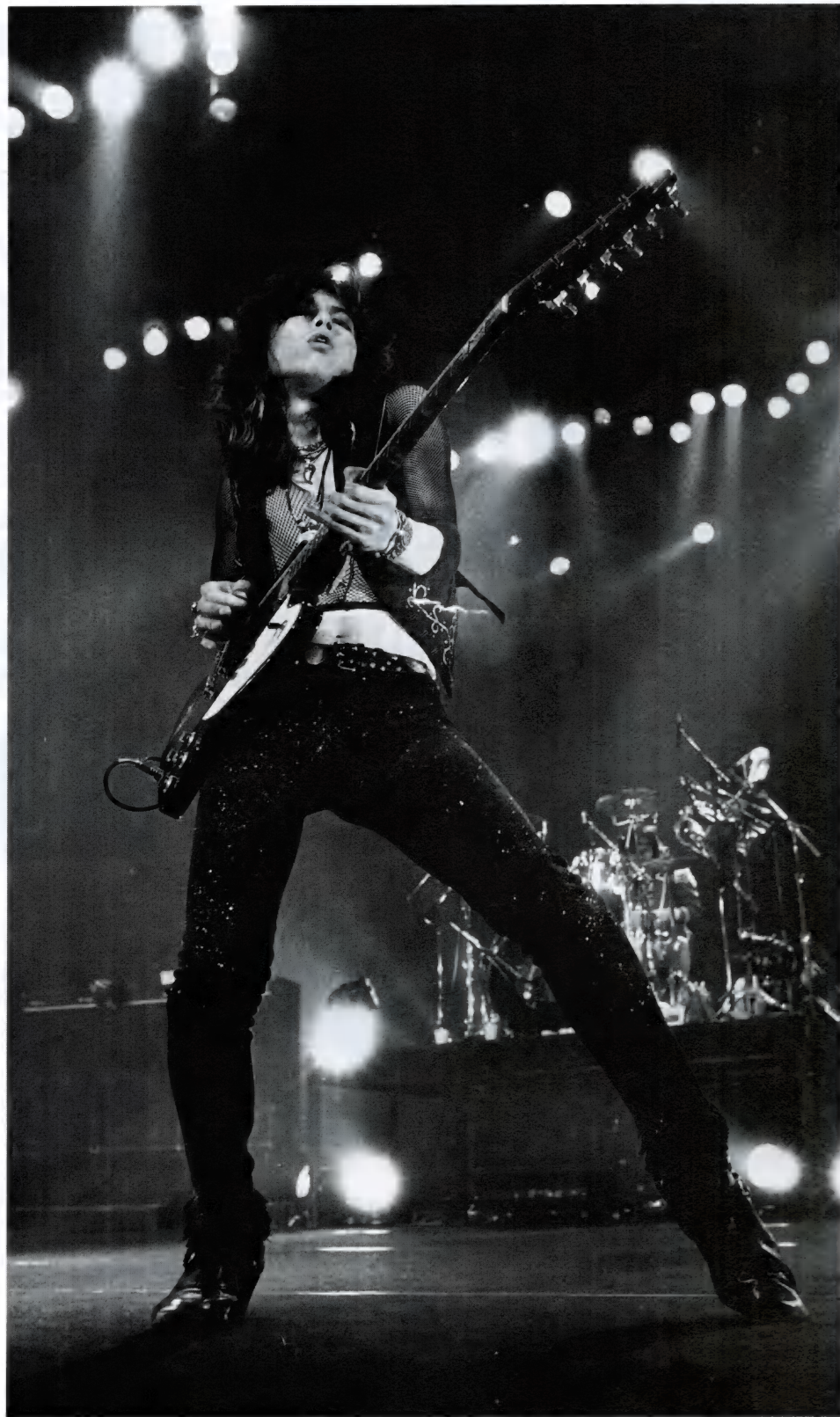
註⑰［アリス・クーパー］…ヘビを首に巻き、ギロチンにかけられたり、お札をバラまいたりするシアトリカルなステージで話題を集めたハード・ロッカー。アイラインを黒々と引き、下まつ毛までアイライナーで顔に描いてしまうメイクもトレード・マーク。

註⑱［グランド・ファンク］…グランド・ファンク・レイルロードの略称。トリオ・スタイルによる一番ラウドなバンドと言われていた。

註⑲［バッド・カンパニー］…フリー解散後、ポール・ロジャースが結成したバンド。ヘヴィでブルージーな中にアメリカ的なサウンドで取り入れて人気を集めた。

註⑳［KISS］…デビュー当時はアメリカンSFコミック的なメイクをほどこし、火を吹くステージでティーン・エイジャーを熱狂させた。

註㉑［EL&P］…シンセサイザーを一躍有名にしたキーボード、ベース、ドラムというスタイルによるクラシカルでアヴァンギャルドなバンド。

註㉒［カルメン・マキ&OZ］…フォークの女王だったカルメン・マキがジャニス・ジョプリンに触発されて結成したハード・ロック・バンド。

ダメならアメリカ行こうと思ってた。ユカイ君もシンガーでやりたがってた時期でタイミングが合ったんだよね。キヨシは初めて会ってテープ聴いた時、いいと思った。テクニックってことじゃなくて主張してんだよ、ベースが。これならいける、と思って。コンマ君はレベッカから一緒だからね。

最初、エッグマンに電話してさ、新しいバンドやりますって言ったら、スケジュールに入れてくれて。これも賭けなんだけどさ(笑)。レベッカの曲も少しやったし、カヴァーでプリテンダーズとかJ・ガイルス・バンドとか。あとは昔のバンドの時のストック曲、レッズでやるために書いた新曲。やっぱり一番最初のライヴって感覚あるよ。アマチュアだったし。これによって今後が決まる、みたいな。でもコレでいけるって手ごたえはあったよね。

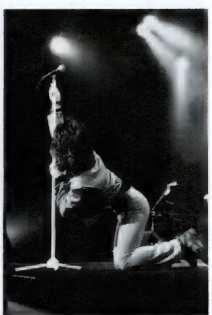
「レッド・ウォーリアーズやってて幸せだったよね。日本じゃこういうの主流じゃないけど、ここまで来たんだしね」

その後のツアーのブッキングもエッグマンの事務所でやってもらって、だからすごい世話になったよね。ヤクルト・ホール（'85年12月）の時には、そろそろと思ってたから事務所も今のマザーに決めて。

プロになって思ったのは、いいなりにならないぞ、自分たちの思うとおりにやってるってこと。音楽には口出させないぞっていう。実際、俺たちほどに自由に作ってきたバンドっていないと思うよ。それなりの作品っていう自信もあるしさ。

最初の頃のホール展開って地方とか客入んないじゃない。でもそういうのも大事なんだよ、クソったれって思ってさ。俺って必ず悪いことを教訓に活かすの(笑)。

レッド・ウォーリアーズをやってて幸せだったよね。日本じゃこういうのって主流じゃないけど、ここまで来たんだしね」

※1986年10月10日アルバム『Lesson 1』でデビューし、7月21日発売した『SWINGIN' DAZE』まで、5枚のアルバムと12インチ・シングル2枚、それにシングル6枚、ビデオ2本を発売した。レコードを発売するたびに、メンバーは大きく成長し、多くのファンを巻き込んできた。そして、そのファンに、音楽とはどんなモノなのか教えてきた。シャケのバック・ボーンを聞いていると、音楽を演るために生まれてきた奴だなぁとつくづく思った。

註㉓［四人囃子］…プロデューサーで有名な佐久間正英が在籍していたプログレッシヴ・バンド。最近、再結成し、アルバムもリリースした。

註㉔［サンハウス］…九州出身のブルージーなロックン・ロール・バンド。シーナ&ロケットの鮎川誠が在籍していたことでも有名。

註㉕［安全バンド］…シンプルでハードなサウンドに鋭い日本語の歌詞で独自の位置にしたバンド。ヴォーカル&ベースの長沢博行は現在、作曲やアレンジャーとして活躍。

註㉖［クイーン］…デビュー当時は中性的な少女漫画から脱け出したようなルックスだった。

註㉗［2枚目］…『クイーンII』

註㉘［3枚目］…『シアー・ハート・アタック』

註㉙［エアロ］…エアロスミスのこと。ガンズン・ローゼスも彼らから多大な影響を受けていると思われる。

註㉚［フュージョン］…ジャズ・ロック的なサウンドで聴きやすいため、大ブームとなった。エスクニック指向も特徴。

註㉛［フェイセス］…ロッド・スチュワートがヴォーカルのいかにもブリティッシュ的なブルース、トラッドをルーツに持つロックン・ロール・バンド。小粋なロンドン・ポップ・ファッションで華やかなステージングを見せた。ストーンズのロン・ウッドが在籍していた。

註㉜［アダム&ジ・アンツ］…アフリカン・ビートを取り入れたニュー・ウエイヴ・ダンス・バンド

完全永久保存版Part2

ARENA37°C 1988年1月号～1989年8月号

今月は完全永久保存版の第2弾として1988年1月号から1989年8月号まで掲載したレッド・ウォーリアーズの名言、格言を載せてみようと思う。

五里霧中

YUTAKA TADOKORO
田所　豊

彼は突然「〃怪物クン〃のカッコウをして写真を撮りたいなあ」といった。最初、冗談かと思ったが目が真剣だった。

そう、いつだって彼、田所豊は、囲りにいる人間をアッと言わせる思考回路を持ち合わせている。

——守ってやるって意識はどうかな？〃女は守ってやるもんだ〃みたいなのは。

「あるでしょ、男だから。でもさ、自分のことを守ることもできないんだからさ、そんなの無理だよ。生活できないしね、現実的には。わかんねえな。永遠の課題じゃない？佐伯さんはどうなの？」

——オレはもう〃ひと穴主義〃だよ。

「そうか。まっ、そーゆー時期なんじゃない？ふーん」

(88年1月号　佐伯　明)
Photo／Masafumi Sakamoto

★思わず赤面!!ユカイクンに女性観を聞く取材を試みたが、うまい具合にはぐらかされて、逆にインタビュアーの女性観、それも〃ひと穴主義〃発言が飛んだりして。

(88年2月号) Photo／Shuhei Fujita

★この取材は大へんで、手錠を借りてきたり、メンバーにイラスト描かせたり、メンバー、スタッフ総出の仕事になってしまった。でも、なかなか、おもしろい企画で、楽しみながら仕事をおこなった。音楽文化ライターの佐伯氏からFAXが届いた時には〃ゲロハキそうですよ、梅原さん〃というコメントがそえられていた(笑)。

ロックン・ロールで暴れたい

3月10日にシングル「ロイヤル・ストレート・フラッシュ・ロックンロール」を発売。そして4月1日には超ブッ飛びのアルバム『KING'S』をリリースする。

この取材の日、彼らは4月1日に発売するアルバムに向けてレコーディングの真っ最中だった。

ユカイはヴォーカル入れが終わるまではヒゲを剃らないとポツリと言い、しきりにヒゲを気にしていた。

ユカイ「歌詞は開き直り、生き様の(笑)。ロックンロールそのものだね。幼いけどさ、反抗だよね、デッカイものに対するとき。体制にね、負けねえぞ、やってやろうっていう。限定で「アウトサイダー」をシングルで出した時、すごい負けた歌でさ、最後にGIVE　ME　A　CHANCE!って言って救いを求めてるんだけど、その時、失敗したなって思ったんだよ。何で負けるようなのを作っちゃったんだろうって。だから今度は絶対に負けねえぞって」

シャケ「そういうのってその時のバンドの雰囲気が出てんだけどさ(笑)。今、もっとすごいポップなシングルを出せば簡単に売れそうな気がするんだよね。だけどそこをあえてそうしないところがすごいこだわりの強いバンドっていう。ロックンロールで暴れたいね、面白いじゃない。今、巷に溢れているロックンロールってロックンロールじゃないと思うんだ。利用してるじゃない、やっぱりカッコいいじゃない、その名前って」

——シングルが、これだけ強力だから、アルバムも期待大!ということで、話はちょっと変わって2人の関係は？

ユカイ「ホモじゃないよ(笑)。ギターも燃えてるけどさ、バンドの中で映画監督みたいなところがある。シャケがディレクターで俺が役者みたい、さ」

シャケ「関係…。一番フィットするコンビだと思うんだよね。全然違うところが多いんだけどさ、合わせるとピッタリくるみたいな。本人がいる前で言うのって難しいけどさ(笑)」

(88年4月号　藤野ともね)
Photo／Masafumi Sakamoto

★ユカイとシャケって一見仲が悪そうにみえるが、ユカイはシャケの作る音楽に惚れ込んでるし、シャケは、ユカイのヴォーカルに惚れ込んでいるという、絶妙のコンビといえる。

KING'S

ユカイ「オレは最初やっぱりチカラが入りすぎちゃってさ、〃今度はいっぱい歌詞書くんだ〃とか思って。何か思わず〃チ〃になっちゃったりして(笑)。歌詞書く時もリキンじゃって鉛筆だけがどんどん減っていく」

シャケ「ユカイ君、鉛筆の扱いが乱暴でさ、ポキポキ折ってんの」

ユカイ「何言ってんだよ。でもそのチカラが最初は空転した。ぜんぜん〃絵〃になんなくて。ボーカリストとして、歌詞書く位しかないじゃない？声出す以外に」

(88年5月号　佐伯明)
Photo／Mariko Mirra

★シャケのロックンロールに対してのこだわりが一番出ているアルバム。この時の写真は、キャデラックを借りて、何度となく高速道路を行き来して撮った。本当、楽しい取材で、さながら映画のワン・シーンを撮ってるような感じだった。帰りは一生に一度乗れるかどうかわからないからと、キヨシが運転するキャデラックに便乗し、最高の気分!!だった。しかし、マザーの坂に来たとたん、ガス欠で立ち往生して、スタッフ・メンバー総出で押しながら駐車場にいれるというオチまでついてた。あの時ほど、思いっきり笑えたことはなかった。

無敵のR&Rバンドのかなめベースの小川清史とドラムの小沼達也のいいたい放題

KIYOSHI OGAWA SIDE

メンバーの中で一番年下ながら、一番の常識人でもある。そんなキヨシの目を通したメンバー評は、いかに。

——キヨシさんから見て、他のメンバーで、ここが変化してきたなって思えるのは？

キヨシ「シャケは、やっぱりリーダーっぽくなったね。それは感じるね」

——落ち着きが出たっていうこと？

キヨシ「っていうか、何かあった時に冷静に考えられるようになったんじゃないかな。結構、自分のペースをバンドのペースに変えられるようになったね。自分だけっていうんじゃなくてさ」

——自分自身としては、どうですか？

キヨシ「最近、演奏しているのが楽しくてね(笑)」

——余裕が出てきた？ミュージシャンとして。

キヨシ「ミュージシャンというか、人間だからね。自分のポジションって、やっぱり確立してきたのかもしれないな。ただ、まだ表に〃こうだ!〃って出せるような確立のしかたとは違うんだけど。やっぱりね、何年も生きていればね、そうしたいなと思うし、意外に年とって良かったなっての、あるんじゃないかな」

——年とったって感じます(笑)？

キヨシ「いや、それは感じない(笑)。ただ、もうバンドやって何年にもなるんだっていうのはある」

TATSUYA KONUMA SIDE

いつも、ニヤニヤしていて何を考えているのかわからないコンマ。スケベさでは筆頭に立つ彼は、メンバーに関しての話は慎重だ!?

——ツアーがずっと続いていると、プライベートな時間がないでしょう？

コンマ「あんまりね。昼時間あるんだったら、観光めぐりでもするけどさ」

——観光めぐりですか(笑)意外だけど。

コンマ「この間、移動日に温泉行ったけどね(笑)。すごい良かった。あと京都でね、お寺めぐり、やっちゃった(笑)。嵐山行ってね、湯どうふ食ったりとか。うまかったよ。結構古風だからさ、オレって(笑)。アメリカも好きだけど、日本も好き、みたいな」

——一番よく飲みに行くのは？

コンマ「そうだなー、オレとキヨシじゃない？ま、シャケも行くけどね。田所先生は結構ホテルへ帰っちゃう場合が多いね。次の日、のどにこたえるからさ」

——全国くまなく回りました？

コンマ「回りましたよ。この間、東北でね、峠の茶屋みたいのがあってね。滝とかあったり、ハイキングコースみたいなのがあるの、そこでスタッフも含めてみんなで、こう、一瞬だけど遊んだんだけど、すごい気持ちよかったのね。釣り掘りがあって、釣った魚を焼いて食べさせてくれるんだけど、すごいおいしかった。そういう素朴なさ、自然にふれあいたいっていうか。年中ホラ、室内にいるじゃない。たまにあいうとこ行くと、ひと息つくね」

(88年8月号　岡本明)
photo／Mariko Miura

★この日の取材時間にコンマクンが大幅に遅れた。道が混んでいたといっていたが…。それでライターのつごうで、夕がたに再び合うことになった。〃おわびに食事でもドーゾ〃というスタッフの言葉に甘えて、アメリカンサンドをたのんだが、それが食べづらいのなんのって。思わずこぼしてしまったら、インタビューが中断して注目されてしまった。スミマセン。

ところでキヨシクンは、取材で会うたびに「梅ちゃん、結婚しないの？」って聞くのだ。そのたびに私は、笑ってゴマかしていた。

構成／梅原祐子(本誌)

Photo／Ryuzho Minemura

KING INTERVIEWE

俳優・田所豊が演じる山口ヒロという人物

TOKYO POP

フラン・ルーベル・クズイ監督と田所豊に映画『TOKYO POP』についてインタビュー!!

「ちょっと音楽の片手間に軽く演った映画じゃないからさ。ノメリ込んで研究して創ったもんだから。それは、観てくれれば絶対わかると思うよ」

――ユカイ君は、映画初主演にしていきなりアメリカ映画ということで、とまどったことはありませんでしたか？

田所「最初は右も左もわかんなかったよね。で、演技指導としてさ、フランさんとパントマイムをやったんだよ。気持ちの伝え方を勉強して言葉の壁を少しでも乗り越えるためにさ。それをやってるうちに何かだんだん自分がどうやればいいか見えてきた。何か不思議で新しい体験だったよ」

――山口ヒロという人間に対してはどう感じます？

田所「もちろんオレとは違うよね。でも、山口ヒロの臆病者っぽいところとか弱いところは共感できたりもするし。いい意味で、普通の人だって部分にね。オレ自身としては、この映画を撮り始める前は、まだほんの子供だったけど、演り終えてからは何かオトコになったっていうかさ、そんな感じがするよね。だから、『TOKYO POP』はオレにとってスゴク大事なんだ」

（'88年10月号 佐伯明）
photo／Mariko Miura

★ユカイはこの映画出演の準備として、どこに行くにも英語の講師がそばにピッタリついて、暇さえあれば、英語を習っていた。『TOKYO POP』に出ているユカイ（役・山口ヒロ）は、ツッパッていながら純な男の子で、ユカイと山口ヒロがだぶって、みえて、前よりもユカイが好きになった。

「ライヴ盤の一番いいところって客席の歓声じゃないかな。トラック・ダウンの時興奮したもん」シャケ

KING'S ROCK'N ROLL SHOW をリリース

――で、その時の模様がライヴ・アルバムになるわけですけど、ライヴ盤に対してシャケが持っている考えを聞かせてもらえますか？一般的にライヴ&ベストっていうか、ベスト・アルバム的な性格が強いけど……。

「まっ、何かロック・バンドの証明っていうか、そんな感じがするよね。オレは昔からライヴ盤の方が好きだった。グランド・ファンクから始まっていろいろと。だから、自分たちのバンドがライヴ盤出せるってことが、まず何より嬉しい。でも今はビデオがあるからさ、ライヴ盤そのものの価値は下がってるかもね。でも、オレとしては〝重み〟がぜんぜん違うよ、ビデオとは。たとえば自分で、自分の好きなバンドのライヴを追体験したい時は、やっぱりビデオの方を観ちゃうけど、演ってる側としてはライヴ盤の方が〝バンドの証明〟になるよ」

――ライヴ・アルバムの良さっていうか、一番いいところってシャケは何だと思いますか？

「やっぱり歓声じゃないかなぁ、客席のね。この前トラック・ダウンやっててさ、興奮した、うん。それも普通の歓声じゃなくて、たとえば曲のイントロで入ってくる歓声とか、ブレイクで起きるのとか、そのコンサートでなけりゃ聴けない歓声ってのがあるよね。まっ余計なものもあるけどさ、ブレイクでメンバーの名前呼んでたり（笑）。だから、トラック・ダウンで客席の声を重視すると、自分たちの音がぼやけちゃうし、臨場感出ないし、けっこうむずかしかった。ただのクリアーなサウンドを追求するんだったら、スタジオ盤で事足りるからさ。空気を通って反響してくるのがやっぱりライヴ盤の味だと思うよ。

（'88年10月号 佐伯明）
photo／Mariko Miura

★小雨パラつく西武球場で初のライヴを行った彼ら。雨のせいで一番の聴かせどころでシャケのギターの音がでなくなるというハプニングがあった。そのことで楽屋うちあげの時、シャケは落ち込んでいたのが印象に残っている。

田所豊、大いに語る

――話は変わるけど、そのパーマは定着させるつもりなのかな？

「全然。定着ってことは俺にはないから。絶えず変わっていくからね」

――みんな何って言てるのかな？

「まわりがよくないって言うから、またかけてやったんだ（笑）。よくないって言われるとやりたくなるんだよ（笑）。ざあまぁー見ろ（笑）」

――そういえばキースの新譜聴いた？

「うん。でもキースのアルバムより〝ディザイアー〟の方が好きだな。なんか深いんだよね。本当はペテン師なのかもしれないけどそう言う気持ちにさせてくれるからね。ディラン聴いちゃうと、まだキースはガキだなって思うよ」

――深いものがユカイ君は好きだね。

「全然わからないけど、フィーリングだよ。騙されてんだと思うけどさ（笑）。実際はただ女が好きで、その為にタワゴトを言ってるだけだったりして……」

――でも〝深く見せる〟のは技だよ。

「軽く見せるのも技だよ。大変だよ、軽く見せることの方が（笑）」

――もうそろそろ〝深い部分〟見せてもいいんじゃないかな？

「うーん。考えてみるよ」

（'88年12月号 佐伯明）
Photo／Ryuzho Minemura

★いつでもマイペースの田所豊。インタビュアーをはぐらかすのはお手のもので、真実はいったい何処にあるのかと、いつも思ってしまう。でもインタビュアーは大へんかもしれないけど、そばで聞いてると、これが、ボケとツッこみ漫才のようでおもしろいのだ。

そういえば、ユカイを街で見かけたことがあったが、カッコつけて歩いてる姿は、笑えた。

KING'S ROCK'N ROLL TV SHOW 芸能界に殴り込み

シャケ「テレビはさ、ライヴやるって感覚じゃないよね。だから……ラジオ出て、曲かけてさ、なんかしゃべるのと一緒だよ。

ようは、ライヴに来てもらうとか、レコード買ってもらうためのプロモーションでしょ、オレにとってはさ。でも、プロモーションとしたら楽なプロモーションだよ。一回出ればさ、インタビュー何本かやって、読まれるか読まれないかよりも、大きいよね。

テレビは楽しくないけど、せっかくカッコいい曲を作ったんだから聴いてもらいたいとは思うけどね。だけど、ライヴの方がいいねえ。それは、くらべるまでもないことだけど」

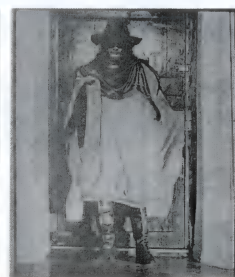
※　※　※

シャケ「テレビっておもしろいと思うのは、自分たちでそれを見る時だね。コイツあんなことしてるよ、とか写りが悪いとか（笑）」

キヨシ「前に夜ヒットに出た時に、体調が悪くて、オレだけ先に帰ったんだよね。テレビが車についてるから見ながら帰ったんだけど、おっかしんだよね。シャケとかユカイとか一番前に座ってるしさ（笑）。なんかヘンにポーズとったりしているわけよ。わざわざ写る方に移動してきちゃったりしてさ」

コンマ「そうそう、モニターで映る角度を研究したりしてね（笑）」

シャケ「だけどさ、テレビって画面でもわかると思うんだけど、横に長いじゃない。だから、写ってるのを見ると足が短くなってんだよ、なーんかさ、それがどうもイヤだ」

（'89年2月号 藤野洋子）
Photo／Ryozho Minemura

★この日彼らは、日テレの『トップテン』から始まってNHKの『JUST POP UP』、そしてとどめはジャケット撮影、そして翌日は地方へという超ハード・スケジュール。でも彼らは、文句言うどころか、その場、その場で楽しんでる。本当にこの4人は、音楽を愛しレッズを愛してるんだなあと思わせる一コマだった。

思惑をアッサリと裏切る、多重構造をもった作品

5月21日にシングル「欲望のドア」「Sister」をリリースするレッズ。これから、またレッズ旋風が巻き起こることを予感させる曲だ。

（'89年6月号）
Photo／Peter Calvin

ロンドン帰国第一弾インタビュー YUTAKA TADOKORO

――レコーディング・スタジオをロンドンにしたのは？

ユカイ「いきなり決まったんだよ。偶然みたいなもん。最初はスペインでやろうと思ってたの。でも考えたのはさ、ビートルズの『サージャント・ペパーズ～』みたいなシュールでサイケデリックなのとか、T・レックスとかさ、ちょっと違うじゃん、俺達の今までの簡単なロックン・ロールとさ。芸術的なアルバムを作ってみたいと思って。やるんだったら今だろう、と。」

――今までストレートだったでしょう。

ユカイ「うん、それにいろいろ言われたしさあ、レッド・ウォーリアーズは何も考えてない、とかさ（笑）別に気にしてないけどね。とにかくビートルズの『サージャント・ペッパーズ～』みたいなのをやりたいっていうのが夢だったの。今は丁度区切りだからね」

（'89年7月号 藤野ともね）
Photo／Kazuya Sekiyama

★ロンドン・レコーディングでしばらくユカイクンと会ってなかったが、取材の場所に現われた彼は、なにかふっきれたようにスガスガしい顔をしていた。そして前よりもおだやかな優しい顔つきに変わっていた。今、思うと、それが全てを物語っていたんだと、思う。

そして 先月8月号にてLAST ALBUM、解散のいきさつ。そして今後……をユカイ、シャケにジックリ語ってもらった。解散まで秒読み段階に入ったレッド・ウォーリアーズのライヴをしっかり目にやきつけておこう。

THE STREET BEATS

TOURとBEATSの相関関係

どんな時でも、どのライヴでも最高のものをやりたい

(★)

5／18からスタートした「NAKED HEART TOUR Vol.2」も、全国19ヵ所を経て、無事7／25、初の渋谷公会堂を成功させ終了した。渋公ライヴについては次号の『独占密着取材』で詳しくレポートするが、今月号では、ライヴに対する想い、ツアー中の出来事などを中心に、ライヴの最も似合うバンド＝S.ビーツに話をきいてみた。

7月某日、目黒にあるスタジオで久々にビーツの顔を見た。久々、と言ったのは、このところビーツはNAKED HEART TOUR'89 Vol 2の長い旅に出ていたせいだ。今日は、そのツアーの話を聞く。楽しみなのと久々なのとで、少しドキドキしつつ、スタジオへ向かった。

1時。約束の時間、スタジオに来てみるとスタジオにはKENJIが1人でいる。たいていの場合、KENJIは1番のりでやってくる。セッティングに時間のかかるドラムというポジションのせいかもしれない

——とにかく、1番のりで黙々と準備をする。あまり喋らない。

他のメンバーは、とあたりを見ましているとTSUYOSHIの荷物がある。TSUYOSHIもまた、やってくるのが早い。そして、KENJIと同じく黙々と、音を出さずにベースのランニングを練習しているものだ。寡黙なリズムコンビだ。

そう言えば、まだ1度も書いたコトがなかったけれど、私はTSUYOSHIと7年も昔に会ったコトがある。ちょうどまだ私がNHK—FMの『サウンドストリート』でDJを始めて間もない頃。友人とそのまた友人たちとライブを見に行った時のことだ。帰り、お喋りのために立ち寄った喫茶店で、一緒に行った友人に紹介された高校生——それがTSUYOSHIだったから、縁というものはフシギなものだと思う。

そんなコトを考えているうちに、ØKIとSEIZIが入って来た。

ØKI　なんか呆けちゃって。ツアー終って、なんか今、イイ意味でカラッポになってる。

そういえば、なんだか今日のØKIはゆで玉子みたいだ。ツルンとしていて、気持よさそうな顔をしてる。

——ツアーはどうだった?

ØKI　どうって、別に特にかわったコトはないよ。ただ今回は客が前回より増えて来てるってコトかな。前回より今回、今回より次回、どんどんよくなるのはあたりまえのコトだから……。

SEIZI　どんな時でも、どのライブでも最高のものをやりたい、っていうのはいつでも思ってるコトだし、でもやり続けるのは大変だけど。大変でもやり続けたいと思うとる。

——いつも思うんだけど、ツアーの間って、みんな何してるのかな?　ステージ以外は。

ØKI　そんなにヒマないから。

SEIZI　少しヒマがあると、わりと街をブラブラしてる、かな。

——街を歩くのが好きだって言ってたものね。

SEIZI　そう。ぼーっとして……。

KENJI　オレも、街をブラブラしてるな。

他全員　美を求めて（笑）!

TSUYOSHI　オレの場合は、本屋行って本買ったり、部屋こもってそれを読んでたりしてる。だから、ツアー終ると本が増えてる。行きより帰りの方が重い（笑）。

ØKI　そうだ、今回は誕生日のヤツが（SEIZIを指さして）1人いたから。

SEIZI　いろいろな所で、いっぱいプレゼントもらった!　あ、ここでお礼言いたいな。「全部使ってるよ!」——これホント。

ØKI　だから、こいつの部屋、ものが多くて（笑）。

——でも前回のライブではØKIが誕生日だったじゃない。

ØKI　そう。実はビーツは春夏秋冬、1シーズンに1人誕生日がいるから、ツアーのたびだね。

——誕生日のほかには、特に事故もなく……。

ØKI　あったんだ、それが。今回は車関係のトラブルが多くて。秋田でなんて、会場向かってたんぼの所走ってたら、いきなり地元のトラックがぶつかっちゃって。

——えーっ?!　ケガはなかったの?

ØKI　全然。無事だったんだけど、車がダメになったり、病院行ってってライブが中止寸前になったり。

SEIZI　でも、おかげで全国ツアーをビーツは秋田ナンバーの車で回った（爆笑）!　それも、その日がオレの誕生日だったから、なんていうか……。

ØKI　秋田はコレがあったし、新潟とか北の方のライブは印象に残ってるね。もちろん、熊本とか他の所もだけど、北の方はなんとなく。

——お酒、オイシイからかな?

ØKI　（笑）地酒はずいぶん飲みましたねェ。これはツアーならではの楽しみだな。

——ツアーの最中に新曲ができたりっていうのは?

ØKI　ない。詞を作ったりというのは、自分の内側へ向かう作業だから……。1人自分を見つめだしちゃったら、ライブできなくなる。だから、ライブツアーの間は外へ向かうØKIでいる必要があるんだよ。だから、詞を作るコトはないね。

——ツアーも終りということで、いよいよ25日には渋谷公会堂だね。

ØKI　特に意識はしてないけどね。どこでやってもビーツはビーツだと思ってるし、前のツアーより、もちろんまだまだ状況はパーフェクトじゃないけど、自信もある。なにより「一人ぼっちのワルツ」みたいな曲がライブでできるようになってるから、みんなにまた、1つの面を見せるコトができる。でも、まだまだ。

SEIZI　毎回、1番すごい、1番イイって言われるライブをしていたいよ。ライブするたびに塗りかえていくような、ね。

「今日はなんか、あまり喋らなくって……。まぁ、そういう日もあるよ」とØKIは笑う。ビーツはこれから25日の渋谷公会堂のためのリハーサルだ。ツアーから帰ってきたビーツはなんだか、一回り大きくなった感じがする。というか、みんなすごく気持ちのいいスタンスでいるのだ。それだけに、25日は期待できそうな予感がする。新たな空気の流れを感じるから——。

この期待を胸に抱いて、次号は25日の一日密着取材をお届けしようと思ってるので、乞御期待!!

Interviewer：川村恭子　Pix：関山一也（★印）

BUCK-TICK

INTERVIEW

今秋、BUCK-TICK活動再開！

——レコーディング開始予定

構成・文／岡本明　フォト／関山一也

◆

この５人がいてこそBUCK-TICKなんだから、今井くんを抜いた活動や解散なんて事は全く考えもしなかった。

　みんなには迷惑をかけて本当に悪かった。必ずこの埋め合せはするから、もう少しだけ待っていて欲しい。

◆

事件以来、2ヵ月振りにBUCK-TICKがマスコミの前に姿を現わした。7月17日、午後4時半よりビクター音楽産業(株)役員室において、7誌共同取材という形で、今井くんを除く4人のメンバーとの、事件後初のインタビューが行われた。

事件の核心から今に至る心境、そして今後の活動と…虚飾のない言葉で語る、彼等の声をそのまま詳細に伝えたいと思う。

なお、今井くんからのみんなへのメッセージも、当日別紙で届けられた。

今さらここで説明するまでもないかもしれない。

今年の4月21日、東京・羽田空港に降り立ったBUCK－TICKのギタリスト、今井寿は、麻薬取締法違反で、警視庁・新宿署に逮捕された。

新聞・週刊誌等ですでに大々的に報道されているので、あえてここでは細かいことに触れないが、現時点で今井君は釈放されており、判決も言い渡されているので、BUCK－TICKとしては、これからの方向性について、が注目されているところだ。

事件発生から3ヵ月近く経った7月17日、彼らのレコード会社であるビクター音楽産業（株）において、今井君以外のメンバー4人による、共同インタビューが行なわれた。何といっても、事件以来全てのメディアから遠ざかっていた彼らだ。芸能誌や週刊誌、スポーツ新聞をはじめとしたいくつかのメディアが面白がって、あることないこと（そのほとんどは、いわゆる噂の域を出ない話ばかりだったが）を書きたてたために、ファンの間にもかなり歪められた事実が伝えられていたように思う。

それをいちいちここで挙げつらうつもりもないが、いったいこの先BUCK－TICKはどうなるのか?といった疑問は、ファンや関係者の間でもなかなかハッキリしなかったし、ひどいものになると解散説まで飛び出して、収拾もつかなくなりそうな気配だった。

そんな時だけに、ファンや関係者の前に姿を現わして、現在の状況をキチンと伝えようとするレコード会社の配慮もあって、この共同インタビューの場が設けられたわけだ。

7月17日、午後4時30分、ビクターの役員室に集まった音楽雑誌関係者は『ロックンロール・ニューズメイカー』の竹内氏、『パチ・パチ』の芳賀氏、『パチ・パチ・ロックンロール』の渡辺氏、『アリーナ37°C』の高橋氏、『ロッキン・オン・ジャパン』の市川氏、『バックステージ・パス』の緒方氏、『宝島』の三嶽氏、そして私、岡本（順不同）。

ビクター側からは、河津氏、豊島氏のあいさつがあった後、質疑応答形式で話は進んだ。

もしこの5人でメジャーで活動できないなら、インディーズに戻っても、と考えてた

緒方「あの、順序だててやったほうがいいかなと思うんで。まず今井君が逮捕されたというニュースを知った時の感想から、みなさんにお聞きしたいんですけれど」

樋口「…っていうか、何も知らなくて。（飛行機を）降りてきて、今井さんがいなくて、どうしたのかなって。それで、家に帰るまで解らなかったから。家に帰って、事務所の人が電話して教えてくれたんですけれど。もう、何が何だか解らないっていうのが本音だったっていうか。だから、ホントに自分のことなんだか、自分のことじゃないんだか…。難しい、口では言えないぐらい、混乱した状態だった…です」

ヤガミ「やっぱり、逮捕された時、目の前にいたから、震えましたね。で、その時に、警察官に罪とか聞いたんですよ。〝罪状は?〟みたいな感じで。そしたら〝家へ帰れば解る〟みたいなこと言われて。で、家へ帰ってTV観て、で、知りました。どういう内容だか」

桜井「知った時はやっぱりショックで。罪とか聞いたら、…側にいながら、全然そういうこと気づかなかったというか。で、余計またショックで。どんどん、何か深刻に…。やっぱりメンバー5人いるから…、だんだん（事件のもたらすものが）大きいっていうことが解って。とにかくショックでした」

星野「最初は全然解らなくて、何で?っていう。警察手帳とか、降りた時に見せられたんですけど、何で?って聞いても何も答えてくれなくて。疑問なことばっかりでした。で、そういう気持ちで家帰って…」

芳賀「僕が一番知りたいっていうか、気になったのは、今はもう解消された問題なんで、いいんですけど、実際事件があって、彼が逮捕された瞬間の気持ちとして聞きたいんですが。個人個人の解釈の中で、彼をはずしたりとか、あと、彼が復帰できる状態になるまで4人で活動していこう、みたいな気持ちっていうのは、さして無かったとは思うんですけれども。例えば、メーカーとか事務所サイドとか、そういう外からの要因として、彼をとりあえず置いといた形で、もしくはまた新しい人を入れた形での活動を強いられるんじゃないか、みたいな不安っていうのは、無かったですか?」

樋口「それは、…そんなことしたら、ホント信じられないし。バンドっていうことを考えると、5人が変わらないからこそ…。やっぱり、そこに入れ替えがきいちゃったら、たぶんそれはバンドと呼べるものじゃないんじゃないかなっていう。バンドっていうものにやっぱりオレ達こだわっていたから。もし、メーカーとかに要望されたら、絶対に断わっていたと思うし。…そういうことは、ひと言も周りから出なかったから、そこは良かったな、というか」

ヤガミ「ま、さっき言ったようなことも考えましたけど。もし、そういうふうな状況でも、このメンバーでできないんだったら、インディーズっていうことも考えました。だから、ホントに、プロじゃなくても、個人的にもこのメンバーじゃなきゃダメだなと思ってるから…。そんな感じです」

桜井「不安…は全く無かったです。そういうことは頭に無かったから。誰々をはずして活動するとか。最初はすごく混乱してて、頭の中も。良くないほうにも考えたけど。本人達はそういう気持ち、全く無いから。周りが思ったとしても、深刻には考えなかったですね。不安っていうのは無かったです」

星野「…それは、考えなかった。…何をするにも最初から5人だったし。それは絶対ありえないっていう…考えだったし。考えなかったです」

緒方「でも、最初に腹立ったり、みたいなことはなかったですか?」

ヤガミ「腹立ったっていうより、単純に〝しょーがねえ奴だな〟っていう感じでしたね、冗談抜きで」

樋口「何で言ってくれなかったのかなっていうのは、すごくありましたけども。やっぱり個人のことですから。それは、自分がふがいないっていうか、もうちょっとオレにも言ってくれればなあ。だからどうなったっていうんじゃないけども。それはありました」

桜井「誰々のせいとかって思いたくないし。自分のことだったら、自分が痛い目にあうんだったら解るんだけど、自分の身内っていうか、人とか物とかが痛い目にあうっていうのは、遠回しに痛めつけられてるっていう感じで、苦しい。腹が立つっていうのは、何に対してか解らないけれど、自分達とか…。今井に腹が立ったとしたら、それはもう自分達に腹が立つっていうことだから。そういうふうにしむけた何か。…やっぱ、自分のことなんですよ」

星野「腹が立つっていうのはないですけど。言ってくれなかったっていうのは、ちょっと残念…」

竹内「事実確認をちゃんとしておきたいんですが、いわゆる新聞報道とかで〝乱用〟とかですね、いろいろムチャクチャな書き方があったんですけれども、その辺もし生っぽくなくて、さしさわりが無ければ。罪に重い／軽いは無いかもしれないけども、例えばホントに乱用してたのか。そのまま読んで誤解してる子もいるかもしれないんで、その辺の事実をアッちゃんのほうから…」

桜井「うーん、乱用なんて思ってもいなかったし。で、今井が普通に会話できるようになって…あんまり聞きたくもなかったんですけど…。やっぱり、あの記事を見て、今井と少しそういうことに関して話したけど。腹立ちましたね。本人はそういうの、否定もできないし肯定もできないけど。まあ、本人と同じ立場だから、こっちも。ただ腹が立つだけで。乱用とか、そういうふうに書かれたりして」

竹内「自分達のいる立場っていうか、バンドを組んで、人気が出て、そういう社会的なものに対しては、どのように?」

桜井「やっぱり凄く、自分達ではあんまり真剣には考えられなかった影響力があるんだな、とか。やっぱり今ロック・バンドとか、社会的にも注目を集めてるし。その中で与えた影響っていうのは、はるかに想像を上回ってたっていう」

竹内「で、今井君が最初出てきた時に、初めて会った時っていうのはどんな状態でした?」

桜井「うーん、まあ、元気そうで…。謝ったりするのも、まあ、あったけど。…こっちもあんまり気を使わないように〝お前、太ったじゃんかよ〟とか（笑）。そんな感じで」

竹内「それで、出られた後、それぞれ今井さんと話をされたと思うんですが、それぞれ、どういう話をされたか、お聞きしたいんですけれど」

樋口「やっぱり、今までずっとツアーで一緒にやってたし、取材もあるし、ずっと一緒の仕事っていうか、一緒にいた部分が多かったから、会えなかった時期がすごく長く感じて。だから、〝元気?大丈夫?〟とかしか言えなかった。だから、そんなに深くまでは…。さっき、アッちゃんも言ってたけど、だからってオレ達に対する考え方も、今井さんに変わられちゃ困るわけで。そういうのはすごいイヤだから。会った時っていうのも、そんなにたわいもないって言ったらヘンかもしれないけど、そういう会話で終っちゃった。あんまり奥まで突込んでもアレかなと思って」

ヤガミ「やっぱり同じです。ヘンに気を使わせたくなかったっていうのはあった。で、結構向こうもそういう普通の状況じゃなかったわけだし。俗にいう牢屋っていうか、そういう所に入れられたわけだから。だから、そこでキツいこと言って

もマズいし」
桜井「ま、〝良かったね〟って感じ。で、あとは、そんなカッコつけて話しする相手じゃないし、〝どういう生活してたんだよ〟とか、冗談半分で」
星野「見た感じは元気そうで。でも、やっぱり神経的には、きてるみたいで。〝どうだった?〟とか、そういう会話。〝ゴハンとかどうしてたの?〟とか」
高橋「じゃ、今井君が犯した罪に対する認識、要するに今井君云々の問題よりも、今井君のやった行為ですね、それに対しての、それぞれの認識っていうのを聞かしてもらいたいんですけど」
樋口「…ちょっと難しい質問だな…。悪い…ことは確実だし…。難しいですね。海外では別に何でもないとか、よく雑誌にも出てたけど、海外のアーティストの物真似をして、とか書いてあったけど。でも、今井さんはそういう意識でやったんじゃない、とは思うし。やっぱり…それは悪いことなんじゃないかな」
ヤガミ「やっぱり魔がさしたっていうか、そういう事件だと思うんですよ。で、結構そばに住んでたり、仕事が終った後とかも結構会ってれば違ったんだろうけど。実際その当時って仕事量も凄くて。12時とか1時頃に終って、ホントにそこから〝お疲れさま〟で帰ってたから、その後のことって全然みんな知らないし。だからプライベートっていうのは別個だったから、何ともしようがなかったっていうか」
桜井「やっぱり、これだけの…一人で済む問題じゃないし、いろんな方面に損害やら迷惑やらかけるわけだから。予想以上に…。まあ、本人だってこんなことになるとは思わないで…。予想以上だったのが…実感しています」
星野「同じで。悪いことで、いろんな人に迷惑を…。凄いことなんだっていう…。凄く解った」
高橋「それと、これは今井君本人じゃないと解らないことだと思うんですけれど、今井君本人も、決していいことだと思ってやった事じゃないと思うんですよ。で、その辺でどうして今井君がそういう行為をやってしまったんだろう、みたいな部分で、今アニイが言ったみたいに、その時のBUCK−TICKの状況とかもいろいろあったと思うんですけれど、どうしてそういう方向に手を出しちゃったのかな、みたいなのを、他のメンバーからの弁護っていうわけじゃないけども、考えつくことがあったら」
桜井「曲ができないとか、そういうのでやったんじゃないっていうのは確かです。ただ面白半分っていうか。やりたくてしょうがないっていうんじゃないだろうし」
竹内「複数回数ですか、一回ですか?」
桜井「一回」
岡本「あの、ファンからはどういう反応があったんですか?事務所に励ましの手紙とか、かなり来たんじゃないかと思いますけど?」
桜井「週刊誌とかで、解散説とかが気づかないうちに出てたんで、そういう疑問みたいなのが多かったですね。解散するんですか?とか。あとはやっぱり、ジーンとくるような。〝いつまでも応援します〟とか」

やっぱり、ファンの人とかスタッフとかに迷惑をかけたこと……つらかった。

岡本「別に私生活をどうこうっていうわけじゃないんですけど、こういう間ってみなさんどういうふうに過ごしてたかっていうのを知りたいんですけど」
樋口「オレは曲を作ってました。いろんな音楽聞いたりとか。いろいろコピーしたりとか。すごく自分自身にやれることができたなっていう…」
ヤガミ「ビデオとか借りて見てました。あんまり家から出たくなかったんで。周りの目が気になっちゃって。何かイヤだったです、すごく」
岡本「結構、周りの目って気になると思うんですけど、どのくらいで、そういうふうに楽器に向かえたりビデオに向かえたり、みたいな時期になったんですか?逮捕直後は混乱してたと思うんですけど、何日か経ってある程度自分達を冷静に考えられる時期ってあると思うんですけど」
ヤガミ「今でもきっと本調子じゃないっていうか…。一時期は目まいとか結構したんですよ。で、オレ、タバコやめたし。肺とか痛くなって。初めて気づきましたね、オレって結構弱い奴だな、みたいな。精神的にきました」
岡本「まだ引きずってたりします?」
ヤガミ「…でも、なるべく考えないようにするっていうか」
桜井「今井の顔を見るまで安心できないっていうか、落ち着かないっていうのはありました。でもまあ、いろいろ考えめぐらしてもしょうがないんで、適当に本読んだりとか、ムリヤリですけど。あんまり好きじゃないんで。本読んだりビデオ観たり、音楽聞いたり…。考え事のほうが多かったですけど。ボーッとして。あと、酒飲んだりとか(笑)」
星野「最初のうちは、やっぱり不安で。だんだん落ち着いてきて、時間が解決してくれるっていうか。次を待つしかないっていうのが解って。音楽聞いたりビデオ観たり、曲作ったり。そういうことやってました」
芳賀「今井君は元気ですか?」
樋口「ええ。外へ出られないから、煮つまっちゃうし。だから、曲できたんだ、とか。聞かせてもらったりしてるし」
高橋「とりあえず、今井君から事件後に、メンバーに対してどのような話があったかっていうのを、聞かしてもらえないですか?お詫びとかいう部分も含めて」
樋口「さっきも誰か言ってたけど、一番初めに、謝られたっていう…。それが何か…普通、人間的にはそうするかもしれないけど、オレらは多少、寂しい感じはあったっていう。やっぱり、今井君はふだんから物静かだから…」
ヤガミ「やっぱり同じで。捕まった後に初めて会った時、謝られて…そういう感じでした」
高橋「今井君のほうから、BUCK−TICKの今後の活動について、その時点でいろいろ心配とか、そういう部分での話って特別無かったですか?」
ヤガミ「…そういう次元じゃなかったっていうか。とりあえず、今井が出てきて、一応5人集まったから。でも、実際はもう、全て白紙なわけだし。で、いつから活動するかも解んないし。だから、バンドを結成して以来、初めて…自分達の意志が無くなったっていうか。もう、メーカーさんと事務所の人にも…そういうふうになったっていうか。だから、そちらがGOをしないかぎり、オレなんか一生コレ(下を指さす)だろうし。そちらがGOをすればいけるんだろうしっていう状況でした」
竹内「事件があってから、メンバーの方どうしで、その事件について何か話されたことはあったんでしょうか?」
桜井「いえ、事件直後は、もう電話も何か…。みんなでグチ言ってもしょうがないし。個人個人、気持ちが落ち着くまで、あんまり話もしなかった。話しても何かまとまらないだろうし。みんなそれぞれ、一人で考えて…。落ち着いた頃にいろいろ冗談言い合ったりとか、できるようになって。活動っていうのは任せるしかないんで。その辺、解んないから。希望っていうか期待、できたらいいね、とかそういう話を…」
緒方「具体的には、今年もしくは来年の活動があるとしたら、予定は?」
桜井「早くツアーをやりたい。いろいろな問題が、まだまだたくさんあると思うんで…」
緒方「BUCK−TICKとしては、何から始めようと?」
桜井「とだえた時点から続けるっていうか。そうしたいですね、ツアー。レコードもそうですけど」
緒方「じゃあ、将来的には必ずツアーとレコードがあると、伝えていいんですね」
桜井「…はい」
三嶽「もちろん、その活動を中止したっていうことが一番つらいことだと思うんだけど。その他に、活動を停止していた期間の中で、プライベートなことでもいいし、公的なことでもいいんだけど、自分の中で一番つらかったことって何なのかな?」
樋口「自分が外出たり、友達のライブ観たり、いい外タレが来たりするのを観れなかったなぁ、とか。その期間を無にしちゃったのがつらかったかな」
ヤガミ「やっぱ、同じような感じですけど。やっぱ世間の目が一番イヤだったっ

ていうか。写真週刊誌とかにも狙われたんですよ、実際。だから、外にいる人がみんなそういうふうに見えてくる、みたいな。精神的にもヘンになりましたね」
桜井「何もできないって言うか。ファンの人に対しても何もできないし、今井に対してもやっぱりどうにもできないし。自分の行きたい所にも行けない…。最初はそれがつらかったっていうか」
星野「やっぱりファンの人とかスタッフとかに迷惑をかけたこと。つらかったっていうか、…痛い気持ちっていうのが、正直な感じ…」
緒方「当たり前のことなんですけれども、ドラッグをやって起した社会的な問題っていうか。というよりは、ドラッグ自体に関しての、BUCK-TICKの対応コメントをいただきたいんですけれども」
桜井「悪いことは悪いなあって、損だなって思いましたね」
（しばらく沈黙）
豊島「事件周辺のことは、出つくしてると思うんですけれども。6月28日に刑が確定しまして。で、今井君抜きですけれども、ぼちぼち個人的なレッスンを始めて。今後どういうふうな活動展開を、というような話をしてるんですけれども、正直言ってまだ確定はできない状況ではあるんですけれども。思惑ではですね、秋、9月ぐらいから、今リハーサルしている曲をレコーディングしまして、来年の早い時期に『TABOO』に続くアルバムを出したいと、いうように考えてます。あと、事務所のほうとも打ち合わせした上で、コンサートはまだいつから皮切りかというのは具体的に出てないんですけど、これはもうハッキリ言って、来年から〝TABOO〟ツアーを含めて、コンサート再開はあると思うんですけど、そこら辺の部分で、今後のことでの展開について、何かありましたら？」

みんな元気だし、ツアーができるようになったら、いいものをイヤッてほど見せるつもり

緒方「リハーサルでは、どの程度のリハーサルをやってるんですか？」
樋口「始めのうちは、ドラムとベースで合わせる練習をしたり。あと、ヒデが曲作るの早かったんで、3人で、こんな感じだねっていうのはやってました」
緒方「新曲で？」
樋口「ええ。でも、始めのうちは2人で今までの曲をやったり」
緒方「今まであまり曲を表に出してない人が、ずいぶん曲も作ったとか？」
樋口「ええ…。作ったんです（笑）」
桜井「聞かせないんですよ、何か（笑）」
緒方「何曲作った？」
樋口「3曲ぐらい」
緒方「アニイとアッちゃんもトライしてるんですか？」
桜井「トライはしてるんですけれど…」
ヤガミ「録音機材が無いとダメですね」
緒方「…じゃあ、来年のアルバムは全然見えないにしても、何か変わった感じにはなりそうですね？」
桜井「やっぱり、また幅広くなるとは思いますけど」
竹内「あの、『TABOO』の3作目までの流れってあったと思うんですけど、その流れは一応断ち切るんですか？それとも、それをまた拡大した形で続けていくんですか？」
桜井「うーん、やっぱり延長でもあるし、新しい面もどこかに…。そこでまた、次にこういうふうにしようっていうのも、浮かんできたから。『TABOO』の時点で。ま、少しはあの空間、雰囲気も、もうちょっといいなとか思って…」
緒方「ツアー始まって、まずファンに何を伝えたいですか？MCで」
桜井「…いろいろ考えたんですけどね（笑）…。今井にMCでもしてもらおうかなと（笑）。前も全然考えてないんですよ」
（しばらく沈黙）
芳賀「あの、ぶっちゃけた話で、僕らはまだ、ビクターの人とか、枡岡（マネージャー）さんとかから話聞けるから、あ、そうなんだ、大丈夫なんだって安心材料はいくつも入ってくるんだけど、実際、東京に限らず日本全国にBUCK-TICKを応援してくれてる人達がいて。その人達って、プッツと情報がとだえたまんま、あるものといったら、ゴシップとかスキャンダラスな週刊誌とかスポーツ新聞とか、ああいうものしかないわけで。で、すごく解ってることをあえて、整理するために聞くんだけど、例えば、アッちゃんが円形脱毛症になった、とかね（笑）」
樋口「ああ（笑）、見せてやったほうがいいんじゃない（笑）？」
芳賀「（笑）最高だったのは、〝ユータさんが死んだってホントですか？〟って泣いて電話かかってきたりとか（笑）」
ヤガミ「死亡説ですか」
芳賀「そう。ホントにいろいろ、そういうのがあるんだよ。だから、整理するために、自分達は元気だし、これからも活動していくんだよっていうのを、僕らに対してじゃなくて、僕らはたまたま活字のメディアなんで、読んでる人達に対して一言ずつ」
樋口「それ言っちゃうと、シメの言葉になっちゃいますけど（笑）。…いい意味で期待してほしいなって。ああいう雑誌って面白いんでしょうね。また、とだえてる時期だから……。みんな元気でやってるし。今ここにはいないけど、今井さんも元気だし。だから、すごく期待してほしい」
ヤガミ「やっぱり、ブランクでたまった分、今までの3倍ぐらいの勢いでやらせていただきますんで。よろしくお願いします」
桜井「あんまりヘンなことで心配しないように（笑）。全然元気だし、もうウズウズしてるから。ツアーできるようになったら、すごいいいものをイヤッていうぐらい見せたいと思ってます」
星野「全然元気です。だんだん徐々に力を取り戻してきつつあるから。まだ100%とはいえないけど」
緒方「枡岡さんはどうですか？」
枡岡「僕が思う観点も、やはり、メンバーが4人になったりとか、除名とか、そういうことを一切誰も考えてなかったし。かえってそういう外からの情報で我々自体が混乱しちゃったし。だから、それに関しては僕らも最初から思ってなかったし。メーカーさんも思ってないし。ちゃんと5人でやっていく最良の方法を、やはりどういう形でとろうかっていうことをみんなで話してたし。その部分で、こういう形で4人を謹慎させてもらったし。もちろん今井も謹慎してるし。そういうひとつの形をつけなきゃいけないと。それからじゃないと、ハッキリ言って5人じゃできないから、ジックリもうちょっと時間を持とうよ、と。それは、あせればね、こういう芸能界だから、別に裁判が終われば、活動しようと思えばできると思うしね。いろんな形で表面的に出られるかもしれないけど、やっぱりそういうイージーな考え方でやってたら、基本が崩れちゃうからね。もう一回そこをしっかり建て直して、5人で初めて登場する時のインパクトの強さをね、持ってきたほうがいいんじゃないか。そういうのが僕らの考え方だし、メンバーもそう思ってくれたし。それで、いろんな意味で混乱もしたし、迷ったし。でも、今井を連れて、初めてみんなに会わせた時の、みんなの嬉しそうな顔を見てると、ああ、やっぱりこれで良かったんだなと。そういうことを一番感じました。もちろん、今井も、さきほどの質問の中であれば、4人に対してどう思ってるかっていうと、仲間だと。そういうふうに思ってるし、メンバー4人も今井のことを仲間だと思ってるし。やっぱりそういう気持ちを切実に感じちゃうんでね、僕らは非常にいいことだと思うし。口じゃ言い表せないと思うんです、みんな。どういうふうに表現していいのか。さっきユータが言った〝元気？〟その一言でいいと思うんですよ、彼らのつきあいっていうのは。だから謝る必要もないし。だけど、形上（かたちじょう）はそれでいいと思う。僕が何ヵ月か見てて」
（しばらく沈黙）
河津「メンバーから言っておくこととかは？」
桜井「雑誌社の人に…。心配して下さって…感謝してます」

＊　＊

この後、ワープロで打たれた今井君のメッセージが一人ずつに配られ、メンバー4人は退室ということになった。
関係者を残して、ビクターの河津氏、豊島氏から今後の展開の話が補足説明され、前向きな姿勢が語られ、この共同インタビューは終了した（ページ数の都合上、全ての発言を収録することは無理なので、一部構成してあります）。
文中でメンバー、ビクター側からも語られていたとおり、この秋から、現在リハーサル中の曲をレコーディングし、来年の初頭には『TABOO』に続くアルバムのリリースが予定されている。
また、4月24日の神戸国際会館から以降、キャンセルされたツアーについても検討中で、来年に入ってからツアー再開、という可能性も高くなってきている。
何はともあれ、全く突然のできごとで沈黙を余儀なくされたBUCK-TICK。メンバー、スタッフ、関係者、さらにはファンやリスナーまでをも含めて混乱の渦の中にいたわけだが、時間が経つにつれて、ゆっくりと絡み合った糸をときほぐすように、事態は前向きに進みつつある。
また、インタビューの中で何度か出た発言に〝社会的責任〟という言葉があった。ここ数年のバンド・ブームの中でも、とりわけ群を抜いた存在として注目されているBUCK-TICKだからこそ、その責任、そして影響力は大きかったはずだ。しかも彼らの場合、他のバンドをひき離してトップへと昇りつめるスピードがあまりに速かったため、自らのポジションの重要さを認識しないまま、仕事量の多さに押し流されそうになって、ここまできていたのかもしれない。だとすれば、〝バンド・ブーム〟と安易に呼ばれているここ数年のムーブメントの犠牲者に彼らはなったのだと思う。それは、一人の人間が思春期を経ないで、いきなり大人、あるいは世間の荒波の中に放り込まれてしまったのと同じで、試行錯誤や紆余曲折の期間の前に、抵抗力もなく濁流に流されかけてしまったわけだ。
しかし、彼らは何とか我流でもいいから、この濁流を泳ぎきる術を見出そうとしている。
直接手を貸すことはできないまでも、今後の彼らの活躍ぶり、そして今まで以上の前進をしっかりと見据えておくことが、BUCK-TICKファンにとっての最大の応援となることは間違いない。
最後に、当日届けられた、今井君からのみんなに対してのメッセージを載せたい。今井くんの元気な姿が見れるのも、もうすぐだろう。

今は、すこしずつ落ちついてきています。
自宅で曲を作ったりしてのんびりすごしています。
この事でツアーが中止になったりして色んな形で負担や迷惑をかけたことをおわびします。
BUCK-TICKを応援してくれてる皆様へ
復活したときは、また楽しんでもらうのでよろしくお願いします。
ライブ見れなかった人ごめん、かならずこの穴はうめます。
平成元年7月17日　今井　寿

Outerlimits

Beyond the dream, the stage is now Planet Earth.
Representing Japan, they are blasting off into the Outerlimits.

SHOW-YA

NEW ALBUM 9/6 RELEASE

CD: CT32-5540 ¥3,008(TAX INCLUDED) ¥2,920(TAX NOT INCLUDED)
LP: RT28-5540 ¥2,637(TAX INCLUDED) ¥2,560(TAX NOT INCLUDED)
MT: ZT28-5540 ¥2,637(TAX INCLUDED) ¥2,560(TAX NOT INCLUDED)

OUT OF LIMITS/LOOK AT ME!/昭和シェル石油'89春イメージソング限界LOVERS/TROUBLE/野生の薔薇
祈り/戒厳令の街 −CRY FOR THE FREEDOM−/BAD BOYS/昭和シェル石油'89夏イメージソング私は嵐/Paranoia Paradise(※CD・MTのみ収録)/NHK衛星Be★SPO24テーマソング BATTLE EXPRESS

予約特典:Outerlimits オリジナルB2ポスター

NOW ON SALE

NEW VIDEO「ROLLIN' WORLD」 全11曲

FK050-1027H/F COLOR, STEREO, 50min. ¥4,944(TAX INCLUDED), ¥4,800(TAX NOT INCLUDED)

LASER VISION

FV050-1027 COLOR, STEREO, DIGITAL SOUND, 50min.

PRICE DOWN

FIRST VIDEO「DATE LINE」VIDEO CASSETTE

FK040-1028H ¥3,914(TAX INCLUDED), ¥3,800(TAX NOT INCLUDED)

LASER VISION

FV040-1028 ¥3,914(TAX INCLUDED), ¥3,800(TAX NOT INCLUDED)

CD・レコード・音楽テープがやすくなりました。

NAON の YAON III

9/16(土) スペシャル前夜祭 OPEN 16:30 START 17:00 東京日比谷野外音楽堂 出演▶全国アマチュア女の子バンド多数、ゲスト

9/17(日) NAONのYAON III OPEN 15:00 START 16:00 出演▶SHOW-YA, PRINCESS², Peg Wink, Jaco-Neco, VELVET PAW, TWIGGY & SUPER NAON ALL STARS

お問い合わせ▶SOGO東京 TEL 03-405-9999

EASTWORLD TOSHIBA EMI

中川勝彦
KATSUHIKO NAKAGAWA

殺すも生かすも自分しだいのヒューマン・リズム。

いい音楽には素敵なリズムがある。中川勝彦の熱い鼓動を感じて欲しい。KATZ WORLD。時代は確実にそこまで来ている。

NEW ALBUM 8・21 ON RELEASE

「HUMAN RHYTHM」

◆CD：N29C-29 税込定価¥3,008（税抜価格¥2,920）
◆CT：N25K-29 税込定価¥2,637（税抜価格¥2,560）

NEW SINGLE
●好評発売中

「I CALL YOU」

◆CD-S：N09C-35 税込定価¥937（税抜価格¥910）

LIVE◆9・3日MZA有明
START▶7:00PM. お問い合せ●チャンプ 03-505-4656

NEC NEC Avenue, Ltd.

TH eROCKERS

AGE OF THUNDER ROAD'89

7.15 日比谷野外音楽堂

ロッカーズ復活!!

あの陣内孝則が率い、めんたいビート随一のスピードを誇ったロッカーズが7年ぶりに再結成された。この日、たった一日だけの復活だ。TH eROCKERSは全然スピードと輝きを失っていなかった!!

レポート／小林由明
撮影／大西基

今は昔、こだわっていた人々は、「エロッカーズが好き」と言っていた。かどうかは知りません。そのロッカーズが突然、日比谷野音で復活した。7月15日のことだ。

もともとこの日はレコード会社のイベントで、ロッカーズはその中の1アトラクション的性格のものだったようなのだ。しかし、その話を聞いたとき、他の出演者には申し訳ないが、僕はイベントのタイトルが何だったとかどんなバンドが出るのかといった類は、完璧にうわの空。

7年振りにメンバー紹介をしよう。5人いる。陣内孝則(Vo、俳優現)、鶴川仁美(G、パラドックス・ターキー現)、谷信雄(G、エコーズ元)、穴井仁吉(B、ルースターズ元、ウイラード現)、船越祥一(D、佐谷光敏バンド現)。

7時半を少しまわったころ、突然「ジャッキー」のビートが日比谷の空気を揺るがす。20分一本勝負の幕明けだ。"モーターサイクルとばしてーへへ"(非常線をぶち破れ)もやった、"こうしゅう、、べんじょの、、"(ムーンナイト・ラブ)もかました、「可愛いアノ娘」も「おんぼろキャデラック」も、7年前とちっとも変わっちゃいない。陣内のバディ・ホリーばりにしゃっくる（そのためによく聞き取れない）歌い方も健在。

最後の「ショック・ゲーム」まで全8曲。聞き終えて痛切に感じたのは、これはナツメロでも伝説でもない、現役のロックンロールバンドそのものだということだった。

もちろん年令には逆らえなかった点もいくつかあった。鶴川が金髪でなかったこと、陣内の肉付きがよくなってジャンプの回数が減ったこと、デビッド・ヨハンセンばりのメイクをしてなかったこと、曲と曲の間にブレイクがあったこと（長い短いの次元の話じゃなくって）、ふてぶてしくなかったこと、あたりがそう。それでも8曲20分だからねえ。

20分の印象を一言で言えといわれたら、狂い咲き、それが総て。観客の多くはローグやGO BANG'Sなどのファンで、ロッカーズを見たことある人はまず殆どいなかっただろう。彼らの目にはどう映っただろう。先に書いた思い入れを抜きにして客観的に見ても、曲の良さ、ステージングのセンス、存在感、どれも3枚くらい役者が上だったと思う。特にスピード。当時『めんたいビート』と呼ばれていたロッカーズ、モッズ、ルースターズ共通のキーワードは速い・短い・ふてぶてしいの3つで、ロッカーズの場合、客のタテノリが追い付かないくらい速かった。

そのロッカーズが最優秀グランプリを取った第6回L—MOTIONのライブレコードは我家の家宝であり、その場に居合わせたことは、僕のささやかな自慢である。

P.S. ロッカーズのCDが再発されている。さあ、どうする……。

*「AGE OF THUNDER ROAD'89スペシャル　しあわせなら足鳴らせ"野音の地響き"」には木嶋浩史、J-BLOODS、PASSENGERS、FAIRCHILD、高橋研、川村かおり、関口誠人、GO-BANG'S、The Shamrock、TH eROCKERS、ROGUE（出演順）が登場し、午後3時から約6時間にわたって熱演をくり広げた。

▲左から鶴川仁美(g)、穴井仁吉(b)、船越祥一(ds)、陣内孝則(vo)、谷信雄(g)

KATSUHIKO NAKAGAWA

“HUMAN RHYTHM”

「別れぎわにオスカーは、
“I CALL YOU……EVERYTIME I CALL YOU!”と叫んだ。
こうして、『HUMAN RHYTHM』ができたんだ」
（中川勝彦）

いよいよ8月21日に中川勝彦のニュー・アルバム『ヒューマン・リズム』がリリースされる。前作『ラヴァー・ピープル』から、約1年。3部作の中間に位置するこの作品で、中川は何を訴えかけてくれるのか？

◀このジャケットは中川勝彦自身が描いた。宇宙に流れる髪をタテに見ると『HUMAN RHYTHM』と読める。

インタビュアー／渡辺孝二（本誌）　撮影／松崎信彦（本誌）

「前回『LOVER REOPLE』というテーマで、大きな部分で見せていったものを、今回は一つ一つ掘り下げていったんだ。大宇宙の中に小宇宙があるように、一人づつクローズ・アップしていったら、大きな世界が見えてくるかなって。さまざまなリズムがあって、それが違うリズムと出合って、結局それも社会につながってゆくんだよね。マクロからミクロの世界へと。——自分自身、今回考える必要があったし、時代もそうなってるような気がする」

ちょっとニューサイエンスのインタビューを読んでるような気分かもしれないけれど、これが中川勝彦がニュー・アルバム『ヒューマン・リズム』について語ったコンセプトだ。

うーん、ムツカシイ!? イヤイヤ、実はとっても簡単なことなんだ。例えば、「愛」について言えば、前回の『ラバー・ピープル』が大きな全体的な愛を歌っていたとすれば、今回は〝僕の君への愛〟だったりするわけ。

小さな小さなことを見すごしちゃうと、大きなモノまで見えなくなっちゃうことがあるんだよって、勝ちゃんは言ってるんだ。

一番最初に『ヒューマン・リズム』を聴いた時、全体的になんかとても切ない部分で叫んでいるような印象を受けた。何度も何度も聴けば、決してそうではないのだけど、心の深い部分からの叫びというイメージは消えなかった。そんなアイマイなイメージを勝ちゃんに言ってみると、優しい勝ちゃんは僕のために分析してくれた。

「それは外人ばかりの中でやったから、叫ばなきゃ伝わんないと思ってたからじゃないかな（笑）」

——ハハハ。

「レコーディングは、一人一人個々のものを生かそうってところから始まったんだ。それぞれの音がみんな生きているっていうのは、すごく難しいんだよね。でもお互いがお互いをおぎない合いながら作っていったら、こういう音楽が生まれた。どれもが主張していながら、ジャマはしていない。とても難しかったけど、これを経ないといいものは出来ないよね」

——今回は曲はもちろんだけど、詞も全部自分で書いてるよね。

「うん、ようやく。言いたいことがあったんだね、今回」

というわけで、アルバム『ヒューマン・リズム』を恒例によって、一曲づつ本人に解説してもらおう。

①「ブルーアイドル」

この曲の英語タイトルは〝Blue Eyed Doll〟とつづっている。

「（いきなり）上野の山に清水寺の分家があって、人形供養のびんずる様って神様があるの。そこに沢山人形が置いてあってね……それぞれいろんな運命を背おった人形も、自分では動けない、思う所に行けない。アイドルもそういう共通性があるのかもしれない。アイドルにこだわらず、そういう人たちを自分をうつす鏡にしてみたらって。……そういえば今日は中森明菜ちゃんの誕生日だっけ。それこそ、ブルーアイドルだね」

②「LIP TRIP」

これはとてもイヤラしい歌なので、素直に感じればいいのだけれど……。

「愛という言葉を使おうか、使うまいか考えたんだけど、関係なしにいろいろなコトで愛というのはあるし、どんどん使っちゃえって。愛してるつもりで愛してなかったりとか、愛してたんだけど忘れちゃったりとか、個々のリズムで行き違いもあるだろうし。自分のSEXに対する愛情とか、相手の肉体に対する愛情とか、いろんなものが結局愛という一言でつきちゃってる。本当は違うのかもしれないのに……そういうヒニクっぽいところも、ちょっとはある」

③「戻らない空と海とジャングルと君と」

レゲエ調のこの曲は、タイトルにテーマの全てが集約されている。

「空と海とジャングルと君——どれをとってもたった一人の大切なものばかり。なにか怒りとか悲しみとかのエネルギーで訴えるんじゃなくて、優しさのエネルギーというものを、レコードやステージで聴く人に与えられたらいいなと思う。聴いた人が、フッとあったかくなって、何に対しても優しくなれたらいい……そんな気持ちで作ったんだ」

④「I CALL YOU」

シングル曲でもあるこの曲は頭からラストまでNYの雰囲気がもろ出ている。

「今回の楽曲の中では一番よそ行きの服を着てるよね。この曲にはいろいろエピソードがあるけど……。オスカーってエンジニアと、それまでいろいろぶつかりあいながらも、やっと一つのものを作り上げた後、最後の晩にオスカーが『いろいろあったけど、明日から遠い日本とアメリカに離れるなんて信じられないよ。けど、また声が聞きたくなったら電話をするよ。I Call You. No No No, Everytime I Call You!』っていってくれたんだ」

⑤「LAST CHILD」

耳をよーく立てて聴いても、聞きとりにくい詞は、歌詞カードで確認せよ。

「うちのおばあちゃんが病気で入院しちゃってね。会いに行ったら喜んでくれたけど、小っちゃくなっちゃってね、子供みたいになってる。人間最後は子供に戻るのかな……これが本当の〝最後の子供〟だなって。中国では産児制限で子供は一人しか生めないなんて、これも〝最後の子供〟だよ。かといって、一人一人をクローズアップすれば、子供が何人いても、自分もみんな〝最後の子供〟。この曲はいろんな思いがつまってる」

⑥「LONDON CALLIN'」

どっかで聞いたことのあるタイトルだけど、クラッシュじゃありません。

「ロンドンって行ったことないんだ。想像するだけ。行ってない所って世界中にいっぱいあるけど、そういう未知の場所から電話がかかってきたらおもしろいなって。それと好奇心とが対決して、イマジネーションがふくらんだんだ。タイトルからすぐ曲が出来たね」

⑦「僕の小さな国」

可愛い曲だけど、とても大切なことを歌っていて、個人的にも大好きだ。

「ほとんどタイトルで表わしちゃってるかな。打ち寄せる波も、そこで笑ってる美しい人も、全部自分の中にあって、自分が死んじゃったら無くなっちゃうわけだからね。自分というのは一つの国なのかな、という思いからきてるんだ。じゃあ相手もちょいと小さな国かなとか、母親も父親も友人も兄弟も……それが集まって共和国を作ったりとか、革命があったりとか。人間は一つの小さな国だね。その中で一人一人が自由になりたいし、相手も自由にしたいって歌なんだ」

⑧「EVERYBOOY～僕の歌は君の歌～」

エルトン・ジョンの「YOUR SONG」の邦題が「僕の歌は君の歌」だった。

「あのエルトン・ジョンの曲大好きでね。小学生で洋楽を買いはじめた頃のレコードの一枚。自分のルーツの一つだよね。その曲作った時もなんとなくあれが浮んで、サブタイトルをこうしたの。このサブタイトルは、この曲をぴったりと言い表わしている。

⑨「全てうまくいけば…」

最低限の言葉と最低限のメロディーでこれだけ人の心を打てるという見本。

「初めこの曲は〝Everything Is Gonna Be〟の一行と、そこの循環コードだけしかなくて、どうしようかと思ってたの。一緒にやったオスカーがハーレムに住んでたんだ。で、ハーレムにはいろんな人種がいろんな思いで生活してるでしょ。じゃあ、ピアノ一台通りにポンと出して、オスカーと2人で歌いながら、DATで録ろうよって話になったんだ。その辺にいる人みんなに参加してもらってね。結局それは実現できなかったんだけど、今回レコーディングに集まった人間だけでそういうのをやってみようって、長さもエンディングも決めないでやったら、一回で決まってね。本当の一発録り。終わったあと全員で大拍手。これでハーレムでやんなくてもいいなって」

⑩「夜空に（OVERTURE）」

アルバム唯一のインスト曲。

「これは最初〝ヒューマン・リズム〟って曲だったの。そのイメージを、こんな風に表現してみたんだ」

THE POGO

博多のファンの前で、リョータが見せた顔

THE POGOが山笠祭りで賑わう博多のライヴ・ハウスBe1で、7月13、14日の2日間ライヴを行なった。ツアー10本目のこの日、リョータは39°Cの熱を出して、開演を30分遅らせた。

リョータは前に〝ステージは一番自分を壊せるところだ〟といっていた。つまりは、ステージの上に立つと別人になってしまうという。彼はステージに立つと、まるで何かに取りつかれたように歌いまくる。そして時には、挑発的に客に向って鋭い視線をなげかけ〝どうだスゴいだろう〟といわんばかりに、動きまわる。

そんな客なんて関係ない的にもみえるステージにグイグイ魅き込まれてしまう。暴力的でいながら、歌詞は意外とセンチだったりするからだろうか?まるで好きな人に好きといえず、嫌いだとツッパってみせ、それでいて、その好きな子のことを誰よりも思っている。そんな感じがする。あまのじゃくで素直じゃない。そして一人になった時に後悔するが、どうしてもツッパった態度しかとれない……。でも、そういう奴に限ってハートは誰よりも暖かい。リョータは、そういう男のような気がする。デビューの時のライヴ終了時彼は〝客とコミュニケーションとるのってむずかしいなぁ〟と真顔でいっていた。そういう奴なのである、リョータは。

そこが彼の魅力であり、そしてPOGOの魅力につながっている。だから、たんたんと超スピードで演っていながら、ハートにビシバシ響いてくるのだと思う。

それでも、最初、彼らのステージを観た時は、ただのツッパリバンドかと思っていた。しかし、回を重ねてライヴを見るたびに、POGOがかもしだす過激性のあるライヴにグイグイ魅き込まれて、自分でもメンバーのテンションに合わせて熱くなってしまっていることに気づいた。

それが、今では、めったに見ることができなくなった過激なファン層を作ってきたといえる。警備と殴り合いのケンカをする者、ダイビング寸前までいってる奴、そんな客をみているだけでもワクワクしてしまう。

5月25日のデビュー日から全国のライヴ・ハウスツアーを展開中である。夏には野外イベント、そして10月10日には、日比谷野外でライヴが予定されている。大きくステップ・アップしようとしているPOGOは、今回のライヴ・ハウス・ツアーを最後にホール展開に移る。もう一度、彼らをライヴ・ハウスで観たいと思っていたら、運よく博多でメンバーをキャッチすることができた。

構成／梅原祐子(本誌)　撮影／梶木則男

7月13、14日の2日間行なわれた博多のBe1で彼らのライヴを観ることができた。

町は、ちょうど山笠祭りで賑わっていた。町をあげての一大パフォーマンスに〃やっぱり男はこうじゃなくては〃と思いつつ、今日行なわれるライヴ・ハウスに向った。この場所は市内から二駅電車に乗った所に位置していて、地下にある、白と黒で統一されたオシャレな場所(スペース)である。すでに10数人たむろしていた。ファンがライヴ・ハウスの前には、ファンがすでに10数人たむろしていた。階段を降りて扉を開けると、メンバーはリハーサルの真っ最中で、我々の姿を見つけたギターのカスガが、

〃わざわざこんな遠くまで来ていただいて〃と相変わらずの人懐っこい笑顔で近づいて来た。この日、リョータは39°C近くの熱を出し、入りがメンバーより遅れている。ヴォーカルのいないリハーサルは何か味気ないものだったが、それでも彼らは、満足のいく音を求めて続けている。

pm5・30頃、カスガの〃だいたい演ったね、もーいいんじゃないの〃の言葉でリハーサルは終了した。あとはリョータが来てからの最終的なチェックを待つばかりだ。

彼らは薄暗い、まだ客の入っていない客席に降りて来て、思い思いにくつろいでいる。スタッフに食事を買って来てもらい、必ずステージ前には飲むというユンケルを飲みほしている。

――ユンケル飲むとやっぱり違うの?

カスガ「うん、効くよ」

――それっていくらの?

カスガ「一番、高いやつ」

と、たわいもない会話を繰り返した。そばでケンが、カスガが9800円で買ったというゲームボーイに夢中になっている。

〃え、そんな、ずるいよ〃とゲームに向って一人言をいいながら、楽しんでいる。ジュンは相変わらず寡黙で、自分たちが載った雑誌を読んでいる。

スタッフは最終的サウンド・チェックと、客入れに向けて着々と準備をしている。リョータの体調のせいで、今日の開演は30分遅れるという告知が貼り出された。

それにしても6時に着くハズのリョータの姿がまだみえない。メンバーはステージ衣裳に着がえ、リョータの到着を待っている。6時30分過ぎにマネージャーに連れられ、リョータが来た。見るからに具合いの悪そうな青じろい顔色で、本当につらそうだった。スタッフが見かねて、大丈夫?と聞くと、すかさず〃熱があって体中あつくって、もうダメですよ。ノドも痛いし〃と不調をうったえている。

しかし、だからといって、ライヴを中止にするわけにはいかない。彼は休む間もなく、ステージに立ち〃オレ、ギターの練習しなくちゃ〃といってギターを持ち「待ちわびた時」と「リトル・ボーイ」の曲をやった。二曲歌い終わると〃ノドが痛くって〃とスタッフに向っていいながらも、数曲、やつぎ早やに歌った。リョータの体調を考えて、今日予定されていた曲が数曲カットされた。リハーサルのリョータをみている限りでは、今にも倒れそうな感じがしたから、しかたがないのかもしれない。スタッフがマネージャーに〃リョータ大丈夫ですかね〃と尋ねた所、

〃プロの根性みせてもらうっす〃という返事がかえってきた。そこには、マネージャーとアーチストの信頼関係のようなものを感じた。リョータなら、どんな逆境でもやってくれるというような。

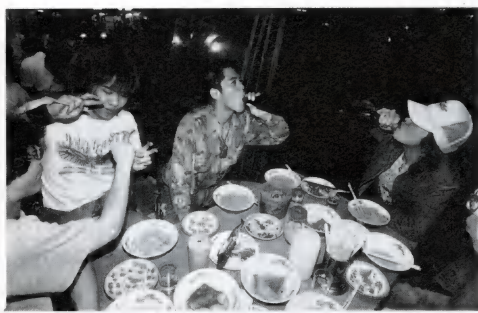
7時過ぎにステージに立ったPOGO。状況を知っているだけに意識はメンバー側に傾いているが、今日、来ているファンは、POGOのステージで熱くなりたいと思って、お金を払って来てくれたんだから、ただ演ればいいってもんでもない。きついことをいっちゃえば、自己管理もプロの内なのである。特にヴォーカルは楽器と違って体調がすぐノドに出てしまうのだから――。

「タイム・イズ・マネー」からスタートした今日のライヴは、いつもよりスピードが速く、前半6曲目までは、なげやりな歌い方をしていたリョータだったが、7曲目になったときから、ノリをつかんできた。客のテンションの高さにノセられたのだろうか、俄然良くなってきた。そしてそのまま一気に最後まで、息もつかせぬ曲攻撃で、壮絶なライヴを展開した。汗だくになった客は、2度目のアンコールを要求したが、メンバーは姿をみせなかった。

ライヴ直後、リョータは楽屋口から即、急救病院にスタッフと向かった、らしい。後半戦のノリをみてると、それほど体調が悪いとは思えなかった。逆に体調が回復したかのように見えた。

こんなシチュエーションのライヴは見ようと思っても見ることができない。あの最後の力をふりしぼったようなリョータの底力を見せられ、またPOGOの魅力をひとつ発見したようで、来た甲斐があったと思った。

打ち上げはリョータをのぞいたメンバー3人が参加して行なわれた。彼らの口からは、リョータのリョーの字もでなかったが、客の入りがおもわしくなかったことを凄く気にして〃もっと頑張らなければ〃と口々に言っていた。

それにしてもツカモト兄弟の食欲の旺盛さには、いつも感心させられてしまう。日頃何を食べているのかと思う程の量を2人で競い合って食べている。カスガは、もっぱら飲む方にウエイトを置き、今日のライヴの疲れをいやしている。二次会はいわずと知れた川辺の屋台に、名物の長浜ラーメンを食べに行った。一次会であれ程、食べたのにメンバーは何回も替え玉を注文し、満足しきった表情をしている。こうやってPOGOにとっての長い一日は過ぎていった。そしてまた、明日、彼らは同じステージに立つ。

FUNKY DYNAMITE

ARENA 37°C VERSION　FOR THE POGO FREAK　VOL.1

(FUNKY DYNAMITE) IS OFFICIAL FAN CLUB OF THE POGO. SINCE 1988

■今月からスタートしたPOGOの連載、楽しんでもらえました!?今後は、いろんなコーナーをもうけて展開していきたいと思いますので、広く読者の投稿を募集します。①イラスト②質問/悩み事等（何でもOK/メンバーが親身になって答えます）③フォーカス（街でみかけたPOGO等）④街でみかけたファンキーな奴（Photoつき/それと説明も入れて下さい!）⑤POGO川柳（POGOを題材とした落ちのある、笑えるもの希望）⑥POGOのメンバーに似ている人を捜せ!!（Photoつき、説明付きで）以上の原稿を随時募集してますので、ドシドシ傑作なのを送って下さい。宛て先は〒104中央区銀座5ー1ー7数寄屋橋ビル5F㈱音楽専科社内 ARENA37℃"THE POGOのFUNKY DYNAMITE"係までドーン!!

FD 出張インタビュー

小河原良太

第1回：オレの音楽ルーツ❶

──まずは軽くプライベートな近況でも。
R：あんまないなー。
──もう部屋は飽きた？（2月に今の所に越したばかり）
R：もーグチャグチャ。早く引越したいね。金入ったら引越そうかって…。
──お金入るでしょ。オリコン18位だもん(笑)。うんと儲ったら何したい？
R：バンドやめるよ。
──またー。バンドやめてどうするの。
R：ハーレムでも作るよ(笑)。
──行きつく所はいつも女の話(笑)。でも、男友達は充実してるね。狂市さんや幼一くん…だからって、ファンクやスカに興味があるって訳ではないんでしょ？
R：あるよ。好きだもん。
──クラブに行ったりは？
R：そういうのは嫌い。今度シングルのB面がおもしろい曲だから（笑）。
──その方の？ツートーンだとか？
R：それは出てからのお楽しみ。
──レゲエはどう？
R：好きだけど演れないよ。レゲエって言っても、ボブ・マーリィしか知らないしなぁ。
──歌謡曲も聴くって…。
R：最近何も聴かねぇよ。家ではラジオかけっ放しにして。音楽なんかＢＧＭでしか聴かないもん（笑）。
──でも、音楽モノのビデオをかなり持ってるそうじゃない？
R：見ないよ、別にあるだけで。
──×××（オフレコ）も持ってるって…。
R：それは、徳間でもらったんだよ。
──じゃ、大江慎也のも持ってる？
R：大江慎也は…持ってないけど、ルースターズは持ってる！オレ、ルースターズ大好きだったもん。
──めんたいビートにも興味あったんだ。
R：もちろん。あの当時のロックン・ロール・バンドはすごく好きだよ。
──ロッカーズとか、シナ・ロケとか。
R：大好きだったよ。あの当時、モッズ見に鹿鳴館行ったんだ。メジャーで２枚出してたけど鹿鳴館でさ。それでもスゲエと思ってたのに…。今とはもう、全然時代が違うんだろうなぁ。感覚も。
──初めて買ったレコードが、矢沢永吉の「ゴールド・ラッシュ」。
R：永ちゃん、好きだよー。カッコいいじゃん。何でも好きだったんだ。非常階段とかのノイズ系も好きだったし、ジョニー・ロットンがやってるＰｉＬとか流行ったじゃない？ポップ・グループとかバウハウスとか。ＣＡＮとか。ＣＡＮはすごい好きだったよ。（と、しみじみ）オレ、水玉消防団ってバンドが好きで…すごいカッコいいんだよ。あのへんをしきりに好きになってさ。
大好きなんだよ、オレは（笑）。
──熱しやすく冷めやすい、と。
R：そうそうそう。それ。
──ＧＳ好きだったという話もあるし。
R：うん。今でも好きだけどね。

MINI² NEWS

なんと、カスガくんがあの山下達郎から自転車をもらった!?それも、白いサイクリング車。実は山下達郎さんのアルバムのプレミアを当てた友人から、「またもらい」したそーで。

悩めるプリンス　塚本研

♪サン・ライズ、サン・セット～
そして、また日は昇るのであった。

男・ドラマー・生まじめ一本勝負
「ぼくらはみんな生きている!!」
塚本　純

今月から俺のいろいろな考えを書いてみます。特に人に関する俺の勝手な考えを、その時々に思ったことを中心に書いてみるけど、あくまでこれは一つの意見として聞いて欲しい。押しつけではないので、念の為。

人は楽しい時や面白い時には笑いが出るけど、それ以上に大事な笑いに「微笑み」がある。特にあるいろいろな相手に対しての微笑み。これが、人の人生を左右するほどの重要な笑いだと思う。最近の人達はほとんど言葉、つまりおしゃべりで、相手に伝える事があたりまえになっていて、相手に気持ちが伝わりにくくなっている事が多い。その人の上っ面は伝わっても本当の心までは伝わらない。その中には自信もあれば、自分では気付かない無意識な所も含まれていて、変に装った言葉より、よっぽど相手に伝わる部分が大きいと思う。だからといって言葉がないと結果はわからない時もあるかもしれない。それでも言葉で締める以前の所で「微笑み」というものが、かなり大きな役割を果たしてくれるんじゃないかなぁ。良い結果を迎え易くするための笑いでもいいと思うし。

えらそうな事を言っているおれ自身、最初に会った人には笑いが作れず、無表情なツラをしているから、とんでもない人間に見られ怒っている人とか、怖い人だとか、ひどい時になるとている事がかなり多い。最近は少しずつ減って来てはいるけれど、しょうがないよなぁ。自分でもわかってるんだけど、できない。酒を飲んで酔っぱらっている時は別だけど。無理に笑おうと思うと余計出て来ないし。でも、最初から気の合う人という場合もたまにはあって、その時が自分にとって唯一の微笑みの出る時だと思ってる。不思議なもので、そんな時は全然苦にならない。そういう時に出る笑いが重要な笑いなんだ、という事が結論であって、おれが一番言おうとする事なんです。

かなり真面目に話してきたけど、おれが書いた事についての意見や文句などがある人は、遠慮なく手紙かなんかで送って来て下さい。

それでは、またどこかでお会いしましょう。さよおなら。

GUITAR MAN・春日の BEAT CRAZY TALK 1

ハロー〃みんな元気でやってるかい？という訳で今月から始まったこのコーナーを担当することになっちゃったギターマン春日です。ヨロシク〃まあ、適当にやってくつもりなんで、あんまり期待しないで(？)気楽に読んでちょーだい。

ところで今ちょうどツアーの最中なんだけれども、メジャー・デビュー（あんまり実感ないけど）ってことで以前よりも取材が多くなってきた。東京はもちろん地方に行った時も雑誌やラジオ・ＴＶなんかも出てるから、みんなチェックしとくように。でも以前に比べてメジャーともなると、さすがにホテルなんかもグレード・アップして楽になってきたけどね。今まではツインの部屋（2人で１つの部屋に泊ること。それ以上の人数で泊る時も当然あった）に泊ることが多かったんだけど、シングルの部屋に泊まれるようになったもんね。やっぱりライヴの後はぐっすり眠りたいし、これからは某マネージャーのプリンス近藤のいびきにも邪魔されずに済むことだろう（以前はこれが原因で不眠症気味だったこともある）。

後は打ち上げなんかもけっこう豪華になってきた。ツアー中の食事もちょっと前までは高速道路のサービスエリアでカレーライスとカカツ丼ばっかりだったけど、最近だと焼肉・すきやき・寿司…等うまい物ばっかり食べてるような気がする（とは言っても、今でもたまにラーメンなんか食べたりするけどね)。そしていろんな地方の名物料理(？)ってのがあって、俺はとても大好きだったりするわけだな。（食べすぎはヤバイけど、これがウマイからしょーがない…）

まあ、メジャーに行って変わったことは他にも色々あると思うんだけど、俺たち自身は何も変わってないつもりなんで、今まで通りこれからもヨロシクって感じだな。あと「ここの○○って料理がおいしい！」とか「何かおもしろそうな店だ!」ってのがあったら教えてちょーだい。ツアーとかで地方に行った時に探険してみたいものだ…。それぢゃあ、今月はこの へんで。

侵攻開始！
Justy-Nasty
CRASH TOUR
8.12 福岡サンパレス
●くすミュージック 092-791-0999
8.16 名古屋市公会堂
●サンデーフォークプロモーション 052-320-9100
8.18 札幌メッセホール
●メッセホール 011-221-8748
8.22 長野ブラックアイ
●ブラックアイ 0262-32-1921
8.23 諏訪セロニアス
●セロニアス 0266-28-7551
8.24 前橋レストピア
●ムーンチャイルドカンパニー 03-554-8858
8.29 金沢バンバンV4
●バンバンV4 0762-22-1212
8.31 新潟エッグマン
●エッグマン 025-229-1494
9.2 日比谷野外音楽堂
●たむとむスコープ 045-251-3491
9.4 豊橋かごやホール
●かごやホール 0532-52-2655
9.6 富士ユニセックス
●ユニセックス 0545-52-4981
9.7 大宮フリークス
●フリークス 048-642-3315
9.11 小倉イン&アウト
●イン&アウト 093-531-5816
9.12 博多Be-1
●Be-1 092-481-7881
9.14 熊本大谷楽器ペパーランド
●ペパーランド 096-355-2248
9.16 高松クラブハウス
●高松クラブハウス 0878-23-2220
9.18 広島ウッディストリート
●ウッディストリート 082-242-8187
9.20 福山ブーム
●ブーム 0849-31-5407
9.21 岡山ペパーランド
●ペパーランド 0862-53-9758
9.22 神戸チキンジョージ
●チキンジョージ 078-392-0146
9.25 大阪ミューズホール
26 大阪ミューズホール
●ミューズホール 06-252-2160
9・28 名古屋ハートランド
29 名古屋ハートランド
●サンデーフォークプロモーション 052-320-9100
10・1〜7 代々木チョコレートシティ 7 DAYS
(ゲスト有り)
●フリップサイド 03-770-8899
INFORMATION▶ディア・フレンズ 03-5485-1385
DEBUT ALBUM
CRASH
●CD:H30Z-10003▶税込定価¥3,100
●MC:X25Z-3503▶税込定価¥2,637
NOW ON SALE
株式会社ポリスター

あと、数日後に
夢にまでみた、
彼らのステー
ジが実現する

ZIGGY

8・18彼らの本拠地でもある渋谷ラ・ママのステージに立つ。そして、その追加公演として8・21に日本武道館のステージを踏む。

森重「ソウルド・アウトしたって言ってもさ、通常のアリーナ席の半分ぐらいまでがステージだったりしてね（笑）」

インタビュアー／藤野洋子　撮影／梶木則男

——さて、ラ・ママの追加公演の東京・日本武道館でのコンサート直前ということで、今の心境を語って欲しいんですが。

戸城　そんなにナイです。ベツに変わらないです。20日ぐらいになったらテンションが上がってくるかもしれないけど……。

森重　まぁ、前日になったらアガると思いますね。アガるっていうか、緊張して、遠足行く前の日みたいな状態。ただ、ライヴは好きだから、広い所で出来てうれしいなっていうのもありますけど。

戸城　ただささ、周りが武道館、武道館って盛り上げると逆に……ねぇ？

森重　緊張しますよ（笑）。

——あ、じゃこちらがいけないんだ。

戸城・森重　そーです！

森重　だって、これもコンサートの一貫だって形でいればさ。周りがこうも言わなければ普通にやれるのかもしれない。

大山　昔からそうだよね。なんか何もいわれないでやれるといいのに、今日はどこそこのレコード会社が見に来てるから気合い入れろって言われると、ガクっと。

森重　アガってダメ。それで何回レコード会社を蹴られたことか……（笑）。

大山　だから、そっとしておいて下さい。

森重　ほら、やっぱりいけないと思うとやっちゃうでしょ？　人間って。だから。

松尾　ようは、プレッシャーに鬼のように弱いんですね。

森重　根が小心者だから（笑）。

大山　だからね。メンバーにはどこそこでやる、というのを内緒にしておけばいいんですよ。でね、行ってみたら武道館だった、というように。

——そりゃ、無理だわ（笑）。でね武道館のZIGGYはどうなるのか、と。

戸城　電飾どんぱち、パシパシ。昔のKISSよりすげぇのにしたいね。

森重　オレはね、BON JOVIみたいに宙を浮きたい。

松尾　オレ、クレーン車。

森重　けど怖いかもね、5階ぐらいの高さでヒーヒー言う人だから、だけどあそこ音響的にはあまり良くないでしょ？

戸城　ヘタなのが余計、ヘタに聞こえてしまう。

大山　でも、ボロは出ないかもしんない。だって、オレ、武道館行ってヘタだなって思ったバンドってひとつもないもの。

松尾　んじゃ、オレたちが初めて思わせることになるんじゃないの（笑）。

森重　初のバンドになれるかなぁ（笑）。

——そんなこと期待してどうするの。

戸城　アリーナ席なんかは、一番前だから胸がワクワクして音なんかどうでもいいってところがあるけど、一階の南の席なんかでサメて見られると困っちゃうな。

大山　ま、オレはね、両脇の人に愛想を振りまくようにしたいですね。

戸城　でも、両脇なんて入れてるかぁ？　そんなに入ってねーんじゃねーの？

大山　おっと、究極の意見。

森重　ソールド・アウトしたって言ってもさ、通常のアリーナ席の半分ぐらいまでがステージだったりしてね（笑）。

松尾　ああ、でも鳴らしたいね。マーシャル4発ぐらいねぇ。

森重　マーシャルの壁、やりたいよなぁ。

松尾　KISSの初来日の時みたいなのね。やっぱマーシャルの壁は永遠だもの。

戸城　オレらの場合は、壁じゃなくて、柱になっちゃうよな（笑）。

大山　壁はもう古いからマーシャルの床っていうのはどう？

——あー、気持ち悪そう。

松尾　ドラム台もマーシャルだったら、吐くだろうね、きっと（笑）。

森重　出来たら、オレ、KISSのさ、あのピカピカに光るのが欲しいな。

戸城　あー、欲しい。カッコいいもんな。

森重　ZIGGYってダカダカダカアーって光ったらさぁ。カッコいいぜぇー。

戸城　オレ、KISSのでもいいぜ。借りてきてよぉー（笑）。

大山　でも、まだ持ってるかなぁ？

——コスチュームはどうするの？

戸城　何着ていいかわっかんねーんだよ。

森重　おっきいから、自分じゃカッコいいもの着てると思っていても、遠くから見て、何だかわかんないんじゃね、ヒョウ柄のスーツも茶色のスーツにしか見えないという。そのへんも計画しないとね。

松尾　とにかく柄物はダメよ。やっぱ一色ものがいいと思う。

——単色で光りもの入れるとか、ね。

松尾　オレはたぶん光らせると思う。

戸城　そんで頭もテカらせる、と。

森重　でも、確かに光りものは大切だと思いますけどね。あとはさ、パンツ一丁とか。しかも肌色で。遠くから見ると全裸にしか見えない（笑）。

戸城　や、それなら全裸で出ても2階の上の方じゃわかんねーかもしんねーよ。あら、小さいわね、なんて見えてるって。

松尾　でもさ、オレたちの衣装って、近くで見て、なんぼって所があるからね。

森重　うん。そういう意味じゃ、ライヴハウス向きなのかもしれないな。ま、Gパンで出たっていいんだけどね。

——けど、オペラ・グラスも売ってるからね、武道館で。

戸城　ほんと？　知らねーよ。でも、それで見るっつーのも何かヘンな感じだな。

森重　うん、ノレないよねー。

松尾　どうせなら、天体望遠鏡持ってくるぐらいの真似はして欲しいよね。

戸城　おー、それは粋だねー（笑）。
――しかし、音響が悪いだの、もっとキャパの大きい所があっても、武道館にはなにがしかのものが未だにあるよね。
森重　クサってもタイってものだよね。
――これは余談だけど、書く場合は東京・日本武道館としなくちゃいけないんです。武道館って各地にあるからって理由で。
大山　自分ちの近くにある武道館と間違えるんですか？　そんなバカいないでしょ。
――そうだけど、念のためってヤツでね。
森重　まぁ、でもそういう武道館でなくて良かったな、とは思いますが（笑）。東京・日本武道館でね。
戸城　あ、ならさ武道館ツアーっていうのは？　いろんな所にあるんでしょ。各地の武道館を回るの。笑えるよね（笑）。
大山　畳敷きとかさ、剣道やってる所ならフローリングだね（笑）。
森重　とにかくね、正直な所、武道館はやってみないとわかんないでしょう。
松尾　そうだよね。渋公だって、やったあとから来たものね。
森重　そうそう。
戸城　だからね、ステージに上がった時、オーっというどよめきが起こればきっと何か感じるんだろうとは思うけどね。
森重　だけどさ、早いよね。去年はちょうど、渋公やってた時期だものね。キャパ的にはその4倍でしょ。そのオレたちですら早いと思うのに、もっと早く出世というか登りつめちゃうバンドの、そのプレッシャーはすごいだろうな。確かに武道館に対する感慨はあるんだけど、オレ、そっちの方を考えちゃうな。
――そのね、やっぱり武道館の後のケア？　ま、もちろんアーティスト側が考えるべきものでないにしろね。
大山　オレたちは考えちゃいけないよ。押して押して押しまくるだけだよ。
森重　自分がどんなに努力してもさ、みんな人気を保つために努力しているんだろうとは思うんだけどさ、それが結びつかない場合もありうるからね、難儀だよ。
――これだけの事をしたからって同じだけ返ってくるもんじゃないしね。
森重　そう、それがないんだよね。作ってるものにしてもね、自分たちの価値感で最高って思っても、時代だとか万人には受けないってこともあるしね。だから、って、一作一作、しっかりした作品を作っていくことを基本に考えるしか方法はないよね。あとは、どぉーにでもしてくれ、というまな板のコイじゃないけど、ね。ただ、悲観的じゃないんだよ、客観的に見て、そう思うだけなんだけどね。
戸城　よくわかんねーけど、武道館満杯にするよりも、全国どこ行っても人がいっぱい来てくれればいいなと思いますよ。
大山　たとえドームが満杯になっても、その方がオレもいいと思うな。
松尾　ただ世間じゃ、ドーム満杯の方が売れてるなって思うわけよ。
森重　うん、そうなんだよね。だから、日本を何周もするより、テレビ1回出ることの方がバンドのステイタスを上に見せちゃう、そのへんのトリックだよね。ただね、そのテレビを見てファンになってくれたり、ロックに興味を持ってくれたりすることはおもしろいよ、でも、そうしたら、その人たちの所まで行ってライヴしなきゃって思うもの、やっぱり。
大山　そうだよ、オレの近所ってないもん、釧路。立派なホールがあるんだよ。
森重　オレだって立川やってないよ。やろうよ、メンバーの出身地でさ。
大山　『故郷に錦』ツアー（笑）。

UP-BEAT

Personal Interview VOL.5 (Fin)

SHINJI HIGASHIKAWA

人間・東川真二

「俺にとって、ギターは今でも〝オモチャ〟と同じなんよ。いつまでたってもおもしろくってしょうがないんよね」

彼の話を聞いていると、真底ギターに取りつかれてしまった男という印象が強い。〝俺はバンドでギターを弾いていたい。UP−BEATの演ってる音楽が好きだからやってるけど、新しい興味がわいて、違う音楽がやりたいという気持ちが生まれたら、UP−BEATにしがみついていない〟ときっぱり言う東川の音楽漬けのヒストリーをじっくり読んで下さい。

インタビュアー／松浦靖恵　撮影／吉田恒星

東川真二が初めて音楽を意識したのは小学校4年生の時だった。4歳上の兄きの影響でビートルズがぎっしりつまったカセット・テープを聴いた彼は、すっかり音楽に夢中になってしまったのだという。それから彼はおもちゃを手にしてしまったかのようにギターで遊ぶようになり、それは未だに、いつも彼の傍らにある。

――子供の頃はどんな感じでした？

「今までも取材で生いたちとか子供の頃の話をしたことあったけど、なんかね、音楽体験っていうか、他の友だちとかに比べて洋楽を聴くのが早かったり、ギターを手にするのが早かったっていうのがどうも前面に出すぎちゃってて(笑)、普通の子供と違うみたいに捉えられてんじゃないかと思うんよ」

――普通の子供!?

「俺だって近所の友だちと遊んでるよ(笑)。野球もやったしさぁ、家にこもってばかりじゃないよ」

――でも、その音楽体験の年齢って早いと思う。9歳とか10歳でしょ？洋楽が浸透している〝今〟とは違うもの。約15年くらい前の事だし…。

「15年!!　なんかそれってすごいよね。オレ、年寄りみたいじゃない？」

――(笑)。

「ただね、同級生とかに自分の好きな音楽の話をしたくても、わかってもらえんかったんよ。だから学校や友だちと遊んでる時は普通に遊んどったっていう。決して異端児ではなかったね。学校がものすごくおもしろかったし好きだったんよ。ノビノビしてたし、友達は多かったし…。それは中学行っても変らんかったよ」

――小学4年の時ビートルズを聴いて衝撃を受けたわけだけど、それ以前は音楽に興味はなかったの？

「いや。実は小学校3年の時に当時のフォークを聴いてた」

――早い!!

「それも兄きの影響っていうか、部屋でレコードとかテープとかかかってるでしょ？　自然と耳に入ってくるんよ。で、これは誰が唄ってるの？みたいなノリ」

――当時のフォークっていうと？

「泉谷しげる、岡林信康、加川良」

――すごいライン・ナップ!!

「そう？　当時は普通だよ」

――そうかなぁ…。小学生でだよ。

「エレック（レコード会社）時代の泉谷さんとかはね、全部兄ちゃんが部屋で聴いてたのを、同じ場所にいた俺が聴いてるんだよね。だからホントに自然に耳に入ってきてるの。で、興味としてはそれじゃ俺もアコースティック・ギターを買って唄うぞっていう方向には向かないで、この人の声ってスゴイなぁとか、これは誰が唄ってるんだろうっていう、すごく素朴な小学生らしい（笑）興味を持ったんだよね」

――お兄さんの影響って大きいね。

「影響なのかな。どっちかていうと兄ちゃんとは同じように、同じ時に音楽が入ってきてると思う。だから4歳違いだけどズレてないっていうか。フォークもビートルズも兄ちゃんが聴いてるのをそばで俺が聴いてたっていう。まぁ、確かに兄ちゃんが友だちの兄きからテープを借りたり、部屋でレコードかけたりしていなかったら、俺が音楽に興味を持っていたかどうかっていうのはあると思うけれど」

――音楽に興味を持ち始めた少年・東川真二はそれからどうなったの？

「おこづかいをためてレコードを買ったり、相変らず学校が楽しくってしょうがなかったり。そうそう、俺って小学1年の時かは鍵っ子だったんよ。親が共働きだったから。で、兄ちゃんは高学年だったから俺の方が早く学校から帰ってくるじゃない。1人で家にポツンといるのがイヤで、いつも何か音を出してたよ。テレビつけたりして。で、音楽に興味を持ち始めてからはレコードかけたり、テープを聴いたり。それは未だにそう。音を出す習慣があるんよね」

――お兄さんとはよく遊んでた？

「よく遊んでたよ。面倒見がいいっていうか、遊びに行く時には必ずオマエも来るかって聞くの。親が家にいないせいもあったのかもしれないけど、弟が1人で家にいるのがかわいそうだと思ってたのかもしれない。でね、兄ちゃんの友だちと一緒だと同い年の友だちと遊ぶより行動範囲が広がっておもしろかったんよ。上級生だから遠出もできるし、いろんな駄菓子屋を知ってるし。小さいながら、これはおもしろい！とか思いよったもん」

――ギターが登場してくるのはもっと先？

「兄ちゃんが中学1年の時に家にギターがやってきたから、俺が小学4年の時かな。ヤマハが作り始めたばかりのSGモデルとグヤトーンのアンプを中学の入学祝いかなんかで買ってもらったんよ」

――お兄ちゃんのギターはさわらせてもらえた？

「うん。でも兄ちゃんもものすごく大事にしてたから、さわらせてもらうにはまずお伺いをたてなくちゃいけなかったけど(笑)。あ、そうだ！その前にクラシック・ギターがあったんよ。これも兄ちゃんなんだけど、なんかのクジ引きで当たったヤツが家にあってね。まずそれをさわったのが最初だった。コードなんて知らないし、チューニングもわからんし、たださわってたってだけだったけど、子供の手じゃ大きすぎるんよ。なんて弾きにくいんだろうってすでにクラシックは挫折してた」

――で、ヤマハのSGがやってきて、新たなギターへの興味がわいて？

「そうだね。だんだん自分のギターが欲しくなってきたんだけど、高いじゃない？　こづかいためてもレコード買ってたし…。結局、自分のギターっていうのは小学校を卒業する少し前かな。グレコのギターだったよ。それまでは、たとえばビートルズだったら彼らはもう解散していなかったけど、ちょうどそれぞれのメンバーがソロ活動を始めてた頃でね。もっと彼らの音楽を聴いてみたいっていう興味の持ち方をしてたから、とにかくおこずかいをためたらレコードをかたっぱしから買ってたんだよね。で、ギターが登場してから少しづつやってみたいなと思うようになって、兄ちゃんのギターを借りて弾くようになって、やっと自分のギターを手にできるようになってから、思いっきり好きな時に弾けるようになったの、お伺いをたてずに(笑)」

――バンドへの興味は？

「あったよ。小学校6年の時にラモーンズがデビューしたんだけど、それは結構くるもんがあった。小学4年の時から『MUSIC LIFE』とか読んでたんだけど、ちょうどパンクが登場してきたのが6年の頃でね。グラビアに載ってる彼らを見て、今まで見た事なかったようなスタイルっていうの？　カッコイイ!!って思ったんだよね」

――黒ずくめの服を着て、やせっぽちのメンバーが気だるそうに立ってるって感じ？

「なんかねぇ、ホントにカッコイイって思ったんだよね。そんな奴ら見たことなかったし、ビートルズってバンドっていうより音の方に魅かれてたって感じがあったから」

――確かお兄さんが組んだバンドに誘われたのが最初のバンド体験だったよね。

「バンドではないけど実はその前に一度だけ博多のライヴ・ハウスに出た事あるんよ。兄ちゃんのバンドのメンバーのひとりとノリでやったんだよ。兄ちゃんのバンドの出番前に、元ルースターズのドラムの灘友君と」

――!?

「中学2年のクリスマスだった。灘チン書き下ろしのオリジナル曲でね。ポリシーはパンクの2人組ユニット（笑）。俺がギターで、灘チンがヴォーカルという」

――それが初ステージだ。

「そうだね、とりあえず（笑）」

――で、ホントにバンドにかかわり始めたのは？

「兄ちゃんが中学1年の時にバンドを組んで、まずそれの手伝いをしてたんよ。ローディみたいな形で。でも正式に誘われたのは俺が高校1年の時だよ。すでに兄ちゃんは東京で活動してたんだけど、高校1年の秋かな、東京出て一緒にバンドやらないかって言われたのは」

――返事は？

「高校はちゃんと卒業したいって思ったし、学校が好きだったから悩んだよ。中途半端にするのがイヤだったから、親を説得するためにも一生懸命勉強やったんよ、俺。ちゃんと

Personal interview

イイ成績とってた。で、通信制の高校に移って東京で活動を始めたの。それが〝モデル〟っていうバンド」
――モデルって『アリーナ37℃』に登場したんだよね。
「そうそう。あったねぇ（笑）」
――私、覚えてるよ。『アマチュアバンク』っていうコーナーだった。

「（笑）。アリーナって言えば、UP－BEATをいちばん最初にとりあげてくれた音楽誌なんだよね」

――そうなの？
「うん。今のメンバーになった時に自分たちでアーティスト写真を撮ったんだよ。それがすごくカッコイイ写真でね。アリーナはそれにだまされた（笑）」
――ハハハッ。
「今から思うと、その頃って少しでも大人っぽくしよう、大人に見てもらいたいって思ってて、すごくカッコつけてたんだよね。知り合いのカメラマンの人にも「大人っぽく撮ってくれ」って言ってた。年齢がまだ18、19じゃない？　ガキ扱いされるのがすごくイヤだったんだと思う」
――モデルを脱退したのは？
「それは音楽的な方向性が変ってきちゃったから。3年間やってたんだけどね」
――で、UP－BEATに広石君から誘いを受けたんだ。
「やめてから少し期間はあったんだけど、広石とはずっと連絡はとりあってたんよ。その頃は一緒にバンドやろうなんて話は全くなかったけど、2人でいつも音楽やバンドの話をしてたんよ」
――広石君とはどういう知り合い方をしたの？
「ラモーンズの福岡でのライヴで」
――それってカッコイイ！
「（笑）」
――モデルをやめても東京には残ってたんでしょ。
「うん。東京にこだわってたわけじゃないんだけどね」
――でもUP－BEATは九州で活動してるわけじゃない？
「そうだね。バンドはどこででもできるとは思ってたから、UP－BEATに入るって決めた時も九州に戻るっていう感じじゃなかった。バンドがその場所にあったからっていうね。なんかね、いつでも東京には来れると思ってたし、近いうちにUP－BEATも東京に来るとなぜか思ってたんだよね。
　バンドをやりたかったんよ、とにかく。ギターを弾ける場所が欲しかったしね。で、そこにUP－BEATがあった、と。その時広石もバンドの方向性を変えようと思ってて、もうひとりのギタリストを入れたいと思ってたんだよね。UP－BEAT UNDERGROUNDの事は知ってたけど、他のメンバーの事は何も知らない状態で九州に戻って。水江と凡はその時が初対面だったの」
――不安はなかった？
「それよりもバンドをやりたかったんだよね。それに不安あったら一緒にやろうとはきっと思わんかったよね」
――音楽やバンドをやめようとは全く思わなかった？
「それがねぇ、不思議な事にどんな状況であっても一度もなかった。だけど音楽でメシを食っていこうとも思ってなかったんだよね。プロ・デビューとかアルバムを出したいとかそういうあこがれはなくて、ただバンドがやりたいってだけだったんよ」
――で、UP－BEATでの活動がスタートしたのが'84年。
「今のメンバーになったのが、ね。なんかね、嬉しかったよ、バンドできるのが。でもねぇ、ホント九州に戻ったらすぐリハーサルでしょ？　新メンバーでの初ライヴまで1ヵ月もなかったんだよね。すでにスケジュールは決定していたという（笑）」
――それが小倉のライヴ・ハウス「－N&OUT」でしょ？
「そう。それはね、かなり観客を集めたライヴだったよ。俺自身バンドでギターを弾ける嬉しさもあったけど、なんて言ったらいいのかなぁ、やっと腰をすえて活動できるバンドかもしれないって思えたんだよね。ライヴやるからギターを弾いてよっていう中途半端な事をやりたくなかったし、俺はバンドとかギターとか真面目にやってるからね、同じ目的でやってるメンバーに逢えたっていうのも、その嬉しさのひとつだったよ。やっぱりね、同じ目的や思い入れを感じられないと一緒にはバンドできないよ。たとえアマチュアでも。俺たち、いいバンドをやりたいんだよね。当時もチラシ作ったり、プロモーション・ビデオも撮影したんよ。アーティスト写真を撮ったり、プロ
「スキャンダラスな君の夜」のビデオ。もちろん自主制作だったけどカセットも作ったしね。真剣だからこそ自分たちの手で、カッコイイこの俺たちのバンドのことを知ってもらう手段として、ライヴ以外でもいろんな事を試みたんだよね。アマチュアとかプロとか関係ないでしょ？　そういう気持ちって」

――プロを意識した事は？
「なかったんよ、本当に。俺、原点はいいバンドを作って、より多くの人に見てもらいたくてライヴやってチラシ作って、より多くの人に聴いてもらいたいからカセット作って。

それは決してレコード会社や事務所の人たちに向けて作られたものじゃなかったんよ。原点からの自然な流れなんよ。そういう事を他人が〝まるでプロみたいじゃない〟って言っても、俺はプロを意識してなかったんよ。
　それはある意味では未だにそういう気持ちがあってね。音楽やバンドをやってる事にプロもアマチュアもないと思うんだよ。みんなバンド好きだからやってるワケだし、もしヤメたくなったら続けられないと思うんだよね。俺はバンドでギターを弾いていたい。UP－BEATでギターを弾きたいと思っている気持ちがあって、好きだからバンドやってるの。もしね、他にもっとやりたい新しい興味がわいて、違う音楽がやりたいという気持ちが生まれたら、UP－BEATっていうバンドにしがみついてはいないと思う。それはきっと他のメンバーも同じじゃないかな。
　今、うちのバンドは5人が目指してるものが同じだけど、これからどうなるか、先は誰にもわからないわけでしょ。これはうちに限らず他のバンド全てに言える事だと思う。決してしがみついたり、こだわってるんじゃないんよ」
――それはUP－BEATに加入した時も思っていた事だった？
「いや、たぶん〝プロ〟になってからじゃないかな。逆にアマチュアとかプロとかこだわってなかっただけに。ある種〝プロだから〟っていうワクが決められたからこそもっとバンドを好きでいる事の自分の気持ちを確認したり、ここで、このメンバーでやりたいって思ってる気持ちを大事にしてたり。
　もちろんデビューしてからいろいろあったよ。煮つまった時もあった。特にデビュー当時は〝ビジュアル面〟だけのアプローチが強かっただけに、自分たちの知らない所でいろんな事が動いている事が恐かったよ。
　でも今にして思える事だけど、そういう時期があったから〝今〟のUP－BEATがいるんだと思うんよ」
――東川クンにとってバンドって何だろう。
「うーん。言葉にするのは難しいし、あらためて考えるにはあまりにも身近にありすぎるのかもしれんね。それに、そういうの言うのってちょっと照れくさい（笑）」
――じゃあギターは？
「これも同じ。ただ小学生の低学年の時に初めて手にしたギターの感覚っていうか…、俺にとってはギターって〝オモチャ〟と同じだったんよ。それは未だに変ってない。俺にとって、ギターは今でも〝オモチャ〟と同じなんよ。いつまでたってもおもしろくてしようがないんよね」

KOOL&KRAZY VOL.29

THE PRIVATES

延原達治、アリーナ37°C植民地計画
ますます快調ブッチギリ・スーパー・エッセイ！

[真夏の大親友・エアコン君]

やぁ日本全国のマルペケさん達、調子はどうかね。私は今日もボロボロだぜぃ。(並)はなんと海外のとある島でバカンスを楽しんでいるというのに、俺様はうんうんうなりながらこの随筆を執筆しているのだ、久保さんは、そんな俺の原稿を待っているのだ。そして日本列島のマルペケ・キッズ達に勇気をあたえるために私は書かねばならぬ。燃えているのだ。燃える闘魂である。スポーツ平和党なのだ。

私は7月1日、京都駅でアントニオ猪木と会ってしまった。この随筆を君達が読む頃には参議院選挙も終わっているが乱立されたミニ政党がどこまで健闘するか興味津々である。しかし政見放送を見ていると、いったいこの人は何を考えているんだろうというオチャッピーさんが続々と登場する。しかも皆さん口々に憎い消費税を廃止させます、などと公約を口にするが、どうもTVを見ているとうさんくさい奴等が多すぎる。まぁ、誰も何も期待してないと思うがな。本当の勝負は衆院選と世間の人々も思っていることであろう。どうぞ政治家の皆さんがんばってくださいね。チャンチャン。

さてさて、街はじめじめと暑苦しいがそろそろ今月の本題に入らねばならない。しかし本題が見つからずに私はここ3日間悩んでいるのだ。私達のように生活にテーマのない人々はただずるずると日々を暮らしがちである。計画性というものがまったくありません。これはいけません。学生さんは長期の休みの前に作成した夏休み計画表にそって規則正しい生活を送りましょう。もし無理ある計画を立ててしまった人は、人生の試練と思いがんばりましょう。朝5時に起きてマラソンするとか計画表にうかつにも書き込んでしまった大馬鹿者は毎朝早起きして走ってくださいね。私も応援しております。

そういう訳で、どういう訳だかわかりませんが、大馬鹿さんが早朝マラソンに精を出している間に私達は次の話題へと移っていくことにしませう。次から次へと話題が変わってパープリンの君達にはちぃとばっかしきついかもしれねえが、まぁがんばってついてきなされ。ついてくるものは必ず救われるのである。そうであーる。新興宗教なのであーる。信者は毒を飲んで全員死ぬのだ。ここはガイアナ人民寺院である。なんのことだかおわかりか?わからねぇ奴はここで終わり、いますぐ早朝マラソン組に加わり体を鍛えて出直しなさい。わかった奴は毒を飲んで死んでしまいなさい。本当はなんのことだかよくわからないけど、なんとなくわかったふりをして流行に飛び乗ってしまう超大馬鹿さんは、続きを読んでもいいざんす。

さぁ関所をすり抜けてここまでたどりついた超大馬鹿者の皆さん、あらためてお元気ですか。病気がちの超大馬鹿者の君も元気を出してついてきなさい。ここから先は深く考え込んで読む必要はありません。君達の最大の持ち味である軽さでサラリと読み流していいのです。さて我々一行は4月に米国より帰国し、はやくも4ヵ月が過ぎた訳だが、なんと時間の過ぎるのが早いことやら。ボガルサやN・Yでの日々が遠い昔のことのように感じられる今日この頃である。ツアーの毎日も一日一日をしっかり焼きつけておかねば、なにがなんだか訳がわからなくなってしまう。まぁわけがわからなくなってしまえば、なったようになるまでだが、もともとわけのわからない日々を送っている私のような人種であるからしてツアーが終わってフッと、自分は何をしているのだろうか、などと考えてしまうと言葉にならない妙な気分になったりもするものでありまする。(オーッなんと格調の高い随筆)私は夏の暑い日々が嫌いでありますから、できることなら、どこか異国の地へでも避暑に出かけてしまいたいところですが、そのようなわけにもいかず、しのぎやすい季節がやってくるのを、ジッとこらえて待つしかないのでございます。読者の皆様の中には、このように高温多湿の気候が一番好きと、おっしゃる方もおられると思いまするが、私のようなものから言わせてもらいますと、一年の中で一番つらく苦しい日々でございます。しかし遠い異国の地へ足を運ばなくても、この季節を乗り込えることは、できるのでございます。いつの日にか皆様に紹介した、私の大親友のエアコン君がいるからです。エアコン君をビンビンに働かせながら、この地球をむしばむ数々の問題、(資源問題や公害等)を扱った記録フィルムを音を出さずにTVやモニターにうつし、ステレオから心地よいレゲエのビートを大音量で流す。そしてあたたかい紅茶で体をあたためながら、東京スポーツで昨日のプロレスの結果を読んだりするのです。私は立派なアナーキストではないですが。日本中の人々が似たりよったりのことをしていることに、実は私はうすうす感ずいていたのです。なぜならば、真夏の暑い日TVの中から省エネをうったえかけた、あのアナウンサーは背広にネクタイをしていた。しかも一滴の汗もかいていなかったのだ。しかるに私の思うところによりますと、あれは絶対にクーラービンビンにかかってる所で話しているはずだと、しかもその時、私は超暑苦しいところでそのTVを見ていたのだ。世の中に矛盾は数多くあるが、その時ほど腹が立った時はなかったのだ。何に対して腹が立ったかというと、そのアナウンサーに対してではなく、私の置かれていたTシャツとパンツ一枚でも死にそうになる暑さに腹が立ったのである。その時、エアコン君との交際を心に誓ったのは言うまでもあるまい。私は熱に弱くルーズな人間だが、いつの日かアフリカや南米のインディオ達のパーカッションを生で聞いてみたいと思ったりもする超矛盾君である。人間とはとても身勝手なものですなぁという訳で今月はチャンチャン。

PS・来月は重大発表があるんだぜBABY。期待しないで待てよ。大先生より。

KOOL&KRAZY 遂に廃止か⁉
(記事下段に続く↓)

今、日本国民の興味のタネといえば、消費税の行方か、はたまたKOOL&KRAZYの行方か、といったところだが、参院選自民党大敗により、遂にKOOL&KRAZYも廃止！という噂が国民の間をまことしやかにながれている……果して噂どおり、次号連載30回を最終回となるのか⁉ 担当編集者にもわからないこの事態、待て次号‼

待ちに待ってた新連載

KUSU KUSUの奥までついて

―テーマ知らずのお茶目破茶目茶パワー―

夢と希望をあたえる健全青少年・少女(笑)御用達コーナー

VOL.1

とりあえず今月から始まったこの連載、1回目という事で多少メンバーみんな緊張気味だったみたいだけど、次号からはスゴイ!マンガあり、レコード紹介あり、読者からの質問コーナーあり、読者の〝私の恥ずかしい写真〟コーナーあり(笑)、とノン・テーマ、なんでもアリの月替りメニューハチャメチャ、ページで行くつもり。と言うわけで、メンバーへの質問でも恥ずかしい写真でも(笑)なんでもいいから、勝手にコーナー作って送ってちょうだい。あて先は〒104 東京都中央区銀座5－1－7数寄屋橋ビル5F アリーナ37℃ 〝KUSU KUSUの奥までついて係〟まで。メンバーは楽しみに待ってるよ。

MU

こんにちはGUITARの夢乱です。

連載なんて初体験なのでボッキ度90°です。このまえLOFT 2DAYSが終わったばっかりなんですが、そのLIVEのことを書きます。

まず1日目なんですが、1日目は昔使ってたガムランSEを流して始まりました。だけど昔のSEなのでGの入るところがわかりずらくて、気がついたらSEが終ってました。そんであせってパンツを急いではいて出て行きました。そしたら母親が「いまなにやってたの」と怒りだして…「なにもやってないよ」と昔言ったことがあります。

それでGのイントロから〝光の丘の木の下で〟が始まりました。途中でGのトラブルが多くてボッキ度90°でした。アンコールでゲストが出て〝世界が一番幸せな日〟が始まりました。ゲストは〝ZELDAのアコさん〟〝DJ界のアイドルチエコビューティー〟そして〝ファンキーエイリアンのかおるさん〟でした。そんで〝オレンジバナナ〟をやって終りました。すごく楽しかったです。

2日目はジャングルSEで始まって、またGのイントロでオープニングが始まりました。そんで曲と曲の間で照明がまっくらになるのでみんな困ってました。それでいろいろ曲をやっておわって、なんと2日目のゲストはボクラが大好きなJAGATARAのOTOさんと、GO-BANG'Sのかおりさん そしてビアズリーのちあきさんでした。すごくうれしかったです。演奏は1日目にくらべると2日目の方がちょっと良かったと思います。そんで無事に2DAYSがおわりました。

でも2DAYSが無事終ったのもみなさんのおかげです。どーもありがとう。

Say

初めまして、KUSU KUSUのBassのSayです。最近の暑さにはほとほとまいっていて元気が出ません。これ以上オゾン層が破壊されて夏がもっと暑くなったら、僕はもう生きていけません。だからあんまり髪の毛を立てないで下さい。どうしても髪を立てたい方はもうしわけなさそうに爆発して下さい。………

…というわけで、このコーナーでは、みなさんからの〝大バカな手紙〟と、〝私のはずかしい写真〟(※Sayくんじゃなくって、キミたちのだよ)をお待ちしております。ちなみにこれはメンバーだけの楽しみなので、雑誌では発表しないかもしれないです。あしからず。

JIRO

さって、やってきたね、夏がさ。みんな元気にすごしてますか?

で、14日福岡でのLIVEすごかったさ。打ち上げで、ボ・ガンボスやユニコーン、J(S)Wと飲んで〝レーサー〟と言う軍団ができたのです。合言葉は〝男はレーサー、女は旅人〟ってわけで、どんとSAN、たみおSANと3人で話し合った結果、BIG EGGをめざすことになりました。で、最終地は筑波サーキットにあいなりました。

〝レーサーとはなにか?〟それは男にしかわからない孤独な戦いのことなのです。で、その教えというのは〝男は孤独なレーサー〟〝人生は長くでこぼこなサーキットである〟などetcですが、とにかく、みんなレーサーなのです。連載ののっけから、わけわからんことですいませんねェ。

あっそーだ、今年の秋にインディーズでレコードを出すことになりました。まだどーゆーのかはわかりませんが、みんな聞いてみて下さい。KUSU KUSUをまだ知らない人、たくさんいると思います。みなさん、一度LIVEに来てみて下さい。遠くてこれない人は、ぜひ、レコード聞いてみて下さい。

来月もまたこのコーナー読んで下さいね。さようなら。

MAKOTO

みなさんこんにちは、ドラムを叩いておりますまことです。こんにちわ、いやこんばんわ、かもしれませんね。え〜〜とぼくは、まことです。だからまことなんです。

みなさん元気ですか!?ぼくも元気です。いや〜〜最近もう夏ですね。夏といえば海、みなさん海に行く予定などあるのでしょうか!?最近日本は荒れていますので、海では津波に気をつけてください。地球の7割は海なのです。だから北極の氷がとけたら大変なことになるんです。あらゆる所に海ができて、海の家がいっぱいできて、いや〜〜こわいですねぇ〜〜。

最近、ぼくは山が好きなんです。この前友達のエレーナといっしょに紋別岳にのぼりました。頂上にのぼって下を見おろすと、そこは雲の海でした。だけどエレーナは疲れていました。エレーナは夜には強いが、朝には弱かった。それではまた、さよ〜〜なら。

STRUTを知らないやつは大バカ野郎だ!五感で感じろ!

THE STRUT DEVIL IN RED

CD:VDR-9067 ¥2,256(税込) LP:VIH-18 ¥1,885(税込)
収録曲:BY MY MAGIC/NIGHT MARE/FEAR OF THE DESERT、他全7曲
●8月21日発売

真のノスタルジア

invitation

割礼 ネイルフラン

CD:VDR-1637 ¥3,008(税込)
LP:VIH-28375 ¥2,637(税込)
収録曲:溺れっぱなし/君の写真/ネイルフラン、他全7曲
●8月21日発売

アルバム発売記念ライブ▶8月21日(月)渋谷クラブ・クアトロ

神秘の哲学

ASYLUM/ASYLUM

NOW ON SALE
CD:VDR-1605 ¥3,008(税込) LP:VIH-28366 ¥2,637(税込)
収録曲:The Shade/Collectors/Leave me alone、他全8曲

不死身のロック・モンスター

YBO²/STARSHIP

NOW ON SALE
CD:VDR-1606 ¥3,008(税込) LP:VIH-28370 ¥2,637(税込)
収録曲:STARSHIP/CANON/FURAN、他全7曲

EXPLODE N.Y.

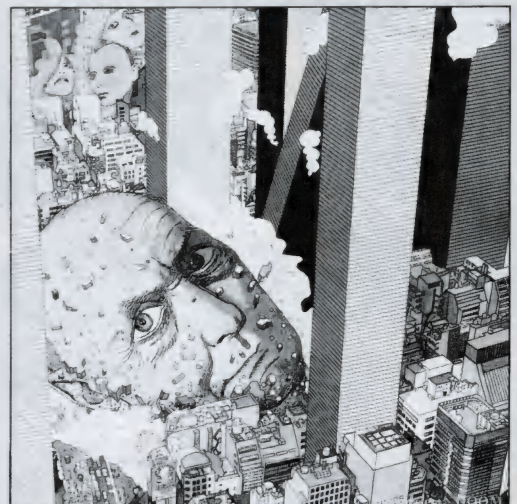
DOOM、ニューヨークを爆撃す。

Incompetent.../DOOM

CD:VDR-1635 ¥3,008(税込) LP:VIH-28374 CT:VCF-10410 ¥2,637(税込)

収録曲:I can't go back to myself/Eating it raw/20th century a proud man/Killing time/A sandglass of the jungle/Death of false ROCK!!/I will be with you.../Lost! in my head/Sympathy for the devil/Desert flower/Incompetent...The war pig

8.21 ON SALE

RECORDED AT:
WATER FRONT STUDIO (HOBOKEN) MAY 13th~JUNE 8th
GRAMAVISION STUDIO (SOHO) JUNE 11th~16th
UNIQUE STUDIO (TIMES SQUARE) JUNE 19th~JULY 3rd
PRODUCED BY STEVE LINSLEY & DOOM

視聴覚がゆがむ悦楽の全て

SOS Stories

出演 ASYLUM、YBO²、THE STRUT、割礼、DOOM

8.26[SAT]インクスティック芝浦
OPEN 18:00/START 18:30
¥2,575(税込) ▶チケットぴあにて絶賛発売中
問い合せ:バックステージTOKYO 03-499-7357

ビクター音楽出版株式会社

ZIGGY

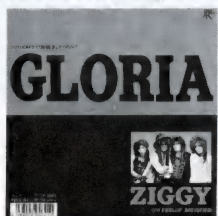
武道館迫る!

8.18(FRI) 渋谷ラ・ママ　8.21(MON) 日本武道館

NOW ON SALE!

12cm CD
それゆけ! R & R BAND ~REVISITED~

CD:15JC-437税込定価¥1,500

SINGLE
●フジテレビ系ドラマ「同・級・生」主題歌
GLORIA
C/W FEELIN' SATISFIED

CDS:10JC-439税込定価¥937
EP:7JAS-117税込定価¥659

ZIGGY LIVE SCHEDULE

〈MILLION DOLLAR'S STING TOUR〉——100万ドルのサギ師たち——

10.10(TUE)・11(WED)渋谷公会堂　10.25(WED)・26(THU)中野サンプラザ

4公演とも OPEN▶6:00P.M.・START▶6:30P.M.・¥3,399(全指・税込) *INFORMATION▶SōGō 03(405)9999*

〈夏のイベント〉

8.12(SAT)大阪・安治川イベント(問)サウンドクリエーター(06)361-9900 14(MON)「盛岡ROCK CITY CARNIVAL」岩手県民会館(問)ミュージックギルド(022)222-2033 19(SAT)「THE ROCK KIDS '89」富士急ハイランド コニファーフォレスト(問)THE ROCK KIDS '89事務所(03)376-0686 26(SAT)「高知市制100周年記念」四国鉱発土地特設ステージ(問)高知・まちと人の100年101人委員会(0888)23-1989 28(MON)「フレッシュサウンズコンテスト・ゲスト」茨城県民文化センター(問)IBS(0292)21-2121

ZIGGYサマーフェア実施中!

実施期間▶7月21日➡8月20日

この期間中に対象商品をお買上げの方に、オリジナルTシャツをプレゼント!
※プレゼントの数には限りがありますので、御了承下さい。

対象商品

1st ALBUM
ZIGGY
~IN WITH THE TIMES~
CD:32JC-257税込定価¥3,008
LP:28JAL-3132税込定価¥2,637
CA:28J-2132税込定価¥2,637

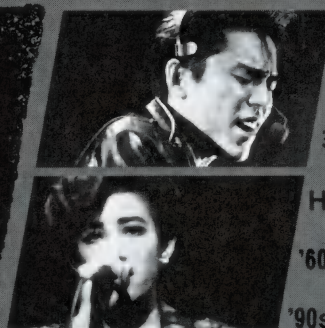
2nd ALBUM
HOT LIPS
CD:32JC-298税込定価¥3,008
LP:28JAL-3155税込定価¥2,637
CA:28J-2155税込定価¥2,637

3rd ALBUM
NICE & EASY
CD:32JC-400税込定価¥3,008
LP:28JAL-3183税込定価¥2,637
CA:28J-2183税込定価¥2,637

1st VIDEO・LASER DISC
1.16 芝浦・冬の陣
VHS 48SH-46税込定価¥4,635
βII 48SB-5046税込定価¥4,635
LD:48SX-27税込定価¥4,944

2nd VIDEO・LASER DISC
ALL THAT ZIGGY
VHS 38SH-69税込定価¥3,667
βII 38SB-5069税込定価¥3,667
LD:48SX-28税込定価¥4,944

JAPAN RECORD
MANUFACTURED BY TOKUMA JAPAN CORPORATION. DISTRIBUTED BY TOKUMA COMMUNICATIONS CO., LTD.

HANDY MAN
「HOT SOX」デビューシングル8・25発売。
伸びのよいHi-トーンと
抜群のリズム感覚。
ミュージカル仕込み、
HIROのヴォーカル。
'60全米大ヒット曲が
'90sダンスミュージックに。
PARTY'S Party
HOT SOX
HOTSOX
MANUFACTURED BY BANDAI CO., LTD.
DISTRIBUTED BY APOLLON MUSIC INDUSTRIAL CORP.
EMOTION
1st Super Live Party
One Night Club
Presented by HOT SOX
●DAY 8 19(SAT)
●TIME 16:30 Open 17:00 START
●PLACE サウンドコロシアム・MZA有明
●PRICE ¥2,500(税込)全席指定
お問合わせ先●03-405-9999(SOGO)
03-746-0969
(Cool Station)
●「ビデオクリップ」「写真集」プレゼント!
アルバムCD、ミュージックTAPEをご予約頂いた方(先着10,000名様)
8.25
同時発売
●アルバムCD
●ミュージックTAPE
「PARTY'S Party
OUR LITTLE CEREMONY」
個性的な5つの
ヴォーカル・スタイルをクロス・ビート
に乗せたPARTY'S MUSIC。
バックコーラスは、スティービー・ワンダーのセッションメンバー
"ザ・ウォーターズ"ベーシストには、映画ラ・バンバの、"マーシャル・
クレンショー"を迎えカリフォルニア・カメレオンスタジオでレコーディング
●アルバムCD BAH1001 税込定価¥3,000(税抜価格¥2,913)
●ミュージックTAPE
BMH1001
税込定価¥2,630
(税抜価格¥2,553)
●シングルCD
「HANDY MAN」
●シングルCD BSH1001
税込定価¥930
(税抜価格¥903)

氷室京介

9月6日、4枚目のシングル「MISTY～微妙に～」をリリースする氷室京介。この曲は、カネボウ'89秋のプロモーション・イメージソングとしてもオン・エアーされる。そして、9月27日セカンドアルバムもリリースされるので、こちらもお楽しみに。

THE ROCK KIDS 89

今年もいろんな所でイベントが開かれてるけど、そのトリを務めてくれるそうなのがこの〝THE ROCK KIDS '89〟だ。なんてったってメンバーもすごけりゃ何でもすごい。場所は富士急ハイランドの隣、コニファーフォレスト。新宿から1時間30分と近い。大自然の中でロックンロールってなわけだね。出演者、日程は次の通り。

8／18(金)エレファント・カシマシ、MODEL—GUN、THE MODS、THE SHAKES、SHOW—YA、THE STREET SLIDERS、TEADROPS

8／19(土)ARB、MAD GANG、永井真理子、ROLLIE、SHADY DOLLS、X、ZIGGY

8／20(日)ANGIE、De—LAX、ECHOES、FENCE OF DEFENSE、G・D FLICKERS、PASSENGERS、SHEENA&THE ROKKETS

問THE ROCK KIDS'89事務局03(376)0686まで。

TETSU100%

ARB

TETSU100%の4thアルバム『素直』が7／21にリリースされたぞ。今回はカーニバルをテーマに創り上げ、ロック、ソウル、ジャズなど彼らの広い音楽性でアレンジ、ブラス、セクションをフィーチュアした素晴らしい仕上りとなった。

アルバムのコンセプトは素直になれない多くの人達にもう一度〝素直〟という言葉を思い出してもらうこと。

また、収録曲のうち、「サーカスのイブ」はプロモーション・ビデオも撮りTV各局でON AIRされる。ライヴは9／19、新宿パワーステーション。

UNICORN

今や飛ぶ飛行機を落とす(危い!)イキオイのUNICORN。武道館も大成功、そっくりバンド(!)のハ・ムーまで出る始末。困った困った。まさに何でもありのマルチバンド、UNICORNのシングルが出るぞい。曲は『服部』から「デーゲーム」。そして何と何と何とゲスト・ボーカリストには坂上〝飛びます〟二郎さんを迎えてしまったのだ。曲を知ってる人ならわかると思うけどこの〝デーゲーム〟はどちらかというと、フォーク調の曲。でも二郎さんは「ディスコは歌いにくい」と言ったとか言わないとか。このシングル、M—2にノーマルバージョンの「デーゲーム」を入れて9月21日リリース。ちなみにアーチスト・クレジットは〝坂上二郎とユニコーン〟。ムードコーラスかってーの。

CHRIST

ブラッキング・レーベル第2弾アーティスト、クライストが、9月6日に新作『DON'T MEAN NOTHIN'』をリリース。そして、9／12長野ブラック・アイを皮切りに計10ヵ所(東京は9／24目黒鹿鳴館)のツアーに出る。詳しくは、ブラッキング事務局☎03(746)5686まで。

パンチ・ミュージックVSケニー・ミュージック弱少企業(笑)抗争

9／10、代々木チョコレート・シティで、パンチ・ミュージック倒産記念ライヴが行われる、という噂をキャッチ。当日は㊙大物ゲストが目白押しとの噂もキャッチ。ましてやK⊠GUNSが乱入ギグ敢行との噂もキャッチ(笑)。このへんの噂をケニー・ミュージックの社主に(笑)訊くと「これは倒産記念ではなく、ケニー・ミュージックM&A戦略の第一弾、パンチ・ミュージックをケニー・ミュージックへ吸収合併するのだ。音楽業界の秀和こそケニー・ミュージックだ!俺は第二の小林茂いや五島〝強盗〟慶太になる(?)」と言語道断。果して9／10、ケニー・ミュージックの強引横やり商法を、パンチMが防戦・阻止する事ができるか!?(笑)興味は尽きない!!

※ケニー・グループは新たにケニー映像を発足。第一弾として、K⊠GUNSライヴ・ビデオを今秋発売予定!?〈99%信じない方がいい(笑)〉

(関連記事P90に)

FENCE OF DEFENSE

フェンス・オブ・ディフェンスの4thアルバム『RED ON LEAD』が9／21にリリースされるぞ。〝2235〟プロジェクトを一段落させ、次のアルバムはまさに、ロックンロール。またまたカッコイイサウンドを聞かせてくれるぜ。また、10月からは新たなステージも見せてくれるはずだ。期待して待つように。

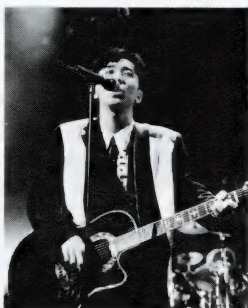
URCレコード復刻盤

日本ロックの原点(ルーツ)を知る上でも貴重な復刻盤。今年に入ってから各社から相ついで再発されているが、遂に待望のキティ・レコードからURCレコード・50タイトルがキティ・レコードから毎月10枚ずつCDとして発売される。とりあえずラインナップは、7月25日に発売された、早川義夫「かっこいいことはなんてかっこ悪いんだろう」、遠藤賢司「NIYAGO」、休みの国「休みの国」「FY FAN」、西岡たかし・木田高介・斉藤哲夫「溶け出したガラス箱」、「高田渡／五つの赤い風船」、五つの赤い風船「ベストアルバム」、「全日本フォークジャンボリー」'69、'70、'71(各3枚)、そして8／25に発売される、はっぴいえんど「はっぴいえんど」「風街ろまん」「LIVE」、柳田ヒロ「HIRO」、金延幸子「み空」、五つの赤い風船「おとぎばなし」「巫OLK脱出計画」、V.A「J-ROCK EARLY DAYS STRONG SELECTION」、V.A「HISTORY OF JAPANESE FOLK」1,2(各2枚)……等、どれもが貴重な名盤ばかり。11／25まで毎月10枚リリースされるので、是非一度は聴いてみて欲しい。

SANTA

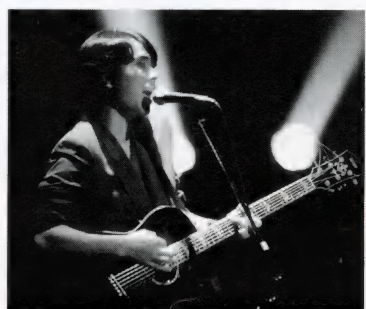
6／26パワーステーション

5月25日にセカンドアルバム「ジャンプ」を発売したばかりのサンタのLIVEがパワーステーションで行なわれた。

アルバムから受ける印象そのままに、あったかさで、はちきれそうなサンタのステージに、会場を埋めた女の子達はHAPPYそのもの。リラックスしたサンタの歌声は、会場を優しく包み、時にはしんみりさせる。相変らずMCでは爆笑の渦。バンドとの一体感も増し、アルバムの中心曲でもある「君の勇気になりたい」では、ギターの弾き語りまで披露、会場をグイグイひきつけていく。ビートミュージックに慣れた体には、こんなにのびやかなステージは、とっても新鮮。

大内義昭

6／22川崎クラブチック

こぶしを振り上げる、ビート系ライブのステージにやや疲れ気味だったこの頃、久々に心に響くライブに出会えた。「大内義昭」、既に小比類巻かほる等のヒット曲を作り出しているシンガーソングライターでもある。クラブチッタのお洒落な空間が期待で一杯になった頃、オープニングの「バックシートで恋をして」からスタート。ファーストアルバム「バックシート」を中心とした、サックスがグルーブするアップな曲から、ストリング系のきいたドラマティックなバラード迄の全15曲が彼の魅力的な声と一体になって届いてきた。男っぽさの中に隠された繊細さが生み出す詞と例えようもない美しいメロディーが胸の奥にビシビシと伝わる。

もう次のライブに期待をしている……そんな自分が、そして周りにも自分の様な表情をした人達がこの空間に溢れていた。

バトルヒーター

BAKUFU－SLUMPの映画、バトルヒーターが完成したぞ！この映画は人喰いコタツのホラー映画なのである。BAKUFUのメンバーはもちろん、他にも柄本明、室井滋、小宮孝泰（コント赤信号）、小倉久寛、三宅裕司、富田靖子他。監督はぴあFILMフェスティバル出身の飯田譲治。劇場用映画は初監督。こりゃあおもしろい映画になりそうだ。

MICA

"とらばーゆ夏のキャンペーンソング"「人間なんて」がオン・エアー中（他にEPO、アマゾンズパターン）のMICA。この夏からのツアーには2パターンがあり、A「人間なんて」ツアー（通常ライヴ・イベント、学園祭）、B「HOT COLORS」ツアー─自分が一番かわいいだ─。Aは、10／20日大東北高校、11／5日大、12／15名古屋法経情報専門学校が決定。Bは、すでに一般公募され選ばれたアマチュアバンドと、8／27ホコ天、8／30四ツ谷フォーバレー、9／3ホコ天、9／10ホコ天、9／17ホコ天が決定。

GO-BANG'S

8月18日（金）FM東京「ヤングプラザ80」の公開生放送がある。DJは、GO－BANG'Sの森若香織。場所は、ソニープラザ8Fサテライトスタジオ。16時30分から17時までの30分間。みんな、遊びに来てネ。

チェッカーズ

またまた、フミヤがドラマに出演。「時間ですよ平成元年」（10月10日よりTBS20時～21時）がそれ。その中でフミヤは、梅の湯の息子（長男）で東大出身、通産省勤務のエリート役という設定。今までのフミヤとは少し違った味が楽しめる!?かも。

それ、ナオユキもなんとドラマに出演。「愛したいのに」（9月2日より日本TV21時～22時）というタイトルで全5回。主演の野村宏伸の高校時代の同級生で工員の役。なかなかの見物だよね。

PASSENGERS

第4弾シングル「気が遠くなるまで抱きしめて」が8月21日リリースされる、PASSENGERS。この夏のライヴ予定は、8／19富士急ハイランドROCKイベント、8／27名古屋デザイン博イベント、8／28TV埼玉イベント（大宮フリークス）、9／5新宿パワーステーションだよ。

HOT SOX

バンダイが作った音楽レーベル、"エモーション"レーベルの第一弾アーチストがこの"HOT SOX"。アメリカ・ロスアンゼルスの"ROXY"でもライヴパフォーマンスをした強者。アルバム『HANDY MAN』、シングル「PARTY'S party」は8月25日発売。発売に先がけて8月19日にはMZA有明で1stライヴも行うことになっている。

FUNKAHIPS

昨年のNEW BLOODに続いて今年もNEW BLOODS PRESENTSでファンキーな奴らがファンキーなステージを見せてくれるぞ。公演日程は8／23福岡サンパレス、24日広島郵便貯金会館、26・27名古屋市民会館、29・30大阪フェスティバルホールでこのあとも続々決定するから待っててね。出演は大滝裕子、GWINKO、久保田利伸、斉藤久美、富樫明生、ブラザーコン、ブラザートム、吉川智子などなどとんでもなくファンキーな奴らだ

NEVERLAND

地に足をしっかりつけた活動を続けてきたNEVERLAND。7／25にシングル"Dear MY Friends"をリリースしたぞ。5月から始まったツアーも7／29の日清パワーステーションでラスト。夏の間は各地のイベントに出没するぞ。

MUSIC

前号でも紹介した"マツダ・アーバン・サウンド・インター・カレッジ"の決勝大会が9／13に開催されますが、ここに読者の方20組40名を招待しちゃうぞい。ゲストは"20世紀Jr（第一回グランプリ）と"MALTA"。応募先は〒107港区赤坂9─1─7─426ケイ・エム・エス内「MUSICプレゼント」係。必ず官製ハガキに住所・氏名・年令・職業を明記の上応募して下さい。締切りは8月末日。

CD2800円！

ポニーキャニオンが7月19日に発売されたチェッカーズのニュー・アルバムからCDの価格を3008円から2800円に値下げした。シングルCDは8月発売分から800～900円。安いことはいいことだ。各社、値下げしてちょーだいネッ。

ニッポンサイゴの夏祭

8／31㈯、インクスティック芝浦で"ニッポン最後の夏祭"と銘うった異色のイベントが行われるよ。出演陣が面白い。仙波清彦とはにわ隊、原ますみ、七福神、そしてゲストに福岡ユタカ（ex・PINK）、坂田明。開演19：00。前売り3300円、当日3800円。チケットぴあまたはチケットセゾンまで。

UNDER TAKER

"インディーズを本気で応援するお店"と評判の原宿のインディーズ・ショップ「REVOLUTION」から新たなレーベル"REVOLUTION'S LABEL"が発足。第一弾として、いか天でも話題となった噂のおじさんバンド（!?失礼）UNDER TAKERの6曲入りLPが8月末リリースされる。これは業界に一石を投じる大波紋だぞ！予約受付および問い合わせは、REVOLUTION（☎03・479・6895）まで。

AURA

毎週日曜日の日本テレビ系で放送されている『天才たけしの元気が出るテレビ』でメタルコーナーに出演し話題をさらっているAURA。ケバイ化粧の下には、まだあどけなさが残り、アイドル性がある。テレビ出演のおかげで、人気は高まりこのまま行くと収集がつかなくなる程とか。その彼らが8月12日渋谷クアトロでワンマンライヴを行なう。開演はPM7：00で、料金は前売2575円、当日2884円。詳しくはTHE LIVE STATION☎03（444）3464まで。

でーもって、AURAから読者に嬉しいプレゼントがあるよ。なっなんと彼らのビデオをあげちゃおうというのだ。これは売りビデオで『ウエンディ、きみだけに……』のタイトルで、2000円で発売されているもので、40分で4曲入り。それにNGまで付いている品物。このビデオを5名様にプレゼント。希望者は、住所、氏名、年令、テレビでみたAURAの印象等を書き、〒104中央区銀座5─1─7 数寄屋橋ビル5F ㈱音楽専科社 アリーナ37℃"AURAのビデオ、オ・ク・レ係"までドーゾ!!締め切りは9月10日必着まで。で、もって、プレゼントにもれた人でどーしてもほしいという人は、通販をしているので、そちらの方へどーぞ〒141品川区上大崎2─13─35ニューフジビルB1"ザ・ライヴ・ステーション AURAビデオ"係まで。詳しくは☎03（444）3464㊟松沢まで。

キャンパスコンペティション

パナソニックが後援する「パナソニック・キャンパス・コンペティション」も今年で3回目。企業が学園祭を後おししちゃうこの企画も定着してしまいました。今年もまたパナソニックがAV設備を提供してくれるぞい。まずは企画を応募してますんでそちらへ。㊐は事務局☎03（402）0552まで。

日本レコード協会発表
6月のアルバム・チャート

①BLOND SAURUS／REBECCA
②CIRCUIT of RAINBOW／杏里
③Return to Myself／浜田麻里
④MIRACLE GIRL／永井真理子
⑤ナポレオンフィッシュと泳ぐ日／佐野元春
⑥REALIZE／徳永英明
⑦服部／UNICORN
⑧KOIZUMI IN THE HOUSE／小泉今日子
⑨フラワーズインザダート／ポールマッカートニー
⑩STAR BOX／ローリングストーンズ
⑪鎧伝／オリジナルサントラ
⑫SAPPHIRE／MALTA
⑬紗／たかはしまりこ
⑭ザッツユーロビートVOL11／VARIOUS ARTISTS
⑮LET'S GET CRAZY／プリンセスプリンセス
⑯市川と宮嶋／とんねるず
⑰THE POGO／THE POGO
⑱決心／中山忍
⑲HELLO FORTY／堀内孝雄
⑳Especially For You／Wink
㉑ソングス・アンド・デイズ／松岡直也
㉒ハートブレイクをくれないか／野村宏伸
㉓HERE WE ARE／プリンセスプリンセス
㉔STAR BOX／ケニーロギンス
㉕Delight Slight Light Kiss／松任谷由美
㉖HEART & SOUL／稲垣潤一
㉗FIRE FIRE／EZO
㉘ザ・ミラクル／クイーン
㉙きよしこの夜／エンヤ
㉚「アーシアン」／濱田金吾／鈴木晶子／熊木あゆみ／MILK

HIROSHIMA'89 東京前夜祭

去る7月6日に新宿パワーステーションにおいて、8月5、6日に広島サンプラザで行なわれた〝HIROSHIMA'89 ピースコンサート〟の前夜祭が東京で行なわれた。このコンサートに参加するアーチストがビデオによって〝ピースコンサート〟にかける意気込み等のコメントを話した。みなそれぞれ平和って大事だと思っているんだと実感すると共に、この時ばかりでなく常に平和について考えなければいけないと実感してしまった。

この日は、7月7日に発売されたヒロシマ'89のテーマ・ソング「正義の味方」を作曲したバービーのいまさが来て、いろいろコメントを話していた。そして、その曲に合わせたプロモーション・ビデオが流された。去年は、参加アーティスト総出演のレコーディング風景のビデオだったが、今回は大人と子供のストーリー性のあるビデオだった。なんか前回のビデオの方が、ファンにはウレシイんじゃないかなあって思ったりして。

続いてはペッパーボーイズによるライヴで、来ていたファンは盛り上がっていたが、この今日、来た子達の何人が、このイベントの意味を理解しているのだろうかと思った。まあ、この問題は今日、明日に決着がつくというものじゃなく、ただ単に平和っていいナって思ってもらえたらいいのかもしれない。

最後は今日、来ていた人達によってカバーをやり広島で会うことを約束して幕を閉じた。

小比類巻かほる

久々にKOHHYが動き始めるぞ！ まず9／25にはシングル「DREAMER」。これは秋からのTDKテープのCMに使われる曲。ちなみにB面には自作曲が入る予定。そして11月からツアーが始まるし、アルバムも出る！ 期待してちょ。

黒住憲五

黒住憲五がレコード会社をコロムビアに移籍し、久びさのアルバム『ピロー・トーク』を発売した。ウェストコーストっぽいアルバムで、南の島をイメージしたりして、夏にはピッタリの一枚だ。

デルジベット

8月25日にシングル「Funny Panic」を発売するデルジベット。彼らのライヴは超オススメだから、一度観に行ってほしい。㊙に気にいると思うから。ライヴ日程は、8月24日(木)前橋アクトドーム(G・Dフリッカーズ他)、9月7日(木)インクスティック芝浦(ワンマン)10月2日(月)インクスティック芝浦(with TOYS)、8日(日)高知イベント(withちわきまゆみ)、29日(日)奈良学園祭。詳しくはZ-BET'S☎03(402)8121まで。

4TH TRIAD ARTIST AUDITION

オーディションのお知らせです。コロムビアの中のレーベル・トライアドでは、90年代に向けてセンセーションを巻き起こしたい人を求めています。プロになりたくてウズウズしている人は応募して実力をためしてみたら？

応募要項は①デモテープ（オリジナル2曲以上／ビデオ可）②写真2枚③プロフィール（連絡先／ライヴ予定があれば明記して下さい）④歌詞締め切りは9月30日(消印有効)詳しくは〒107－11港区赤坂4－14－14 日本コロムビア㈱「TRIADアーティストオーディション」係☎03(584)8226まで。

ANGIE

6月15日から7月20日まで、LAレコーディングをしていたアンジー。プロデューサーに小原礼を迎え、超ポップな、それでいて詞が斬新なアルバムを作ってきた。それが10月4日に発売される『黄金時代』だ。その前の9月21日にシングル「蝿の王様」を発売する。同行したライターにいわせると〝超売れ線の曲ばっかりで、これでアンジーも一躍有名人の仲間入りって感じがする〟と豪語していた。そういわれちまうと早く聴きたくてしょうがなくなる。

HILLBILLY BOPS

現在、ヒルビリーは、10月25日発売に向けて2ndアルバムのレコーディング中である。ギターの平野に言わせると〝今回のアルバムは、とてもカラフルで、散漫的な印象を受けるかもしれないんですが、楽しいLPを作りたかったんです。でも、その分、誰でも一曲は好きになれる曲があると思います〟と自信たっぷりだ。これは期待できそう。

ライヴの方は日替りメニューで演る。8月28日(月)29日(火)30日(水)の3日間、インクスティック芝浦ファクトリーで行なわれる。メニューは秘密だけど、アッと驚かせるようなことがあるらしい。それと9月3日にはクラブチッタ川崎でライヴを行なう。詳しくはキティ・サークル☎03(770)9355まで。

そして、まだまだ続くよニュースが！そろそろ学園祭の準備に取りかかろうと思ってる実行委員の皆様に朗報!!ヒルビリーは、この秋、学祭荒らしを決行する予定なので、ぜひうちの学校に！と思う実行委員の皆様は、〒153目黒区大橋1-7-4 久保ビル4F キティ・サークル『ヒルビリー学祭』係まで、連絡して下さい。

で、もってだ、ファンクラブ〝ぼら出た！DELTA▽CLUB・2(仮称)〟では、只今会員を大募集中だ。詳しくはヒルビリーバップス入会案内☎03(770)9355まで。

秋にかけて、ますます意欲的に活動するヒルビリーは、おもしろくなりそうだ。

まだ続けるぜ!!今度は、これから

サラマンダー

横須賀からとんでもないバンドが出てきてしまったぞえ。その名もサラマンダー。メタルキッズにはのどから手が出る待望のバンドだ！

彼らはYo－ki(Vo)、紅緒(G)、TAKAMI(B)、J(ds)、菊(G)、の5人グループ。'86年7月Yo－ki、紅緒、TAKAMIの結成したグループを母体にしている。東京を中心にLive活動を行い、88年4月、紅緒が「元気が出るTV」に出演、同年4月にエクスプロージョンレーベルよりオムニバス・カセットに参加。89年1月からデビューアルバムのレコーディング開始。6月21日FEIレコードよりアルバムがリリースされている。地元横須賀では米軍キャンプを中心に回っていただけあって実力はバツグン。まさにエキゾチック・メタルと言うにふさわしい音だ。

1stアルバム『誕生』は好評発売中。問い合わせは音楽館FEIレコード☎03(359)3621まで。

LINDBERG

キュートでパワフルなヴォーカルのいるリンド・バーグのライヴ・スケジュールを教えちゃうよ。8月12日(土)大宮フリークス、22日(火)前橋ラタン、9月9日(土)目黒ライブ・ステーション、18日(月)横浜7thアベニュー、11月6日(月)インクスティック芝浦ファクトリーでやります。詳しくはフリップサイド☎03(770)8899まで。

で、もって、10月25日には2ndアルバムをリリースする予定なので、お楽しみに!!

子供ばんど

子供ばんどから、ドラムの山戸ゆうが脱退しちゃったヨォ。ゆうちゃんがいない子供ばんどなんて想像つかないヨォ。サビシーナァー。ゆうちゃんはこの業界から足を洗ってシヤバに出るそうだ。ギターのヒロシは別のバンドをかけ持ちでやってるけど、子供ばんどからお声がかかれば、いつだって飛んでくるとか。とりあえずJ-CKは、近々ソロ・アルバムの制作にはいる予定。ゆうちゃん、さよなら。元気でネッ!!

THE REDS

ようやく地に足のついた活動をスタート

度重なるメンバー・チェンジで、イマイチ活動もスムーズにいかないようなところがあったザ・レッズだが、ドラムに新メンバーの林和宏を迎え、ようやく地に足のついた活動をスタートさせた。

「ビートルズとか、聴いてきたものはけっこうメンバーと合ってたし、音楽的にも、レッズのやってることはやりたいことだった」（林）

「合宿したりして生活を共にする時間ものすごく長かったから、すぐうちとけられる的な状況があって、すごくいい感じですよ。レコーディングの準備も、すぐ始まったし」（嘉多山）

「やっと、スタート・ラインに立てた感じ。これからやりたいようにバリバリやっていきたい」（藤原）

これまで、どうしてもヴォーカルの大平太一のカラーが強かったレッズも、バンドとしての音を追及できる時期が来たようで、メンバーはみんなはりきってる。

「曲もみんなで作ってて、ドラムからできる曲もあれば、ベースからできる曲もある。だから、昔は出せなかった要素が、出せるようになってきたということと、どの曲をとっても、このメンバーだからっていう統一性があるってことと、そこでバンドらしさってのを表現できる形が、見えつつあるかなってとこ。まずはライヴで、あ、こうなりたかったんだっていうのが、一番わかってもらえると思う」（大平）

彼らは伊豆で合宿を行い、曲作りや、アレンジ固めと共に、メンバーのチーム・ワーク作りも、バッチリやってきた。そして、8月にはレコーディングを行い、10月下旬にはリリースされる予定。それまで待てない人のためには、8月24日・芝浦インクスティック、9月4日・大阪バナナホール、9月10日・京都ビブレホールでライヴもある。

「いやあ、ダテにメンバー・チェンジをくり返してるわけじゃないっていうね。やっとここに来たか、みたいな喜びですよ。もう、メンバーチェンジはないでしょう」（大平）

（角野　恵津子）

photo／Norio Kajiki

杏里

ディスコクイーンの華やかさ

7／7、8　横浜アリーナ

〝ANRI'89 CIRCUIT OF RAINBOW〟と題して7月7日・8日の2日間、杏里が横浜アリーナでコンサートを行なった。

この会場は出来て間もなくて会場に入るとプーンとペンキの香りがする。スリバチ型になっている客席は、2階からみると配列が奇麗だ。そのオシャレな会場に杏里が立つとピッタリはまってしまう。ディスコを思わせるステージングにコーラス兼ダンサーをしたがえて登場した杏里は、さながらディスコクィーンのような華やかさがある。「最後のサーフホリデー」で、今日のライヴはスタートした。

〝嫁に行ってからすっかり晴れ女になってしまって（笑）ツアー始まって21本目で横浜にもどってきました。

きょうはNEW　ALBUMの曲を中心にお届けします。ノドがつぶれるまで思いっきり歌いたいと思います〟

と、今日のライヴにかける意気込みを話した。夏はやっぱり杏里の曲なくしては語れないという程、定着した彼女のイメージ、しかし、NEW　ALBUMを出すたびに彼女は、どんどん新しいことに挑戦し、幅を広げている。この日のコンサートでまた一段と成長した彼女を魅せてくれた。女性の気持ちを歌わせたら他に近よるスキをあたえない彼女が歌うバラードは天下一品だと思った。

photo／Motoi Ohnishi

小川美由希

発展途上だから先が楽しみ

6／23　日本青年館

徐々に徐々にではあるが、とってもナチュラルなスタンスで、しかも確実に歩を進めている小川美由希。3月にリリースした「ネバー・ギブ・ミー・アップ」のヒットによる勢いを温存して6月23日、日本青年館のステージに臨んだ。

都内でのコンサートに関して1年近いブランクがあったせいか、それとも初めてのホールという気負いからか、当初はフランクでユニ・セクシャルな彼女らしさを思うように出せずにいたが、そこはチャキチャキの都会っ子。環境に順応するのが早い。持ち前のポップ・フィールが会場内の張り詰めた雰囲気を解きほぐしていくのがわかる。それは、客席までも支配してしまえる彼女のアーティスティックな器の大きさと言い換えてもいい。

この日のステージは、先入観抜きにして楽しんでもらおうというのが表向きの趣旨だったように思う。しかし、彼女の内側では様々な思いが交錯していたに違いない。巡ってきたチャンスをなんとかモノにしたい、小川美由希のカラーを更に強くアピールしたい、リラックスした雰囲気で客席とコミュニケートしたい、そんな感情が複雑に絡み合って……。

コンサートの何日か前、リハーサル帰りの彼女にたまたま路上で出くわしたことがあった。「いやぁ、もう大変！」と飾らない笑顔を返してくれたが、その裏側にある〝なんとかきっかけを作りたい〟という強い意志めいたものも感じた。6月23日という日が、それだけ大きな節目になりそうな予感があったのだ。

結果的に、フレンドリーなポップ・ボーカリストの存在を植えつけることができたと思う。だが、終了後楽屋での「今日はひとつのステップにすぎない。要はこれから」という言葉が彼女の口から発せられた。どうやらまた新たな目標を見つけ出したようである。そうだ。まだまだ発展途上だからこそ先が楽しみなのだし、魅力的なのだ。もっと輝きを増した彼女に是非会いたい。（轡田　昇）

The Shamröck

好きなもんで…。

7／11、パワーステーション

シャムロックのライヴを見るのは久し振りだった。前見たのは1stアルバムのリリース後だったはずだから、ずい分間があいてしまった。

あい変わらずのハーモニーと構成力、そして演奏力。楽曲の良さも問題なし。こういうバンドこそ、もっともっと上を狙ってもらわなくては。

それにしてもMCがよかったなあ。客席とのやりとりとかも何かあったかいものがあったし、FMとかやっててしゃべるってことに自信がついてきたのかも知れない。MCの回数も多くなったし。

ステージ上での動きもカッコよくなった。別に前がださいってわけじゃないんだけど、キメてくれるよね。

バラードもしっとりしてよかった。バラードになったとたん会場の雰囲気を変えられるっていうのはスゴイ。詞の世界も胸に〝グッ〟とくるものがある。

ラストはドドーっとイキのいい曲がズラッと並び、最後は〝LOSSEN LOVE SICK〟でキメ。いいなあ。

あれ、もっと〝シンラツ〟な批評をしようと思ってたのに…。いやはや、好きなもんで。ごめんなさい。聞いてない人は必ずきくべきなのである。今後のシャムロックに期待するってことで、ちゃんちゃん。

（金子貴昭）

STRIKES

〝ビート〟バンドの王道

6／26　芝浦ファクトリー

そろいのピンクのスーツでキメたストライクス。まさに60年代のビートを聞かせてくれる。

6月26日のインクスティック芝浦ファクトリーには思い思いのファッションでキメたファンが一杯に入っている。「STRIKERS' WALK」のSEがかかりストライクスが登場。たて続けに3曲をかましてくれる。ビートが会場全体をゆらす。踊るファンは波の様に外側へ続いていく。

曲の大部分は彼らの1stアルバム、「VOX&BEAT」から。そしてその他の曲も彼らが昔からライヴで演奏していた曲ばかり。当然知っているわけである。

彼らのステージはまさに〝カッコイイ〟。メリハリがきいてるというか、何か表現できないカチッとした形ができている。確かに一曲が短くまとまっているということもあるんだろうけど、ダラダラした感じがほとんどなく、スキッとしたソリッドなステージング。

終ってみれば24曲。すごい。たたみかけてくれちゃって、いとうれし。

〝ネオGS〟みたいなムーブメントに入れられちゃってたから、ストライクスってソンな役回りをさせられていたかも知れない。しかし、これからは本当の意味の〝ビート〟バンドの王道を歩んで欲しいな、などと思ってしまう。

（金子貴昭）

photo／Nov Matsuzaki

予告だっ!! ARENA37°C

●巻頭大特集

LÄ-PPISCH

▶今年5月号に続いてまたまたレピッシュの大特集だっ！①新作徹底解剖②マグミのTV-DJ追跡③イベント完全収録の3次元バトルロイヤル大取材！どこもマネのできないパワーで送るゾ!!!!

●第2特集

J(S)W

▶8/16&17日本武道館をぶちかますジュンスカ、諸君アリーナの特集を期待してくれたまえヨ！

●第3特集

UNICORN

▶西川&EBIコンビによるウッヒヒAV企画と、ギターKIDS必見！手島いさむの硬派連載大スタート!!これはスゴイ2本立て!!

●第4特集

De-LAX

▶好評対談シリーズはなんと高橋マコトVS吉田建だっ！もういっちょ、イベントをバッチシ取材するかんナァ〜〜〜〜!!

●第5特集

ANGIE

▶新作を頭のテッペンから足の先までジックリ解剖！プロモビデオの㊙潜入レポートもお楽しみ!!

●第6特集

KUSU KUSU

▶エッ!?ついにやったゼ！アリーナ大プッシュのKUSU KUSUをアッと驚く企画でお見せしましょ。内緒ナイショ……。

●まだまだいくゼ！

▶フェンス・オブ・ディフェンス待望のアルバムが出るゾ！▶JUSTY NASTYのここが好きっ！▶THE POGOが最高！▶UP-BEATの対談もあるってか！

メトロファルス

ロンドンレコーディングでメジャーデビュー。さすがメトロはやること違う

「レコーディング順調だよ。スネアやベースの音が恐ろしくクリアーなんだ。きっと最高のアルバムが仕上がるんじゃないかな」

ラッキーな事に、メトロファルスが滞在中、ロンドンに訪れる機会があった私を、ヒースロー空港まで出迎えに来てくれたマネージャーの山添氏は開口一番こう語った。

81年にバンド結成後、一度メジャーデビューしたものの、インディーズで地道に活動を続けていたメトロファルス。メンバーは、伊藤ヨタロウ(Vo)、光永巌(G)、ライオン・メリー(Key)、バカボン鈴木(B)、三原重夫(Dr)。バカボンはパール兄弟、ライオン・メリーはヒルビリー・バップス、三原はスターリンでも活躍中なので、御存知の方も多いだろう。メンバーの課外活動(!?)が多い為か、これまで派手な動きが見られなかったメトロが、奮起して決行したのが、ロンドン・レコーディングだ。

ロンドン郊外のウッド・グリーンという、閑静な住宅街の中に、メトロの新しい子供（アルバム）が生み出されたリビング・ストーン・スタジオはあった。スタジオを覗くと、リズム録りを終え、ダビング（ギターやキーボードの音をかぶせる）段階に入ったところ。リラックスした雰囲気の中にもテンションの高さがビシバシ伝わってくる。エンジニアのジョージ・シリングとのコミュニケーションも、たどたどしい英語やアクションなどで上手くとっていたようだ。ただ、メリーさんだけは自閉症にかかっていたようだが……。深夜、レコーディングを終えると、5人が共同生活を送っているフラットへ、黒人の白タクで帰り、朝方までミーティングを行い、翌日お昼頃、地下鉄でスタジオへ向かう…という毎日だったらしい。

こうして完成したのが、9月1日にポリドールからリリースされる、『GOOD MONING MR. TALISMAN』だ。

——元々ロンドンでレコーディングをしようと思ったのは？

ヨタロウ「長い間やってるわりにはなかなか集中してできる機会がなくて、頑張らなきゃいけない状況に追い込んだ、追い込まれたって感じかな。自分達で実験体になって、なおかつ実験者になっているという……ロンドンを選んだのは、別に深い理由はない。バンドのイメージに合っているかな、ぐらいで」

——ロンドンが及ぼした影響ってありますか？

光永「ギターを弾いてて、今までで一番気持ちのいい音を出せたって事。それは、空気や電圧の違いからくるものなのかもしれないけど、一度体験すれば頭の中に残るじゃん。具体的に気持ちいい音が分かるようになったから以前よりはやり易くなった」

バカボン「音楽的なアイデアが急に変わる事はなかったけど、いい音に出会えた事は、自分にとってプラスになると思いますよ」

ヨタロウ「レコーディングのノウハウとか、やってる事は日本と同じだけど、5人で1ヵ月暮らした事とか精神的な部分が、微妙にサウンドにも影響してると思うよ」

三原「言葉の問題とか、いろいろ大変な事もあったけど、それをクリアしていくところにはテンションがあるじゃない。そのテンションの高さ、密度はこのアルバム高いよね」

——バラエティに富んだ選曲で、トータル・アルバム的印象を受けたのですが。

ヨタロウ「うん、俺欲張りだから(笑)これ可愛いとこだよねメトロの、これ気真面目でいいよねメトロの…って…ずっとやってきた俺の感覚が凄い出てると思うのね。でも、基本的には好奇心だからさ、冒険心がないとつまんないから…」

——メジャー・デビューをするわけですが、今後の展望を!!

ヨタロウ「今の時点ではこれまでと変わらず、マイ・ペースでやっていくつもりだけど、来年あたりからはじわじわと全国行脚（ツアー）もしたいと思ってるよ」

（古川裕子）

平松愛理

ラジオのリクエストが生んだ曲「太陽のストライキ」

2月にアルバム『TREASURE』でデビューした平松愛理のセカンド・シングル「太陽のストライキ」が、7月21日にリリースされた。これは、デビュー・アルバムに入っている曲で、夜っていうのは、すてきな明日へのエネルギーを蓄えるために、太陽がストライキをしてるんだという発想がユニークな、すてきな曲だ。

「私、不眠症の時間があって、夜ベランダから新宿のビルの明かりを見てたんですよ。そしたら、あ、眠れないのは私だけじゃないんだって思ったの。そのうち太陽が上ってきて、そうか！ 夜っていうのは、太陽がストライキしてるんだって思ったの。それとこの曲に関して最初に浮かんだのは、どんな人にも朝はやって来るってことだったの。で、その朝を、その日の幸せな日にするために、太陽はストライキをしてエネルギーを蓄えてるんだって。だから、これはある意味私のメッセージ・ソングなの」

誰にでも幸せな明日が来るんだから元気になってほしいという、彼女のメッセージが素直に伝わるからか、ラジオのリクエストも、この曲が一番多くて、今回のシングル・カットになったんだそうだ。

「前向きに上昇指向で、いつも素直にときめく部分だけは持っているとすてきだなって思ってるんで、それを感じてもらえればいいなと思います」

デビューしてまだ5ヵ月とちょっとなのに、もうずっと前にデビューしたような気がするという彼女。すでにセカンド・アルバムのレコーディングも終わって、秋にはリリースされる予定だ。

華奢な体に、細いかわいい声。だけど、芯はとっても強そう。実はこの日も急に胃が痛くなったとかで、顔面蒼白で、おなかを押さえて、体をエビのように曲げて現われたのだけど、少し休むと、もう大丈夫ですといって、インタビューに応じてくれた頑張りやさんだった。

とても、聞きやすく軽いポップスだけど、なかなか中身は深そうだ。

（角野恵津子）

PAINT BLACKS

“EAST TOUR”を軸に活動再開

鬼頭径五率いるPAINT BLACKSは関東近郊のライブハウスを重点的に回る“EAST TOUR”を軸に本格的な活動を開始した。本格的、といえるのは、そのライブの本数だけではない。中身の方も文字どおりバンドとしての形態を明確にしつつある、と言っていい。

「銀のカマロ」、「でっちあげ」といった、HARLEM時代の鬼頭とはやや趣を異にする溌剌とした新しいナンバーや、（メッセージとして）ヘヴィな色を持つ「銃を取れ」、「歴史から飛び出せ」といった頭脳警察のカバー……。演奏内容の変化もさることながら、メンバー4人の、いわゆるバンドっぽい連携プレイの面白さのようなものが生れてきた。

おそらくはドラマーの畑佐もベーシストの萩原もギターの高橋も、そして鬼頭自身も、己れの持っていた“過去の音のイメージ”を断ち切れるようになったのではないか？

今、PAINT BLACKSの音は、それゆえに非常にみずみずしい。鬼頭の、悪く言えば年齢と不相応に老成し過ぎたブルース感覚は、この新しいバンドで“80年代のロックンロールの持つブルース”の色あいを帯びてきた。タメよりもタイトで前のめりな攻め方をするビート、サイケデリックな雰囲気さえ漂わせるギターの絡み……。そういった音の上で鬼頭の声＝言葉が伝えるものを聴く感覚は新鮮だ。

海の向こうではあのデビッド・ボウイさえもバンドを作って“やっぱりロックンロールだぜ”と叫んでいる。いみじくも、鬼頭自身、デビュー・アルバムで「時代じゃないと人は言うけど、勘違いするなよ、俺のやりたいのはIt's Only Rock'n Roll」と歌っていた。この言葉をPAINT BLACKSは音で表現しはじめた。これからはバンドとしてどんなロックンロールが見えてくるか。ライブハウスへ出向くたびに鮮度を感じさせてくれるバンドであるはずだから、彼らは。

（脇坂一彦）

photo／Saori Tuji

VELVET PAW

イマジネーション広がるメロディ

'87年「CBSソニー・レディス・ロック・コンテスト」出身の女の子5人組バンド・ベルベット・パウが7月21日アルバム『VEVET PAW』でデビューした。'81年、当時中学1年生だった桐生千弘（Dr＆リーダー＆作詞・作曲担当）が結成したバンドを母体に、ずっと女の子ばかりで編成されてきたバンドだよ。

桐生「女子校で、しかも音楽の盛んな学校だったから、先輩も後輩も先生もバンドに対して寛大だったというか…。だから女の子じゃなきゃダメってこだわってたんじゃなくて、まわりは女の子ばかり。自然に女の子のバンドになってたんです」

須賀直美（Vo）「メンバー・チェンジもあったけど、結局バンドや音楽が大好きな5人が集まって、ワイワイ演り続けてるんです。みんなそれぞれ個性は違うけど、なんか波長が合うんですよ」

平野安芸子（B）「個性だけじゃなくて、それまで聴いてきた音楽のジャンルもバラバラ。ハード・ロックあり、プログレあり、ポップスあり。でも5人がひとつのバンドにそれぞれの要素を持ち込んで、新しい形としてベルベット・パウのサウンドになってるんだと思います」

高沢祥子（G）「ふだんはのんびり屋なんだけど、ギターを弾いているとシャキッとするんです（笑）。私だけじゃなくて他のメンバーも、普通の女の子がいったん楽器を手にしたり、ステージに立ったりするとガラリと変っちゃうその変化がおもしろいんですよ」

増田友紀江（Key）「男の子と張り合うんじゃなくて、私たちには私たちの魅力があると思うんです。それを少しずつでいいから着実にみんな知ってもらいたい。ライヴをいっぱいやりたいです」

イマジネーションが広がるメロディー。のびやかな直美のヴォーカル。感性に深く響くサウンドと言葉を持ったベルベット・パウ（猫のつめっていうイミ）。彼女たちの魅力って、きっと普通の女の子が大好きな音楽を背伸びすることなく、自由にやっていることだと思うよ。ホラ、男の子も負けちゃいられないぞ!!

（松浦靖恵）

ブルー・エンジェル

前向きでとんがった世界 2ndアルバム リリース

ブルー・エンジェル――青い天使なんていう、ちょっと雰囲気のある名前を持つバンドがある。日本より香港やタイで先に人気に火がついちゃったという珍しいバンドだ。7月にセカンド・アルバム『media-holic』をリリースして、いよいよ国内での活動に本腰を入れるというので、ちょっと御紹介。

メンバーは、ウリ坊（浦江アキコVo）、ミッキー（並木清次・G）、コンジー（金光浩道・G）、ケン坊（佐々木研・Dr）の4人。結成は、1986年。最初はロカビリーをやっていたのが、デモ・テープ制作のために行ったロンドンで、メロンの屋敷豪太と出会い、彼をプロデューサーに迎えることによって、そのサウンド・ワールドは大きく変わった。メンバーの中には、まだロカビリーへのこだわりもあるようだけど、彼らの音には、ほとんどそのエッセンスは感じられない。屋敷豪太と出会って、シークエンサーを使うことにも抵抗がなくなったという。

そして、セカンド・アルバム『media-holic』が誕生した。

「機械もおもしろいと思ったけど、1枚目はどうしてもシークエンサーぽい音になっちゃったんですね。だから、今回はそれをすごい気にして、今回はもうギターで固めちゃおうぜって。だから、もうギターひきまくり大会」（ウリ坊）

そして、“どうしようもないこと”をコンセプトに書いた詞は、思ってることをストレートに表現してて、結構前向きでとんがってる。タイトルの『media-holic』にも、込められたメッセージがある。「今の世の中、情報がすごいでしょ。あふれすぎちゃって、本当は自分達の中にその情報をチョイスする力を持っていながら、それを信用できなくなってるっていうのかな。で、情報でいいっていわれないと、動けなくなってる。それって一種の情報中毒で、こわいなって」（ミッキー）

これからはライヴ活動もスタートするので、一度自分の耳で体で、彼らのスピリットをあびてみてはいかがかな。

（角野恵津子）

ライヴ御招待

8／22（火）渋谷クラブクアトロで行われるアルバム発売記念ライヴに4組8名様を御招待。御希望の方はハガキに住所、氏名、年令、電話番号、およびブルー・エンジェルへのメッセージを明記の上、〒150東京都渋谷区渋谷1−23−23 ピンクドラゴンビルB2 クリーム・ソーダ音楽出版「BLUE ANGEL8／22チケット欲しい」係まで。8／15発送分有効。

四人囃子

また何か自分達らしい物を作りたい。10年振りの新作『DANCE』リリース

'70年代、日本のロック史において輝かしい史跡を残し、'79年に活動を停止した四人囃子が、岡井大二、佐久間正英、坂下秀美という三人のメンバーによって、10年振りにニューアルバム『Dance』を制作し、再び動き始めた。

きっかけは、岡井が他の2人に、また何か自分たちらしい物を作りたい、という話をした事だと言う。

岡井「僕ら3人共、ここ数年裏方的な仕事をしてて、今の音楽状況を見てると、ロックという物がビジネスとしてうまくいってる。でも、そのわりにソフトの種類が少ない。自分でやりたいような音楽が見当たらなくなってきたので、もう一度自分たちの個性を発揮できるような音楽を作りたい、という欲求が出てきたんですね。で、話したら他の2人も同じような事を感じてて、最初は四人囃子うんぬんは考えてなくて、何かひとつ作品をつくりたいなって事になって、やってみたら、これは正に四人囃子の音だなって物が出来たんで、じゃ四人囃子で行きましょう、と」

アルバム制作においては、具体的なコンセプト等を煮つめるまでもなく、ごく自然にひとつの方向性に向いていったようだ。

佐久間「僕のデモ・テープが最初に出来たんで、そこで集まって、こんな感じでいこうか、みたいな話になって、それから皆もデモ・テープを作り出して……不思議なもんで、昔一緒に長い事やってたから、具体的な音楽の話よりも、すぐに日常的な雑談になるんだけど、雑談すればするほど、逆に（やりたい事が）見えてくるという感じはありましたね」

岡井「3人のデモ・テープでも、〝一人だけ大ハズレ〟っていうのは全く無くて。音創りに関しては何の問題も無くスムースに出来ました。むしろ、四人囃子を名乗るって事になってから、少し意識して、ヴォーカルはどうしようとか、そういう事では本当に話し合いましたけど。だから、本当にそれぞれがミュージシャンとして自然にやりたくなったという。これが例えば、誰かから、お金いくらかあげるから四人囃子でやってみろって言われても、やらなかっただろうしね」

佐久間「まぁ、それは額によりますけどね（一同爆笑）」

プロデュースは、現在、日本のロックの名プロデューサーとして評価の高い、佐久間が担当した。

佐久間「僕は昔から四人囃子のある種のファンだったから、やっぱり今あるバンドとは違う完成度を持ったバンドだったし、そういう物をまたプロデュース出来るというのが、今回やる気になったきっかけです」

具体的な音創りに関しては、昔とは違った方法論が使われた。

佐久間「先にデモ・テープを作って、そこにドラムからダビングして、順にデモの音を生楽器で差し替えるという作業でした。一度出来てる物をこわしてまた作り直す、みたいな」

かつての四人囃子は、日本人離れしたスケール豊かな、構成度の高いサウンドで、プログレッシヴ・ロックと呼ばれた。今回の作品もその流れは継承している。だが、まぎれもなく現在の音だ。それは彼らがジャンルとしての〝プログレ〟を志向した訳でなく、その音創りの意識が今でも充分にプログレッシヴであった事の反映だという気がする。

岡井「いってみれば、今この3人でアルバム作る自体が実験じゃなかろうか、と。それぞれの個性が集まってバンドのキャラクターになってる。それ自体が僕らの主張なんです。そういうバンド・サウンドがもっと増えていいはずだと思います。だから僕らみたいなベテランと言われるミュージシャンがこういう物を作ったという事の評価がどう返ってくるかその辺がすごく興味ありますね」

彼らは、9月22、23日MZA有明で2日間だけのコンサートを行なう。それには、森園勝敏、佐藤満というかつてのギタリストも参加する。

現在の音楽状況に対する、ひとつの問いかけという意味もありそうな四人囃子の再始動、受け取める価値は大きそうだ。

（野口　顕）

photo／Nov Matsuzaki

B'Z

確かな自信とほのかなこだわり。青年館の後に彼らが求めるものは？

先月号で、6月5日、日本青年館でのB'Zの初のコンサートをレポートしたが、今月はその感想や手応えなりをB'Zの2人に直接聞いてみることにしよう。あの青年館という空間の中で、彼らが何を感じ、何を考えていたのか、その言葉を拾っていくと、B'Zとしての確かな自信とほのかなこだわりが浮かんでくる…。

——まずは率直な感想を。

松本「すごく楽しかった。それが一番でしたね。やってく最中に、リアルタイムで楽しいみたいな実感がすごくあって」

——プレッシャーは？

松本「それは確かにありました。でもそれは始まる前までのことで、やり始めたらもう関係ないでしょう」

——稲葉さんは全くの初ライブだったわけですけど、どうでした？

稲葉「チケットの売れゆきとかでもうお客さんのノリがすごいっていうのは頭にあったから、とにかく出足でのまれないようにしようとは思ったんですよね」

——ギターとボーカルが2人でフロントマンをやるライブというのは、新しい形だと思うんですけど、ステージ構成はけっこう考えたんですか。

松本「いや、わりと作り込まないで自由にやってみようと。決め事とかもほとんどしないで」

稲葉「それがすごく良かった所もあれば、逆にお客さんがどこを見ていいのかわからなくなるような面もあったりしましたね」

——もっと2人のからみがあったら良かったと思ったんですけど。

松本「それは反省点の一つですね。やっぱりタイミングというか…、自由にやってた分、お互いに（タイミングが）はまったときはすごくはまるんですよ。それが変に考えちゃうと、元から作り込んだものじゃないから、無理が出ちゃうという。その辺は難しいですけど、ツアーとかを長くやっていれば〝ア・ウン〟の呼吸でだんだん自然に出来てくると思うんですよね。だから秋にもツアーをやるから（10月末から全国15ヵ所ぐらいを予定）、その時はもっとね」

——稲葉さん、ライブをやってみて何か新しい発見とかありました？

稲葉「そうですね、一つのみんなの共有する空間というのが、いろいろな形があるということで…。たとえば2人がコミュニケーションをとるのに、お客さんが媒介になってはね返ってきたり、そのお客さんの声、存在が媒介としてあるだけでどんどん相乗効果として高まってきたり。みんなが一緒に盛り上がって、キャッチボールをしてるみたいになったり、すごく面白かったですね」

——初めからそういうのをつかむというのはすごいですね。

松本「だからやっぱり進歩が早いよね。結局最初のステージから自分がメインになってるわけでしょ。その分反応もダイレクトにうけるから」

稲葉「覚えなきゃいけないこともいっぱいありますけど（笑）」

松本「ぼくが何年もツアーやってきてわかったことを説明するでしょ。そうすると稲葉の方は、それをライブで直接感じるわけでね。だからぼくが何年もかけて覚えたことを、2、3年でわかっちゃうんじゃないかな」

稲葉「やっぱり耳で聞いてたことを実際体で感じると、それがすごく明確になりますね」

——松本さんはそういう何年もTMのサポートとかでやってきたわけですけど、B'Zとしての違いとか？

松本「そう、だから結局やらなきゃいけないことが違うわけじゃない？ TMのサポートだったら、100％TMをサポートするのがやるべきことで、B'Zの場合は100％自分達を見にきてくれた人たちのためにやるわけだから。たとえば、小室くんと2人でやる時でも、常に彼の動きを見てて、常に形がきれいになるように動く。でもB'Zでは主導権はこちらにあるから、動きは自由なわけ。稲葉がぼくに合わせてもいいし、ぼくが稲葉に合わせてもいい…。B'Zというのはギターとボーカルのバンドだから、きてくれる人もやっぱり稲葉の歌とぼくのギターを聴きにきてくれるわけだからね」

（関根章喜）

photo／Nov Matsuzaki

日詰昭一郎

季節の移り変わりを感じるレコーディング。2ndアルバム、8／21リリース

8月21日にソロ第2弾アルバムである『TAKE A CHANCE』をリリースする日詰昭一郎。前作で聴かせてくれた大人の恋愛物語は私たちにちょっぴり背伸びの気分を味わわせてくれたけど、今回ではまた新しい彼の世界を聴かせてくれてます。

「前回はTMの小室さんに手伝ってもらったということもあってロンドンと東京でのレコーディング作業だったんだけど、今回は純国産（笑）。都内のスタジオでせっせとコンピューターを打ち込んだりしましたね。たちあがりは今年の2月からスタジオに籠ってたんだけど、ずっとかかりっきりではなかったから、そんなに長く時間をかけてたワケじゃないんだけど、なんか、とてもゆっくりアルバムのことに集中できたみたい。でもねぇ、さすがに季節は移り変わったなと思ったのは、最初の頃レコーディングが朝方までかかっても、夜がなかなか明けないからまだ空も暗かったのに、レコーディングが終わりになるにつれて夏になってくるから朝になるのが早いんだよね。2つも季節を越えちゃったレコーディングになっちゃったの、結局（笑）」

——今回のアルバムのテーマは？

「1stアルバムには1stアルバムの世界があるから、2ndはそれにとらわれずにやろうっていうのはあったけど、テーマとかコンセプトっていう大げさなものはないです。どっちかっていうと、自分の好きな音とか気に入ってるサウンドとかルーツとか…、僕の中にある音楽をいろいろ盛り込んでみようかな、と。でもこれもやっていくうちに自然とそうなっていったんですけど」

——日詰さんのルーツ？

「プログレッシブなのもビートルズも、とにかく今まで聴いてきた全ての音楽がルーツでしょうね。それがいちど僕の身体を通過して、僕のメロディや詞になってるんだと思う」

——今回は11曲中、作詞が8曲、作曲が10曲ですけど、以前と比べるとどのような制作上の変化がありました？

「シーケンサーに打ち込んだそのままの機械的なサウンドの上に人間的な詞がのってたのが、前回のアルバムなんだけど、今回は機械が音を出していても〝生〟で演っている感じを意識したんですよ。もし人間がドラムをたたいてたら、感情的なものでたたき方も音の出方も強弱があったり波があったりするでしょ。ノリを細く出したくて、ひとつの音でも強さと音の延ばし方もコンピューターでちゃんと計算して出したんです」

——生の楽器ではなく、シーケンサーにこだわった理由ってあります？

「ライヴをやった時に打ち込みも使ったんだけど、やっぱりどこか淡々とことが運んでるなって気がしてたんです。人間だとその時の気分や体調で同じ人がやっててもずいぶん音が変わるでしょ。データをよみ込んでカチッと計算通りに正確にライヴが進んでるライヴもこれもまたいいんだけど、どこか〝生身〟じゃないって。だけど逆にね、すべて人間ではないけれど、機械の正確さにポイントをおいた上で、機械を人間に近づけることができるんじゃないだろうか、と思って。シングルB面の「ROOM No.909」なんかそのいい例なんだけど、シングルでは打ち込みヴァージョンじゃないんですよ。機械だから限りない正確さっていう三連符って割り切れないはずなのに、のが出てノリのあるビートが出せないわけ。だけど人間だとやっぱりその人の味が出るっていうか…。その違いはきっとおもしろいと思いますよ。機械を人間がコントロールして正確に近い三連符にノリを加えてるんだから」

——詞の方の変化は？

「もうこれは超自然ですね。僕がそのまんま出ている」

——アルバム・タイトルもですか？

「意欲的でしょ（笑）。僕そのものっていうか、何事も前向きなんですね。夢も現実も結局は自分から手をさしのべなければ自分のものにはならないんですよね」

（松浦靖恵）

宮原　学

OVER DRIVE'89を終えて——6月25日中野サンプラザホール

どんなステージなのかということよりも、やはり今注目を浴びているビート・バンド・シーンとは一線を画している宮原のライヴへどんなファンがやって来て、どんなリアクションを見せてくれるのかということの方が、私には見当がつかなくて、ステージと同じくらいにそれを実際に見ることも楽しみだった。中野サンプラザでのライヴでは、客席は私の期待を裏切らず独特のノリで楽しんでいた。宮原の音楽からして流行にとらわれず自分の出したい音にこだわったものなら、それを気に入っているファンもリラックスしつつ各自で自分のこだわりを楽しんでいるような。体を左右に揺らした女の子もいれば、両手を高く振り上げた男の子も多い。会場全体が軽くスウィングしているかんじが、せこせこしない大きなノリを出していた。

宮原のMCもとても気ままなんかんじで、すんなり耳に入ってくる。

「俺、何年か前にここでエルビス・コステロとかライ・クーダーのライヴを観たんだけど…俺、こんな所に立っててホントにいいの？（笑）」って思ったりして」なんて、かなり素直。照明も彼自身の意志でほとんどが無色だ。これひとつ取ってみてもギミックなしで勝負しようという彼の意気込みとセンスの良さがうかがわれるが、無色の照明ってそのステージ自体の魅力が充分にないと、とても味気のないものになってしまうから誰でも実現できるとは限らない。その夜のステージは、色に飾られなくても客席をクギ付けにしてくれるほどパワフルだった。

ライヴ後、宮原学に直接話を聞かせてもらった。この日を含むツアーに関してこんなことを言っていた。

「今回は全部で9ヵ所回ったんだ。今までは回を重ねるごとに段々ステージの波ができてくる、その波を強く出せるようなツアーだったんだけど、今回は日ごとにその波が違うんですよ。メニューは9ヵ所とも同じなんだけど、バラードが多かったとか、バンドのグルーヴがかみ合わないとヤバイ、グルーヴ命、それでなんぼっていう曲がかなりあって最後まで余裕という言葉が出なかった。毎回ステージ前は緊張したし、ライヴ後も今までは〝サイコー！お疲れ様！〟ってかんじだったのがと、今回はもうホントに精気を使い果たしちゃったってかんじ（笑）。でも、ステージに上がってる間はリラックスしてるんだよね。ステージに立つことがすごく楽しくなったツアーでもあった。そこへ立つとサ、もう言葉なんていらないんだ〝これが！〟〝こんにちわ、宮原です！〟ってだけでいいの。愛がどーしたこーしたなんてMCとかいらない（笑）。〝とにかく聴いて！〟って言えてしまう、そう言わせてくれるお客サンがすごく多かったからね。「Without You」や「Get Ready」とかでメディアに多く登場してた去年よりも動員は減ったけど、今回のツアーは宮原を好きになってくれた中でも根底の人達が来て聴いてくれてた気がした。だから、余計に緊張するしすごく嬉しかったし、ライヴ後はもうグッタリ（笑）。メンバーと打ち上げとか酒を飲みに繰り出すことも全くなかったもん（笑）」

私を含めた客席は、そんなパワーを体で感じていた。だからこそ気持ちはグイグイ彼の方へ引き込まれていたんだ。

今回のツアーで特筆するべきことがもうひとつある。200人の署名運動によって急拠青森のライヴもツアーに組み込まれたこと。

「感激したよ、1曲ごとに涙してしまうくらい（笑）。〝観たいんだ！〟と思ってる人のところなら、どんな所にでも行きたいね。自分の村（笑）とかで、好きなライヴ観られたらスゴイと思うしね。こっちもいい音楽聴かせてますます印象良くしてやろうって意気込むよね」

初めに署名を集めて宮原のライヴを地元で観てやろうと奮起した人もすごい、その人にそこまで思い入れさせてしまった宮原の魅力もスゴイ。パワフルである。

（星野京子）

Photo/NovMatsuzaki

DEAD END
ロンドン・レコーディング・レポート
アルバムは9/21リリース!

5月下旬から7月上旬までの6週間、ロンドンでサード・アルバムをレコーディングしていたDEAD END。マッチ箱のようにかわいい一軒屋に住み、すっかりリラックスしてロンドンライフを満喫していた彼らの様子を、しっかり報告してしまおう。

彼らがレコーディングをしていたのは、ロンドン郊外のキルバーンという所にあるマスターロック・スタジオ。以前、BUCK-TICKもここでレコーディングをしていたという。広いキッチンやリビングがあり、専任のコックさんまでいるのでみんな夕食はいつもスタジオで済ませていた。イギリスの料理っていうと、涙が出そうになる位マズイことが多いんだけど、彼の腕は、なかなかでメンバーの評判も上々だった。でも、たまには日本の味も恋しくなるらしく、オフの日曜日には必ず日本食レストランに通っていたとか。そこでメンバーは「冷し中華とカツ丼」とか、「ラーメンと天丼」などというようにひとり2品ずつ注文し、それをぺろりとたいらげて店のご主人を仰天させていたそうだ。

さて、スタジオ内で人気者だったのは、なんといってもビリヤード。卓球台やテレビゲームもあったんだけど、暇さえあれば、いつも誰かが玉を突いている音が聞こえてくる。メンバーの中で、いちばん上手だったのは、ギターのYOUちゃん。日本ではあまりやったことがなかったそうなのだが、毎日練習しているうちにメキメキと頭角を現してきた。ところが、それを面白く思っていなかったのが、エンジニアのスティーヴだ。自称チャンピオンの彼は、ゲームでYOUちゃんに負けると、途端に機嫌が悪くなってしまう。その後の仕事にも影響が出そうな程(?)の落胆ぶりに、実はYOUちゃんも困っていたらしい。「ここで勝ってしもーたら、スタジオに戻ってから雰囲気が悪くなる。勝ったらあかん、と思ってるんだけど、勝負になるとつい本気になってしまって……」と彼はボヤいていた。

レコーディングの方は、とても順調で、なんと予定していたスケジュールよりも早めに進行していたとか。そこで、あいた時間を何に使ったかというと、当然、ショッピング! 靴を12足も買ったのが、ドラムスのMINATO。他のメンバーに「靴屋でも始める気じゃないの?」とからかわれていたが、「これで、あと2、3年は靴を買わなくても済みそうだなあ」と、本人は満足そうだった。ベースのJOEは、ひたすらオモチャ捜し。彼は結構有名なオモチャ・コレクターで、やはりコレクターの岡野ハジメ氏(プロデューサー)とアンティーク・マーケットを走り回っていたらしい。「どっちが先にイイ物を見つけるかが競争で、だんだんふたり共早足になってしまう。1日歩き回ると、もう足が痛くて痛くて……」と悲鳴をあげていた。YOUちゃんは、なんとマーシャルのヘッドを3台も買いこんでしまった。どうやって日本へ持ち帰ろうかと頭を抱えていたが、飛行機がヴァージン・エアだったので、ミュージシャン特別優遇で、どうにか乗せてもらえたらしい。たくさんショッピングできて大満足の3人に比べて、ヴォーカルのMORRIEは、ちょっと渋い顔。「ヴォーカル録りが始まるまでは歌詞を考えたりするのが忙しかったし、いざ始まったら、発音問題でコッテリしぼられた。ショッピングに関しては、出遅れたとしか、いいようがありませんね……」と、半ばあきらめ気味だった。

また、スタジオには、ロンドン滞在中の鈴木賢司、パリに行く前にちょっと遊びに来たというXのヨシキが顔をだして、本当に和気アイアイとした雰囲気だった。

そこで、肝心のレコーディングの内容についてなのだけれど、これは来月号で詳しく報告する予定。それまでは、大変貌をとげたと巷で噂のシングル「SO SWEET SO LONELY」を聞きながら、楽しみに待っててね。

(大島　暁美)

CATS IN BOOTS
EMI-USAと契約。9月6日にアルバムリリース、11月から来日ライヴも!!

大橋"JAM"隆志率いる、CATS IN BOOTSがEMI-USAとの契約を果たし、アルバム『KICKED AND KLAWED』でデビューする。アメリカでは9月6日、日本では10月リリースが予定されている。

ロックン・ロールをベースに、ハード・ロックやブルースのエッセンスをとけこませ、ワイルドでエキサイティングなサウンドで酔わせてくれる。その強力なサウンドで多くのロック・ファンに新鮮な衝撃な与えてくれるだろう。

――まずは、メジャー・デビューということで今の感想は?

「レコードはどうでもいいですから、ライヴをやりたいですね。レコードはもう、上がっちゃったからかもしれないけど、まともなライヴを一年以上やってないからね。早くやりたい」

――(笑)ところで、EMI-USAとの契約まではどんなふうに進んでいったの?

「インディーズで出したのはそれしか手がなかったから。音は仕上がっていたけど、タイミングが合わないとか、外人がいるってことで無視されたり……。だったら、おもしれぇ、自力でやったろうって(笑)。それで、そのレコードをアメリカの知り合いに積極的に送ったんですよ。弁護士の所とか」

――弁護士?

「あのね、こちらでは契約の時に絶対弁護士がからむんです。バンド側につけないと。アメリカは契約ですべて決まるから。それでマネージメントをやりたいという人が出てきて、その人が飛び回ってくれたりして。そうしたら、いろんな所が食いついてきたんだよね」

――それは純粋にバンドの音? それとも日米混合バンドという興味?

「アメリカでは混合だからというのは所詮、二次的なものなんだ。あくまでも音楽が第一、会社が選ぶ基準はね。あと、ガンズがウケてるっていうのも、半分はあるかもね。ただ、混合ということでは、他のアメリカの新人よりは有利かもしれないけど」

――雑誌関係とかだと、その部分に興味を示すみたいな所はない?

「うん。当然。こちらのプレスは音楽的なことをケアするのがあまりなくて、そういう二次的なもので取り上げる所が多いからね。興味本意の質問が多くなると思いますね」

――その対策は考えてる(笑)?

「いや、腹立つ質問されたら、FUCK OFFするだけだから(笑)。そのへんは自然体でいたいし。けれど、興味本意なヤツにも、音を聴かせば納得させられると思うからね」

――その音のことなんだけど、アルバムについて教えてくれる?

「聴いてあきらかに、売れ線だなとか、ソフィスティケートされたなとか思われたくなかったし、とにかくアグレッシブな部分しか見てなかったから…スピリット的にはパンクですね。金のためにプレイしないみたいな(笑)。聖飢魔IIの頃の曲を聴いてもらえばわかるけど、僕の曲は早いんですよ(笑)。ちんたらしたのは大きらいだから。一曲だけバラードが入ってるけど、これも僕らはハード・ブルースって呼んでるんだ。いわゆるスローなバラードとは違うしね、売れるための歌は死んでもやらねーぞっていう。ただこの『EVERY SUNRISE』って曲はどうにもならなくて日本に帰りたくてしょうがない時に作ったもので、その気持ちをジョエル(VO)に伝えて詞を彼が書いて出来た曲なんだ。すごく気にいっているよ」

――アルバムのテーマは?

「エキサイトメント、エナジー。ロックでしょ。ロックってフラストレーションが溜まって発散させるものだからね。僕にとってのロックはピストルズなんだ。パンクって言われるけど、行くとこまで行った人間のロックだから。ああいうのが好きなんだ。とにかくやるからにはコピを売るようなものはやりたくないし、納得出来るだけのものをやりたいからね」

――9月に来日して、東京と8ヵ所ライヴが決定しているね。

「酒でもかっくらってみんな一緒に盛り上がればおもしろいよね(笑)。でも、やれるだけのことはやりたい」

――じゃ、最後にファンの人たちへのメッセージをお願いします。

「長い間、待たせてしまったけど、納得いくものを作ったからぜひ聴いて欲しいし、日本へ行った時にはぜひライヴに足を運んで下さい」

(藤野洋子)

photo/William Hames

*CATS IN BOOTS来日スケジュール　9/11(月)川崎クラブ・チッタ、9/12(火)名古屋ボトムライン、9/14(木)大阪バナナホール、9/15(金)福岡ビブレホール、9/16(土)岡崎CAMホール、9/18(月)東京・渋谷クラブ・クアトロ、9/19(火)仙台CADホール。問い合わせは東芝EMI☎03-587-9031まで

GO-BANG'S
ゴーバンズの快進撃 7／8、日比谷野外音楽堂

この春ぐらいからの、ゴーバンズの快進撃ったらない。初めての渋谷公会堂で、すごくゴージャスでカラフルなステージをたっぷり楽しませてくれたと思ったら、今度は初めての単独野外、日比谷野音だよ。タイトルも、彼女たちらしく〝ROCK'N ROLL PICNIC〟。昼間は少し雨もふってヤキモキしたけど、ライヴが始まってからはすべてOK！

ゴーバンズって、行ないがいいんだ、きっと。

まずは、3人だけがステージに現われて、美砂のベースからコンサートはスタートした。衣装もかわいくて、カラフル。ゴーバンズは、つっぱらずに女のコっぽいとこギンギンに出してロックンロールするから好きョ。

「こんばんは、ゴーバンズでーす。緊張した（笑）」

多分、めったに弾かないギターのことだよ、ウン。

「今日は楽しみましょうね。おねえさんと約束、OK？」

景気づけの「OK」で、メンバー紹介。グレート・サポーターズが登場する。このメンバー紹介で、早々と自分を紹介し忘れて、香織ちゃんは〝あーら、みなさん、ごめんなさい〟だって。

でも、それでなごんじゃって、そのあとはもう一気にゴー・ゴー！って、野音はノリまくり。

「ゴーバンズ野音は初めてなんだけど、爽快ね。今日の目的はざっくばらん、これですからね」

香織ちゃんは、本当に楽しそうだった。渋公が、あれやこれやアイデアと工夫がいっぱいのステージだったのに比べると、野音は勢いとノリ重視のストレートなステージ。もう、カッコなんか気にしないで、ノリまくれって感じ。

光子のリード・ヴォーカル「ときめきはグラマラス」が聴けて、「素晴しきデラックス」で、トトトと光子と美砂もステージ前に出てきて、3人でショッキング・ピンクのストールをかけて、1本のマイクでコーラスしたり、アンコールの「チキチキバンバン」で、香織ちゃんが自転車に乗ったり、「ざまあカンカン娘」で、香織と美砂がかわいくダンスしたり。でも、それ以外は野外だ気持ちいいゾ、踊っちゃえ！の、熱狂ライヴだったのだ。

（角野恵津子）

Photo／NOV MATSUZAKI

GEN

〈第3回〉
げんちゃん愛情120%
書き下し連載

げんちゃんの気分はとっても上気嫌
JO KIGEN

毎日毎日くそ暑いぜ!!俺もそろそろ床屋さんに行かなくちゃ。おっと失礼いたしました。7月のどんよりとした曇り空の下、国語辞典を手に公園を散歩している好青年、わたくしがげんちゃんです!!皆様、花火をつけしましたか? 俺は線香花火をつけてるぜ!!最近かぜをひいていて喉の調子が良くない。それでこの機会にたばこをやめようと思ったのですが、次の日にはバリバリ喫っていたぜ。俺は本当に意志の強い奴なんだぜ!!

相変わらずすばらしい文章ですね。

8月1日、4曲入りミニLP、CD「あした天気になあれ」が発売されます。そのレコーディングの時の話でもしよう。6月19日、レコーディング初日六本木のスタジオで。

まずはドラムの音決めから。と思いきや、全然いい音が出ない。1時間、2時間〰〰結局ヘッドを前部取り変えて再度チャレンジ。うん、いいじゃん、いいじゃん、それ、それってな感じで、初めはあせっていた中島くんも徐々にエスカレートしていき、最後には鼻血を出していました(笑)。2日目、この日はベース録りとギターのバッキング録り。しかし、but、but、but、「とんでもねエ」。予定を大幅にくずしてくれた中村くん、音にはうるさいんですね(大笑)3日目、まだかまだかと待ちくたびれていたしげきが、やっと音を出す。「勝手じゃん」で弾いたしげきのリードギターがとっても好きです。4日目、5日目はボーカル録り、バイオリン、ピアノ、コーラスなどで、バイオリン奏者の人にはえらく感動してしまった。全く台風のような人でした。ピアノのジョージは、俺達の使ってる練習スタジオの店長で、録音中もワイワイガヤガヤやっていたんだけど、ピアノは黄昏ています。バラ色の人生のイントロのピアノがとても気に入ってる次第です。そしてボーカル録り。なんと言っても唄ですよ。唄。「叫んで、あばれて、血管ぶっちぎれそうになって」ってな感じかな。「勝手じゃん」は仮歌をそのまま使っている。他の3曲も1テイクか2テイクのやつを使っている。まぁ家で聞く時は、にぎりこぶしをしてふんばって聴いて下さい。気持ちは込もっていると思う。最後に2日間、トラックダウンという作業してこのミニアルバムが完成しました。正直に今の俺達の実力とセンスが詰まっていると思う。別に満足してるわけじゃないけど、すごく気に入ってます。普通じゃ嫌だから「好きか嫌いか」ってな感じのアルバムじゃないかな。はい!!あと「あした天気になあれ」というアルバムタイトルなのに、その曲が入ってなくて不思議に思う人達がいると思うのだけど、単に「その言葉がステキだったから」という簡単なものです。くどくど書いたけど、とりあえずこのミルアルバムを聞いて欲しい!!欲しいです。今月はオマケで、「GEN」の名曲「あした天気になあれ」の歌詞を載っけておこう。

「あした天気になぁれ」詞／げん

今日は泣きっ面みたい曇り空がいばってる
今日は泣きっ面みたい曇り空がいばってる
花火が咲いた夜空に好きなあの娘の夢見たい
明日は大事なデートの日お星様輝いて
Oh ture、Love かくれんぼしてる
Oh ture、Love ぐずぐずしないで出て来てよ

※
明日天気になぁれ 明日天気になぁれ
明日天気になぁれ 太陽さん顔だして
日の当たる場所作ってよ
目が覚める程まぶしい光で僕を起こして
ウキウキソワソワしたいウキウキソワソワしたい

Oh ture、Love かくれんぼしてる
Oh ture、Love ぐずぐずしないで出て来てよ
※Repeat

明日天気になぁれ 明日天気になぁれ
明日天気になぁれ 太陽さん顔出して
太陽さん輝いて 太陽さん笑って
日の当たる場所作ってよ〰〰
明日天気になぁれ〰〰

この曲はすごくスケールのでっかい曲だと思う。詞に関しては、色んな意味を含んでいると思うし、曲に関してもすごく変わっているんじゃないでしょうか。曲を聞きたい人はライヴに来て下さい。

6月18日(日)芝浦のインクでライヴをやったんだけど、たまたま俺の誕生日で、プレゼントを持って来てくれた子達、本当にありがとう。ちゃんと活用してます。です。

7月8日(土)新宿のロフトで弾きがたりをやったんだけど、なんか「初心に戻った」って感じがして気持良かった。これからもたまにやっていくつもりです。そんなとこかな?ブ〰〰「そうだ、そうだ」10月20日日清パワーステーションという所で、ワンマンライブをやります。チケット発売が8月5日なので、この本が出る頃には発売されていると思います。そちらの方もヨロシクお願いいたします!!

「最後に一言」新聞屋のあんちゃんは話がうまいぜ!!

ステキな夏でありますように

げんより

DER ZIBET

ゴチック・グラムの提示 デル・ジベットは確実に変化しつつある

ひょっとして逆境に強いとは彼らのようなことをいうのだろうか（単にのん気という噂もあるが）。7月、ちわきまゆみと共演したあたりから、その兆候はみえていたが、やはり彼らは確実に何かをふっきったようだ。

ウソのように派手に華やかになったISSAY。ISSAYに負けず劣らずの存在感でギターを弾きまくるHIKARU。〝責任感のかたまりのようなサウンド〟と評されていた演奏も、徐々に抜けてきて、カバーでTレックスの「20TH センチュリー・ボーイ」をかましてしまう余裕も出てきた。

世の中、ほとんどバンド戦国時代。〝あせるな〟と言っても、ついあせってしまうのが現状だ。にもかかわらず、彼らのこの余裕と自信はいったいなんなのか!? HIKARUとISSAYに聞いてみた。

「もうやる気の固まり（笑）!! ツアーやってなくて欲求不満がたまってたっていうのもあるけど、最近、個人的に元気になったんだ（笑）。

この2年間、ずーっと気持ちが内にこもってたからさ。ふだんも部屋でじーっとしてたんだよね。それがいきなり躁状態になってさ。部屋にいても、歌ったり踊っちゃったり、もう大変（笑）!!〈ISSAY〉」

「だから4枚目のアルバムでロンドンの暗い方に向きすぎたからね。ライブもテンション高すぎて、客を緊張させちゃった（笑）。今、やっとそれを超えて、ちょっと余裕が出てきたんだよね。解放感が欲しくなったのかもね〈HIKARU〉」

というわけで、ISSAYはアンコールで銀ラメのミッキーマウスのTシャツを着たり、若干アブないという噂もあるが、DER ZIBETのエンジンは周囲の状況をものともせず、完ペキにかかったようだ。

そんな彼らのハイな心境を象徴するかのような怖いもの知らずの新曲が「Funny Panic」（8月25日発売予定）。1度聴いたら、忘れられないほどPOPなオープニング。猫でも踊り出してしまいそうな陽気なナンバーだ。

「あのね。『FUNNY PANIC』は自分の状況をパロディにしちゃった詞なんだ。詞ができなくてイライラ、イライラしてさ。外に出れば雨が降ってきて、タクシーひろおうとするとタクシーが来ない（笑）。そういうときって泣きたくなっちゃったりするじゃない!? もう人生おしまいみたいな（笑）。で、なんとかその状況を笑いとばしたくてできた曲なんだ。こういう状況におちいってるのは自分だけじゃないなんて思ったりしてさ〈ISSAY〉」

「曲はギターのリフが最初にできて、あとはメンバーの家でワイワイ言いながらみんなで作った。すごくシンプルなんだけど、よく聴くといろんな音が入っててどこかクセがあるっていうのがDER ZIBETらしいかな（笑）〈HIKARU〉」

突きぬけつつあるDER ZIBETのサウンドを、メンバーとスタッフは〝ゴチック・グラム〟と名づけた。確かに、今までのDER ZIBETは、洋楽の影響を強く受けたバンドということもあり〝こんなバンド〟と表現することが難しかった。ここで彼らはあえて自分たちからジャンルを提示したのだ。

「けっこうDER ZIBETってわかりにくいと思われてたからさ。じゃあ、自分たちでジャンルを作っちゃえばいいんだって（笑）。ゴチック・グラムっていうのはグラムなんだけど、それをもっとシックに消化してるっていう〈HIKARU〉」

「グラムにクラシカルな要素を加えたっていえばいいのかな。多少、重厚な感じがある〈ISSAY〉」

状況を笑いとばしたDER ZIBETの自信は本物だ。

「のん気なのかタフなのかわからないけどオレたちは健在（笑）!! 元気だよ。もうそろそろ、売れたいと思ってるしね」

（山本弘子）

PRESENCE

9／11、渋谷公会堂で一年半振りのライヴ。テンション高いぜ！

PRESENCEが、1年半振りに、渋谷公会堂へ戻ってくる！ デビューして、ちょうど2周年。その間に3枚のアルバムと1枚のミニアルバムを発表してきた彼ら。アマチュア時代から、ライヴバンドとしての評価が高かったPRESENCEだけに、9月11日のコンサートではどんなステージを見せてくれるのだろうか？

――サードアルバム「AWAKING DOG」を4月にリリースしてから、ずっとツアーをしてたの？

恩ちゃん　そう。今回のツアーはすごく充実してたんで、楽しかったです。

ヒバリ　なんか、やるたびにテンションが高くなるっていう感じ。このまま、渋谷公会堂へなだれこみます。

シゲル　でも、テンションが高すぎて、夜も寝ないヤツが若干2名程いたんで、困りました。朝まで飲んで、そのまま次の日突入しちゃうんですよ。

――誰ですか？ そんな不届きなヤツは？

白田　俺と恩ちゃんです。

ヒバリ　始めは俺と恩ちゃんが同室で、白田とシゲルが同室だったんですよ。でも、夜中は全然帰って来ないし、明け方に部屋に戻って来てゴソゴソやってる（笑）。たまんないから、部屋をチェンジして、夜寝る組と夜遊ぶ組に別れました。

――渋谷公合堂のコンサートは、何か新しいアイデアを取りいれる予定？

シゲル　どうかなあ。具体的なことは、まだ全然決まってないからなあ。

――PRESENCEのステージって、今まではセットや照明に凝らないシンプルなのが、多かったよね？

恩ちゃん　うん。それは、生身の自分達だけでカッコよく見せたいっていう気持ちがあるからなんだよね。

ヒバリ　コンサートが終わった後、セットが良かった、照明が良かったっていわれるより、（メンバーが）カッコよかったっていわれるのが、いちばん嬉しいからね。

シゲル　でも、本当はアマチュアの時にやり尽くして、あきちゃったっていうのもあるんだ。花火とか、爆竹とか、俺達、ハッキリいってプロだったもん。

白田　自分達で工夫して、装置とかも作ってたんだ。問屋さんへ行って花火をいっぱい買ってきて、それをステージ用に作り直すわけ。ツアー前になると、自分がミュージシャンなのか、花火師なのか、わからなくなることがあった（笑）。

シゲル　メイクとか衣装に、思いきり凝ってたこともあったし、全員、金髪だったこともあった（笑）。だから、その反動で、デビューしてからはシンプル路線へ行っちゃったんだよね。

白田　でも、シンプルなのにもまたあきてきたから、今年になって、ギターからスモーク出すのを始めたんだ。

――じゃあ、渋公も派手路線に逆戻りする可能性がありそうだね？

恩ちゃん　派手とかシンプルとか関係ないところで、ライヴはカッコイイものをやりたいと思ってるけどね。

シゲル　これから、知恵を絞っていいアイデアを考えます。

ヒバリ　思いきり奇抜なことをやってみようかな。花火関係はもうあきちゃったから、ステージが始まった途端、バスドラから犬が出てくるとか（笑）。

恩ちゃん　ステージからカエルを客席に投げこむとか（笑）。

白田　天井から、ヘビが降ってくるとか（笑）。

シゲル　おいおい。それがカッコイイ演出になるのなら、俺は反対しないけど、とてもそうは思えない…。

ヒバリ　まあ、自由な発想でいろいろと考えてますということで。

白田　でも、とにかくいいコンサートにしますから、乞うご期待。

恩ちゃん　みんなと一緒に思いきり歌いたいし。

ヒバリ　特殊効果（？）は、秘密ということで。

シゲル　当日、来てくれれば全てわかりますので、みなさん、よろしく。

（大島暁美）

photo＼KAYUYA SEKIYAMA

NEW ARTIST
今月の新人カタログ

割礼

①宍戸幸司（Vo、G）'63年1月12日・三重県／今井直樹（B）'65年9月5日・愛知県／島雅彦（Dr）'64年5月1日・愛知県②ビクター音産③パラダイスカッパ☎052－763－6008④－⑤'89年8月21日アルバム『ネイルフラン』でデビュー。

富樫明生

①'61年5月15日・札幌②キティ・レコード③キティ・レコード〒153東京都目黒区大橋1－8－4☎03－780－8631④－⑤'89年7月1日シングル『Let'S A・B・C』でデビュー。

THE STRUT

①木村武嗣（B）／左近雄二（Vo、G）／中井克也（Dr）②ビクター音産③－④ビクター音産☎03－746－5589⑤'89年8月21日アルバム『DEVIL IN RED』でデビュー。

阿Q
夢にまで見た日が来た！
7／20、渋谷公会堂

「夢にまで見た7月20日がやって来たゾー」とTARACOが叫んだ、阿Qの初めての渋谷公会堂のステージは、彼らの定番商品「ダンスはサイレンの彼方」からスタートした。一番といっていいくらいおなじみの曲だから、ゴキゲンな盛り上がりを見せる。

いつもよりおしゃれ！　って感じのメンバーは、すごいリキ入ってる。音数は少ないのに、パワーはビンビン伝わってくるし、体でリズムをとるTARACOの動きで、マイク・スタンドが揺れるほど。こっちまでドキドキしてきた。

ちょっとリキみ過ぎかなとも思うけど、はりきりよう、熱の入りようが伝わってきて気持ちいい。好感ビシバシだよ。

初めて東京に来て、渋公の向かいの路上でプレイしたことなどを、感慨深そうに話すTARACO。彼らにとって、だから渋公はまた特別の思いのある場所なのだ。はりきるのも無理ない。

どっとノセて、ミディアム・ナンバーで少し落ち着かせて、それからバラードをじっくり聴かせる。「こんにちは」「ガスタンク」「ただ…」と続くバラード・コーナーは、ノリのいい阿Qのまたもう一つの面を見せて、印象深かった。

そして後半は、阿Q恒例の三三七拍子なんぞというものまで出て、固さもとれたメンバーは、どんどん本領を発揮する。楽しく、うれしそう。

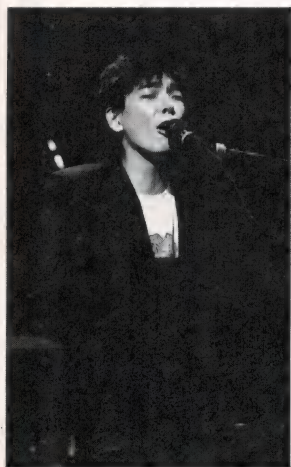
「会場にいる人の中で、今一番感動しているのは、TARACOちゃんだと思います」

という、DAITETSUの少ししみじみとした言葉が印象的だった。

（角野恵津子）

伊秩弘将
大いなる序章
6／21、日本青年館

伊秩弘将の『TOUR OF 99・99』東京公演が6月21日、日本青年館で行われた。1stアルバム『99・99』を出してからわずかに2ヵ月でのホールコンサート、それは彼自身の新たなスタートであり、新たなるチャレンジの大いなる序章といっていいだろう。

「お客さんは半分くらいうまればいいんです(笑)。その数は関係なくて、ただ来てくれたお客さんは絶対につかもうということだけがあって」と言っていた彼。確かにお客さんが満杯というわけではなかったけれど、その勢い息吹きと強い想いは確実に一人一人の胸にとび込んでいっていたように感じた。

洋楽ではエルトン・ジョン、ビリー・ジョエルなど、いわゆる〃ピアノマン〃のソロ・アーティストが確実にいるけど、日本ではまだまだその存在は希有だ。そういう意味で彼は新しいスタイルに挑んでいるのかもしれない。この日も、ステージ中央の後方にピアノを置き、時にたたきつけるように、時になでるようにけん盤をたたいていく。〃ピアノのスタイルを作りたい〃と言っていた言葉が浮かびあがる。

途中、渡辺美里に提供した「恋したっていいじゃない」を歌ったり、村井麻里子をゲストに迎えて「ハートではKISSしてる」をデュエットしたりと、〃遊び〃の部分も見せてくれて、いい意味でメリハリもあったように思う。

そしてラスト——、グランドピアノで「Sad Song」を歌い、「今日は無理したかいがあった。今日来てくれた人を大切にします」とあいさつした彼の表情がいやに印象に残った。〃大いなる序章〃の〃次〃と〃これから〃に期待したい。

（関根章喜）

GONTITI
ナニゲなく気持ちいい音楽
7／5、6　芝浦インク

ゴンチチというヘンな名前は初耳でも、「さんまのまんま」のオープニングでキモチいい音楽をナニゲなく聴いたことは、一度はあるでしょう。そのナニゲなくキモチいい音楽ばっかりをしこしこと作り続けているのがこのGONTITI。サンバにボサノバ、クラシックに軽音楽、そしてブルース（笑）と、アコースティックギターでできることなら何だってやっちゃうナイスミドルな2人組です。

7月5、6日にインクスティック芝浦で催されたコンサートはしかし、ナニゲが大アリでキモチいい、一言でいうならゴキゲンなものでした。僕の見た6日は、ミュートビートの小玉、増井の強力ブラス隊にいとうせいこうがゲストで（5日はチャーとかの香織。人選がアナーキー）いつもながらの第1部と好対照の華やかな盛り上がりを見せてくれました。

僕はといえば、今は亡き（笑）『ポッパーズMTV』でオンエアーされた初期の名作『修学旅行夜行列車南国音楽』にクギづけになって以来4年間、熱心に追い続けたGONTITIのあまりの変わりようにただ驚くやら、呆れるやら、口元がほころぶやら。インクスティックを満杯にするなんて当時は考えつかなかったことです。しかも半日に。また、2人が演奏中立ち上がったときには思わずのけぞりながら、『博士の異常な愛情』のラストシーンを連想してしまいました。

バックのメンバーがこれまた強者揃い。特にドラムスのれいちさん。僕はずっと男とばっかり思ってた。確かなリズム感にシャープなバチさばき、ほれぼれしました。ドラマーの皆さんはプロアマ問わず、れいちさんを目標に精進しよう。

最初から最後までがハイライトだったこの日。GONTITIは聴くだけでも幸せになれるのに、コンサートを見てしまい、そのうえ原稿まで書けるのだから、これ以上の幸せは他にあるのだろうか。彼らに理解を示し、我慢強くアルバムを出し続けたレコード会社、スタッフの思い入れも相当なものです。これを良心といわずに何というのだろうか。

そんな世の中のありとあらゆる良心に包まれた、ちょっと人とはネジ加減の違うイカすGONTITIの次のコンサートは8／27の東京グローブ座、9／16のクラブクアトロ。クアトロには東京スカパラダイスも一緒に出る（またまたアナーキー）。ネジを緩めて、或は外して楽しむ人にとって、GONTITIは絶好のパラダイスになるでしょう。

あのひまわり下さい。（小林由明）

GRAND PRIX

R&Rの王道を歩むバンド 7/21、2ndアルバムリリース

たとえばR&Rでも現在様々なタイプのものが出てきている。それはそれで大歓迎なんだけれど、時に何かを見失いそうになる。そんな時に聴いてホッとするのが、いわゆるR&Rの〝王道〟を歩んでいるバンドだ。王道とか〝正統派〟とかをいうと、つい気負ってしまいそうだけど、つまりは〝R&Rの本来持っているもの〟を追求することだ。それを実践しているのがグランプリだといえる。

昨年の9月にアルバム『Tears&Soul』でデビュー。POP感よりあくまで〝本道〟をあゆむという姿勢から、ライブハウスで確実に力をつけてきた。そして7月21日にセカンドアルバム『TREASURE HUNTING』をリリース。力強いスケール感、骨太サウンドのパワー感と、その〝正統派〟がついに花開いた力作だ。それに伴ってライブの状況も勢いを増してきたということで、ボーカルの山田信夫とギターの南明朗に聞いてみた。

—セカンドはかなりの力作ですね。

南「ファーストを出した後、ライブを1年間やった成果がバンドの音にも出てるんじゃないかな」

—ライブ感はバッチリ。

山田「自分たちでも〝本物〟だっていってるんだけど、何が本物かっていったら、やっぱりいいライブを魅せられるのが一番だと。レコードなら金とヒマをかければある程度誰でもいいもの作れるけど、そうじゃなくて自分たちが作った曲を自分たちが演奏する場所で、いいもの出せるっていうのが本物だと思ってるからね」

—その本物とか王道とかっていうことなんだけど今はある種そちらの方がウラ街道的になってしまってる所があるんだけど…？

山田「イヤ、俺たちは自分たちが王道で、今はウラ街道がはやってると思ってる。だって変わったことしなきゃ売れない時代でしょ。それを王道というのはおかしいよね。だからはやりものでも、最初にやったバンドはすごいと思うけど、それを追っちゃうっていうのは絶対ダメ」

—グランプリが唯一の王道だと？

山田「唯一じゃないけど（笑）。でもそういう自負はある。今日本では数少ないバンドだしね」

南「そういう意味で、はやりもの聞いてるコもやがてはこっちに向いてくれるんじゃないかなと」

—南さんのギターは前回より増してフューチャーされてますね。

南「今回は自分自身もそうだけど、メンバーからもギターを、というノリが全員にあって。だからこういうふうにギターが前面に出て、それプラス、きめの細かい感じが出せたらいいというようにやりましたけどね」

—グランプリはそういうギターサウンドを含めた〝スケール感〟が何といっても魅力ですよね。

南「そう、そういう意味では音的にもホールクラスの大きい所で早くやりたいね。ライブハウスよりもっと何かいい面が出せるんじゃないかな」

山田「ライブハウスって雰囲気は好きなんだけど、俺たちキーボードがいたりして大所帯でしょ。やっぱり腕を振り上げるのさえ気を使っちゃうようだといいステージできないと思うし。曲自体もでっかいスケール感を目指してやってるしね」

—年末にはホールでっていうウワサもありますけど、そこに行くまでにはコツコツとライブハウスでやってきた実績がある。

山田「まさにそう。一切仕かけみたいなこともやってないし。無理しないで、満員になったから次へ行くっていう感じでやってきたからね」

—それじゃ、秋のツアーも仕かけなしにストレートにやるっていう？

南「変に作ったら失敗するだろうし」

山田「やっぱり普段のライブをやってる時の方が一番自信あるというか、一番かっこ良く映ってるだろうなって思うからね。プロモーションビデオとかで芝居っぽいことやったんだけどやっぱりダメでね（笑）。普段のライブやってる自分の姿には勝てないなって自分で思う」

—やっぱりライブで輝いてるっていうのが一番ですよ。

山田「そうそう」

（関根章喜）

ZELDA

とにかく一言、今のゼルダはおもしろいぞ

レポーター●カドノ・トツゲキ・エツコ

ただいま，オトイレ中!!

5月にゼルダのライヴに行ったら、もう少ししたらレコーディングに入って、9月頃には、みんなに聴かせられると思うという話をしていた。その話し方がすごくうれしそうに、何かすごくワクワクしてる感じだったのが、すごく印象的だった。そしたら、7月の中旬の現在、無事レコーディング終了だって。

「今けっこうみんな、かつてないくらい音楽に対する気持ちとか集中力があって、3月ぐらいから合宿したりしてたの」（さちほ）

今回は、曲のアレンジを固める合宿の前に、すでに収録曲を絞り込んでいて、そういうやり方は、ゼルダとしては、すごく珍しいことなんだそうだ。とにかく今回は段取りが早かったとかで、話してても、なにかすごい楽しそうなのだ。どうも今までのゼルダと気分が違うなと思って理由を尋ねると、前々作を出したあとあたりに、さちほと佐代子に黒人音楽との強烈な出会いがあって、それがバンド全体に伝染して、それはゼルダというバンドの色を変えるほどの影響力だったということなのだ。

「黒人音楽を好きになり始めた時に、アローっていうカリブ海のスカ・ミュージックの大御所の人のコンサートに、ちほ（さちほ）とふたりで行ったの。そしたらすごいノリで、小さい頃のお祭りとか思い出しちゃって、バーッと前に行って踊ってたら、アローが私達をステージに上げてくれて、一緒に踊ったの。で、こんな楽しい思いをさせてもらって、いざ自分のコンサートに来てくれるファンの人たちを、そこまで楽しませてるかって、振り返って見ちゃったの。で、今まで私っていうのは、すごく気持ちが内側に向かった世界を歌ってたんだけど、今はもっと外に向かって歌いたいっていう気持ちがすごくあって、もっと私達のコンサートに来てくれる人達も、このぐらい楽しませてあげたいみたいな気持ちが出てきてね。それで、前作では一緒に歌ったり踊ったりできるような曲をふやしたの」（佐代子）

「黒人音楽と出会って、音楽の面白さがよくわかるようになったんだと思う。だから、音楽に対する態度とかは、今の方が重いっていうか、真剣」（さちほ）

「深いの」（佐代子）

もう、ふたりの話はすごくノリがよくて、いかにその黒人音楽との出会いが大きかったかというのが、ビシバシと伝わってくる。

「私達って、今まではアルバムごとにわりとコンセプトが変わってたんだけど、今回は初めて、前作で得たエネルギーとかインスピレーションみたいなものの延長線上にあるアルバムっていうか、前作をより掘り下げたっていうか、そういう感じ。でまた次のアルバムもそうなると思う」（佐代子）

「それは、もうこれからずっとそうだと思う。これからは、前作でつかみたいと思ったものを、力の続く限り追求していきたいなって、そういうやり方・考え方に変わっちゃったの」（さちほ）

黒人音楽と一口に言っても色々あるんだけど、ふたりともそれは色々聞いたらしい。でもその中からまた特にひかれる分野を探っていくと、やはりカリブの音楽とか、ラテン、サルサとか、アフリカのものとか、エスニック的なものへの傾倒が深いみたい。だから、今回のアルバムもその辺の香りはたっぷり入っていて、それはとてもゼルダらしい。そしてそこに詞にしてもサウンドにしても、とても開放的な気分が満ちあふれてわかりやすくなって、ダンサブルなビートが全体に流れているっていうのは、今までのゼルダになかったことかもしれない。

とにかく一言、〝今のゼルダは面白いぞ！〟ってこと。要注意だ。

ノリのいい、このアルバムのタイトルは『D・R・O・P』。ダンス、レボリューション、オープン、パワーの頭文字。しかもドロップという言葉になってるとこがミソ。これだけ見ても、気分開放的だよね。9月21日にリリースされるから、ぜひ聴いてみて。

photo＼Nov Matsuzaki

川嶋みき

マンスリー・ライヴで出逢える"最上級の微笑み"

「久しぶりのライヴだったし、その上ニュー・アルバムの曲を初めてみんなの前で演るっていうんで、なんかものすごく緊張しちゃった」と開口一番。照れ笑いの川嶋みきちゃんは、あの日のライヴと同じスタイルで取材場所に現われた。真っ白のTシャツ、黒のジーンズ、足元には黒のバスケット・シューズ。ボーイッシュなそのスタイルは、飾り気のない彼女のライヴそのものだった。

「バンドに新メンバーが加わった初めてのライヴだったんです。それに関しては何の不安もなかったんだけど、あの日はもう本番が始まる10分位前からドキドキしちゃって、自分でも顔がこわばってるのがわかった(笑)。トイレばっかり行ってるってスタッフに笑われてたんですよ、私」

7月7日、世田谷区民会館で行なわれたイベントで、彼女は池田政典、結城めぐみと同じステージに立った。いつものソロ・ライヴと違って、限られた時間の中でのライヴだったけど、彼女はいつも通りの元気なライヴを演っていた。

「ソロ・ライヴだからとかイベントだからとか意識を変えることができないんです。不器用なのかな。だけどステージに立っちゃえばライヴはライヴ。時間が短くても、イベントでも、私らしいライヴしかできないから」

久しぶりに彼女のライヴを体験した私が感じた大きな変化は、ステージでの彼女のTシャツにジーパンというスタイルだった。そのことについては？

「着たい！着たい!!って以前からスタッフに言いまくってたんですよ。あまりに私がしつこく言うもんだから、スタッフも何も言わなくなっちゃって(笑)。でね、やっぱりアルバムの『ナチュラル・ハーツ』を作ったことで私もそのスタイルに関してはもうこれしかないよねって思えるようになったんです。自分のやりたいことをやりたいようにやって、まだ全曲ではないにしろ自分で作詞作曲もやって。そしたらもう飾りたててカッコつけてる必要ないよねって思ったんです。

でもねぇ、私としてはちゃんとステージでは洗いたての真っ白なTシャツとジーンズにはきかえているのに、メンバーやスタッフに『いつも同じ服じゃなくて、とりあえずステージ用のヤツに着換えたら？』って言われちゃったの。あれはショックだったぁ(笑)。私だって一応、一応ですよ、女の子なんだから、それくらいの気は遣いますってば!!」

会場に集まったお客さんの顔をまるでひとりひとりちゃんと覚えて帰ろうとでもしているように、彼女は観客といつも向いあわせだ。そして視線と視線が合った時のニコッと笑う彼女のとびきりの笑顔は、歌うこと、ライヴをやっていること、そこでみんなと逢えていることが、嬉しくて嬉しくて仕様がないっていう感じの最上級の微笑みだ。

「ステージでは素っぴんの私を見せたいなっていつも思ってるんです。ステージに立っている自然にそうなれてる自分がかわいいっていうか(笑)、自分自身が確認できる場所でもあるなって。歌が好きな自分も、ライヴを大切にしてる自分も、みんなと出逢えたことをものすごく幸せに思ってる自分も」

8月からマンスリー・ライヴがスタート。まずは8月30日の渋谷TAKE OFF7。そして全国各地のイベントにも参加。彼女の大好きなライヴで、彼女の夏はアッという間に過ぎてしまいそう。

「私に夏はあるのでしょうかって感じですけど(笑)、ライヴができるのが嬉しくって仕様がないんだから幸せ者です、なんて(笑)」

アルバム『ナチュラル・ハーツ』を作ったことで、今まで以上にナチュラルな感情をこちらにぶつけてくるようになった彼女。今夏、もし、彼女のライヴがみんなの近くであったなら、ぜひ足を運んでみてほしい。きっとあまりにも素っぴんなライヴだから、思わず自分も、「自然にならなくちゃ！」って感じるはずだよ。

(松浦靖恵)

photo＼Nov Matsuzaki

短期集中強力新連載！

池田貴族の辻説法・怒りの言いたい放題〈第一回〉

今月から、短期ではあろうが、連載することになった「remote（リモート）」である。そして、リモートのリード・ヴォーカル兼リーダーである「池田貴族」自ら執筆させてもらう。

原宿ホコ天、「イカ天」、ロック喫茶「リモート」、数々の雑誌等で我々を、知らない人間はいないであろうが、自己紹介から始めるとするか。

結成は、三年前だが、まともに活動しだしたのは一年前だ。そう、原宿ホコ天を始めた頃からだ。しかしながら各メンバーの活動歴は長い。十年選手が四人もいるのだ。

〈各メンバーの紹介〉

愛川"プカポン"弘樹……ベース・コーラス・作曲担当、本物の音をだせるベーシストだ。まぁ、今のベースひいてる若い連中に、本物の音がわかるかどうかは疑問だが、女性コーラスのような高い声も彼のうりだ。なんと、地声なのだ。変声期が、こなかったため、あのような高音になってしまったらしい。

Hiro……ギター・コーラス・作曲担当。タータンチェックに、ルックスのよさが先行しているが、彼の音色のこだわりはすごいものがある。彼の音色のよさがわからぬ奴は、ロックを語るな。余談だが、彼の実家は北海道の牧場だ。

チャッピー……ドラムス担当。メンバーの中で最年少。美形とウエストの細さ(58センチ)がうりだ。最近の若者にしては珍しく、音楽理論も強い。ドラム符も書けない、読めない連中が多すぎるんだよ！基本だぜ。

前崎史郎……キーボード・コーラス・作曲担当。最近（六月）加入した新メンバーだ。といっても三年前一緒にやってた男だから、我々に違和感はない。数々の有名タレント等のバックミュージシャンをつとめていた彼は、理論、演奏なんら問題はない。打ちこみしかできないキーボーディストには、彼のあじは絶対だせぬ。

池田貴族……リードヴォーカル作詩担当。態度がでかい、なまいきと、とかく悪評が多い。しかしながら、言いたいこと（決して、まちがったことは言っていない）を、正面切って言うことが、なまいきなのであろうか。ひねくれて、捨てゼリフを言ったり、陰口たたく方がなさけないと思わないのか。まぁ、ライブに来てくれた連中は、わかってくれるからいいけど。

我々は、五月二十八日をもって、原宿ホコ天から抜け、ロック喫茶「リモート」を原宿にオープンした。現在ホコ天は、五十以上のバンドがひしめきあい、爆音地獄と化している。さらには、事務所、レコード会社が決まっているバンドの進出。なにやら金もうけのにおいがプンプンしている。ホコ天は、子供達のもの、家族連れのものだったはず。それが大人たちの策略がはいりこんできた。こういった「ホコ天おいしいぞ」現象をつくってしまったのは、我々リモートである。ただ、我々は一九八八年五月から、一九八九年五月までの一年、毎週のようにホコ天で演ってきた。その一年では、我々が一番多く演ったはずだ。結果、ホコ天ナンバー1バンドになった。タイミングよく「イカ天」にも出演したし。続けることのできるバンドが最後に笑うと思う。この「続ける」ということが一番むずかしいのだ。現在ホコ天の場所取りは、朝六時半ときく。（ロッカーが早起きして、どーするんだよ(笑)）そして、夏の暑さ。果して、何バンドが秋に残っているのだろう。ロック喫茶リモートから、傍観させてもらう。

私に言いたいことがある人は、編集部に手紙を送るべし。

また来月！

※12時30分と14時30分の２ステージ
〈ドリンク代1000円〉

▲池田貴族直筆地図

文句があるならいつでも来なさい

remote連載「俺が池田貴族だ！」では、みんなからの投書・意見を待っている。多方面で色々と誤解を受けている池田貴族だが（すごい性格いいんだぞ）、彼への文句・反論…etcなんでもOKだ！それらの意見に、池田貴族が受けて立つぞ。もちろん、プロ・ミュージシャン、業界関係者——特に某誌の方(笑)——は大歓迎、遠慮はいりません(笑)。

一部の無言電話する卑怯なキミ、これからは堂々と発言しましょうね(笑)。あて先は〒104東京都中央区銀座5—1—7数奇屋橋ビル5F　アリーナ37°C "池田貴族にもの申す係"まで。もちろん、励ましの手紙も待ってるよ。

※8／14　名古屋クラブ、クアトロLIVE決定！(19：00START)

Kids On The Street

文／小林美樹（ミュージック・ビジョンズ）

INDEPENDENT ALBUMS&SINGLES

G-SCHMITT「Sillage」ヴェクセルバルグ

相変わらずの深遠な音作りで、Vo、SHOKOのカリスマ性の健在を改めて認識させられた今回の12インチシングルです。ジャケットと共にSHOKOはいつでも美しく、怪しげな魅力がいっぱい。大人向きのレコードかもしれないけれど、10代の皆さんにもお薦め。

BAD MESSIAH「OUTSHINE」

ライブヴァージョン2曲を含むバッドメサイアの4曲入りCD。スタジオテイクの2曲は前作のミニLPに比べるとかなりの成長を感じさせるが、ライブヴァージョンの2曲の音質がかなり悪いのが残念なところ。ミディアムテンポの曲で渋みを味わってみては？

KING HIP GO GO「DEMONSTRATION」

exオートモッドのジュネによるニュープロジェクト。GOGOをベースにした最近のダンスビート。このCDはあくまでも〝デモンストレーション〟としてスタジオテイク。LIVEテイクの曲の間に彼等特有のギャグを盛り込んだ遊び心いっぱいの作品。

16TONS「冒険者たち」

最近ではめずらしいカントリー&ブリティッシュ・トラッドをベースにしている16TONSのIstLP。アコーディオンやバンジョー等のアコースティック楽器を取り入れていて、現在のインディーズシーンでは類を見ないバンドで、今後の動向が気になるぞ!!

BILLY THE CAPS「BILLY THE CAPS」SIMA

カントリーミュージックにパンクの要素を取り入れたものをカウパンクと言うそうな。このビリーザ・キャップスは正にソレ！IstLPを堂々と発表。ウッドベースがとても心地良い。ロカビリーと言うな！これはカウパンクだ！ビートパンクに飽きた貴方へ…。

TWIGGY「TWIGGY」

エアロスミスやT・レックス等のR&Rを好む女性4人編成のTWIGGYのIstミニPL。LPよりも生でライブを味わって欲しいバンドの一つなのです。明るくて、元気で、ポップで…と単純に楽しめるところがオイシイ。もちろんレコードもGOODだよ。

今月（その他の）リリース

札幌の女の子ハードロックバンド〝HIP〟がIstLPをリリース。そして同じく札幌の〝FAST DRAW〟がビデオとCDシングルを一挙に発売してくれます。それから〝ジムノペティア〟が8月上旬に新譜CDのみでリリース。同じくこちらもCDのみのリリースでメンバーも一新した〝ピアズリー〟。〝マザーグース〟はIstミニLPを発売します。そして神戸の〝MAD GANG〟は以前のミニLP「SHOT GUN」を出しましたが、今回はそれがCD化されて店頭に並びます。んー。今さらながらだけれども、やっぱりCDの時代なんですねェ…。

THE MISS CAST

京都で'88年6月に結成され、地元京都では着実に動員を伸ばしていて、今後は月1回のペースで東京でもライブをしたいという意欲満々のこのMISS CAST。音の方はと言えば、基本はR&B。このベースにロカビリーの要素を取り入れた…という新しいタイプの音。ツインギターでありながらロカビリーっぽいことをやってくれちゃって、憎めないんだなこれがまた…。サウンドはまだ未完成な所もあるけれど、とりあえず新しモノの好きな方、またそうでない方も1度、このMISS CASTを体験してみては⁉

8／18目黒ライブステーション
8／26京都スポーツバレー

（写真左から）G・藤井健二、G・清田潤、Vo・金沢孝史、Dr・中大路明、B・内藤智至

STRAWBERRY FIELDS

こちらも先に紹介したMISS CASTと同じく京都出身のバンド。Voが元デランジェ、Gが元ジャスティナスティの2人が結成した、巷で話題のストロベリーフィールズです。6月に新宿LOFTで行われたデビューライブは、前売券がSOLD OUT、当日券もなしで超満員の大盛況の中、無事終らせました。今のところレコード等のリリース予定はありませんが、ライブを上手くこなして、音も固めたところでドカンと一発超大作を発表してくれるのでは…⁉と期待して待っていて下さい。単なるビートバンドではありません。ストロベリーフィールズは化粧はしていてもスカッと爽やかサウンドが売りのイカすバンドだ！

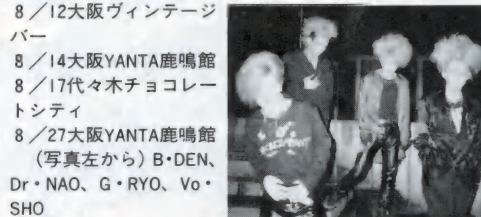
8／21京都ビックバン
9／6神戸チキンジョージ
9／15新宿LOFT

（写真左から）Dr・鈴木修見、Vo・福井祥史、B・土田直樹、G・小池裕明

BY—SEXUAL

なんか今回は関西のバンドずくめだなあ。ここでもひとつオマケ、大阪出身のバイーセクシャルだ。平均年齢18歳と前号でも紹介した通り。7月には初めて東京でもライブを行い、手応え大アリで大満足だった様子。今後はもっとライブを行う予定らしいのでチェックをして、1度足を運んでみて下さい。それにしてもVoはバクチクのGの1にそっくりだ…（笑）。BOØWY、BUCK—TICKと〝B〟が続いた後、次になる〝B〟となるか⁉

8／12大阪ヴィンテージバー
8／14大阪YANTA鹿鳴館
8／17代々木チョコレートシティ
8／27大阪YANTA鹿鳴館

（写真左から）B・DEN、Dr・NAO、G・RYO、Vo・SHO

さてさて、関西勢ばかりを紹介してしまいましたが、ここ東京にも良いバンドはもちろんたくさんおります。今回は「16TONS」をひとつ。ひと口に言えばカントリー。けれどそれは奥深く、アコーディオン、バンジョー、ギター、ウッドベース、笛といったアコースティック楽器を中心に編成。曲の構成、アレンジ、演奏とも20代とは思えない内容。サウンド面は、どこかノスタルジックな、昔のフォークソングやヨーロッパ民謡に近いモノを感じさせます。秘かに私は〝ムーミン谷〟も感じてしまう程、のどかな曲ばかりなのです。都会の生活に疲れきった体をホッと休ませてくれる、これが16TONSなのです。こりゃこの夏、聴きのがす手はないぞ!!

INDEPENDENT CHART

全国総合ランキング

6／21～7／20集計〈調査協力店〉UKエジソン、DISK INNなんば店、札幌UKエジソン、レコードギャラリー、ユリナーレコード、ボーダーライン

①	—	—	The STRUMMERS「RUNNING OF THE WILDSIDE」（CD）CLUB THE STAR
②	—	—	餃子大王「LIVE AT THE BURBON HOUSE」（CD）EXTENDED
③	—	—	G-Schmitt「SILLAGE」（CD）ヴェルセルバルグ
④	↑	⑦	アグレッシブ・ドッグス「YOUTH BURNING GO！」（LP）IN&OUT
⑤	↑	⑪	S.O.B、ナパーム・デス「SPLIT FLEXI」（ソノシート）SOUNDS OF BARIAL
⑥	—	—	BILLY THE CAPS「BILLY THE CAPS」（LP）SIMA
⑦	↓	②	NEW ROTEeKA「ハーレム野郎」（CD）Captain
⑧	↓	④	DEATH SIDE「WASTED DREAM」（CD）SELFISH
⑨	↓	①	COLOR「BROKEN TARVAN」（CD・S）Free will
⑩	↑	⑰	V.A「PANIC PARADISE」（CD）Captain

東京◆UKエジソン
☎03（369）3708
1位 The STRUMMERS「RUNNING ON THE WILDSIDE」（CD）〈CLUB PHE STAR〉
2位 BILLY THE CAPS「BILLY THE CAPS」（LP）〈SIMA〉

仙台◆レコード・ギャラリー
☎022（221）5308
1位 LIP CREAM「LIP CREAM」（LP）〈セルフィッシュ〉
2位 G-Schmitt「SILLAGE」（CD）〈ヴェクセルバルグ〉

大阪◆DISK INNなんば店
☎06（644）2822
1位 G-Schmitt「SILLAGE」（CD）〈ヴェクセルバルグ〉
2位 不失者「不失者LIVE」（LP）〈BSF〉

京都◆ユリナーレコード
☎075（223）0711
1位 餃子大王「LIVE AT BOURBONHOUSE」（CD）
2位 V.A「Kyoto City Hard Core」（ソノシート）〈MCRカンパニー〉

札幌◆UKエジソン
☎011（271）0166
1位 G-Schmitt「SILLAGE」（CD）〈ヴェクセルバルグ〉
2位 餃子大王「LIVE AT BOURBONHOUSE」（CD）

福岡◆ボーダーライン
☎092・761・0388
1位 The ROOSTERZ「LOFT1981」（CD）〈Captain〉
2位 アグレッシヴ・ドッグス「YOUTH BURNING GO！」（LP）〈TAP〉

GIG!!

★NEW ROTEeKA
8／20(日)仙台R&Rオリンピック
24(木)25(金)26(土)27(日)新宿ロフト
9／26(火)渋谷公会堂
問ラジカル・シティ・ミュージック（☎03・226・7328）

★GEN
8／13(日)芝浦インクスティック
23(水)京都スポーツ・バレー
問TAEE PROJECT（☎03・5371・8882）

★THE REAL INDEPENDENTS ACT1
出The FUSE、THE BOLD、THE HIPS、THE RAMBLINGS、天然危険児、破戒、東京スカンクス、THE CLANKERS、CORISEZ、THE CRACK THE MARIAN、たんぽぽ、アグレッシブ・ドッグス）
8／14 川崎クラブチッタ
問REVOLUTION（☎03・479・6895）

★THE MAGNETS
8／13(日)新宿ロフト
問マグネッツ・オフィス（☎03・785・4382）

★The Wells
8／10日(木)神戸チキンジョージ
11日 京都磔々
13日(日)愛知勤労会館
14日(月)大阪ミューズホール
16日(水)名古屋ELL
17日(木)豊橋かごやホール
18日(金)芝浦インクスティック
問SOLID BOND（☎03・5485・0810）

★餃子大王
8／13(日)博多Be-1
11(火)大阪バーボンハウス
16(火)名古屋公会堂
問UKプロジェクト（☎03・5485・1381）

★ポテトチップス
8／12(土)代々木チョコレートシティ
16(木)名古屋市公会堂
18(金)横浜7thアベニュー
22(火)渋谷ラママ
28(月)神戸チキンジョージ
29(火)京都ビッグバン
31(木)豊橋かごやホール
問バンビ・ミュージック（☎03・780・3580）

★BAD MESSIAH
8／11(金)大阪アムホール
12(土)名古屋フレックス・ホール
問LARGE SUM（☎03・5371・0340）

★CORISEZ
8／14(月)川崎クラブ・チッタ
25(金)原宿クロコダイル
9／9(土)渋谷テイクオフ7
21(木)新宿ロフト
問各ライブハウスまで。

★TOY-B♂YS
8／14(月)渋谷エッグマン
9／9(土)渋谷テイクオフ7
14(木)新宿ロフト
問各ライブハウスまで。

★RUKES
8／17(木)代々木チョコレートシティ
21(月)前橋ラタン
24(木)大阪ブーミンホール
25(金)大阪バハマ
26(土)京都スポーツバレー
27(日)名古屋ミュージックファーム
29(火)横浜7thアベニュー
問ミュージック・ビジョン（☎03・369・5059）

NEW ROTEeKA

シーンをかきまわすハーレム・パンク野郎——飲んで騒いで歌って…パンクは楽し

9/26、オッドロキの渋谷公会堂決定!

Interviewer:中込智子

ニューロティカというバンドをごぞんじかな?先頃、読売ホールを超満員にし、各地のイベントで大盛り上り状態のタテノリの嵐を展開しているバンドだ。しかし、ニューロティカはメジャー・デビューはしていない。彼らはインディーでありながら全国区の人気を持つ超ド級のアマチュア・ミュージシャンなんである。この場合のプロ・アマの区別は音楽を職業としているのかそうでないかの2つに分けたのみの意味だと考えてね。だって彼らのステージングときたら、そんじょそこらじゃないザッツ・エンターテイメント!キャッチ・フレーズも「みんなで歌おうパンク・ロック。みんなでさわごうニューロティカ」とキタもんだ。

結成は'84年3月、ライヴハウスで活躍してきた古株、実力派のパンクバンド。今月はそのボーカリスト、井上アツシことルーフに来てもらったワケだ。

——人気出てきましたよね。メジャーのバンドとあんまり変わんない位スケジュールも詰まってる。仕事が大変じゃありませんか?

ルーフ「そうだよ。八〇子で働いているのに今日だって昼間こいとか言われちゃって7千円パーだもんね(笑)。でもマジな話、下手すると生活できないんだよ。ツアーとか入っちゃうと働けないから仕事休んじゃうから給料が入ってこないの。5人とも大変!でもまあ大変だけど好きでやってるからね、不満じゃないんだョね」

——キャプテン・レコードももうメジャーとあんまりかわらないっていうか、日本のヴァージン・レコードを目指すって話もあるし。

ルーフ「ヴァージン?」

——イギリスのインディー・レーベルで今は飛行機までトバしてる大手レコード会社になったってヤツ。

ルーフ「ふーん。あんま関係ないケドねー。ってゆうか、まわりがあおりすぎなんだよね。ウチはマイペースで行くから、それを崩したくないから。まわりがあおってもウチらそのレベルまで追いつかないんだよ」

——マイペースってどういうこと?

ルーフ「うーん、ツッこまれると困るな(笑)。うーん…」

——今度は渋谷公会堂でライヴもあるんでしょう?

ルーフ「ああ、あーゆーのはね、打ち上げの席で廻りの大人にあおられて、〝OK!OK!〟とか言っちゃうの(笑)。ヨッパらうとすぐブッキング入れちゃうんだよー」

——そのくせ普通のライヴハウスでいわゆるインディーズのブッキングもあったりして。

ルーフ「それはね、他のバンドの打ち上げ行って飲んでてね、今度一緒にやろうよとか言われて〝OK!OK!なんでもOKだあーっ〟とか言っちゃうの。ジャッキーが(笑)」

——…どこがマイペースなの?

ルーフ「前者が無茶なマイペースで後者が無茶をしないマイペース。なんちゃってー」

——でもなんだかあったかいね。バンドって上へ上へと行くから大きくなると小さい所でやらなくなるでしょう?ワンマン中心になるし。

ルーフ「ただ単にね、色んなバンドとやると面白い。色々観たいバンドもあるしね。友達も増えるしね。自分達が面白いのが大前提だもの。あとはヨッパらってブッキングしすぎて仕事出来なくて生活苦しいけど(笑)。ただライヴは一応メンバーで話し合ってから入れるけどね。嫌なライヴはやりたくないし」

——義理人情に厚いとゆうか、昔気質(かたぎ)と言うか……

ルーフ「そんなんじゃないよ。でもウチらちょっと違うかもしれない。けどコレじゃ生き残れなかったりしてね(笑)。でも楽しくやってきたい。そう言えばさー、イベントがあって、呼び屋さんから会場の地図のFAXが送られてきたのね。そしたら何か変なFAXが一枚まじってんのよ。近所の飲み屋の地図なわけ。で、〝おウワサはかねがねうかがっております〟って書いてあんの。失礼しちゃうよ全く(笑)!」

コイツら全く飲んでばっかりいるんじゃねーの?と思ってしまいました。とはいえ今時気持ち良い話。本当は今が一番大変な時期のハズなのに、(だってライヴは増えるわ生活苦しいわでしょ?)笑って話してくれちゃうからね。でもこうなると選択の時期も近いんじゃないだろうか。

——そろそろバンド一本でやっていこうとか考えてはいませんか?

ルーフ「今一番複雑なところ。今はなんとも言えない。解散か、バンドを取るかって感じじゃないかな…」

——えええーっ!!

ルーフ「(笑)成り行きまかせ!明日の風に聴いてくれって感じカナ」

Vo.ルーフ、G.修豚、G.ジャッキー、B.SHON、Dr.アキオの5人組、ニューロティカ。彼らのライヴは楽しく笑えて、楽しくノレる。自分達の楽しみを一番に考えて行動することが、すなわち観る者の楽しさに直結するバンドだ。彼らの最新アルバム『ハーレム野郎』(キャプテン)もギャグやコントが曲間にびっちりと詰め込まれ、とても楽しい作品に仕上がっている。だけど、コミック・バンドでは決してないんだよね。彼らの速くてポップなR&Rを味わって、キミも酒飲みになってみないか!アレ、違うか(未成年の人は知らん)。

Live in MAEBASHI LATTAN

with

Ximon & Wakigarfunkle

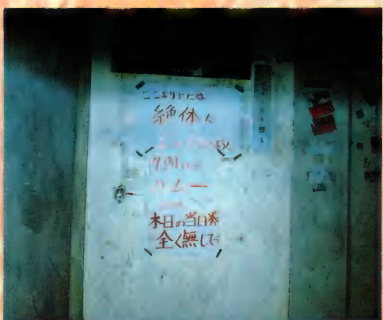
B.M.B

極（獄）道

1989.7.24

●

噂が噂を呼ぶナゾのバンド"ハ・ムー"。彼らに加えて海外から2バンド迎えてツアーに出るとの情報をキャッチしたアリーナ取材班はさっそく彼らを前橋ラタンで追っかけまわしたのであった。

photo/Nov Matsuzaki(Arena37°C)　report/Yoko Fujino

ハ・ムー Live in MAEBASHI LATTAN

With Ximon & Wakigarfunkle/B.M.B/極(獄)道

dsの西川幸光一大王

これでリハーサル？

極(獄)道笑撃のステージ

Gのスーザン(略称)

打合せ(なぜここにユニコーンのマネージャーがいるんだ？)

内堀くんの横に何故かキースが

前橋のKing of Live House

ラタンの事務所。お世話様でした

ひげそり内堀くん

くつろぎの一時

サウンドチェックする義堀

これはパチロクの取材です(笑)

アマチュア・バンドが注目を浴びている昨今、また、ひとつ強力なバンドが出現した。その名もハムー。

詳細は不明だが、広島出身の高校生バンドで、平均年齢は17・5歳。

最近、日本武道館でのコンサートも大成功におさめ、今や、押しも押されぬ人気を誇るユニコーンのコピーを得意としており、ルックスまでもが酷似している、完コピ・バンド。

メンバーは、奥田民太郎左衛門玉年(ヴォーカル)、見るも無残、聞くもスーザン久美子(ギター)、堀内内堀(ベース)、西川幸光一大王(ドラム)、阿部義堀(キーボード)。

で、もってこのハムーは大胆にもアメリカからやってきたという2バンド、フォーク・デュオ、クサイモン&ワキガーファンクルと通称、BMBという謎の3人編成のロック・バンドとハムーのスタッフで結成された極(獄)道を引連れ、小倉、徳山、姫路、和歌山、前橋とライヴハウス・ツアーを敢行。

最終日である前橋・ラタンでの彼らの様子を追うことにした。

午後2時半、メンバーを乗せた車が到着するとすでに待ち構えていた女の子たちの間から歓声があがる。

楽屋に荷物を置くより早く、スタッフとともにセッティングを開始。

アベBeeに良く似たクサイモンはピアニカを手にステージに上がり、BMBとセッションを始める。これがまた、ゴキゲンなR&B。相棒のワキガーファンクルは、アコスティック・ギターを手に、うろうろとしている。それぞれのバンドのリハーサルに移る前に食事となった。しかし、きつねうどんを注文した内堀はその前に牛めし弁当をパクついていた。ヤセの大食いなのであろう。

外は、今までの晴天がウソのように激しい雷雨に見舞われていた。

リラックス・ムードの究極 寝る子は育つ!?

楽屋は2部屋あり、なかなか結構な作りで、広い方の部屋で食事を終えたメンバーがくつろいでいる。

取材班はあらためて彼らと挨拶をかわし、何気なく(半ば意図的に)ゲーム・ボーイの話をする。と、奥田民太郎左衛門(長い…)が、「オレ、持ってるよ」とバックからゲーム・ボーイを出してきた。ソフトは『テトリス』。そして取材班側も同じものを出す(持ってんなよ)。ギターのスーザンは早速、遊び始めた。

4時、少し前、BMBがリハーサルのため楽屋を出る。予定曲をもくもくと、しかし楽しげに演奏している3人。70年代ロックのカヴァーをこの夜、キメてくれそうである。

30分ほどで3人が楽屋に戻ってくると、今夜が解散という極(獄)道のリハ。演奏は二の次という目立ちたがり屋のコピーバンドである。「服部」が聞こえる。「メチャクチャ」とハムーの西川大王が溜息をつく。

内堀は『テトリス』に夢中で、窓から吹込む雨に濡れそうな事にも気づいていない。その様子を見て、やはりゲームに興じているスーザンが笑う。「まったく!」と西川大王があきれたようにつぶやく。

クサイモン&ワキガーファンクルとハムーはその余裕のためか、リハを行わない。奥田民太郎は、旅の疲れか、隣室で大の字になって寝ている。そのうち、内堀も寝てしまった。

なんとも、リラックスした楽屋である。しかし、極(獄)道だけは、綿密なミーティングをしていた。

「2年ぐらい前の今ごろかな、まだデビュー前のユニコーンがここ(ラタン)に来た時、お客さんが0だったんだ。その頃は、地元のバンドとかとの対バンで、その対バンの客をとる、みたいなことをしてたわけ。だけど、その時は大学生のバンドでね、丁度、試験と重なったとかで、来なかったわけよ。おかげでお客は0。スタッフを前にライヴをやったんだ。ま、そのほうがやりやすかったよ」(笑)。まるで、自分のことのように西川大王が語る。それが今や、ユニコーンのコピー・バンドであるハムーでさえもこの人気。あらためてユニコーンの成長に目を細める西川大王であった。

ステージでのネタのために東スポを買い、お菓子をつまみ、ゲームをして、カード手品で人をだまくらかす義堀、マネージャーの原田氏にソックリなタコのぬいぐるみで遊んでいるうちに、6時、客入れ開始。

いつの間にか雨もあがり、昼間の暑さが戻ってきた。フロアーに詰め

B.M.B

まさに究極。流石名人、のそっくりさん

ハ・ムー

Ximon & Wakigarfunkle

Ximonのケムリ出しピアニカ

こまれた200人。

6時45分、極（獄）道からスタート。コーガンズのキース中田がステージに乱入。そのハプニングがさらに観客の熱を高める。「リンダ・リンダ」、超ショートな「服部」など、4曲を演奏した。そして、サンタバーバラ出身のクサイモン＆ワキガーファンクルが次を受けて現われた。

サイモン＆ガーファンクルは彼らの祖父であると言う。確かに、美しいギターの音色とハーモニーを聞くとうなずけなくもない。しかし……

㋗「私、日本でシャレ、覚えマシタ」

㋻「クサイモン、アメリカで牛、飼ってイマース」

㋗「ソウ、牛を、飼う(COW)！」

……こんな貧血を起こしそうなダジャレをサイモン＆ガーファンクルは死んでもやるはずないのだけれど…。

「次ノ曲は、ワタシがいつも鼻歌でうたっていたのをジョンが聞いて、欲シガッタのであげた曲デェス」と語り、ビートルズのデビュー曲「ラブ・ミー・ドゥ」を披露。

「ワタシ、日本のウェンカ(演歌)覚えマシタ」とワキガーファンクルは「与作」をうたい、「服部」と「人生は上々だ〜悲しいパターン」をアコースティック・ギターとピアニカで演奏し、クサイモンはヴォーカルとピアニカを交互に行う高度な技を持っているわ曲を間違えたワキガーファンクルにクサイモンがハリセン攻撃をかますわ、手品はするわで、爆笑のうちにステージを終えた。

ハムーは果たしてユニコーンになれるのか!?

3番目は、ガラリと趣きも趣向もまったく異なった硬派なバンドが登場。テッシーとEBIーと西川くんにソックリなのだが、気のせいか。

ギターの音が飛びだす。オープニングは「20th・センチュリー・ボーイ」。ギターのヘッドと弦の隙間に差し込まれた煙草。ギタリストが動くと、立ち登るうす紫色の煙も揺れる。ああ、エリック・クラプトンかキース・リチャーズか。

クールでありながらも、エキサイティングなプレイに観客も引き込まれている。「ブラウン・シュガー」「パラパラ」「フィンガー」をメチャ、カッコよくキメた。

ライヴハウスの中はうだるような暑さだった。メンバーも観客もシャワーを浴びたように全身、汗まみれ。「ペケペケ」の温泉の撮影よりヒドいなぁ」と、ハムーの西川がステージに向かいながら言う。いよいよ最後の、そして噂のハムーが姿を見せた。

激しく弾けたドラム、一曲目はツェッペリンの「ロックン・ロール」。スーザン、奥田民太郎、義堀と3人がリレーでヴォーカルをとる。「こんばんは、ハムーです。ピチピチした高校生バンドです」とヴォーカルの奥田民太郎があいさつをすると観客が沸きに沸く。あの、ふてぶてしい奥田民生のMCとは違って、初々しくカワイイ。さすがは高校生。「僕たちは、ユニコーンのコピーをしていて、なんでも出来ます。が、お金がないので、機材が足りなくて、出来ない曲もあります。出来るか出来ないかは、キーボードの義堀が決めます」と奥田民太郎がリクエストを呼びかけると、一斉に手と声があがる。スーザンが指名した男の子は「メイビー・ブルー」と叫んだ。このところユニコーンのコンサートでは演奏されていない曲だけに、当然の要求だろう。ハムーのメンバーもノリノリの演奏で応える。ステージから熱さが渦になって間近に迫ってくる。ライヴハウスの良さってここにあるんだと再認識してしまう。

2曲目のリクエストは「おかしな二人」。そして「服部」で、ハムーのステージとツアーは幕を閉じた。

汗ではりついた服と髪。楽屋では、西川大王がパンツ一枚でひっくり返って「暑い、暑い」とうわごとのように言い、「あー、替えパンツがないっ！」と誰かが叫んでいる。

「いやぁ、ライヴハウスもいいもんだね、暑かったけど。でも、武道館も暑かったんだよねー」と内堀。

あれ？ ハムーって武道館やったんだっけ、まさか!? という疑問を抱きつつ、取材班は帰路についた。

今後、ハムーがコンスタントに活動を行うかはわからないが、完ぺきなユニコーンになる可能性、素質は十分。これは想像だけど、もしかしたらユニコーンのステージに立っているのはハムー、なのかもしれない。

UNICORN

"UNICORN WORLD TOUR '89"

服部 IN 日本武道館 1989.7.10　Report／Yoko Fujino　Photo／Norio Kajiki

7月10日、東京・日本武道館。ついにやってきたユニコーンの武道館公演。

服部姓の方々を招待した服部シートがステージの斜め後方に用意されており、服部様御一行とデカデカと書かれた文字がまず、目を引く。

そして、ステージ。これがまたシンプル。セットらしいセットはなく、一段高い位置に据えられたドラム・セットからなだらかな傾斜がステージに続き、左右にはPAスピーカーを囲むように、約3mほどの高さにやぐらが組まれ、前方に一面のスクリーン。両サイドには長く伸びた花道があり、全体は白に統一。

これはもう、5人が5人だけを見せる場。このだだっ広い会場で、なんの飾りもないステージで1万人を前に5人だけで挑む、そんな潔ささえ感じてしまった。

客電が落ちる。それと同時にそれまでバラけていた1万もの意識が一気に前方ステージに集中した。スクリーンに服部の2文字が浮かびあがり、西川くん、テッシー、アベBEE、EBI、タミオ順で現れた。ステージにほぼ横位置となる客席に向かって「そこから手島くんは見えるか? 見えない? 見えない? それはホントに大・迷・惑っ!!」とタミオが叫ぶと、テッシーとEBIが弾け、花道に飛び出す。最初からパワー全開、会場もその勢いにのって揺れる。

「フドウカンはガイジンがヤルモノ。ワタシたちも出来テ、とてもウレシイです。ドモ、アリガト」とタミオが妙なガイジンなまりでご挨拶。まったく人を食ったヤツだと変に感心するヒマもなく「シュガー・ボーイ」に突入し、「ペケペケ」に入る前にはアベBEEがブルース・ハープを手にステージを走り回り、テッシーと左右のやぐらに登って、ギターとハープのバトルを展開。大迫力。

次に続く「抱けるあの娘」ではラストでタミオが卒倒、スタッフの手により退場させられ、アベBEEがマイク・ジャック。ああ、前半だけでもこの目まぐるしさ。全部を伝えると原稿用紙が何枚あっても足りないので、ちょっとはしょるぞ、バカヤローってなもんで、タミオがストリート・パフォーマーよろしくスティックでフロアーをちゃかちゃか叩いたり、テッシーはハード・ロッカーさなが

天は人の上に『服部』を作らず……

KOGUNS武道館参上!!

Special Thanks "The BEST HIT"
Photo Kazuya Sekiyama

M 1 大迷惑
M 2 Sugar Boy
M 3 ペケペケ
M 4 抱けるあの娘
M 5 アローン・トゥゲザー
M 6 サービス
M 7 デーゲーム
M 8 逆光
M 9 ペーター
M10 君達は天使
M11 パパは金持ち～リンボー
M12 シンデレラ・アカデミー
M13 Hey／ Man／
M14 おかしな二人
M15 服部
ENCOLE
1 リンボー
2 眠る
3 バラバラ
4 人生は上々だ

らにギターをガシガシと聴かせ、「パパは金持ち～リンボー」の間にはスタッフが一発芸を披露するスタッフ・ショーなる怪しげな趣向があって、なんとそこに噂のコーガンズのメンバーまでが乱入。

とにかく走る、動く。広いスペースをムダにしない律義さ。タミオのジャケットにストラップの跡が汗でにじむ。EBIやテッシーはこの比ではないだろう。「最後の曲はお前たちに捧げます！」と「服部」をフロント・ヘアのハード・ロック・バンドと化し、服部様御一行へ。

アンコールは西川くんのヴォーカルによる「バラバラ」。ピアノ・アレンジされた「眠る」。そして、極め付けは「人生は上々だ」のアベBEE。まっ白のエルビス・プレスリーばりの衣装で登場。

ご丁寧にマイク・スタンドまで白という用意周到さに加え、Y・ABEと書かれたタオルをひるがえしながらうたった。その上、P-Tのステージでクセになったか、またもやジュンスカのヨヒトとのデュオ。ヨヒトまでプレスリー。どうしようもない悪ノリぶりってヤツですか。

このステージに意味とか意図とか考えちゃいけないんだと思う。確かに、曲と曲のつなぎであるとかそういう必然的なもの、あるいはそのテクニック的なものは以前より断然、ウマくなっている。そういうことをクダクダ語るのもまたいいけれど、その前に、いかにやりたいことをやりたいだけ彼らがステージで表現しているかの方が大事なのだと思う。一見、自然体のようでありながらも実はちょっと作為的な部分をもちらつかせながら。

それは今回のタイトルでもある 服部だってそれを示している。名字という概念を破った時点でそれは観念としての存在になる。その観念自体がむちゃくちゃな服部に対抗するには、ユニコーン自体がさらにその上を行かねばならないっつーことなのだ。制約なんておよびでない、こりゃまた失礼の世界にしなければ彼らが負けちゃうから。だが、武道館というひとつのシンボルを利用してさらに強大な力を持った『服部』に彼らはまずは勝利をおさめた。けれど、これからがもっと見ものだろうなと絶対に思っているけどね。こんなもんじゃないって。

FENCE OF DEFENSE

2235 ZERO GENERATION 【完結編】

LAST LIVE of "2235" 7/4,5 渋谷公会堂

2235の完成形として、僕達の前に提示された3月15日、日本武道館でのライヴ。それから約4ヵ月、本当の意味での2235の最終幕が7月3、4日、渋谷公会堂2daysという形で降ろされた。

客電が落ち、「DARKNESS REMAIN THE SAME」の重々しい靴音が響く。ギター、ドラム、そしてピアノと続けて音が入ってくる。「DATA NO6」「BURN」「EMOTIONAL WAY」と続く。全体的な流れとしては〝2235〟の曲を中心に、うまく1st、2ndの曲をはさむ形となっている。すでに〝2235〟はステージ上で完成されていた。演奏力は全く問題なし、その上、構成、流れも全ての面を含めてである。

アンコールで2曲、次のアルバムに含まれる予定の曲をやった。4thアルバムは9月にリリースが予定されている。そこにはまた、みんながワクワクする様な曲がいっぱい入っているはずである。そして、北島健二がMCで言っているように、ロックン・ロール中心になる。それは、このアンコールの2曲でもよくわかる。

10ヵ月にも及ぶ〝2235〟プロジェクトの最終日。このプロジェクトは終ったけど、また新しいフェンス・オブ・ディフェンスが生まれたと言っても過言ではない。彼らは〝2235〟の旅からもどってきた。次なるターゲットは何か。9月発売の4thアルバム、そして秋に行なわれるツアーで新しくなったフェンスに会えるはずだ。

DARKNESS REMAINS THE SAME
I) 2235
II) DARKNESS REMAINS THE SAME
III) THE DANGEROUS OPERA BEGINS
DATA NO.6
BURN
EMOTIONAL WAY
PLASTIC AGE
BACK TO THE EDGE
SARA
HARD LIPS
FLOATING TIME
NIGHTLESS GIRL
STRANGE BLUE
MIDNIGHT FLOWER
HONEY MONEY
FAITHIA
—ENCORE—
CHAIN REAKTION
NAKED EYES
—MORE ENCORE—
PARALLEL

レポート／金子貴昭　撮影／松崎信彦(本誌

REBECCA

BLOND SAURUS TOUR

レベッカ・ブラボー!!

それは歓声というより地鳴りのようだった。東京ドームの空気が激しく震え、僕は息をするのがやっとだった。もしも近くにアラモの砦があったなら、きっとひとたまりもなかっただろう。

力強いレベッカがこの日の総てだった。ノッコはまるでアマゾネスのようだった。たくましく、そのくせぞくっとするほどセクシーで、本能的で、センチな涙さえも挑発的だった。ノッコは一流の表現者であり、超一流の女だ。

派手なスタンドプレーヤーはいないのに、1つ1つの楽器の感情は驚くほど抑制されているのに、一体化したときの爆発力、瞬発力、説得力はどうだ。彼らは日本の(『おせっかい』、『狂気』、『アニマルズ』の頃の)ピンク・フロイドだ。

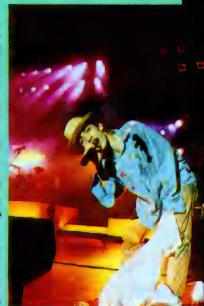
彼らの演奏にノッコが合体すると、空気は一瞬にスパークし、決して押し付けでないグルーヴ感が生み出される。演出が控え目な分、この日のグルーヴ感は、きっと居あわせた1人1人の骨の髄まで染み渡ったことに違いない。レベッカは大会場にふさわしい日本の、僕の知る限り唯一の、ポップ・ミュージシャンだ。

そうしたグルーヴ感に混じって、僕の耳には〝まだまだやりたいことが山のようにあるからねー〟といった叫び声が、ズシン、ズシンと届いて来た。そうか、ブロンドサウルスが言いたかったのはこのことだったのか。メンバー間の不協和音、ノッコの入院とコンサートのキャンセル。谷底までおっこちて自力ではい上がった者だけが持つことのできる、それは本能の叫びである。

アルバムにはやはり迷いが見られるが、7月17日ビッグエッグで、その迷いは完全に砕け散ったことだろう。間髪を入れず制作に入るという次のシングルやアルバムでは、あの地鳴りを曲で伝えて欲しい。まあでも意欲的なときは、休むのがもったいないものなので今日のところはレベッカ、ブラボー!でレポートを終わります。おめでとう。

'89.7.17 BIG EGG

レポート/小林由明　撮影/松崎信彦(本誌)

カステラです！ホンジャ、やりまーす！

事前にこの日のためのプランを色色と質問したら、まだな〜んにも考えてなかったようだったけど、〝オープニングが勝負！〟とかなり力一杯コメントしてたので、〝どれどれ、どれくらいやれるか見てやろうじゃん！〟ってかんじで楽しみにしてた。なんと、トモくん、ハセガワくん、フクダくん、フクチくんの4人は自転車でステージに登場。なかなか健闘してた。

そんでもって1曲目は、盛り上がりまくるオーディエンスの見守る中での「デート」。トモがマイクを口にぶつけちゃうくらいの勢いで「電車はいいな」と進む。MCでは、「美空ひばりサンがなくなられた今、日本の音楽シーンをリードするのはカステラだ」と豪語しながらも、まだ明るい会場を見渡して、「落ち着いてるからみんなのひとりひとりの顔がよく見えます」なんて嬉しいことを言ってくれる。そのすぐ後に新曲「手ぶらのうた」「アタマを回すと世界が回る」を——チョ〜ットだけ歌詞を忘れてたケドね——披露してくれるなどサービス満点のステージだ。それでもいつも通りのカステラ・ペースを崩さず、ステージは二部構成。再びメンバーが登場し、9月にCBSソニーからプロ・デビューを果たすことを報告してからの「お天気おじさん」「記憶力」「アタマのわるいやつ」を比べると、一部でふくれ上がったパワーが最高潮に達したようで、一曲一曲がとてもエネルギッシュだ。〝カステラのライヴは一曲ずつのブツ切りだから〟なんて言ってたけど、なかなかどーして、ライヴの流れがしっかりあるじゃない！ 前回の日本青年館でのライヴよりも数段よい！ 屋外の解放感も手伝ってみんな思い切り楽しんでた。この楽しいライヴを体験させてくれるカステラは、トモ曰く〝人間らしいバンド〟なのだそうだが、デビューしたら遠い人になると連呼してみんなを大笑いさせてくれた。だって、デビューが決まったって野音でのライヴが実現したって、コンサート・タイトルが〝東京ドーム前夜祭〟(笑)でも、4人はいつもと変わらず淡々とカステラ・ノリで我が道を行くってかんじ。曲の途中でギターを持ち替えたハセガワは思わず〝すみません！〟なんて言っちゃうし、フクチはアンコールで短パン姿、ハセガワは妙な赤いカツラで変にマジメ。アンコール2曲目の「わがまま」じゃ、大胆にもギター・ソロをぬかしてトモがひとりで突走り状態。それをその場でバラしちゃうのもカステラっぽいけど、その埋め合わせ(?)のために急拠曲数を増やしてしまう柔軟さも嬉しい。あげくの果てには、カメラマンお人払い。〝最後ぐらいバンドとお客サンだけでやらせてネ〟ってことで、トモからステージ前での撮影禁止令が出されたわけだが、それじゃカメラマンの方々があまりにも可愛そうってことで、いっかにも〝ライヴだぜ！ 歌ってるぜ！〟ってポーズでの撮影会まで行なわれてしまった。やってくれる！

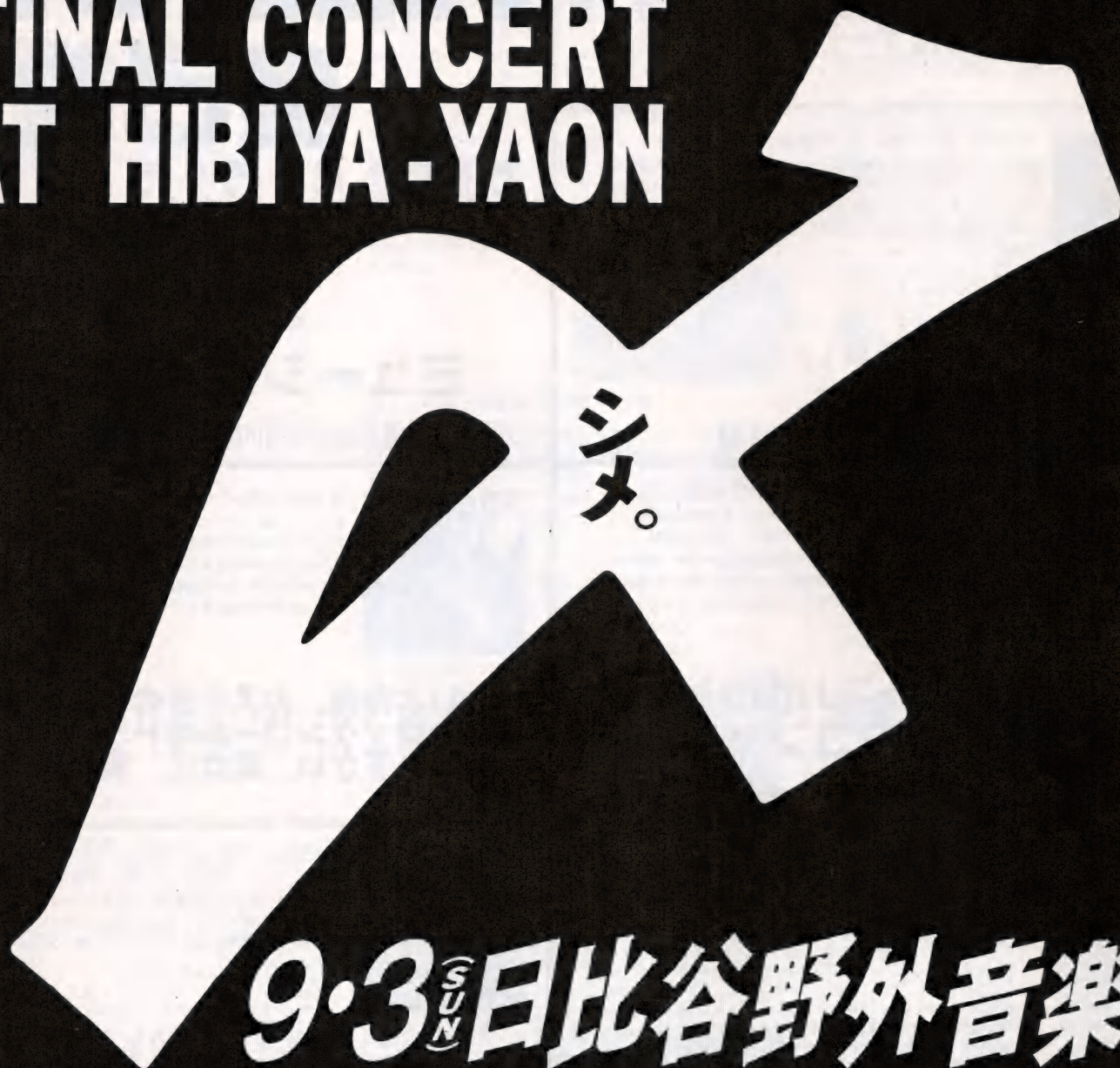
「熱血ライヴを繰り広げているバンドもいるけど、俺達は小っちゃい所でも大きい所でも淡々とライヴをやっていくから、これからも見に来てネ」と、トモが可愛らしく挨拶した。1曲が短いせいか、全29曲のステージは、軽快なリズムにのっていつの間にか幕を閉じたけど、カステラはこれからが本番だ。と、言っても観る側も本人達も全部まとめて、オープニングのトモの言葉みたいに〝カステラです。ホンジャ、やります！〟ってかんじだ。気楽に面白くいこう。

レポート・星野京子／撮影・関山一也

KENZI & THE TRIPS

FINAL CONCERT AT HIBIYA-YAON

〆

シメ。

9・3(SUN)日比谷野外音楽堂

●札幌時代の「LEOSTAR8」から「CRAZY SUMMER」ツアー配布ソノシートまでの貴重な音源による「'84〜'86」、メジャー・デビュー曲「DIANA」から最新作「KANGAROO」までのKENZI & THE TRIPSの軌跡を追った「〆(シメ)」、2作同時にリリース!

KENZI "'84〜'86" <EARLY SINGLES>

JPD-407 税込定価¥2,348[税抜価格¥2,280]CDのみの発売

KENZI & THE TRIPS "〆(シメ)" <BEST ALBUM>

JPD-103 税込定価¥2,627[税抜価格¥2,550]CDのみの発売

8・21 ON SALE

●KENZI & THE TRIPSのベーシスト、上田ケンジ初のソロ作品。サポートにCOLORのTATSUYA(G.)、KENZI & THE TRIPSのシンイチロウ(Dr.)他、バック・コーラスにPOGOの春日、GEN他、豪華ミュージシャン参加。

KENJI UEDA "BAD AT LIFE" <SINGLE CD>

JSD-4 税込定価¥937[税抜価格¥910]2曲収録、CDシングル

9・3 ON SALE

Far-East Network Music Publishing
CROWN MUSIC PUBLISHER, INC.
販売元 クラウンレコード株式会社

NEUROMANCER／De—LAX
●フォーライフ　CD＝FLC-4007　8月2日　¥3100(税込)
LP＝FLA-4002　8月2日　¥2637(税込)
①SPRITS A GO-GO②MAYBE SUNDAY③HAPPY JAP④CYBERSEX⑤TEENAGE WILD⑥TREASURE LAND⑦SUPERCADILLAC⑧NEUROMANCER⑨BABY BABYLON⑩LONE WOLF⑪CRISIS　99⑫DAYDREAM

5人の個性は一つ“De-LAX SOUND”となってかたまった。このアルバムを聴け！きっとLIVEで会えるはず…。

(De-LAX)

ALBUM
自己紹介

♬♪♬♪♬♪♬♪♬

好き勝手に書いて
アルバム売れりゃ
ミュージシャン大いばり

HUMAN RHYTHM／中川勝彦
●NECアベニュー　CD＝N29C-29　8月21日　¥3008(税込)
①ブルー・アイドル②LIP TRIP③戻らない空と海とジャングルと君と④I CALL YOU⑤LAST CHILD⑥LONDON CALLIN'⑦僕の小さな国⑧EVERY BODY～僕の歌は君の歌⑨全てうまくいけば⑩夜空に(OVERTURE)

我も我もと競い合う
気がついたら何もない
全てうまくいけ
たった一つの　僕の小さな国

(中川勝彦)

DREAM＋REVOLT／SHEENA&THE ROKKETS
●ビクター音産　CD＝VDR-1623　8月21日　¥3008(税込)
LP＝VIH-28372　8月21日　¥2637(税込)
①JUNGLE² ②DREAM＋REVOLT③SOLDIER④LOLLIPOPS＋RAINBOW⑤LEVEE BREAKS⑥PILLOW TALK⑦ANGEL EYES⑧ALMOST BLUE⑨BE COOL⑩I GOTTA MOVE⑪PARMANENT HONEYMOON

ドリームアンドリボルト。
ロックの永遠のコンセプト。
心が強くなれる。

(シーナ)

世界の娯楽／カステラ
●CBS・ソニー　CD＝32DH5295　9月1日　¥3008(税込)
①夜明け②太陽テカテカ③軽くなる④やすくなる⑤アイマイ家族⑥歯が抜ける⑦お天気おじさん⑧ヤダヤダ⑨ビデオ買ってよ⑩頭の輪あるいヤツ⑪セミの唄⑫夜更かしは出来ない⑬体力に限界はあるのか⑭ワガママ⑮温室育ち

いよいよ発売、カステラのフル・アルバム。最高のロックンロールのドライブ感を15曲、お楽しみ下さい。まさに、実力派です。

(CBSソニー販促部)

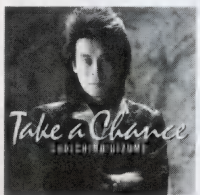
砂漠の熱帯魚／Toru Suzuki
●EPIC・ソニー　CD＝32・8H-5104　8月21日　¥3008(税込)
①夜を泳いで②君が降りてくる時間③砂漠の熱帯魚④想像デート⑤街にあきた僕⑥風の路⑦ひぐらし⑧エッシャー的恋愛⑨paradise へ parade⑩避暑地が遠くなる

「砂漠の熱帯魚」すごく魚が苦しそうなタイトルがついています。音の方はタイトルのそれとは打って変って“気持ち良い”この言葉につきると言えるでしょう。ある方はこう言っておられます。『まるで洗いたての肌衣をつけている様』だと。そして僕も思います。『まるで乾きたてのT・シャツの様にからだに良くなじみます。』
ヨロシク、「砂漠の熱帯魚」鈴木　トオル。

(鈴木トオル)

WASTED TEARS／SHOGO HAMADA
●CBS・ソニー　CD＝32DH-5269　9月1日　¥3008(税込)
①LONELY―愛という約束事②SILENCE③BREATHLESS LOVE④悲しい夜⑤ロマンス・ブルー⑥MIDNIGHT FLIGHT―ひとりぼっちのクリスマス　イブ⑦傷心⑧もうひとつの土曜日⑨ラスト・ダンス⑩防波堤の上

バラードセレクション「WASTED TEARS」9/1リリース。直訳すると無駄になった涙……。さまざまな世代をこえてのラブバラード集、自分にとっての愛をたしかめて下さい。

(浜田省吾)

TAKE A CHANCE／日詰昭一郎
●BMG・ビクター　CD＝R32A-1057　8月21日　¥3008(税込)
①CHANCE②SCHOOL GIRL③DREAMER④WEEKEND LOVE⑤ZEUS⑥GO BACK TO THE CITY⑦ANNIVERSAIRE⑧WITHOUT YOU⑨ROOM NO.909⑩DESTINY⑪CLOSE YOUR EYES

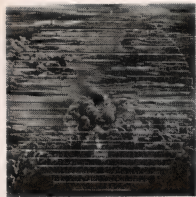
ポップな曲からプログレぽいアレンジの曲まですごく聴きやすいアルバムになっています。真夏の夜に素敵な人と一緒にカーステレオでお楽しみ下さい。

(日詰昭一郎)

PRIDE／CHAGE&ASUKA
●ポニーキャニオン　CD＝D36A1048-1～2　8月25日　¥3800(税込)
1)①LOVE SONG②PRIDE③SHINING DANCE④HOTEL⑤Break an egg⑥さよならは踊る⑦砂時計のくびれた場所⑧天気予報の恋人⑨Don't Cry Don't Touch⑩絶対的関係⑪流れ星のゆくえ⑫WALK 2)①MOON LIGHT BLUES②嘘③終章（エピローグ）～追想の主題④熱い想い

10年の軌跡と複雑

(PONY CANYON)

ALBUM自己紹介

ORCHESTRATION BOØWY−インストゥルメンタル
●東芝ＥＭＩ CD＝CT32-5522 8月9日 ¥3008(税込)
①LONGER THAN FOREVER②RAIN IN HEART③JUST A HERO④WELCOME TO THE TWILIGHT⑤季節が君だけを変える⑥Ｂ・Ｅ・Ｌ・Ｉ・Ｅ・Ｖ・Ｅ⑦MEMORY⑧CLOUDY HEART⑨ONLY YOU⑩BLUE VACATTION

BOØWYの名曲が、オーケストラで甦る。モダンクラシック界の気鋭ロビン・ミスティ・スミスの編曲によるBOØWYオーケストラ・バージョン。ライナー・ノーツ布袋寅泰。

（東芝ＥＭＩ宣伝）

THE MINKS／THE MINKS
●ビクター音産CD＝VDR-1630 8月21日 ¥3008(税込)
LP＝VIH-28373 8月21日 ¥2637(税込)
①パッシュ②ダーリン③READY STEADY④WAR IS OUT⑤時代の忘れ物（LIVE）⑥野良犬になった日⑦HAPPEN THE BEAT⑧テレキャスター58⑨孤独の疾走（LIVE）⑩WAH！OH！AHH！⑪相棒

思いっきり聞いてくれ！
THE MINKS ヨシアキ

KICKED AND KLAWED／CATS IN BOOTS
●東芝EMI CD＝CP28-5900 9月6日 ¥2627(税込)
LP＝RP25-5900 9月6日 ¥2348(税込)
①SHOTGUN SALLY②NINE LIVES③HER MONKEY④WHIP IT OUT⑤LONG LONG WAY⑥COAST TO COAST⑦EVERY SUNRISE⑧EVIL ANGEL⑨BAD BOYS ARE BACK⑩JUDAS KISS⑪HEAVEN ON A HEARTBEAT⑫TOKYO SCREAMIN'

アルバム自己紹介と言われても、言葉若干だし。ロックだけど、それ一言ですまされるとムカつくし。血のかよったヤツは、ふれてみればわかるけど刺激的だな。でも買ってくれなきゃ話になんないな…な！

（大橋"JAM"隆志）

Incompect…／DOOM
●ビクター音産CD＝VDR-1635 8月21日 ¥3008(税込)
VIH-28374 8月21日 ¥2637(税込)
①I can't go back to myself②Eating it ran③20 century a proud man④Killing time⑤A sandglass of the jungle⑥Death of false ROCK!!⑦I will be with you⑧Lost！in my head⑨Sympathy for the devil⑩Desert flower⑪Incompent… The war pig

アメリカはバンドの数だけジャンルのある広大な国だ。そのアメリカで、ＤＯＯＭのジャンルはＤＯＯＭであった。

（DOOM）

CUTTING AIR(Act Ⅰ)／AIR PAVILION
●キング CD＝292A-39 7月21日 ¥3008(税込)
①Lonely Heart's bleedin'②Heaven's On Five③Always Gonna Find You④Bad Bad Girls⑤(Even) Sitting Next To You⑥Trapped⑦Wasting Time⑧Dragon's Alive

今まで日本のロック・バンドが表現し切れなかったスケール感をメイン・テーマにしぼって制作しました。ぜひボン・ジョヴィやヨーロッパあたりとならべて聞き較べてみて下さい。HR／HMの好きな人は１曲目から、そうじゃない人は３、６曲目あたりから聞いて下さい。ゲストのダグ・アルドリッチ、リー・ハートも熱演しています。

（米持孝秋）

NOW PRINTING

浮世の夢／エレファント カシマシ
●EPIC・ソニーCD＝32・8H-5112 8月21日 ¥3008(税込)
①「序曲」夢のちまた②うつらうつら③上野の山④ＧＴ⑤珍奇男⑥浮雲男⑦見果てぬ夢⑧月と歩いた⑨冬の夜

大作です。皆さんも心して聞いて下さい。

（レコード会社宣伝担当 上岡裕談）

非実力派宣言／森高千里
●ワーナー・パイオニア CD＝29L2-85 7月25日 ¥3008(税込)
①17才②これっきりバイバイ③だいて④非実力派宣言⑤今度私どこか連れていって下さいよ⑥はだかにはならない⑦私はオンチ⑧しりたがり⑨若すぎた恋⑩Ａ君の悲劇⑪夜の煙突⑫その後の私（森高コネクション）⑬夢の中のキス⑭17才

どれもこれも私のアルバムより出来が良いに決まってるわ！ 非実力派ウーマン"森高千里"の非実力派宣言!! ふーっ

（森高千里）

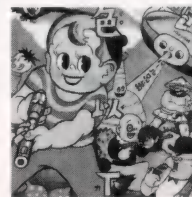
Marmalade Kids／PICASSO
●キティ CD＝HOOK20155 7月25日 ¥3008(税込)
①WELCOME TO THE MARMALADE POP②月曜の朝は金曜の夜じゃない③MASTERPIECES④COMMUNICATION BREAKDOWN⑤THE LOSER⑥太陽だけが知っていた⑦夏の約束⑧９番目の季節⑨SHOWER⑩どんな気分さ？⑪WAITING FOR YOUR LOVE

ピカソはサイケでポップです

（ピカソ）

スカーピープル／泉谷しげる
●ビクター音産 CD＝VDR-4001 8月21日 ¥1500(税込)
①果てしなき欲望②スカーピープル③NEW ビンボー!!④俺は荒野

名盤復活。これが本当のロックだ！

（ビクター音産）

色以下（イロイカ）／パール兄弟
●ポリドール CD＝HOOP-20345 9月6日 ¥1504(税込)
①色以下（イロイカ）②サーフィンTokyo③バカボンのBACK YOU④TOYUOX（エナジーMIX）

色（セックス）をぶちぬいて
秋を丸かじりの
デラックス４曲CD

（サエキけんぞう）

Super Natural／EPO

●MIDI CD＝32MD-1051　7月21日　¥3008(税込)

①Everybody Knows②うさぎがはねた③Seven Little Hours④チクタク⑤本当の色⑥Why⑦いろんな国で暮らしたい⑧矛循の中で生きてる⑨Never Alone⑩母の言い分⑪Super Natural⑫Every Knows

愛は超自然現象

(EPO)

YUKO ISHIKAWA SINGLE COLLECTIONS(1985-1988)
春でも夏でもない季節

●東芝ＥＭＩCD＝CT32-9019　8月5日　¥3008(税込)

①約束のアルカディア②目撃者③ドリーミー・ドリーマー④時を置いて⑤ヴィーナスは泣かない⑥夢色気流'87⑦ニールサイモンも読みかけのままで⑧夏のボサノバ⑨第二章⑩愛を振り向かないで⑪愛をそのままにして――君へ――⑫涙のロードレック⑬左手の指輪⑭春でも夏でもない季節⑮媚薬とナイフ

長い道程を歩いてきたあなた。すこし時を置いて、振り向いて下さい。シングルカットされた曲を１枚のＣＤに集約。絵に浮かぶようなサウンドと、今の石川優子を感じて下さい。

(ヤマハ音楽振興会　宣伝課)

ARE YOU CHAP?／桜井ゆみ

●ビクター音産CD＝VDR-1625　8月21日　¥3008(税込)

①Yumi's Rock②あたし良くなる③ほめて　ほめて？④エッヘッヘ⑤なんだかんだ舌かんでコニャニャチワ⑥オリエンタルブルース⑦ガンビアのおしかり⑧Think It Over⑨Darling吸血鬼⑩Let's Make Heisei Better Now⑪ランランSumertime⑫Love Letter For The Second Space Man

私のお得意の曲を集めて自分がどれだけBlack Musicを理解できるかためしてみました。

(桜井ゆみ)

DEVIL IN RED／THE STRUT

●ビクター音産CD＝VDR-9067　8月21日　¥2256（税込）
LP＝VIH-18　8月21日　¥1885（税込）

①DRIVE WITH THE DEVIL②(I WANT YOUR) HOT REACTION③KILLER IN YOUR EYES④PRIMITIVE LOVE⑤BY MY MAGIC⑥NIGHT MARE⑦FEAR OF THE DESERT

(THE STRUT)

ネイルフラン／割礼

●ビクター音産CD＝VDR-1637　8月21日　¥3008（税込）
LP＝VIH-28375　8月21日　¥2637（税込）

①溺れっぱなし②悲しみの恋人たち③目かくし④太陽の真ん中のリフ⑤バラ色の宇宙⑥ネイルフラン⑦君の写真

高なる鼓動に合わせ続け（音を選んでいき）「あっ」と言う恐怖までこの世のものとして残しまぶたを閉じた中で作っていった。

(割礼)

NEW VISION／ELIKA

●アポロンCD＝C194-1　8月21日　¥2000（税込）

①NEW VISION②危ない二人にブレーキ③雨上がりのSpecial Day④Love Me, Smile For Me⑤Happy Lucky Lonely～どんな時にも～⑥アルバムからSay Good-Bye

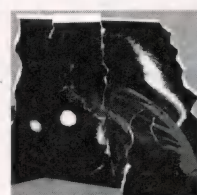
(ELIKA)

SORA／羽根田征子

●ＣＢＳ・ソニーCD＝32DH-5267　8月21日　¥3008（税込）

①ROSY HEART②恋唄千里③MILKY WAY④BESAME⑤SANDY⑥鳥のさえずりが聴こえる？⑦DADA⑧WINDY⑨EVER GREEN⑩HAPPY BIRTHDAY⑪Phénix⑫吹き過ぎた風のように

私のつくった私のうた。貴方の心に届け！

(羽根田征子)

STREET ANGEL／仲村知夏

●キングCD＝292A-46　8月25日　¥3008（税込）

①天使は眠っている②ほんとうに眩しい君③Can't you Dance?④野良猫⑤この街で輝くすべてのものにI LOVE YOU⑥Be Cool⑦涙は早すぎる⑧on the Rock⑨強引MY WAY

今回の私のアルバムは、Composerで氷室京介さん、De LAXのメンバー。Playerで吉田建さん、ホッピー神山さん、高橋まことさん、是永巧一さん佐橋佳幸さん達が参加してくれました。もうぜったいすごいから、よろしくネ！

(CHIKA)

PARTY'S Party／HOT SOX

●アポロンCD＝BAHI001　8月25日　¥3000（税込）

①HANDY MAN②JUST YOU③素顔のままで④ROPPONGI KIDS⑤TAKE A CHANCE⑥涙のハイウェイ⑦FUNKY ANGEL⑧SHOT GUN⑨I NEED YOU⑩残照⑪TIME TO CRY⑫HANDY MAN(DANCE VERSION)

「HOT SOXは、PARTY'S Party。サロンというコンセプトでパーティを楽しむ。"Passion for the PARTY"熱いコト！やったり、熱い空間！つくったり、モノクロームなモノを挑発していく。"Get Set…for the Sansation Seeking!"熱いシャワーで心のエネルギーを呼びおこして……。俺たちのやっていることはHi-スタンダード。音楽もファッションもパーティも、今回のアルバムはオールディーズ・サウンドのスピリットに共振する。

(HOT SOX)

Time-ize／森川美穂

●ＶＡＰCD＝80351　8月21日　¥3000（税込）

①チャンス②少年の瞳③プライド④Be Free⑤風の囁き⑥Good Luck⑦BreaK!⑧By Yourself⑨Real Mind⑩Mambo Soleil⑪Z-Z-Z-Z⑫はじめての記憶

支えてくれている人達と、自分の足にいつも感謝の森川が、ワガママに12曲セレクトした夏バテ防止アルバムです。案ずるより、転ばぬ先の森川のパワーを感じて下さい。

(森川美穂)

オリジナル サウンド コンテスト

SMB'89

サンチェーン ミュージック バトルロイヤル

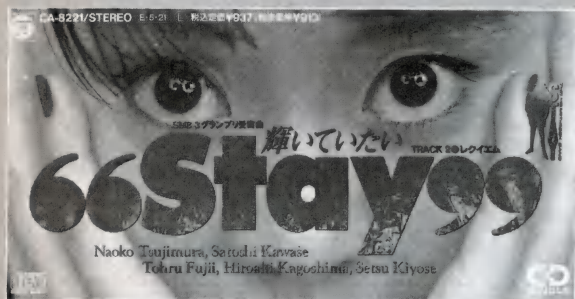
エントリー受付中
9月8日まで!

"SMB"がやってきた!

1,150店舗の広がりを持つシティコンビニエンス「サンチェーン」が、プロミュージシャンへの第1歩をお手伝いする音楽コンテスト『SMB'89』が今年もまたやって来ました!!

音楽大好きの皆さんが、自分達の楽曲をたくさんの人に聴いてもらいたいという欲望をかなえてしまう、とってもコンビニエンスなコンテストだから、作曲家・作詞家・CM音源制作・プロデューサー等をやりたいという人も含めて、今年も"大募集"です。この指止まれっ!

9/17(日)東海地区大会(テレピアホール)
《愛知、三重、岐阜》
【応募締切】'89年8月25日(消印有効)
【予選会】テレピアホール(名古屋東海テレビ)
【応募宛先】〒461 名古屋市東区筒井2-12-40 第2八晃ビル7-A ジェットプランニング内 SMB事務局募集係
【問い合せ先】(052)937-7020(ジェットプランニング)

笑われたって、しかられたって、
捨てられない夢がある!!

SMB'88グランプリ「STAY」
『輝いていたい』(サンチェーンイメージソング)'89.5.21発売 —日本コロムビア—

SMB'88
サンチェーン賞
「岩田麻里」
『ルール違反/KISS!』
'89.1.21発売
『Girls be Vicious』
'89.3.21 1stアルバム
『LOVE SLAVE』
'89.7.21 2ndシングル
—ポニーキャニオン—

SMB'88特別賞
「Chime」
『少年のように…
(Come to Myself)』
'89.4.25発売
—ヴァーンメディア—

【応募方法】
応募用紙に必要事項を記入し、テープ、写真、歌詞カード、定額小為替とともに郵送して下さい。応募用紙は全国のサンチェーン店頭、ライブハウス、楽器店等に置いてあります。もし、入手が困難な場合には、SMB事務局までご連絡下されば、郵送します。応募用紙はコピーでも構いません。

【募集期間】
1989年7月1日(土)~1989年9月8日(金)(消印有効)

【作品の権利】
受賞作品の権利はSMB事務局に帰属します。

【表彰】
グランプリ 1組:賞金70万円及び副賞
特別賞 5組:賞金10万円及び副賞
入賞 若干:賞金5万円及び副賞

【発表】
中間発表 サンチェーン店頭でポスターにより発表。(10月中旬)
発表 10月28日 日本青年館及び、アリーナ37℃他 各音楽誌紙上にて発表。

【授賞式】
月日 1989年10月28日(土)
場所 日本青年館(東京、外苑)

【デビュー】
受賞者には、協賛レコード会社に所属し、レコードデビューの機会が与えられます。

【ゲスト審査員】(敬称略)
上田正樹(ヴォーカリスト)
井上鑑(プロデューサー)
志熊研三(サウンド プロデューサー)
土橋安騎夫(レベッカ キーボード)
阿部祐三(TVプロデューサー)
(順不同)

【ゲスト審査員からのアドバイス】

誰にでもどこか光るところがあるはずです。そこを、うまく磨き出し、いいものを生み出して見せて下さい。……阿部祐三

今年もどんなバンドが出てくるか楽しみにしています。今回はオリジナリティで勝負するのはいかがですか?…志熊研三

【応募宛先】
〒162-91 東京都新宿区牛込郵便局 私書箱第134号
SMB事務局募集係
【問合せ先】 SMB事務局(フレイア内) 03(204)4060

主催 SMB事務局
後援 シティコンビニエンス サンチェーン
協賛 PONY CANYON INC.
日本コロムビア taurus
NECアベニュー ファンハウス
TOSHIBA EMI vap
KORG TOA
Ibanez FOSTEX
DYNAWARE DENON
東海テレビ放送 (順不同)

協力 (株)シンコー・ミュージック (株)キティ・アーティスト
(株)ハロー・グッドバイ (株)アベクカンパニー
(株)ジーベック ジェットプランニング
SHARP STUDENT of the YEAR
(順不同)

企画・制作 FLAIR フレイア

定価は全て税込価格です

最新VIDEO情報

米米CLUB大全集Kick Knock-SHARISHARISM7-Vol.7／米米CLUB

（CBSソニー、Ⓥ48ZH－249、Ⓑ48QH－249、4800円、7月21日、60分）

〈収録曲〉ShakeHip, KickKnock, OH!米GOD, KOMEKOMEWAR, 東京砂漠, KUNG-FULADY, トラブルフィッシュ他。

米米クラブ待望のライヴビデオ登場。4月6、7日、東京ベイNKホールで収録。

SPECIAL I LOVE YOU／GO-BANG'S

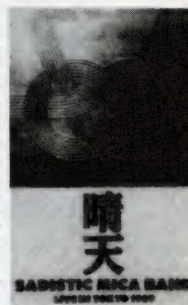
（ポニーキャニオン、ⓋZ55M－909、ⒷX55M－909、5605円、7月12日、58分）

①OK／②HAPPY BIRTHDAY③スペシャル・ボーイフレンド他全14曲。

GO－BANG'Sの5月10日渋谷での初のホールコンサートをビデオ収録。

晴天／サディスティックミカバンド

（東芝EMI、ⓋⒷFV050－1－029、45分、7月26日、4944円）

①どんたく②颱風歌③薔薇はプラズマ④42℃のピクニック⑤脳にファイアー⑥暮れる想い⑦賑やかな孤独他全18曲

再結成で話題を呼んだサディスティック・ミカ・バンドのただ一度のライヴを収録。4／8、9東京ベイ・NKホールでのライヴ。

TAKURO YOSHIDA IN BIG EGG Pt2

（フォーライフ、V38M4023、VHSのみ　8月21日、3924円、39分）

①七つの夜と七つの酒②ああグッと③シンシア'89④恋唄⑤パラレル⑥春だったね⑦ロンリー・ストリート・キャフェ

先月号で紹介したビデオの続編。必殺の「シンシア」、「春だったね」の2曲も入っている。一緒に歌うんじゃねーぞ。

ROLLIN'WORLD／SHOW-YA

（東芝EMI　ⓋⒷFK050－1－027、7月26日、50分、4944円）

①限界ラバーズ②I gotta your love③Come On／④Rock Train⑤Keep me in your heart他全11曲

平和コンサート「MUSIC SUMIT」出演も決定したSHOW－YA、4月16日、汐留PIT IIでのライヴビデオ。「私は嵐」のクリップ付。

布袋寅泰	GUITARHYTHM	50	11	TO	89. 1/11	ⓋⒷFK048-1009	¥4635	布袋寅泰の初ビデオはオールクリップ。『GUITARHYTHM』を完全ビデオ化。
COMPLEX	BE MY BABY	9	2	TO	89. 5/3	FK020-7004H VHSのみ	¥1978	「BE MY BABY」「PRETTY DOLL」のクリップを集めた1stビデオ。
氷室京介	KING OF ROCKSHOW	90	19	TO	89. 6/28	ⓋⒷFK062-1012	¥5974	氷室京介堂々1stビデオ。ヒストリー・ライヴ、インタビューなど豪華な一本
J(S)W	全部このままで	10	3	VAP	88. 7/21	Ⓥ60499-00	¥1875	人気フットウ、ジュンスカのファーストビデオクリップ集。
ブルーハーツ	ブルーハーツ	10	3	メルダック	87. 3/21	ⓋMVPS-2 ⒷMVPB-2	¥2410	ブルーハーツのデビュー・ビデオ。アルバムより先に出た本当のデビュー作品。
	LIVE！	45	11	メルダック	87. 9/1	ⓋMVPS-3 ⒷMVPB-3	¥5706	ブルーハーツ2本目のビデオは日比谷野音のHOTなLIVEだぜ。Dance with The Blue Hearts！
	ブルーハーツ武道館を見学	26	6	メルダック	88. 6/21	ⓋMVPS-5 ⒷMVPB-5	¥2894	88年2月11日の武道館ライヴ。どこでやってもやっぱりブルーハーツ。
THE STREET BEATS	NAKED HEART	20	3	V	88. 11/12	ⓋVTM-157 VHSのみ	¥1741	ビーツの1stビデオ。インクでのライヴを中心に収録。
	PROCESS	30	6	V	89. 5/21	ⓋVTM-185 VHSのみ	¥4635	2stアルバムの予告編ともいえるビデオ。いろいろな映像で楽しめる
ANGIE	バナナの恩返し	20	4	メルダック	77. 9/21	ⓋMVP-6 ⒷMVB-6	¥1926	ビデオ・クリップとライヴの2本立の1stビデオ。
	太陽の季節	60	13	メルダック	89. 5/21	MVPS-17 VHSのみ	¥3811	89年3月20日の渋谷公会堂のライヴとタイのロケを中心に構成した
THE WILLARD	Haunted Years	40	6	V	89. 4/26	FK038-1023 VHSのみ	¥3667	メジャー初ビデオはストーリー形式、初期のロフトなど貴重な映像がたっぷり
LÄ-PPISCH	ANIMAL VISON	29	5	V	89. 4/21	VTM-174 VHSのみ	¥3667	ビデオ・クリップ、香港ロケをたっぷり入れてこりゃいいわい。
KATZE	きのうの事	22	5	B	89. 3/21	28MS15004 VHSのみ	¥2709	カッツェ1stビデオは昨年12月のパワーステーションでのライヴを収録
筋肉少女帯	KIN-SHOW大残酷	10	2	VAP	88. 7/21	Ⓥ60501-00 Ⓑ60502-00	¥1875	ボヨヨーン。筋少の1stクリップ集だよーん。B級スプラッタービデオ。
X	爆発寸前GIG	60	15	CS	89. 6/1	Ⓥ42ZH241 Ⓑ42QH241	¥4326	Xのファースト・ビデオは3月16日、渋谷公会堂のライヴを収録。
ARB	LOVE THE LIVE	60	12	V	89. 1/21	ⓋVTR-169 VHSのみ	¥4635	結成10周年の10月31日、武道館でのライヴを収録。迫力あふれるライヴ
米米CLUB	KOME KOME TV ONODA-SAN	30	3	CS	87. 7/22	Ⓥ48ZH-135 Ⓑ48QH-135	¥4635	米米クラブ初のビデオは何と、スッゲエお笑いの集大成。いやぁ楽しめますわい。
TOKYO POP		99		松竹	89. 2/21	ⓋⒷKF10561	¥15275	レッド・ウォーリアーズの田所豊が出演した映画のビデオ化作品
浜田麻里	RETURN TO MY SELF	20	4	V	89. 7/5	VTM-189 VHSのみ	¥3667	LAでのレコーディング風景を収めたビデオ・クリップ集。他のオフショットも収録。
SHADY DOLLS	HISTRIC PRESENTS	22	4	BD	89, 3/21	28MS-5005 VHSのみ	¥2709	'88年10月のホコ天GIGと日本青年館のライヴをドッキングさせた1stビデオ。
松岡英明	LADY STUDY GO	20	1	ES	89. 4/21	Ⓥ382H-175 Ⓑ381H-175	¥3667	シングル「スタディ・アフター・スクール」のメイキング・ビデオ。
BO GUMBOS	宇宙サウンド	30	7	ES	89. 4/21	Ⓥ382H-157 Ⓑ381H-157	¥3667	ボ・ガンボスの1stビデオは浅草でのビデオのためのライヴ。あーありがたや。

ARENA37℃ ビデオ通信販売申込書

▲種類　VHS又はベーターをはっきり明記下さい。

●本誌で紹介した「ミュージック・ビデオ・カセット」は、最寄りのお店でも販売しておりますが、購入しにくい方は「音楽専科社」でも通信販売致します。

●御希望の方は、右記申込み欄にビデオ番号、種類別（VHS又はベーター）、タイトル名とあなたの住所、氏名、郵便番号、電話番号をはっきり明記し、商品代金と送料400円を合わせて現金書留で下記宛までお送り下さい。

●商品発送　申込み用紙到着後、3週間以内にお手もとに御送付致します。

●宛先　〒104 東京都中央区銀座5-1-7（数寄屋橋ビル）音楽専科社「ビデオ通信販売」係　TEL03(574)0201　担当　岩井

ビデオ番号	タイトル名	種類	本数

住所			
氏名	㊞	年齢　歳	男・女
TEL		同封金額¥	
保護者名		保護者印	

VIDEO通販情報

アーティスト	タイトル	分	曲	発売元	発売日	テープナンバー	定価	内容
THE ALFEE	アルフィー/ヒストリー1982～1985	60	20	ポニー	85.12/15	ⒷV98M1303 ⒷX98M1303	¥9476	人気絶頂のアルフィー。本作は彼らの82～85年における音楽活動にスポットを当てた、ドキュメント・タッチのビデオ。
	SUNSET-SUNRISE1987. AUG.8-9 ALL NIGHT LIVE	90	18	ポニー	87.9/30	ⓋV-128M1526 ⒷX-128M526	¥12381	アルフィーの87年8月に行われた日本平オールナイトライヴのライデビデオ。イベントの追体験ができちゃう。
	MEIGAKU LIVE	40	9	ポニー	88.6/21	ⓋV49M―1667 ⒷX49M―1667	¥4738	アルフィー強力ビデオは'87年11月3日の明学大学祭ライヴ。雰囲気バッチリ。
	ALL OVER JAPAN 4 ACCESS AREA	120	17	ポニー	88.10/5	ⓋV128M―1739 ⒷX128M―1739	¥12381	アルフィーの夏のイベント、4ACCESS AREAを4ヵ所完全収録。オフ・ステージも入ってます。
	The ALFEE in激突	30	8	ポニー	88.12/21	ⓋV49M―1792 ⒷX49M―1792	¥4738	東映映画『激突』のハイライト・シーンとアルフィーのライヴ、高見沢の天草四郎と見どころたくさん。
	THE ALFEE with Jean Paul GAULTER	50	8	ポニー	89.6/21	ⓋV68M1889 ⒷX68M1889	¥7004	アルフィーとゴルチェのイベントから、'89年4月2日の東京ドームの模様を中心に収録。
ストリートスライダーズ	スライダーズGIG	39	11	ES	85.6/21	Ⓥ38・2H―164 Ⓑ38・1H―164	¥3667	3rd LP『JAG OUT』までの集大成的な選曲で構成。
	摩天桜のダンス天国	40	11	ES	86.12/21	Ⓥ42・2H―165 Ⓑ42・1H―165	¥4058	ノリにノってるスライダースの本格ライヴ。'86年8月5日、新宿都有3号地での模様を収録。
	Suck The Blues	25	8	ES	88.4/21	Ⓥ38・2H―120 Ⓑ38・1H―120	¥3667	ビデオクリップとJOY-POPSの入ったスライダーズのかっこいいビデオ。
	ROCK'N ROLL DEF SPECIAL	40	9	ES	88.10/21	Ⓥ58・2H―141 Ⓑ58・1H―141	¥5603	8月11、12日に日本武道館で行われた"ROCK'N ROLL DEF SPECIAL"のライヴ・ビデオ。
	MADE IN JAPAN	32	6	ES	89.3/21	Ⓥ38・2H―156 Ⓑ38・1H―156	¥3667	スライダーズのビデオクリップ集、最近の曲から6曲を選んで全て見せます。
TMネットワーク	VISION FESTIVAL	50	11	ES	85.8/25	Ⓥ96・2M―3008 Ⓑ96・1M―3008	¥9280	ますます人気上昇中のTMネットワークの初ビデオ。本作には'84年の貴重なパルコ・ライヴが収録されている。
	FANKS DYNA-MIX	55	11	ES	86.11/21	Ⓥ42・2H―171 Ⓑ42・1H―171	¥4058	'86年の夏の中野サンプラザホール、よみうりEASTのライヴを収録。
	Self Control	26	5	ES	87.8/1	Ⓥ38・2H―172 Ⓑ38・1H―172	¥3667	「Self Control」のロングバージョンと、そのメイキングものをMIXさせた待望のビデオ。とってもイカした出来になってるよ。
	GIFT FOR FUNKS VIDEO	30	6	ES	88.8/21	Ⓥ38・2H―134 Ⓑ38・1H―134	¥3667	最近のビデオ・クリップを6曲収録。擬った作りはさすが、TMネットワーク。
RED WARRIORS	Live at BUDOKAN	60	10	CO	88.7/21	Ⓥ68HC―147 Ⓑ68BC―147	¥6571	レッド・ウォーリアーズ1stビデオは1月8日武道館のLIVEビデオ。ポスター付。
	SWINGIN' DAZE	25	4	CO	89.7/12	ⓋHC-325 ⒷBC-325	¥2884	レッド・ウォーリアーズ、ラスト・ビデオ。アルバムのコンセプトそのままに味わえます。
BOØWY	BOØWY VIDEO	46	10	TO	86.7/5	ⓋⒷTT98―1149	¥9476	BOØWYのファースト・ビデオがこれ。'86年5月1日、高崎市民会館で迫熱のLIVEですぞ！
	"GIGS" CASE OF BOØWY 1	30	7	TO	87.10/5	ⓋⒷTT35―1200	¥3378	87年の7、8月に神戸、横浜で行われた『CASE OF BOØWY』のライヴ・ビデオ。曲は「IMAGE DOWN」他。
	"GIGS" CASE OF BOØWY 2	27	7	TO	87.10/5	ⓋⒷTT35―1201	¥3378	曲は「HONKY TONKY CRAZY」「わがままジュリエット」「BAD FEELING」「B・BLUE」他。
	"GIGS" CASE OF BOØWY 3	28	6	TO	87.10/5	ⓋⒷTT35―1202	¥3378	曲は「THIS MOMENT」「B・E・L・I・E・VE」「CLOUDY HEART」「ONLY YOU」他。
	"GIGS" CASE OF BOØWY 4	26	7	TO	87.10/5	ⓋⒷTT35―1203	¥3378	曲は「MARIONETTE」「MORAL」「INSTANT LOVE」「JUSTY」「DREAMEN'」他。
ラフィン・ノーズ	聖者が街にやってくる	42	9	VAP	86.7/21	Ⓥ60381 Ⓑ60382	¥6571	'85年の日比谷野外音楽堂でのライヴを収録。とぎすまされた野獣のようなステージは見もの。
	VISIO	45	12	TO	88.9/10	ⓋⒷTT50―1282	¥4831	ラフィンの久々のビデオはニューヨークのイメージ&ライヴ・ビデオ。
尾崎　豊	6Pieces of Story	40	6	CS	86.9/5	Ⓥ38ZH―227 Ⓑ38QH―227	¥3914	尾崎豊のプロモーションビデオを集めたもの。尾崎の映像に引き込まれていってしまうよ。
	Live Core	60	8	MC	89.2/21	ⓋMCV―3002 ⒷMCV―3502	¥8508	尾崎初のライヴ・ビデオは88年9月12日、東京ドームでのライヴ
BUCK-TICK	MORE SEXUAL！！！！	30	7	V	88.2/21	ⓋVTM―138 ⒷVBM―138	¥4635	あっという間のBUCK-TICKの2ndビデオ。ビデオ・クリップ集で、さすがバクチクとうならせるナイスなクリップでいっぱい。
	バクチク現象	15	3	V	87.9/21	ⓋVTM―126 ⒷVBM―126	¥2699	87年6月16日に渋谷LIVE-INNで行われたバクチク現象IIから3曲を抜粋。そのパワーは絶大。
	SABBAT I	50	9	V	89.4/21	ⓋVTM―182 （VHSのみ）	¥4832	89年1月20日の武道館ライヴを完全収録。イメージショットも入っている映像を美しい。
	SABBAT II	50	9	V	89.4/21	ⓋVTM―183 （VHSのみ）	¥4832	『SABBAT I』と同じく1月20日の武道館ライヴ続編。「SEX-VAL×××××」「JUST ONE MORE KISS」他
ZIGGY	1・16芝浦・冬の陣	40	9	徳間	88.3/25	Ⓥ48SH―46 Ⓑ48SB―5046	¥4635	ZIGGY初のビデオは1月16日に芝浦ファクトリーでのライヴをベースにリハーサルの風景なども盛り込んだドキュメント。
	ALL THAT ZIGGY	47	6	徳間	88.11/21	Ⓥ38SH―69 Ⓑ38SB―5069	¥3667	ZIGGYの2ndビデオはヒストリーっぽいクリップ集。オマケも入って大満足。
UP-BEAT	REAL OCEAN	50	7	V	88.3/9	ⓋVTM―137 ⒷVBM―137	¥4347	このビデオはアップ・ビートはライヴ・ヒストリーだ！　奴らの今までのライヴからおいしいところをピックアップ。
	REAL BEAT SCENE	15	3	V	88.2/3	ⓋVTM―130 ⒷVBM―130	¥2699	アップ・ビートのプロモーション・ビデオを3本まとめたおいしいビデオ。
	TWO ALONE	22	4	V	88.12/18	ⓋVTM―158 （VHSのみ）	¥2894	UP-BEATクリップ集。最近のクリップを中心にしています。
KENZI&THE TRIPS	INAZUMA	50	12	CR	88.8/21	ⓋCPS―501 ⒷCHB―501	¥4635	新生ケンヂ&ザ・トリップスの日比谷野音ライヴ。
UNICORN	MOVIE	30	7	CS	89.2/1	Ⓥ382H―211 Ⓑ381H―211	¥3667	ユニコーン初ビデオはライヴ。88のツアーから4月18日大阪MUSEホールで収録。
浜田省吾	ON THE ROAD "FILMS"	97	19	CS	89 5/21	Ⓥ87ZH―240 Ⓑ87QH―240	¥8961	浜田省吾初めてのビデオ。浜省のライヴが充分楽しめる。泣けまっせ
THE STREET BEATS	NAKED HEART	20	3	V	88 11/21	ⓋVTM―157 VHSのみ	¥1741	ビーツの1stビデオ。インクでのライヴを中心に収録。
	PROCESS	30	6	V	89 5/21	ⓋVTM―185 VHSのみ	¥4635	2stアルバムの予告編ともいえるビデオ。いろいろな映像で楽しめる
LINE-UP	V―1	13	3	V	89 5/10	VTM―181 VHSのみ	¥2699	ラインナップ1stビデオ。ライヴが3曲入って雰囲気充分
THE MINKS	THE MINKS LIVE	14	3	V	89 5/21	VTM―184 VHSのみ	¥2029	ミンクス、デビューはこのビデオ。1/15札幌のライヴを収録
THE PRIVATES	FOR SHERRY&RUDE BOYS	15	3	TO	88 1/25	ⓋⒷTT28―7024 H	¥2699	「TV Channel No5」「誘惑のVelet Knght」「シェリー」の3曲を収録。
	SHAPE OF ICE	30	5	TO	89.6/28	FK025-1026 VHSのみ	¥2410	プライベーツ、ビデオクリップ集。デビュー曲の「君が好きだから」から「気まぐれロメオ」まで全5曲。

CONCERT GUIDE

〈Summer Event〉

JT SURER SOUND'89

8/11(金)仙台・泉パークタウンスポーツガーデン特設ステージ
▼AMAZONS、荒木真樹彦、蛎崎弘十"r"Project、久保田利伸&MOTHER EARTH、KOJI TAMAKI、富樫明生&WONDER COLOR、BUBBLE GUM BROTHERS
8/13(日)長岡ニュータウン公園
▼蛎崎弘十"r"Project、片桐麻美、COME ON BABY、THE HEART、KOJI TAMAKI、ハウンド・ドッグ
8/13(日)愛媛県総合運動公園
▼ANN LEWIS W/PINX、米米CLUB、The PRIVATES、JUN SKY WALKER(S)
8/18(金)福岡・海の中道海浜公園大芝生広場
▼ANN LEWIS W/PINX、荒木真樹彦、米米CLUB
8/19(土)北海道真駒内オープンスタジアム
▼AMAZONS、COME ON BABY、久保田利伸&MOTHER EARTH、ハウンド・ドッグ、BUBBLE GUM BROTHERS
8/19、20(日・月)横浜アリーナ
▼BAKUFU-SLUMP、TOPS、The PRIVATES、DEAD END、横道坊主
総合問事務局☎03(499)4711

THE ROCK KIDS'89

8/18、19、20(金・土・日)コニファーフォレスト(富士急ハイランド隣接)
▼18日=エレファントカシマシ、MODEL-GUN、THE MODS、THE SHAKES、SHOW-YA、THE STREET SLIDERS、TEARDROPS
▼19日=ARB、GD FLICKERS、永井真理子、ROLLIE、SHADY DOLLS、X、ZIGGY
▼20日=ANGIE、De-LAX、ECHOES、FENCE OF DEFENSE、MAD GANG、PASSENGERS、SHEENA&THE ROKKETS
問事務局☎03(376)0686

BIG CONEHERTあつきHIBI

8/10(木)山形県酒田市北港時設会場
▼ハウンド・ドッグ、BAKUFU-SLUMP、THE HEART、筋肉少女帯、THE POGO、UNICORN他
問ミュージック・ギルド☎0222(222)2033

NEW AGE OF ROCK CITY'89

8/13(日)愛知勤労会館
▼LA-PPISCH、HILLBILLY BOPS、スタークラブ、阿Q、勝誠二、木嶋浩史、草地草江
問ジェイル・ハウス☎052(261)0641

R&Rオリンピック

8/20(日)宮城県スポーツランドSUGO
▼レッド・ウォーリアーズ、J(S)W、ボ・ガンボス、ティアドロップス、X、筋肉少女帯、二井原実、シェイディドールズ、カモンベイビー、ニューロティカ、ニューエストモデル、カステラ、ビーズ
問フライングハウス☎022(297)6304

ROCKIN ROCK'89

8/22(火)名古屋市芸術創造センター
▼ZELDA、REG-WINK、REPLICA、ナイト・ホークス
問ジェイル・ハウス☎052(261)0641

ロックシティカーニバル

8/14(日)岩手県民会館
▼BAKUFU-SLUMP、筋肉少女帯、UNICORN、ストリート・ビーツ、ZIGGY、TOPS、ボ・ガンボス他
8/17(木)青森市文化会館(18日と同じ)

THE PRIVATES

10/25(水)・26(木) 渋谷公会堂㊱
28(土)大阪厚生年金会館(89)
30(月)札幌道新ホール⑬
11/3(金)東京薬大
10(金)土浦短大
11(土)東京工芸大
13(月)愛知勤労会館⑪
21(火)秋田児童会館㉔
22(水)岩手教育会館㉔
29(水)石川教育会館⑦
30(木)新潟音楽文化会館⑧
12/12(火)福岡市民会館⑱
13(水)長崎平和会館⑱
15(金)鹿児島市民ホール⑱
18(月)鳥取市文化ホール⑤
19(火)岡山市民文化ホール⑤
21(木)姫路市文化センター⑤
22(金)広島県民センター⑥
28(金)大阪厚生年金会館(89)
1/16(火)松山市民会館
17(水)高知県民会館㊽

LÄ-PPISCH

10/2(月)クラブチッタ川崎
9(月)水戸市民会館㊻
10(火)宇都宮市民会館㊻
13(金)大阪厚生年金会館㊼
15(日)高知県民文化会館⑪
16(月)愛媛県民文化会館(85)
20(金)上越文化会館
22(日)長野市民会館
23(月)新潟県民会館
11/1(水)・2(木) 中野サンプラザ(64)
8(水)長崎市平和会館⑫
9(木)熊本県立劇場⑫
11(土)大分県農業会館⑫
12(日)鹿児島市民文化会館⑫
27(月)富山県教育文化会館㉜
28(火)名古屋市民会館⑲
30(水)群馬県民会館㊻
12/9(土)岩手教育会館㉔
11(月)宮城県民会館㉔
12(火)山形県民会館㉔
14(木)秋田文化会館㉔
15(金)青森文化会館㉔
18(月)函館金森ホール⑬
20(水)旭川公会堂
21(木)札幌市民会館⑬
1/12(金)静岡市民文化会館⑲
13(土)沼津市民文化センター⑲
26(金)岐阜市民会館⑲
28(日)広島郵便貯金会館㉘
29(月)岡山市民会館㉘

JUN SKY WALKERS(S)

8/16(水)・17(木) 日本武道館㊱

RED WARRIORS

8/18(金)・19(土) 名古屋市民会館⑪
22(火)札幌市民会館⑬
26(土)西武球場㊱
28(月)・29(火) 大阪厚生年金会館(89)

COMPLEX

8/25(金)・26(土) 横浜アリーナ㊱

UP-BEAT

9/23(土)桐生市産業文化会館⑩
25(月)浜松福祉文化会館㉟
28(木)日本武道館㊱
10/1(日)大阪厚生年金会館(89)
3(火)名古屋市公会堂⑪
30(月)福岡市民会館⑱
31(火)長崎市公会堂⑱
11/2(木)広島郵便貯金会館⑰
6(月)宮城県民会館⑭
8(水)岩手教育会館⑭
9(木)秋田市文化会館⑭
24(金)富山県民会館㉖
25(土)石川厚生年金会館㉖
27(月)福井市文化会館㉖
29(水)長野県民会館㉖
12/6(水)神戸国際会館㉒
20(水)鹿児島県民文化センター(61)
22(金)宮崎市民会館(61)
23(土)大分市文化会館(61)
25(月)熊本市民会館(61)

THE ALFEE

8/13(日)朝霞米軍キャンプ跡地
問03(404)0089

De-LAX

8/11(金)・17(木)・24(木) 新宿パワーステーション
9/2(土)・3(日) 大阪ミューズホール
5(火)・6(水) 京都ビッグバン
15(金)・16(土) 名古屋ELL
10/9(月)・10(火) 仙台141HALL
13(金)・14(土) 金沢バンバンV4
28(土)・29(日) 前橋ラタン
11/9(木)・10(金) 広島ウッディーストリート

佐野元春

8/24(木)・25(金) 横浜スタジアム①
9/4(月)徳島市文化センター㊽
5(火)香川県民センター㊽
7(木)姫路市文化センター㉒
22(金)那覇市民会館㉚
23(土)沖縄市民会館㉚
26(火)静岡市民文化会館(92)
28(木)松山市民会館㊽
30(土)広島郵便貯金会館㉘
10/1(日)倉敷市民会館㉘
3(火)島根県民会館㉘
4(水)山口市民会館㉘
9(月)・10(火) 福岡サンパレス⑫
29(日)・30(月)・31(火) 大阪フェスティバルホール(89)
11/8(水)長崎市公会堂
10(金)大分文化会館
11(土)九州厚生年金会館
13(日)佐賀市文化会館
17(金)青森市文化会館
25(土)・26(日) 北海道厚生年金会館
28(火)函館市民会館
29(水)旭川市民文化会館
12/3(日)茅ヶ崎市民文化会館
6(水)宇都宮市文化会館
8(金)大宮ソニックシティ
13(水)熊本市民会館
14(木)宮崎市民会館
16(土)鹿児島市民文化ホール

HOUND DOG

8/26(土)・27(日)・29(火)・30(水)・31(木) 大阪球場

ZIGGY

8/18(金)渋谷ラママ(64)
21(月)日本武道館(64)
9/22(金)神戸国際会館㉒
23(土)京都会館第一㉒
27(水)岐阜市民会館⑪
29(金)小田原市民会館⑮
10/4(水)高知県民文化ホール㊽
5(木)高松市民会館⑪
7(土)愛媛県民文化会館(85)
10(火)・11(水) 渋谷公会堂(64)
18(水)浦和市文化センター(55)
25(水)・26(木) 中野サンプラザ(64)
11/9(木)平塚市民センター⑮
14(火)札幌市民会館⑬
15(水)旭川市公会堂⑬
21(火)水戸市民会館㊻
24(金)郡山市民文化センター㉓
25(土)栃木会館㊻
30(木)広島郵便貯金会館⑰
12/1(金)福岡市民会館⑱
3(日)長崎市平和会館⑱
4(月)熊本郵便貯金会館⑱
1/11(木)大宮市民会館(55)
13(土)八王子市民会館(64)
18(木)金沢市文化ホール㉖
19(金)富山県民会館㉖
30(火)名古屋市公会堂⑪

TM NETWORK

9/2(水)・3(木)・4(金) 福岡サンパレス
8(火)大阪フェスティバルホール
10(火)広島郵便貯金会館
11(金)愛媛県民文化会館
14(月)・15(火) 広島郵便貯金会館
17(木)・18(金) 大阪厚生年金会館
※ ※ ※
8/25(金)・26(土) 東京ベイNKホール
29(火)・30(水) 横浜アリーナ

ブルーハーツ

9/6(水)・7(木) 京都会館第一㉙
9(土)石川厚生年金会館⑦
11(月)福井フェニックス⑦
12(火)富山市公会堂⑦
18(日)岐阜市民会館⑪
19(火)静岡市民文化会館(92)
21(水)豊橋勤労福祉会館⑪
22(金)守山市民ホール㉙
24(日)舞鶴市総合文化会館
27(水)・28(木) 千葉県文化会館①
30(土)四日市市文化会館⑪
10/2(月)和歌山県民文化会館㉒
3(火)姫路市文化センター㉒
4(水)島根県民会館
6(木)茨城県民文化センター㊻
11(木)高知県民文化ホール㊽
13(金)広島郵便貯金会館⑰
14(土)山口市民会館
16(月)徳島市文化センター㊽
17(火)高松市民会館⑪
18(水)松山市民会館(85)
22(日)山形県民会館㉓
23(月)秋田県民会館
25(水)岩手県民会館㉓
11/6(月)武雄市文化会館⑫
7(火)長崎市公会堂⑫
9(木)熊本市民会館⑫
10(金)鹿児島市民文化ホール⑫
13(月)那覇市民会館㉚
21(火)大牟田文化会館⑫
22(水)大分文化会館⑫
24(木)九州厚生年金会館⑫
25(土)宮崎市民会館⑫
29(水)八戸市公会堂(87)
30(木)青森市文化会館(87)
12/4(月)・5(火) 神戸国際会館㉒
7(木)岡山市民会館⑰
8(金)徳山市文化センター
10(日)平塚市民センター⑮
13(水)松本社会文化会館⑨
14(木)長野県文化会館⑨
17(日)大宮ソニックシティ(55)
19(火)群馬県民会館②
1/9(火)釧路市民文化会館⑬
10(水)北見市民会館⑬
12(金)帯広市民文化ホール⑬
14(日)千歳市民文化センター⑬
15(月)函館市民会館⑬
18(木)宇都宮市文化会館②
19(金)郡山市民文化センター㉓

筋肉少女帯

8/17(木)・18(金) 渋谷公会堂⑩
24(木)広島県民文化センター⑥
25(金)岡山市立市民文化ホール⑤
28(月)徳島郷土文化会館
29(火)高知県民文化ホール
31(木)福岡都久志会館⑫
9/1(金)熊本郵便貯金ホール⑫
3(日)京都教育文化センター(102)
4(月)大阪厚生年金会館④
8(金)千葉市民会館⑩
9(土)平塚市文化センター㉝
11(月)仙台市民会館⑱
13(水)札幌道新ホール⑬
18(月)大阪厚生年金会館④
20(水)渋谷公会堂⑩

中村あゆみ

8/31(木)・9/1(金) 日本武道館
12(火)浦安市文化会館
20(水)岡山市民会館⑤
21(木)島根県民会館⑤
23(土)府中市文化センター⑥
25(月)鹿児島県文化センター㊾
26(火)福岡市民会館(62)
29(金)熊本県立劇場(62)
30(土)大隅町文化会館
10/3(火)福井市文化会館⑦
4(水)石川厚生年金会館⑦
6(金)両津市民会館⑧
10(火)群馬県民会館⑩
16(月)神戸国際会館㉒
21(土)福生市民会館
25(水)黒磯市文化会館

聖飢魔II

9/16(日)戸田市文化会館⑩
23(土)千葉県文化会館⑩
24(日)平塚市民センター⑩
28(木)宮城県民会館⑭
10/10(火)名古屋市民会館⑪
11(水)静岡市民会館(92)
14(土)福岡市民会館(62)
15(日)水俣市文化会館(61)
18(水)熊本市民会館(61)
21(土)・22(日) 新宿厚生年金会館⑩
25(水)大阪厚生年金会館㉒
30(月)北海道厚生年金会館⑬
11/14(火)香川県民ホール⑪
17(金)広島郵便貯金会館⑥
27(月)長野市民会館㉕
29(水)富山県民会館㉕

松岡英明

9/14(木)神奈川県民ホール
15(金)栃木会館
20(水)神戸国際会館
24(日)宮城県民会館
25(月)新潟県民会館
30(土)前橋市民会館

岡村靖幸

8/19(土)仙台電力ホール⑯
21(日)新潟県民会館㉕
24(木)北海道厚生年金会館㉗
25(金)青森市文化会館⑯
31(木)前橋市民文化会館①
9/5(火)長野県民文化会館㉕
6(水)愛知勤労会館⑪
8(金)・9(土) 大阪厚生年金会館(89)
18(日)京都会館第2㉒
19(火)広島郵便貯金会館㉘
21(木)熊本県立劇場(61)
22(金)福岡市民会館⑱
27(水)日本武道館①

ANGIE

9/15(金)日比谷野音(64)
10/6(金)愛知県勤労会館
10(火)京都教育文化センター
11(水)大阪国際交流センター
19(木)栃木会館
23(月)石川県教育会館
24(火)長野NBSホール
26(木)埼玉会館
30(月)岐阜東海女子短大学祭
11/2(木)愛知学院大学祭
4(土)東京電気大学祭
7(火)仙台電力ホール
9(木)青森市文化ホール
23(木)明治大学祭
28(火)静岡市民文化会館
12/1(金)道新ホール
5(火)広島県民文化センター

6(水)松山市民会館
8(金)福岡市民会館
10(日)・11(月) 渋谷公会堂
14(木)神奈川県青少年センター

BO GUMBOS

9/22(金)大宮市民会館
23(土)NHKホール
25(月)名古屋勤労会館
27(水)大阪毎日ホール
28(木)福岡電気ホール
(with BO DIDDLEY)
(問)03(408)7871

THE TOYS

9/9(土)・10/10(火)・11/11(土)・12/12(火) 新宿パワーステーション㊱

THE POGO

9/6(水)新宿パワーステーション(64)
9(土)静岡市民文化会館
10/10(火)日比谷野音(64)

渡辺美里

8/12(土)広島サンプラザ㉘
30(水)仙台市体育館⑯

SHADY DOLLS

8/23(水)・24(木)・25(金) 渋谷Egg-man(64)
29(火)・30(水)・31(木) 新宿ロフト(64)
9/3(日)・4(月)・5(火)・7(木)・8(金) 名古屋ELL⑪
10(日)広島ウッディ
11(月)福岡BE-1
13(水)・14(木)・15(金) 大阪ミューズ㊼
21(木)札幌ペニーレイン⑬
24(日)青森ク3
26(火)仙台ヤマハホール⑪
27(水)仙台CAD⑪
9/29(金)・30(土) インク芝浦(64)
10/12(木)新潟egg-man㉖
13(金)金沢バンバンV4
20(金)水戸サントピア㊻
22(日)宇都宮ビッグアップル㊻
23(月)前橋ラタン㊺
11/9(木)松山ラフォーレ(85)
26(日)渋谷公会堂(64)

X

9/29(金)浦和市文化センター(55)
10/1(日)仙台電力ホール⑭
2(月)盛岡教育会館⑭
4(水)山形県民会館⑭
5(木)秋田県民会館⑭
10/12(木)川崎市産業文化会館⑮
14(土)栃木会館㊺

19(木)岡山市民文化ホール⑤
21(土)神戸市文化大ホール④
23(月)高知RKCホール㊽
26(木)熊本郵便貯金会館(62)
30(月)福岡もちバレス(62)
31(火)広島郵便貯金会館⑥
11/2(木)愛媛県民文化会館サブホール(85)
5(日)名古屋市公会堂⑪
7(火)高崎群馬音楽センター㊻
8(水)水戸市民会館㊺
11(土)長野県民文化中ホール㉕
13(月)富山県民会館㉕
14(火)福井県民会館㉕
16(木)静岡市民文化会館大ホール
25(金)青森市民文化会館⑭
27(日)札幌市民会館⑬
29(火)郡山市民文化センター⑭

THE BOOM

9/17(日)渋谷公会堂㊱
10/2(月)大阪厚生会館(89)

小比類巻かほる

11/15(水)前橋市民文化会館㊺
16(木)宇都宮市文化会館㊻
19(日)日本武道館①
27(月)日立市民会館㊻
12/5(火)酒田市民会館(54)
6(水)秋田市文化会館(54)
8(金)青森市文化会館(87)
13(水)郡山市民文化センター
14(木)平市民会館
19(火)愛媛県民文化会館(85)
20(水)高松市民会館⑪
22(金)倉敷市民会館⑤
23(土)広島郵便貯金会館⑥
25(月)徳山市文化会館⑥
27(水)・28(木) 大阪フェスティバルホール(89)
1/16(火)山形市民会館(54)
17(水)宮城県民会館㉓
19(金)札幌市民会館⑬
25(木)・26(金) 名古屋市民会館⑪
30(火)静岡市民文化会館(92)
2/5(月)鹿児島市民文化ホール㊾
6(火)福岡サンパレス(62)

THE GROOVERS

8/27(日)川崎クラブチッタ
9/2(土)新宿ロフト
12(火)大宮フリークス
13(水)横浜ビブレ
(問)03(5474)0929

HILLBILLY BOPS

8/23(月)・29(火)・30(水) インク芝浦

安藤秀樹

8/22(火)札幌メッセホール

ROGUE

8/30(水)日本武道館

THE CHECKERS

8/12(土)・13(日) 大阪球場

18(金)・19(土)・22(火)・23(水)・24(木) 日本武道館
26(土)・27(日) 広島郵便貯金会館
28(月)倉敷市民会館
30(水)神奈川県民ホール
31(火)愛媛県民会館
9/3(日)・4(月) 福岡サンパレス
5(火)九州厚生年金会館

ZELDA

8/11(金)渋谷クアトロ
19(土)本八幡ルート14(55)
20(日)横浜ビブレ⑮
22(火)名古屋雲竜ホール⑲
28(月)藤沢BOW⑮
9/21(木)クラブチッタ川崎⑮
25(月)・26(火) 神戸チキンジョージ㉒
28(木)・29(金) 京都ビブレホール㉒
10/1(日)・2(月) 大阪ミューズホール㉒
19(木)・20(金) 札幌ベッシーホール㉒

EARTHSHAKER

8/11(月)愛知勤労会館
12(火)京都会館第2
14(木)高松市民会館
25(月)仙台電力ホール
26(火)岩手教育会館
28(木)札幌市民会館
30(土)北見経済センター
10/9(月)渋谷公会堂
11(水)大阪厚生年金会館

四人囃子

9/22(金)・23(土) MZA有明①

REG-WINK

8/12(水)・13(木) 大阪南港(イベント)
22(土)名古屋雲竜(イベント)

dip in the pool

10/2(月)名古屋クアトロ⑲
3(火)大阪ミューズホール㊼
8(日)インク芝浦(64)

GRAND PRIX

9/1(金)横浜ビブレ⑬
3(日)豊橋カゴヤホール
4(月)京都ビッグバン㉒
6(水)・7(木) 大阪バナナホール㉒
8(金)神戸チキンジョージ㉒
11(月)大宮フリークス(71)
12(火)本八幡ルート14
15(金)前橋ラタン㊺
17(日)宇都宮ビッグアップル㊻
20(水)福岡Be-1
22(金)姫路モーニングムーン

23(土)名古屋ELL⑪
28(木)新潟ウッディ
29(金)金沢バンバンV4
30(土)長野ブラックアイ
10/3(火)札幌ペニーレイン
5(木)仙台CADホール⑪
15(日)日清パワーステーション⑩

PASSENGERS

9/5(火)日清パワーステーション(64)
26(火)名古屋ハートランド⑪
27(水)大阪ミューズホール㉒

COME ON BABY

9/7(木)名古屋雲竜ホール⑪
12(火)渋谷公会堂㊱

SANTA

9/24(日)日清パワーステーション⑩

JACO NECO

8/21(月)新宿パワーステーション⑩
28(月)名古屋ELL⑪
30(水)福岡Be-1⑱
31(木)小倉IN&OUT
9/2(土)広島ウッディストリート⑰
9(土)札幌ペニーレーン⑬
11(月)仙台CADホール㉓

NON SECT

8/20(日)渋谷egg-man
30(水)横浜ビブレ
9/8(金)本八幡ルート14
21(木)渋谷egg-man
(問)03(479)4493

DOOM

8/11(金)大阪アムホール
12(土)名古屋FLEXホール
26(土)芝浦インクスティック
9/5(火)芝浦インクスティック
15(金)広島ウッディストリート
16(土)福岡Be-1
17(日)小倉IN&OUT
19(火)大阪バーボンハウス
20(水)京都ビブレホール
21(木)神戸チキンジョージ
24(日)名古屋ELL
25(月)金沢VANVANV4
26(火)長野ブラックアイ
27(水)新潟EGG-MAN
11/22(水)芝浦インクスティック
(問)03(711)5935

20世紀Jr

8/11(金)横浜7thアベニュー
18(金)大宮フリークス
9/1(金)・2(土) 日清パワーステーション
18(月)神戸チキンジョージ
19(火)京都BIGBANG
20(水)大阪ミューズホール
22(金)広島ウイズワンダーランド
24(日)高知キャラバンサライ
27(水)福岡ビブレホール
10/7(土)静岡すみやオレンジホール
12(木)名古屋ハートランド
14(土)金沢バンバンV4
15(日)新潟EGG-MAN

11/7(火)盛岡AVMホール
10(金)札幌メッセホール
12(日)青森フリーライブスペース
13(月)秋田モーニングムーン

REVOLVER

9/20(水)神戸チキンジョージ
10/3(火)名古屋ハートランド
4(水)大阪バナナホール

ALWAYS

8/20(日)日本青年館
31(木)大宮フリークス
9/1(金)藤沢BOW
5(火)国立リバプール
6(水)本八幡ルート14
8(金)横浜7thアベニュー

PRESENCE

9/11(月)渋谷公会堂

REPLICA

8/10(木)新宿パワーステーション
17(木)新潟県民会館(イベント)
25(金)札幌メッセホール

PINK JAGUAR

8/20(日)渋谷EGG-MAN

川嶋みき

8/19(土)大阪バナナホール
20(月)名古屋ハートランド
30(水)渋谷TAKE OFF7

JUSTY-NUSTY

8/18(金)札幌メッセホール
22(火)長野ブラックアイ
23(水)諏訪セロニアス
24(木)前橋レストピア
29(火)金沢バンバンV4
31(木)新潟エッグマン
9/2(土)日比谷野音(イベント)
4(月)豊橋かごやホール
6(水)富士ユニセックス
7(木)大宮フリークス
11(月)小倉IN&OUT
12(火)博多Be-1
14(木)熊本ペパーランド
16(土)高松クラブハウス
18(月)広島ウッディストリート
20(水)福山フーム
22(金)神戸チキンジョージ
25(月)・26(火) 大阪ミューズホール

Pli:z

8/21(月)日本青年館㉟

THE BELLS

8/28(月)大阪ミューズホール
29(火)豊橋かごやホール

問い合わせ先

①フリップサイド東京03(770)8899
②フリップサイド宇都宮0286(33)1009
③キョード横浜045(252)9999
④夢番地大阪06(341)3525
⑤夢番地岡山0862(31)3531
⑥夢番地広島082(249)3571
⑦FOG金沢0762(32)2424
⑧FOB新潟0252(29)5000
⑨FOG長野0262(27)5599
⑩ホットスタッフ03(478)8888
⑪サンデーフォーク052(320)9100
⑫くすミュージック092(526)3151
⑬WESS011(521)8181
⑭エムズ022(222)4000
⑮たむとむスコープ045(251)3491
⑯キョード東北022(223)2188
⑰キャンディプロモーション082(249)8334
⑱BEA092(712)4221
⑲ジェイルハウス052(261)0641
⑳フェスティバル札幌011(251)8870
㉑フェスティバル03(400)9999
㉒サウンドクリエーター06(361)9900
㉓GIP022(222)2093
㉔ミュージックギルド仙台022(222)2033
㉕キョード北陸025(240)2633
㉖サウンドソニック0762(91)7800
㉗ユアソング011(271)7301
㉘ユニオン音楽事務所082(247)6111
㉙J音楽企画075(231)7776
㉚PMエージェンシー0988(64)1616
㉛ミュージックハッピー025(241)5222
㉜ビッグワンプロ0764(92)4400
㉝シャム猫Co0465(24)1208
㉞ギルド秋田0188(32)1511
㉟遠交連0534(53)2497
㊱ディスクガレージ03(5845)3200
㊲ダンミュージック03(356)3660
㊳B&B企画0155(24)8477
㊴ジョイント・ピープル078(241)7099
㊵キョード東京03(5237)9000
㊶秋田新音0188(33)9314
㊷スターライト06(533)6699
㊸神奈川音協045(641)1649
㊹フラッグスタッフ092(713)7681
㊺アワーズ011(211)4118
㊻アクト0286(21)2241
㊼SOGO大阪06(344)3326
㊽デューク0888(31)2020
㊾K&Mプロモーション0992(23)7710
㊿スクラブル0988(63)0217
(51)ロックステリア03(478)8645
(52)チャンプ03(505)4656
(53)ユイ音楽工房03(404)6888
(54)ノースロード秋田0188(33)9314
(55)バックステージP0488(66)3938
(56)静東音協0559(31)7078
(57)アドステージ03(479)3426
(58)マーマレード03(496)7449
(59)ハートランド03(470)3692
(60)サウンドエープ092(713)8275
(61)ビッグバーグユニオン096(356)1808
(62)フレインズ092(71)8121
(63)VIP03((582)8371
(64)SOGO東京03(405)9999
(65)モーニングムーン0222(64)8170
(66)バナナホール06(361)6821
(67)エイプリルFC03(582)7719
(68)コンストップ06(312)4356
(69)ステージサウンド企画0157(23)6227
(70)セブンスアベニュー045(641)2484
(71)フリークス0486(42)3315
(72)モッキンバード0542(81)0880
(73)ウッディストリート082(243)0111
(74)ビブレ0862(32)8888
(75)青木楽器BOW0466(27)5220
(76)京都音協075(221)8441
(77)キョード名古屋052(251)6655
(78)チキンジョージ078(392)0146
(79)キャンディホール06(316)0361
(80)VIP大阪06(312)5000
(81)ビッグバン075(255)3717
(82)名古屋ハートランド052(202)1351
(83)豊川かごやはうす05338(5)6948
(84)クラブ・ザ・スター052(251)7205
(85)デューク松山0899(43)1778
(86)MSコーポレーション022(262)0808
(87)コルクボード0177(35)1155
(88)キープウェイミュージック0236(31)692[illegible]
(89)キョード大阪06(345)2500
(90)ラストトレイン0886(31)2953
(91)釧路音協0154(91)5258
(92)サンデーフォーク静岡0542(8)9999
(93)サンドピア0292(26)3131
(94)九州労音0952(26)2361
(95)甲府音協0552(35)3975
(96)前橋音協0272(32)1012
(97)室蘭音協0143(44)9922
(98)大阪音協06(341)8638
(99)京都音協075(211)0261
(100)桐生音協0277(53)3133
(101)イエローホール096(352)5671
(102)スタックオリエンテーション075(721)44[illegible]
(103)ELL052(201)5004
(104)静岡モッキンバード0542(81)0880
(105)豊橋カゴヤホール0532(52)2655
(106)スマッシュ03(444)6751
(107)ノースホードM022(022)0700
(108)FLEETK2 03(582)4280
(109)サモンミュージック06(252)5635
(110)ジェットプランニング052(937)6651
(111)デューク高松0878(22)2520
(112)TOJオフィス03(423)1189
(113)クラフトワーク03(498)6891
(114)サウンドアーティスト0762(91)7800
(115)ジョイナス052(962)1207
(116)スナフキンカンパニー03(465)5751
(117)アスターM052(732)1361
(118)フライハウス022(297)6304
(119)100CLUB0888(83)5279
(120)スワット03(463)6100
(121)高崎音協0273(22)7145
(122)KMミュージック045(201)9999
(123)佐賀労音0952(26)2361
(124)MAP0985(27)1888
(125)キョード西日本092(714)0160
(126)シンコM03(292)7911
(127)ARG03(404)5591
(128)国立リバプール0425(77)2577
(129)横浜ビブレ045(314)2121
(130)キョー札幌011(221)0144
(131)なな企画0222(22)5711
(132)スタッフギャング03(496)8593
(133)ブレーントラスト052(263)9115
(134)M・ヴィジョンズ03(369)5059
(135)ストライクチューン03(405)9744
(136)レイズ・イン03(470)9867

BACK NUMBER

バックナンバーのお知らせ

■バック・ナンバー申し込み方法■

▼定価金額＋送料（1冊76円、2冊112円、3冊188円、4冊224円、5冊以上は310円）分を、切手か、現金書留、または小為替で〈〒104東京都中央区銀座5の1の7数寄屋橋ビル音楽専科社経理部アリーナ○年○月号〉（○の中には希望の月号を入れる）係まで送って下さい。御自分の住所、氏名、電話番号を忘れないでネ！

※89年4月号までで、当社に直接通販の申し込みをいただいた分は表示価格で販売致します。

◆　◆

▼創刊号から1988年6月号まで、88年10、11、12月号売切れ

▼88年7月号

表紙＆大特集＝ストリートスライダーズ（REPLAYS、ROCKN' ROLL DEF' LIVE、蘭丸ACT3）／氷室京介（レコーディング・レポート）／BUCK－TICK（3rdアルバム分析）／J(s)W（ツアー座談会）／UNICORN（バンド徹底分析）／UP－BEAT（ヒストリー、原発問題）／松岡英明、ラフィン・ノーズ、レッド・ウォーリアーズ、吉川晃司、プライベーツ、山下久美子、ZIGGY、エコーズ、ザ・ハート、アルフィー、デラックス、FOD、プリンセス・プリンセス他。（550円）

▼88年8月号

表紙＆大特集＝松岡英明（不思議の国の英明、「ジャスト・ポップ・アップ」追跡取材、完全年表）／蘭丸ACT4／BUCK－TICKヒストリースタート／J(s)W（ジュンスカ新聞スタート、パーソナルインタビュー）／UNICORN（『パニック・アタック』徹底解説）／レッド・ウォーリアーズ（コンマ、キヨシパーソナルインタビュー）／TMネットワーク、浜田省吾、プライベーツ、アルフィー、ラフィン・ノーズ、ZIGGY、FOD、シェイディー・ドールズ、レッズ、ザ・ハート、レベッカ、エコーズ他（550円）

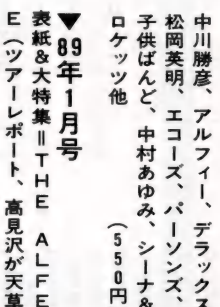
▼88年9月号

表紙＆大特集＝RED WARRIORS（パーソナルインタビュー、レッズとは、7／23西武球場レポート）／J(s)W（合宿潜入レポート、連載②）／ユニコーン（ストーリー「人に歴史あり」スタート・川西編、青年館ライヴ）／蘭丸ACT5／BUCK－TICKヒストリー②／UP－BEAT（野音ライヴ）／対談＝大矢郁史VS SHO－TA／プライベーツ（パワーステーション・レポート）／中川勝彦、アルフィー、デラックス、松岡英明、エコーズ、パーソンズ、子供ばんど、中村あゆみ、シーナ＆ロケッツ他（550円）

▼89年1月号

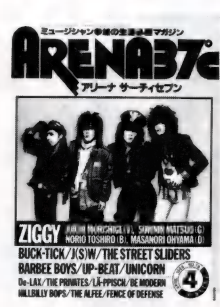
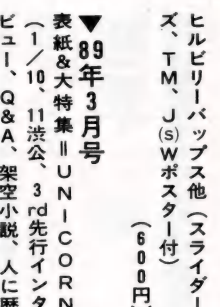
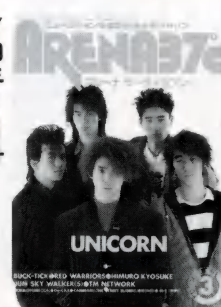
表紙＆大特集＝THE ALFEE（ツアーレポート、高見沢が天草四郎に、桜井賢がFMパーソナリティーに、坂崎VSエスパー清田）／氷室京介（11／17NKホール、11／18、19パワーステーション）／RED WARRIORS（'89の策略）／UP－BEAT（11／7武道館）／BUCK－TICK（ヒストリー5）／UNICORN（10の反省、10の目標、人に歴史ありバンド編①）／J(s)W（新春座談会）／ZIGGY、ラインナップ、プライベーツ、ストリートスライダーズ、TOYS、筋肉少女帯、他。（B－T、UP－BEAT、ストリート・ビーツポスター付）（600円）

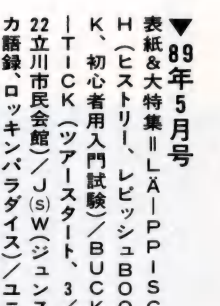
▼89年2月号

表紙＆大特集＝The STREET SLIDERS（スクリュードライバーの全て）／TMネットワーク（ツアーレポート、ロング・インタビューPt1）／BUCK－TICK（「TABOO」徹底解剖）／J(s)W（11／26渋谷、11／27ホコ天GIG、連載）／レッド・ウォーリアーズ（TV追跡取材）／ユニコーンお年玉企画、人に歴史ありバンド編②）／UP－BEAT、De－LAX、The TOYS、ZIGGY、The HEART、アルフィー、FOD、ヒルビリーバップス他（スライダーズ、TM、J(s)Wポスター付）（600円）

▼89年3月号

表紙＆大特集＝UNICORN（1／10、11渋公、3rd先行インタビュー、Q＆A、架空小説、人に歴史あり最終回阿部編）／RED WARRIORS（武道館3days）／BUCK－TICK（ストーリー、1／19、20武道館）／氷室京介（1／3、4BIGEGG）／J(s)W（テスト、連載）／De－LAX、蘭丸、スターリン、アルフィー、ZIGGY、FOD、ヒルビリーバップス、TMネットワーク、バービーボーイズ、プリンセス・プリンセス、ケンジ＆ザ・トリップス、THE HEART、NOKKO（REBECCA）（550円）

▼89年4月号

表紙＆大特集＝ZIGGY（'87～'88 ZIGGYの変貌、2／4、5渋公、パーソナル・インタビュー、アルバムインタビュー）／BARBEE BOYS（パーソナルインタビュー）／J(S)W（2／20、21渋公追跡取材、連載ロッキンパラダイス）／UP－BEAT（ロング・インタビュー）／ストリートスライダーズ（武道館LIVE、らんまるのわがまま）／BUCK－TICK（ヒストリー最終回）／ユニコーン（ペケペケ追跡取材）／プライベーツ（ビデオ潜入取材）／レピッシュ、FOD、ブルーハーツ他（550円）

▼89年5月号

表紙＆大特集＝LÄ－PP－ISCH（ヒストリー、レピッシュBOOK、初心者用入門試験）／BUCK－TICK（ツアースタート、3／22立川市民会館）／J(s)W（ジュンスカ語録、ロッキンパラダイス）／ユニコーン（大迷惑インタビュー）／プライベーツ（ニューオリンズ・レコーディング取材）／ラフィン・ノーズ（パーソナル・インタビュー）／アンジー、カッツェ、ケンジ＆ザ・トリップス、The TOYS、UP－BEAT、カステラ、De－LAX、ZIGGY、The POGO、GDフリッカーズ（570円）

▼89年6月号

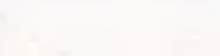
表紙＆大特集＝COMPLEX（フォト・メッセージ、布袋寅泰＆吉川晃司インタビュー）／UNICORN（3rdアルバム『服部』インタビュー、全曲解説）／BUCK－TICK（インタビュー）／De－LAX（4／5P－T追跡取材）／プライベーツ（アルバム・インタビュー、連載）／J(s)W（ジュンスカッ子新聞最終回）／レピッシュ、UP－BEAT、エコーズ、The TOYS、The POGO、カステラ、レッド・ウォーリアーズ、アンジー、X、ZIGGY、ヒルビリーバップス、シェイディードールズ他（570円）

▼89年7月号

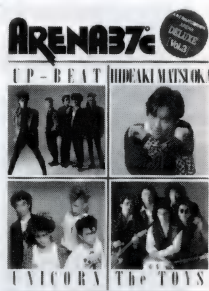
表紙＆大特集＝JUN SKY WALKER(S)（驚き！㊙パーソナル・フォト、オーストラリア・プライベート・フォト＆ダイアリー、アルバム・インタビュー＆J(S)W語録、アルバム応援集、4／23日比谷野音、他）／COMPLEX（5／15・16・17、武道館）／THE PRIVATES（アルバムインタビュー、延原連載）／UNICORN（読者参加企画、4／25日比谷野音、5／13PIT II）／RED WARRIORS（田所豊インタビュー）／中村あゆみ（アルバムインタビュー）／POGO、レピッシュ、De－LAX、LINE－UP、GRASS VALLEY、ZIGGY、ラフィン・ノーズ／X、Be－MODERN、筋肉少女帯、エコーズ、ゴーバンズ、ヒルビリーバップス、ローグ、GDフリッカーズ、カッツェ、カステラ、ケンジ＆ザ・トリップス、ハート、横道坊主他（620円）

▼89年8月号

表紙＆大特集＝RED WARRIORS（新作、解散、そして今後↓シャケ＆ユカイインタビュー、ディスコグラフィー、過去のアリーナの記事を一挙再録）／氷室京介（メイキング オブ〝KING OF ROCK SHOW〟）LÄ－PP－ISCH（NY電話インタビュー）／J(S)W（対談・カズヤVS森重樹一）／De－LAX（対談・榊原秀樹VS鮎川誠）／UNICORN（TVゲーム企画、読者参加企画後編）／ケンジ＆トリップス、カッツェ、ポゴ、ZIGGY、THE PRIVATES、

X、UP−BEAT、THE BLUE HEARTS、THE STREET BEATS、G・D FLICKERS、らんまるのわがまま、ROGUE、THE BOOM
（570円）

増刊、書籍

増刊、書籍申し込みの方は定価＋送料（1冊260円、2冊以上310円）分を切手、現金書留、小為替で〒104東京都中央区銀座5−1−7数寄屋橋ビル音楽専科社経理部○○係（○の中には書名を入れる）係まで送って下さい、御自分の住所、氏名、電話番号も忘れずに！

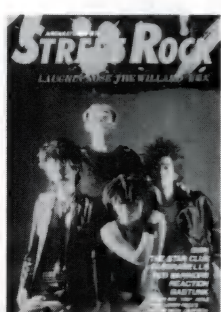
ARENA37°C DELUXE VOL3
UP-BEAT
松岡英明
UNICORN
The TOYS

アリーナ・スペシャルプレゼンツ。こんなメンツはもうそろわないぜ。キラキラ光るスタジオ・フォト、そしてライヴフォト、その上文句のない文章。これを見ずしてなにを見よーっつーの。
（980円＋送料260円）

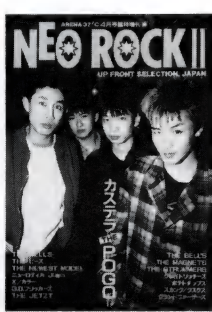
ARENA37°C DELUXE VOL4
JUN SKY WALKER(S)
THE PRIVATES
ZIGGY
中川勝彦

今のジャパニーズ・ロックシーンを語るなら、この写真集みなきゃ語れないぜ。穴があくまで見やがれ。（スタジオ・フォト、ロケーション＋インタビュー、エッセイ）雰囲気たっぷり。生ツバゴックン。これでロックも安泰だ。
（1200円＋送料260円）

The LIVE'88
BUCK-TICK
REDWARRIORS
THE BLUE HEARTS
J(S)W and more

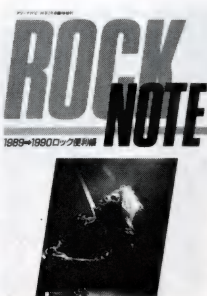
88年夏のイベントを総括した一冊。熱い夏をかけめぐったロックが今またよみがえる。B−T（8／3河口湖）、UP−BEAT（7／17野音）、レッドウォーリアーズ（7／23西武球場）、スライダーズ（8／4名古屋）、J(S)W（8／9仙台）他
（980円＋送料260円）

STREET ROCK
REDWARRIORS
LAUGHIN'NOSE
THEWILLARD
and More

いまや伝説の一冊。レッド・ウォーリアーズのデビュー時のLIVEフォトをたっぷり7ページ。そしてラフィン・ノーズ、ウイラード、有頂天など1986年のインディーシーンが全てこれでわかってしまうのだ。その上インディー名盤、インディーの歴史などなど、これでもか。
（980円＋送料260円）

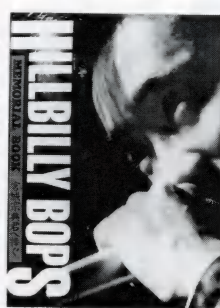
NEO ROCKII
カステラ
THE POGO
KUSU KUSU
and more

これから注目されるバンドの集大成。カステラ、ポゴ、クスクス、ウエルズなどのインタビューも含んだ超強力ビジュアル・インタビュー・ストリート・マガジン。時代に乗り遅れるなよ。
（1010円＋送料260円）

The Street Sliders
UP & DOWN

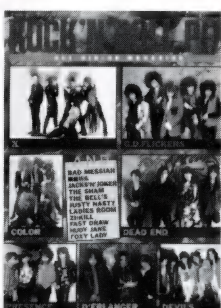
ストリートスライダーズ初のライヴ写真集。撮影三浦麻旅子。'87年秋のツアーを余すところなく収録。ステージ上はもちろん、オフ・ステージ、移動中、リハーサルなど、スライダーズのツアーの全てがわかる。
（1500円＋送料260円）

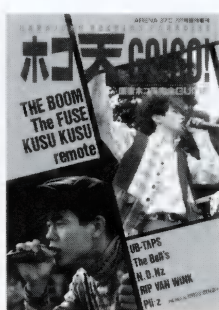
ROCK NOTE
1989−90 ロック便利帳

肌身離さず持っていたいって思うよーなロックの便利帳だよん。300を越えるアーティストのバイオ、ファン・クラブ、住所録などロック・キッズ待望の一冊。ダイアリーもついてるんでとっても便利。
（980円＋送料260円）

蘭丸
おおくぼひさこ
写真集

本誌で好評連載企画だった『蘭丸』が豪華写真集として発売されました。写真の美しさもさることながらデザインも見事に調和している。本人の美しさは当然いうことなし。とりあえず見ろ。
（2060円＋送料260円）

MEMORIAL BOOK
Hillbilly Bops
宮城宗典君に捧ぐ

アリーナ総力を上げて制作した宮城君メモリアルブック。バンドのヒストリー、アリーナでの記事再録、年譜、ディスコグラフィーなど完璧な一冊。ファンクラブ全面協力も受けた、本当のメモリアルブック
（1240円＋送料260円）

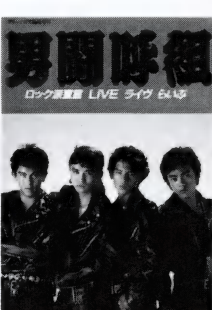
ROCK'N ROLL PIX(ALL PIN UP)
×
G.D.FRICKERS
DEADEND
PRESENCE
D'ERLANGER
COLOR
DEVILS
and More

とっても、とっても、とってもステキなロックン・ロールピンナップ集が出てしまった。切って下じきに入れるもよし、ベッドの横にはってもよし、何でもできる、とんでもねえ切り抜き本だい。アーチストもX、GDフリッカーズ、COLOR、DEAD END、プレゼンス、デランジェ、デビルス、横道坊主などイキのいいのをとりそろえてまっせ、お客さん。もう一冊いかが。
（1200円＋送料260円）

ホコ天GO！GO！
THE BOOM
THE FUSE
remote
KUSU KUSU
and more

原宿ホコ天完全ガイドついに登場！　話題のバンドを始め、ホコ天MAP、インタビュー、ファッション、バンド・アンケート、100人に聞きました、お店紹介などなどこれ一冊あればホコ天情報はバッチリ。
（980円＋送料260円）

男闘呼組
ロック派宣言
LIVE ライヴ らいぶ

男闘呼組のライヴを中心に構成したライヴブック。本当の男闘呼組を見たきゃ、この本買いな。
（1200円＋送料260円）

Binetsu Freak

あれっ 微熱 かな?! '89

あー暑い。梅雨があけたらいきなり暑くなりやんの。困ったねこりゃ。学生諸君は夏休みに入ったのかな。そりゃーうらやましい。何?夏休みが40日もある?とんでもねー奴らだな。あんまり休んでばっかりいるとバカになっちゃうよ。

バカになるといえばテトリス。特にあの"ゲームボーイ"は悪魔のゲームだな。どこでもできちゃうっちゅーのがたまんねーよな。トイレだってできちゃうんだぜ。あとはどこいらの頭いーやつに風呂の中でできるゲームボーイでも作らせりゃ、こりゃあもうかるぜい。これで日本国中大バカ。困ったね。そーいえば、ゲームボーイのテトリスは5万点越えるとロケットがとぶのね。で、10万点越えるとどーなるんだろうと思ってたら、ロケットが太くなるんだってね。奥田民生名人からの情報です。さすが名人はやることが違うわ。ゲームの深さを知ってるやね。まいりました。

そーいえばもう一つ言わして。昨日(7月24日)宇野首相が辞めたのね、で、ちょっと出張してたんで、確認しよーと思って"日刊ゲンダイ"買ったんだ。そしたら一面の全ての"宇野首相"って言葉が一つ残らず"宇野ピンク首相"になってて笑えた笑えた。ま、どーでもいいけどよ。青少年も政治意識をもちたまえよ(笑)。

★最初はちょっとさみしい情報です。でも、これからも頑張って下さい。

●かつてはBOØWY、最近ではG.D.フリッカーズ、もちろん他にも数えきれないバンドを世に送り出してきた新宿LOFTのカニちゃんこと蟹江店長が、引退してしまった。シーンの最前線を作り出してきた張本人のリタイアは、はっきり言って悲しい! 惜しい! でも、長い間ごくろうさん、ありがとね。これからのロックシーンは、うちらがひきうけたぜっ。

名古屋市　服部めぐみ

愛知県　川上太郎

(東京都　狸)

じゃぁここでK⊠GUNS情報。ボーカルのケニーからどーぞ。

「オレが美形のケニーです(笑)。なんなんだ、あの記事は。B・PASSキミらは読んだかい? オレは思わず飲んでいたコーラを吹き出してしまったじゃないか。赤面だぜ。美形のケニー、これじゃ恥ずかしくて表歩けねぇよ。今日もどこかで誰かに後指さされてるんじゃねぇか「あれがケニーよ、どこが美形よ、笑っちゃうわ変な顔してるクセに、生意気よ」なんてよ。おぉー恥ずかしい。やめてよね、田中さん、いやGOGATSUさんか(笑)。ところでK⊠GUNSは8/21ロフトは3バンド目に出演。そして9/10(P51参照)は、血気盛んな鉾の会隊員20名ひきつれ(笑)血の雨必至の乱入ギグ/また8月に㊙出演あり。しかし実はJ・ロットンよりマルコム・マクラーレンに憧れる僕です(笑)」

さて先月号はR・ウォーリアーズの解散特集でしたが、これに関連して。

●私はRED WARRIORSをあいしています。

1人1人になってもこのHEARTの愛は変わりません。ユカイくん、SHAKEさん、キヨシくん、コンマ大王、私はあなた達を一生追い続けます。これからもがんばってください。

(LASTあと8本/ 14才)

●もうSHOCKです。REDSが解散するなんて…。

あたし高校卒業したばっかりで、仕事してます。4月からで、約3カ月たってようやく仕事にも慣れてきたけど、すごく打ちのめされてます。フッと何でこんなことやっているんだろーって思う。やりたいことがたくさんあるのに、一日の仕事が終わると疲れがドーッとでてきて、やっととれる週一回の休みもグターッとしてる……。ROCKとか話せる友達はいないし、いろんな情報が飛びかってるのに、そういうのと全く関係ないところで毎日の生活におわれている。シャケがある雑誌で言ってたように、今の仕事選んだ理由なんて、うちが近いとか、仕事はAM8・00〜5・00までとか…給料が安定しているとか、それ位の理由で…。何やってるんだろーって思う。こんなにREDSが好きなのに、全然関係ないところで一人ぼっちになった気分。すきなことのために仕事してるんじゃない。「車のローン」とか「世間てい」だとか…。本当になんかやだ…。シャケに会いたい。ライヴ見たい。どーして宮崎に来ないの? 休みとっても行くのに…。なんか情けないのー、あたしって。

(宮崎県　匿名希望)

★レッド・ウォーリアーズに限らず、最近、解散って多いよなぁ。たまたま時期が重なっちゃったってことなのかな。ま、でも、気を落さず、がんばって下さい。8月号でREDSへのはなむけの言葉を特集の方で応募したらガンガンきてしまいましたので、こちらでほんのちょっと紹介したいと思います。

●REDSは解散しちゃうけど、みんなそれぞれの道をすすんで、夢を実現させて、ガンバッて欲しい。私はいつまでも応援してるので。

(富山県　高松千恵　16才)

●これからも、ずっと自分らしく生きて下さい。

香川県　三谷順子

(鈴鹿消印・名前なし)

●今はうまく言葉にすることができません。でもREDSの曲と、そして…REDSの皆さんが大好きです。だから、解散しちゃってもそれがみなさんにとって一番いいのなら、これからはそれぞれの道でがんばって欲しいです。そして…ありがとう

(福島市　工藤温子　21才)

●ずーっとずっとRed'sにはロックやっててほしーって思う。シャケにはアメリカ行ってちょっと会えないだろうけど、他の3人はまたステージに立って今まで以上のものをみていきたいって思う。

(神奈川県　八田文月　17才)

●私はユカイくんと結婚しようと思って生きてきたのです。あきらめました。みなさん死なないで下さい。応援します。死ぬまで。

(岐阜県　本田裕子　17才)

●今まで本当にありがとう。レッズのことすきになってよかった。なんか、夢を見てたみたいな気がする。あっという間だった…。レッズ聞くまで、ロックなんて知らなかった。一曲一曲に全部思い出があって、今きいても思い出して胸が熱くなります…。レッズは私の歴史に深く刻みこまれてます。

(千葉県　相川麻理　18才)

●メンバーへは、これからもやりたいことをやり残さずにやって下さい。やってる事が気に入ったら、また好きになります。今でもI LOVE REDSですけど…。

(栃木県　赤坂早由利　17才)

●レベッカ時代からずっとファンだった者としてはムチャクチャサミシィーような感じですが…、うるうる(ダメだ、涙で文字が見えない)。日本で一番かっこいいBANDだから…最後まで、かっこよく終ってください。たくさんの素敵なROCK'N ROLLをありがとう。

(広島市　前田くみか　20才)

●いろんなTV、本を通して本当のROCKをおしえてもらった。だからへタクソなバンド、歌謡曲をきいてると、本当にRED、Sのファンでよかったな…ってつくずく思う。自分でいうのも変だけど、あたしは趣味がいいなぁ…と思う。

(八王子市　梶園まゆみ　16才)

●見事に、期待通りに裏切ってくれました。武道館が終ったら何かする、と思ってたら、やっぱり…。だけど、大好きなRed、sのJumpの瞬間だから、大きな心で見守ってあげましょーです。また、違った形でそれぞれの4人に早くあいたいです。

(山梨県　川口寿美子　21才)

●REDSファンでよかったと思う時

愛知県　大塚昌紀

横浜市　村上由子

愛知県　KOZYAMA

伝言板

は「今」かな。REDSがいたから私、頑張って勉強してクラスで2番になったんだもん。REDSのおかげで青春があったから、やっぱ「今」だね！

（三重県　村田有加　17才）

●こんなにさりげなく解散するバンドっていないと思う。本当、ビッグな4人だったと思う。実力があるから解散できて、自らの音楽を求められるんだと思う。だから私達ファンを悲しませた分、これからは一人一人で目一杯やりたいことわがままにやって私達をおどろかして。

（埼玉県　加藤百合　17才）

●解散するって聞いて泣いていたのは3日間、今は今後の期待を楽しみにしている毎日って感じなので、これからもがんばってね。

（山梨県　木内忍　17才）

●メンバーの皆様、ありがとう。そして又、会える日まで。私は25才にしてレッズを知り、生まれて初めてロックというものの素晴しさを知りました。解散!!　ショック!!　BUt大好きなレッズは、いつまでも私の心に住みついているから、単なるルックスとかそれだけでのファンじゃなく、心から歌に感動してます。詩の内容一つ一つに…レッズの歌によってHAPPY!!な時はよりHAPPY!!に、落ち込んでいる時は力強くなれる様に…。私にとって、今まで生きてきて、レッズに出会えた事はとっても重みのあることです。本当にありがとう。

（名古屋市　野村弥生　26才）

★ほんのちょっとのつもりが今回のビネツはレッズ特集になってしまった。でもまたそのうち紹介するからよろしくたのんます。

では、最後にファンキーな手紙をひとつ。

●こんにちわ。初めてお便りしました。ちょっと私の家族の事聞いて下さい。うちはR&R大好き家族なんです。まず、じいちゃんは、氷室さんのライヴ（TV）をしっかりとくいいる様に見てました。ばあちゃんはTMとチェッカーズが大好きなんです。こんなじいちゃんばあちゃんがすごくかわいいと思います。父さん母さんは、じっと音楽聞いてて「これはいい」とか「もう少しだな」とか冷静に批評するんです。父さんは、車を運転する時にガンガンMUSICならして行くんです。母さんも横で聞いて2人はすごく若いなあ～、と思いました。でも2人はA-haとか洋楽が多いですね。―中略―　こんなとんでもない家族ですが、毎日楽しくアーティストさま達の歌声に狂喜乱舞してるのは私だけです。（熊本県　JUN）

★あら、ファンキー。困った困ったエヘエへ。さてさてさてさて。えー夏休みもまっ盛りっちゅーことで、イベントとかに行く人もたくさんいるでしょう。次回9月10日売り10月号ではその辺のレポートをおまちしてます。それから、地方のみで見れるTV番組、ラジオ番組のレポートもちょーだい。よろしく。じゃね。

千葉県　筋肉処女帯
札幌市　千葉真子
愛媛県　片岡崇章

滋賀県　宮城和弥

兵庫県　あっちゃん・らぶ

東京都　・・・・

仙台市　高橋悦子

原稿募集!!

▼あれっ微熱かな'89…大好きなミュージシャンのこと、腹が立ったことなど日常、音楽カンケーあってもなくてもOK 年令も必ず入れて下さい
▼カウンセラー…だれにも言えない悩みは悩んでないで、どしどし相談してちょ
▼伝言板…何でも伝言したいことをハガキのまんまのせるよ
▼イラスト、4コママンガも大募集、放課後情報も募集してますんでそちらもよろしく！

―あて先―〒104東京都中央区銀座5-1-17数寄屋橋ビル　音楽専科社アリーナ37°C　BINETSUフリーク○○係あて○まで。

神奈川県　KAZURIN

兵庫県　北川原萱

名古屋市　ヘタDEごめん

放課後情報

37C

★KUSUKUSUに関する物を譲って下さい。KUSUKUSU出演の"イカ天"を録画された方、貸して下さい。
〒990山形市青田南1ー3の4　武田弥生

★8月26日のRED'Sの西武球場へ一緒に行って下さる方を募集しています。チケットが一枚余っています。連絡下さい。
〒108東京都港区三田5の6の7　中野和美

★KATZEに関する物、何でもいいから譲って下さい。お礼はします。
〒714岡山県笠岡市小平井3ー160　藤沢潤子

★アリーナ88年12月号を適価で譲って下さい。Wハガキで連絡を!!
〒792愛媛県新居浜市松神子2の1ー1の7　大西麻香

★THE BOOMがデビューする前の自主制作テープを誰かダビングさせて下さい。BOOM大好き！という人、お手紙下さい。
〒953新潟県西浦原郡巻町10区　長谷川純子

★カッティング・エッジ、ゼロスペクターに関するものなら、何でもいいから売って下さい。
〒740山口県岩国市門前町2の6ーの22　小早川香

★ZIGGY、De-LAXに関するものを譲って下さい。
〒655神戸市垂水区本多聞2の5の3ロイヤルハイツ本多聞206　藤原義久

★ユニコーン、レピッシュが大好きな人、私と一緒にライヴに行ってください。
〒500岐阜県清本町6の9　馬渕忍

★プライベーツが今まで出演したTVやラジオのビデオ及びカセットテープを貸して下さい。
〒358埼玉県入間市東藤沢3の1の5　斉藤麻紀

★UNICORNのコンサートパンフを適価で譲って下さい。送料は負担します。
〒272千葉県市川市東大和田2の1ー1の7の403　白石信恵

★アリーナ87年7月号から11月号までと、スライダーズに関するものなら何でも適価で譲って下さい。
〒183東京都府中市小柳町1の16の11　山崎麻弥

★アリーナのバック・ナンバーでBOØWYの特集号をお持ちの方、適価で譲って下さい。また、布袋サンのGUITARYTHM LIVEのパンフをお持ちの方も連絡下さい。
〒173東京都板橋区氷川町23の3の405　正木謙一

★G、B、Key急募!! やる気のある女の子、男の子、B-T、プリプリのコピーします。初心者もOK。自己PRと写真同封で連絡下さい。当方16歳。Vo&Drです。
〒407山梨県韮崎市上ノ山35の2　高野晃子

★UNICORN、J(S)Wに関するものを譲って下さい。お礼します。
〒241神奈川県横浜市旭区東希望ヶ丘1ー67の66　竹田由佳

★B&Dr急募！ ハデでノリのイイパーティ・ロック、けだるく重いハードなロックン・ロールなんかをやりたいと思っています。ケバくてカッコイイ人を求めています。写真同封の上、ご連絡下さい。20歳以上に限る。
〒675兵庫県加古川市加古川町溝之口3の2ー7の8　東田様方　佐田久

★G募集!! 私達は中学2年の3人です。女性に限ります。なるべく年上か、同学年の方がいいと思ってます。県内の人を希望します。自己PRと写真を同封の上、連絡下さい。
〒235神奈川県横浜市磯子区洋光台1の18の38　遠藤美樹

★16〜17歳でヤル気のあるVoを募集中です。ZIGGY、RED'S、その他R&Rをやっていくつもりです。連絡下さい。
〒580大阪府松原市天美北7の8の13　米山寛史

★BASSを売って下さい。出来るだけ安くお願いします。色は白を希望。アンプとかも付いてると嬉しいです。Wハガキに希望価格、キズの具合いなど詳しく書いて連絡下さい。
〒546大阪市東住吉区渦里4の7の24の202　永富千春

★B-Tを本気でファンしてる子、一緒にバンドしよう。Vo、Drを募集してます。なるべく女の子で初心者(15〜16歳)を希望。自己PRを添えて連絡をヨロシク。
〒519ー05三重県度会郡小俣町2550　市来正江

★大阪の方でFM802で延原クンのやってる番組を1回からダビングさせて下さい。J(S)WのSFロックステーションが上手く入らないという方、1回からありますので連絡下さい。
〒444ー05愛知県幡豆郡吉良町富田屋敷37　鈴木小百合

★RED'Sが大好きなあなた、手紙待ってます。
〒310茨城県水戸市曙町1の1の208　須藤朋子

★リモートのライヴに一緒に行ってくれる20歳以上の方を大大大募集しています。どうかどうかお手紙くだしゃんせ！ 私は25歳ダ。
〒300ー03茨城県稲敷郡阿見町中郷西4046　松崎恵子

★B-Tなしでは生きていけないという方、お手紙下さい。返事は必ず書きます。年上でも年下でも大歓迎。当方18歳。
〒350埼玉県川越市小堤658の13　小林和美

★GENが大好きな人、私と文通しましょ。まずは切手同封で!!
〒299ー28千葉県鴨川市江見内遠野64　水野綾

★The TOYSのファンの方、お手紙下さい。ライヴに行きましょう。
〒244横浜市戸塚区矢部町969の35　今田葉子

★LÄ-PPISCH、THE PRIVATESファンの人、お手紙下さい。当方17歳。
〒510三重県四日市市大谷台2の1622の136　平高美保

★ザ・ストリート・ビーツファンのみんなと文通したいと思っています。連絡下さい。
〒369ー01埼玉県北足郡吹上町富士見1の11の5の5　寺山仁美

Let's Howl with AZ　VOL4

ハーイ、エブリバディ！　AZ（アズ）のVo.シゲだよ。6／11の渋公ワンマンコンサートも無事成功に終わってますますギザギザに成ってやろうと考えている今日この頃だ。今年の秋はみんなの学校の文化祭にぜひ呼んでもらいたい。もちろんギャラなんていらないぜ。高校も大歓迎さ。連絡待ってるよ。

てな事で今回は「愛と青春の朝立ちニューヨーク編パートII」。前回ギター片手に一人ニューヨークへ乗り込んで部屋探しを始めたっていうところまでで終わったんだよね。今回はその続きで部屋も決まってそれからどうなったのか。

まず、俺の借りた部屋って言うのがマンハッタンの8Ave. 51Streetと言ってブロードウェイのCatsシアターのすぐ近くにあって、はっきり言ってとても俺好みの環境の良い所だった。一応エレベーターが付いていて入り口には黒人のどう見てもガードマンには見えないデカイおやじが座っていた。アパートメントホテルって言う長期滞在者用の安（ボロ）ホテルだ。ボロホテルの中でもピカイチボロい部屋をあてがわれた。部屋にはラジオ付きのデカイテレビ(画面が映らない）とスプリングの元気良く飛び出したベッドとレトロっぽい洋服ダンスにビックなミラーが壁にかかってた。水の出る蛇口らしき物はあったけどそこから出るものをコップにとってしばらくすると下の方に1センチぐらい白いものがたまった。だから俺はうがいもコーラでしてた。トイレとかシャワーは1フロアーに一つずつ共同のものがあった。今みたいにエイズも騒がれてなかった頃だからよかったけど、今思い出してもゾッとするね。

俺はストリートライブをやる事が目的だったから部屋でも小さめに生ギターを弾いたりしてた。するとある晩、隣の部屋の奴が壁をムチャクチャに叩いて何かを叫びだしたんだ。俺は真剣にビビッたよ。幸い言葉が分からない分だけ恐怖も薄かったんだろうけども叫んでる内容が分かったら多分"殺してやるッ！"とか"オカシてやるッ！"とか"おまえのカーチャンでべそ"って内容に俺は打ち震えていただろうな。そういうことが毎晩のように続いてだんだんと叫び声もエスカレートしてきたんでとうとう俺は、夜通し英作文をして次の朝ロビーに抗議を申し出た。するとロビーのおやじ（マルダイハムのCMに出てきそうな奴）がケロッとして俺にこう言ったんだ。"これを持ってけ"って。何とそいつは金属バットを握ってた。俺はあわてて"ノーサンキュー"と手を振り部屋に戻ったよ。やっぱりここはアメリカなんだって思ったね。

最初日本を出た時、俺は未知の国アメリカをかなり甘く観ていた。何とかなるさってね。ギターケースを開いて唄ってれば飯の種ぐらいにはなるんじゃないかって。けどニューヨークはデカかった。ストリートミュージシャンも半端じゃなかった。どうしてこんなスゴイ奴らがストリートでやってるのか不思議でしょうがなかった。生楽器にも全てアンプを通して堂々とデカイ音でやってた。教会に行けば毎日ただでカッコイイJAZZを聴くことができた。金にはほとんど余裕がなかったから毎日リンゴー個とか、ホットドック一つなんて言う生活だった。最初のうちはカルチャーショックのようなものを受けてなかなかストリートライブをやるタイミングをつかめないでいた。日本を出る前、ビートルズとかいくつかの英語の唄をコピーしてったんだけど、そんな中途半端な歌がこの街で通用するとはとても思えなかった。金の許す限り安いチケットを手に入れてライブハウスやミュージカルの劇場に足を運んだ。オフブロードウェイ、オフオフブロードウェイ、オペラ、ひとり芝居、パントマイム。最初さまざまな刺激が俺を襲った。"もうやめようか"って弱気がだんだん"やれるぞ"って言う勇気に変わっていった。セントラルパークの噴水で宿なし風の男が自分の体と着てる物を洗ってる横にタキシードを着込んだ紳士が平然と立ってた。はねっかえった水が裾にかかりそうなのを気にもしてなかった。俺はニューヨークが好きになってきた。夜8時頃、相変わらずサイレンの鳴り響くマンハッタン、Catsシアターの前で俺はギターケースを開けた。オリジナルの歌を日本語のままで唄い始めた。そんな事を2週間ぐらい唄い続けた。ギターケースの中には小銭が2ドル程たまってた。

ドラマチックな展開に自分自身で震えながら、次回につづく。お便り待ってるぜ！

アンケート

とりあえず、アンケートでやんす。もっとより読者の方々の意見を取り入れて行こうということなんですよ。いよっ勉強熱心！　では質問。

①好きなアーチスト３名(組)を書いて下さい
②注目している新人３名(組)を書いて下さい
③今月号のなかでよかった記事をハガキの中で選んでマルをつけて下さい（いくつでも）
④その理由をできれば細かく書いて下さい
⑤アリーナに対する要望（アーティストのとりあげ方、アーティストの選択、その他、不平、不満、いい所などなど何でも好きなことを書いてくれい）

■ＢＩＧプレゼント➡応募してくれた人の中から次ページのプレゼントが当たります。第３希望まで書いてね。締切は９月10日まで
■応募方法⬇下のアンケート用紙を切り取り線からきって、ハガキにペッタリ貼るよろし。あて先は(〒104東京都中央区銀座５―１―７数寄屋橋ビル５Ｆ音楽専科社アリーナ37°Cあっ、アンケートだ係）まで送って下さい。

ARENA37°C アンケート用紙

氏名(フリガナ)	年齢　歳　男・女
住所	〒　TEL（　）

欲しいプレゼント（P90参照）	番	番	番

①		
②		

③今月号のよかった記事に○をつけて下さい（いくつでも）。

①THE PRIVATESの大特集②レッド・ウォーリアーズ③ストリート・ビーツ④BUCK-TICK⑤ロッカーズ⑥中川勝彦⑦POGO⑧ZIGGY⑨UP-BEAT⑩プライベーツ、延原達治の連載⑪KUSU KUSUの連載⑫ARENA PRESS DELUXE（ニュース、インタビュー、オトイレ中、ライヴレポート、GENの連載、remoteの連載）⑬NEO ROCK（ニューロティカ）⑭ハーム，UNICORN⑮フェンス・オブ・ディフェンス⑯レベッカ⑰カステラ⑱ALBUM自己紹介⑲ビデオ情報⑳微熱フリーク㉑プレゼント㉒KENZI & THETRIPS㉓ローグ㉔ジャスティー・ナスティー㉕THE ALFEE㉖レピッシュ㉗J（S）W㉘らんまるのわがまま㉙シーナ＆ロケッツ㉚G.D.フリッカーズ㉛パール兄弟㉜TV-ウィリングス㉝ミンクス㉞ニューエスト・モデル㉟BL-WALTZ㊱聖飢魔II㊲DOVE㊳池田政典㊴川村かおり㊵仲村知夏㊶De-LAX

④マルをつけた理由

⑤要望

（ここから切り取ってハガキに貼ってください）

微熱日記

☼月☼日…コンサート会場においてカメラマン同志というのは、お互いの撮影をスムースに進める為の暗黙のルールみたいなものがあるんだけどそれを勝手に乱すのがビデオだ。7月20日の阿Qのライヴの時にもそーゆー奴がいてカメラマン全員怒りまくっていた。某氏なんか「殴り倒してやる。」と言っていた。お互い気持ち良く仕事しようね　(NOV)

♨月♨日…相変わらずの淡々としたライヴだった野音のカステラ。これでメジャー・デビューも決まったわけだし。でも、きっとカステラは変わんないだろうなぁー。

♨月♨日…またまた野音。AGE OF THUNDER ROAD '89である。久々の関口君も元気一杯で気持ちのいいライヴを観せてくれたし。早くツアーでもやらないかなぁー、と思ってしまった。ローグは、バッチリとりを取ったし8／30の武道館が楽しみである。

♨月♨日…男闘呼組に係わって、もう一年が過ぎた。早いもんだ。ちゃんと自分の意見が言えて、考え方に柔軟性があって、物事に対する吸収力もある。彼らといると洋楽誌をやっていた頃の感覚に戻ってしまうのだ。　(NAO)

△月△日…いやいや困ったもんだ、ハムーには。高校生のくせに！前橋ラタンの回りがファンでいっぱいだし。まるでコーガンズの様ではないか。ま、演奏が上手いし、それが違うか。いやーでも久々のライヴハウス、床が湿気でぬるぬるしてた。カべもぬれてた。酸欠になりそうだった。困った困った。

△月△日…日詰昭一郎さんは今、近藤真彦のバックをやってるらしい。色々ペケペケ話を聞いたが…教えてあげないフフフのフ。

△月△日…なんか、昔の話で申しわけないのですが、ユニコーン・キーボードプレゼントの当選者が決って、とりにきていただきました。従ってもうキーボードは事務所にありません。すいません。

△月△日…ユニコーンの武道館にコーガンズが出てやんの。ケニーはテングよ。困った困った(苦笑)。(金)

◉月◉日…遂にやりました、念願のプライベーツ表紙巻頭特集！思い起こせば長い間、並人と延ちゃんのツープラトン攻撃に責めさいなまれ続けてきましたが、私にはプロレスなどという邪道なスポーツと違って(笑)、ボクシング魂（またはムエタイ魂）があります。返す刀で左ジャブ、そして幻の右、と……というような話じゃなくて、ただただ感無量だという話だったんだよ(笑)。で、実は今回の写真は都内某撮影スタジオで撮ったんだけど、なんとこの日このスタジオでは、南野陽子、浅野温子、井森美幸、宮沢りえという、プライベーツ以外は(笑)そうそうたるアイドル陣が入っていたのだ。もうメンバーなんて撮影そっちのけで、隣りのスタジオのぞきにいったりで大変だったぜ。嘘、うそ、そりゃ俺の事だったぜ(笑)。ところで、気が早いが予告だ！近い内に第2弾の表紙巻頭やるぜ！今回はシンプルに渋くせめたけど、次はもうみんながビックラこいちゃうような（腰抜かす）前代未聞のすごい企画を既に構想中だ(笑)。次まで楽しみに待っててよ。

◉月◉日…沖縄行きたかったよ〜〜〜、沖縄。おきなわ、OKINAWA。実はJ（S）Wの取材なんてどーでもいいんだ(笑)、俺はジェット・スキーやって、ステーキ死ぬ程喰って、新町行くのを楽しみにしてたんだ(笑)。航空チケット取れなかったなんて情けないじゃないか、俺の夏休み計画をどーしてくれるんだい(笑)。

※ところでジュンタくん＆マサユキくん、東海ラジオに出演させてくれてありがと。それと「ヘイ、ジュンタ、武道館のステージは意外に狭いぜ」(笑)→（また友達を減らしたケニー）

♥月♥日…ゲヘヘ…私、オシャレな街、二子玉川園に引越しちゃったよー‼それにしても引越す時の荷物の多さにはビックリ！なんたって2トントラックじゃ入りきれなかったんだからスゴイ。引越した先で山のように積まれたダンボール箱を横目に見つつ、いつ整理しようかかんがえている最中である。かたづいたら皆さん遊びに来ておくんなまし‼

♥月♥日…大ーい好きなPOGOを追いかけて博多まで行ってきたよー‼リョータが風邪でダウンしたが、他のメンバーはいたって元気で、二次会で行った屋台の長浜ラーメン屋では5回も替え玉を注文し、さながら早い食い競争のようなノリだった。

♥月♥日…せっかく今まで、おとなしくしていたのに、デルジベットがあんまりいいライヴをみせるもんだから、ついつい打ち上げで、飲み過ぎてしまって、記憶をなくしてしまった。後で聞いたら〝またやっちまった〟と思う出来事の数々。やっぱりあの時、飲んだバーボンがいけなかった。でも、本当に、デルジベットはいいバンドになった。こうなったら、彼らを売るために私は本気で頑張るゾ‼みんなも応援してよね。

♥月♥日…L・A・P・P・I・S・C・Hの取材を、成田でやった。気流の関係で着くのが早まったとかで、一時間も待たせてしまった。疲れているのに本当に申しわけない。MAGUMIの女っ気なしで〝花をみても〇〇ズリかける〟は笑えた。でも早々と次のアルバムの音を聴かせてもらったけど、これが、カッチョいい。当然、来月の表紙は彼らが飾るので、お楽しみに‼力入った大特集でっせ。(U子)

×月×日…なんと20時間のうち、3ヵ所で12バンドを見るという離れワザをやってしまった。新宿パワステでジャスティーを見たあと最終の新幹線で大阪へ。JR大阪駅構内で〝終電から始発まで〟という10アーチストが出たオールナイトのイベントを見る。ホテルで仮眠し、朝10時の新幹線で東京に戻り、午後2時から代々木チョコレートシティで遠藤賢司の1円コンサート。まるで超売れっ子タレント並みのスケジュールでしょ。どれも花丸付きいいライヴだった（特に大阪でチャーが「気絶〜」を生ギターでやったのにはカンドーしたね）けど、この間のカンピール消費量も大変なもんだったぜ。

×月×日…アルフィーの桜井さん、ほおヒゲをのばしたとたん奥歯がやられてきたとか。なんでもヒゲをのばすと歯が弱くなるって法則が昔からあるらしい。このヒゲも名古屋のビートボーイズのイベントで見おさめになりそう。

×月×日…中川勝彦はミョーなことをいろいろ知っているんだよねぇ〜。どっから仕入れてくるのか……変に昔のことを知ってたりする。会うたびにフシギな勝ちゃんです。(W)

☆月☆日…参議院選は社会党の大勝で消費税論議が一層かまびすしくなり、自民党もポスト宇野選びで混迷を極め、政局が混沌としている。それにしても消費税、目的は別にしてもとられると何となく腹が立つ。前総理は〝一時の感情に流されないで欲しい〟と訴えたけれど、やはり理性と感情をコントロールしにくい人間にとっては誠に難しい問題……。定価と本体の二重価格表示を早目に解消出来るよう、庶民にも納得のいく結論を出して欲しいものだ。(K)

好評発売中!!

面影の郷(さと)

作詞/山口洋子 作曲/猪俣公章 編曲/池多孝春

五木ひろし

■シングル・7NCS-4015(税込定価)¥659
■シングル・カセット・10NC-5007(税込定価)¥937
■CDシングル・12NT-155(税込定価)¥1,123

PRODUCED BY NEWCREEK RECORDS
発売元:株式会社 徳間ジャパン 販売元:株式会社 徳間コミュニケーションズ

BIG PRESENTES

ARENA37℃9月号

今月もドッカァ〜ンとプレゼントを大放出しちまうぜ!! 応募方法は、P87のアンケート用紙に質問事項の答と希望品名を必ず書いて、ハガキに貼りつけて《〒104 東京都中央区銀座5—1—7数寄屋橋ビル5F㈱音楽専科社アリーナ37℃》まで送って下さい。今月号の締め切りは9月10日(消印有効)までだぞ。

Ⓐ

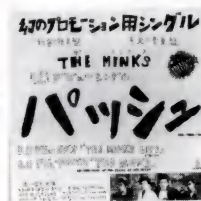
Ⓑ

Ⓒ

①今月の巻頭大特集!THE PRIVATESのポスター(Ⓐ)と特製乙ちゃんピック(Ⓑ)を各10様に。特製バッジ(Ⓒ)を各3名様づつに(東芝EMI、アミューズ提供)

②Unicornのステッカーを10名様に(CSアーティスツ提供)

③De-LAXのバンダナを5名様に(フォーライフ提供)

④レピッシュのオマケ本「HARD LIFE!」を10名様に(ビクター音楽産業提供)

⑤ニューエスト・モデル、SOUL FLOWER Tシャツを5名様に(キング・レコード提供)

⑥THE MINKSの幻のプロモーション用シングルを5名様に(ビクター音楽産業提供)

⑦プレゼンスのTシャツを5名様に(レイン・ソング提供)

⑧BEAT BOYSの特製シャツを5名様に(プロジェクトⅢ提供)

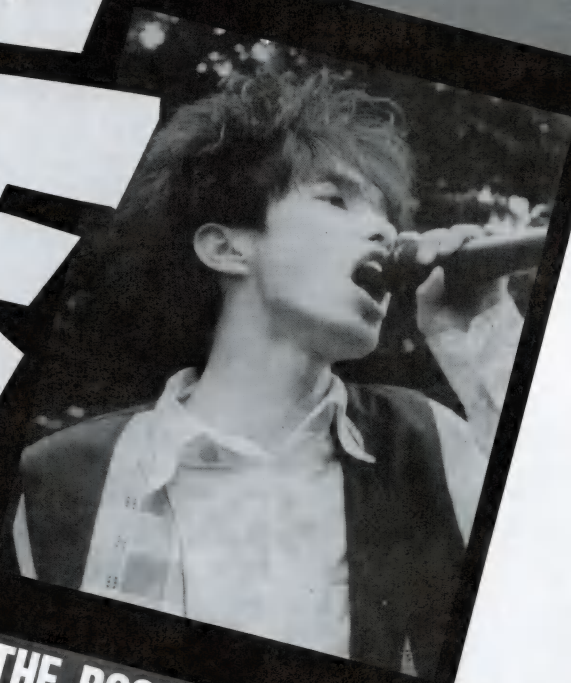
⑨チェッカーズのスタンド・パネルを5名様に(ポニー・キャニオン提供)

⑩池田政典のテレフォン・カードを5名様に(東芝EMI提供)

⑪矢沢永吉の特製パンフを10名様に(東芝EMI提供)

⑫いんぐりもんぐりのトイレット・ペーパーを10名様に(ポニー・キャニオン提供)

⑬岡村孝子の目覚し時計を5名様に(ファンハウス提供)

HARAJUKU ROCKERS PARADISE
原宿ホコ天完全GUIDE
ARENA37°C 7月号臨時増刊
ホコ天知りたきゃ
よっといで
ホコ天GO!GO!
話題のホコ天が
1から10まで全てわかる
決定版!!
THE BOOM
The FUSE
KUSU KUSU
remote
The Bell's
N.D.Nz
UB-TAPS
Plizz
RIP VAN WINK
ヒシキリ・ダイナマイツ
……and all HOKOTEN ROCKERS
♥Interview
◆3週連続ホコ天MAP付き全バンド◆N.D.Nzのテープの作り方◆原宿ショップMAP◆J(S)Wカズヤの語るホコ天◆ホコ天バンド・フラッグ集◆ホコ天KIDSファッション◆ビデオ&映画で見るホコ天◆The BOOM書き下しリレー小説◆バンド・アンケート集◆ホコ天KIDS100人アンケート◆ホコ天㊙フォト集◆生テープ・レビュー◆マンガ「ホコ天やろうぜ」◆ホコ天A to Z◆全国ホコ天MAP◆+?(買ってからのお楽しみ)
絶賛発売中！定価980円
(本体価格951円)
■詳しいお問い合せは
発行◆(株)音楽専科社
〒104 東京都中央区銀座5-1-7
数寄屋橋ビル5F
☎03(574)0201
〈キリトリ〉
雑誌注文書
●受注 年 月 日
●部数 冊
●担当者
●書店名
●書名 ARENA37°C 7月号臨時増刊 HARAJUKU ROCKERS PARADISE 「ホコ天GO! GO!」 ホコ天GUIDE 定価980円(本体951円)
●あなたの名前
●TEL
●預り金
●出版社名 (株)音楽専科社
●あなたの住所 〒

LAST INTERVIEW

KENZI & The TRIPS

4人の思惑

90年代にむけての新たな野望

Interviewer：小島智　Pix：かやばしのぶ

1989.9.3 解散まであと23日

もうすでに各音楽誌で発表されているように、KENZI&THE TRIPSはこの9月のコンサートを最後に解散する。バンドのカラーが明確になりすぎて、これ以上の発展を望むのが困難になった……なんていうのが根本的な理由だ。結成して5年、メジャーデビューして3年弱という非常に短いバンド生命だったが、折りからのバンドブームの昨今、早いうちに勝負を下りてしまった彼らのこの行動は90年代にむけて、はたして吉と出るか凶と出るか？　前号ではKENZI個人の口からその経緯は語ってもらったが、今回は特に、残り3人のメンバー中心に、最近のバンド観のようなものを聞いてみた。

——この春あたりにKENZIくんから解散バナシが持ちあがって、特に反対意見も出ずに今に至ったっていうことなんだけど。

上田ケンジ　うん……まぁ、どう言えばいいのかな、難かしいんだけど……

——どうせなくなるバンドなんだからさ（笑）、その辺、忌憚ない意見を聞かせてよ。やっぱりマンネリ感みたいなものは皆、同様に感じてたの？

上田　うん。同じ音が出ちゃうっていうね……。まぁ、それでもいいんだけど、それ以上を望むか望まないかって所でさ、ストーンズみたく同じことを何年も続けるか、ビートルズみたくスッパリ解散するかっていう……

——で、ビートルズを取った。

上田　そう、そう。そう言うとわかり易いでしょ（笑）。

——いつ頃だったわけ？　そういう意識が芽生えてきたのは。

上田　『KANGAROO』のレコーディング終わった後あたりだね。何かもう、やり尽くしちゃった感じでさ。次に何をやろうって、全然考えられなくなっちゃったんだよね。それで……俺なりに結構悩んでたら皆、同じこと考えてて……。

——実際にKENZIくんから話を受けた時はどんな気持ちだった？

上田　俺はすぐに次のこと考えたな。ドライだとか言われるかも知れないけど、生きてかなきゃなんないからね。

佐野俊樹　俺もわりとそんな感じだったな。最初あんまり実感わかなかったけど、話を聞いて、わりとすぐに納得できた。

シンイチロウ　このバンド入った時からさ、いつかは解散すると思ってたわけですよ。俺なんかは。それがひょっとしたらもっと前だったかも知れないし、10年後だったかも知れなかったわけなんだけど……今が一番自然だった。そんな感じだったから、別にKENZIのその言葉に深い感慨はなかったね。

——いつかは解散すると。そういう意識っていうのは結成した当初からあったわけなんだ。

シンイチロウ　って言うかバンドって、全員の気持ちが一致しないとダメなわけじゃない？　誰か一人が崩れたら、無理にそこに合わせるよりもねえ、解散する方が自然でしょ。

上田　ただ、回りではよく〝解散しそうなバンドだ〟って言われたな。自分たちの中ではそんな意識、全然なかったんだけどね。結びつきが弱いバンドに見えたんじゃないかな、多分。俺たちは東京ドーム位までは軽くいくと思ってたからね（笑）。まぁ、その過程がどこかで崩れたわけだけどさ。

——バンドの解散ってものに対してのイメージはどうだったの？　変な話、最近、日本でも大物バンドの解散が相次いで、あんまり暗いもんじゃないって認識、与えられてるじゃない。

上田　わかんないな、その辺は。例えばピストルズとかもね、あんまりタイムリーに解散に接したわけじゃないからね。リスナーとしてもどういうものか、明確にはね、ちょっとわからない。

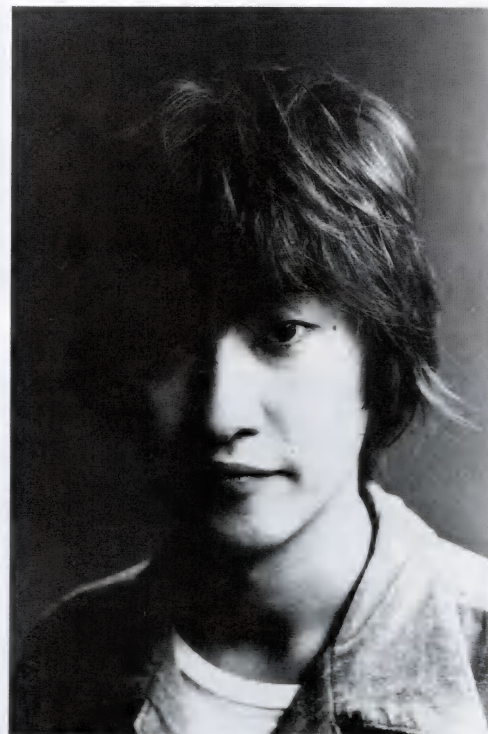
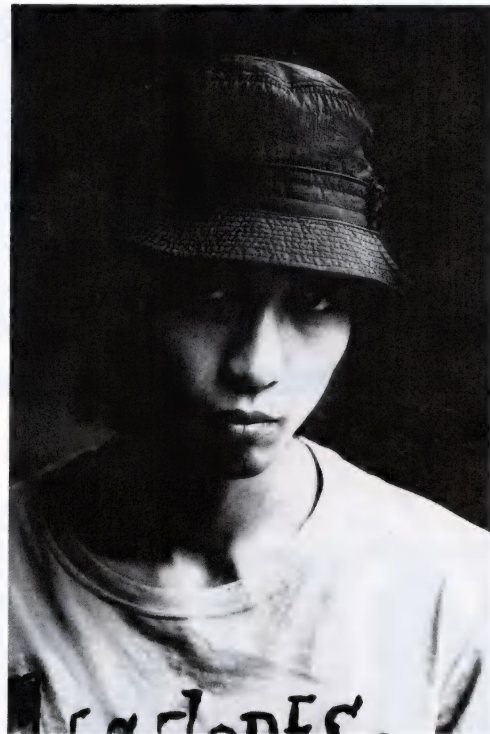
——今のKENZI&THE TRIPSのファンたちがどういう気持ちを抱くかってこととも関連してくると思うんだけれど……

上田　あぁ、そうだね。ファンレターとかよく読むけど、手紙くれるような奴らはさ、ホントに辛いみたいね。すごく情移ってるみたいだからさ、代わりに何聴いていいかわかんないみたくて……

——4月30日の日比谷野音のイヴェントで解散の表明をして、それからも何回かライヴで地方回ってるわけだけど、それじゃ確実にファンの反応って違うわけでしょ？

上田　すごかったね。発表した直後なんか、泣いてる奴もいたもん。取り乱してさ、〝裏切りモン！〟とか言われて……（笑）。で、KENZIくんがもらい泣きした、とかいう噂流されてさ（笑）。

シンイチロウ　〝俺たちも悲しいんだ〟ってことで許してもらったりしてね（笑）。

——そこまで固定した熱狂的なファンがいて、そこで〝やっぱり解散はやめよう〟っていう風にはならなかった？

KENZI 本音言ってさぁ、俺は“もったいないな……”って思ってないって言ったら嘘になるよね。現にレコードの売り上げだって下降してないわけだからね。コンサートだって動員、落ちてないんだもん。それよりも……、何て言うか、束縛されるもんが多すぎたんだよ。KENZI&THE TRIPSってイメージがあまりにも強くなっちゃってさ、何とか抜け出さないとキツくなっちゃったんだよね。それは皆、同じだと思うんだ。
シンイチロウ そうだね。だから……、こうと決めたらイジイジするのイヤだからさ、もうやめる。それ以外の何ものでもないな。
――なるほどね。
上田 だからさ、切れてますよ、今、完全に。そう決めてからのライヴなんか、すごくテンション高くなってますからね。あれはひょっとしてKENZI&THE TRIPS始まって以来のヴォルテージなんじゃないかな（笑）。
――KENZIくんはとりあえずソロでやるって聞いたけど、他の皆さんの進路は（笑）もう決まってるの？
上田 俺はね、とりあえずソロでシングル出すんですよ。これは……、実はもう録り終えちゃった。6月に。
――6月っていうと解散が決まったほぼ直後じゃない。
上田 っていうかね、最初から俺はこのバンドがある時からソロは残したいと思ってたんですよ。それに――、もちろんバンドはいつか組みたいと思ってるけど、それ、やり始めると本格的にやんないとダメでしょ。だから、今しかないなっていう。
――随分きちっとしてるんだね（笑）。他の皆さんは？
シンイチロウ 俺はだから、上田のソロに参加させてもらって、その後も一応、俺と一緒にやろうってこと、話してるんですね。で、今メンバーさがしつつリハーサルに入ったりしてるんだけど、あと1人2人、これといった人材が足りなくて（笑）。
――佐野くんはどうなの？ 前号のインタビューでは“ラーメン屋でもやりながらのんびりやる”とか言ってたようだけど（笑）。
佐野 ラーメン屋に専念するわけじゃないよ、決して（笑）。バンドはもちろんやる。音楽性は……どうかなぁ、今とは全然逆の方向になりそうなんだけど。キーボードとかも入れたいからね。
KENZI キーボード！ 俺、それ初めて聞いたな。どんな音になるの？ ちょっと聴いてみたいな（笑）。
佐野 今の段階だとメンバーがあと4～5人足りないからさ（笑）、はっきりとは言えないけど、ちょっとフォークっぽいものもやるんじゃないかな。南こうせつみたいなのじゃなくてね（笑）。
KENZI アコースティックなわけだ。面白そうだね。
――結局、皆最終的にはバンドになっていくわけだ。
上田 そうだね。まぁ、逆らいたいんだけどね、このバンド・ブームに。ただ、ソロってすごく難かしいし、ここまでバンドやってきたわけだからね。アイデアもあるし……
――なるほどね。すごくいい方向に向いてる感じなんだね、皆。でも……KENZIくんにしても最近は曲ができまくってるって話らしいけど、ここでまた思っちゃうのは何でバンドが前向きに走ってる時にそういう状況にならなかったのかなってことなんだけど……
KENZI それはやっぱりKENZI&THE TRIPSのイメージでの束縛があまりにも大きすぎたからだろうね。俺なんかさ、気持ちの切り替えってホントにヘタだったんだけど、これだけ自然にふっ切れちゃってるわけだから。だから……、何かこういう今の気持ちとかを考えてみて改めて感じてるんだけど、バンドってすごいもんなんだよね。

というわけで8月21日の、彼らのインディーズ時代の代表曲を集めたKENZI名義のベストCD、「'84～'86（EARLY SINGLES）」と、「DIANA」以降の曲で構成された、やはりベストCD企画の「〜」の発表、そして、同タイトルの9月3日（この日は上田ケンジのソロ、「BAD AT LIFE」の発売日でもある）東京・日比谷野外音楽堂でのラスト・コンサートを残すのみになった彼ら。解散を決めてから、ようやくバンドの本質みたいなものをつかみかけたような、ちょっと皮肉っぽい心境であろう現在の彼らだが、本当の意味での勝負は正にこれから、といった所なのだろう。さて、今度は個々の90年代。どんな発展を見せてくれるか、ちょっと楽しみだ。

単独行動ツアー・ファイナル武道館は、次への出発点でもある

ROGUE

ROGUE

「あれっ⁉ まだ東京にいんの⁉」。単独行動はファイナルの日本武道館を残すだけになったのに、ローグはあいかわらず、まわりからこんなチェックを入れられているそうだ。とにかく、単独行動はほとんどオシマイ。奥野クンが名古屋で子猫をひろってきて、部屋でおしっこされたことも、香川クンが道路で寝てしまいひんしゅくを買ったことも、こたつに8人足をつっこんで生活したことも、過ぎてしまえば楽しい想い出、というヤツだろうか、やっぱし。約半年にわたる強行合宿ツアー。普通のバンドなら、とっくに解散していそうだが、彼らは"ローグ・ホモ説(⁉)"がひそかにささやかれるくらい、ケンカひとつしなかった。

そこで今月の題目は"ローグ・単独行動をふりかえる"。昨今の音楽シーンにお怒りのあまり、群れから離れたローグがそこで得たものは、いったい、何だったのか――⁉

「解散なんて考えてるどころじゃなかった」

――単独行動もいろいろあったと思うけど、こりゃあつらかったってことは?

奥野「ボクは名古屋がつらかった。猫飼ってたから、あんまり寝られないし、肌はガサガサになるし」

香川「名古屋じゃ全員カゼひいたしね」

西山「ライブ2本で4kgやせたもん」

香川「でもね。やってる最中はつらいけどもういいの。終わったから」

奥野「そういえば、いちばん煮つまったのは大阪だったね。3カ月目」

香川「3カ月目って時期的にも煮つまんのよ。泊まってたところのまわりが工場でさ。風景がグレーなの(笑)。まわりになんにもないから、遊びに行きたくても遊べないし。みえる景色なんて悲しいなんてもんじゃないよー(笑)」

奥野「その頃ってさ。曲も作んなきゃなんない。レコーディングもしなきゃ。N.Y.にも行くことになったっていうスケジ

インタビュアー　山本弘子　撮影　佐志素子

ユールで、なんかあせってたんだよね。ハラハラドキドキして」
深沢「でも、とりあえず〃終わってよかったぁ〃って感じ。広島では1回、金しばりにあったんだよね。あん時、たぶん誰かが部屋にいたよ。ちょっとおさえつけが強かったもん（ゾォーッ）」
――東京をずっと離れてどうだった？
香川「やっぱり不安だったよ。3ヵ月目に不安になったね。解散ブームでバンドがおしゃかになりだしたでしょ」
奥野「ホント、情報って地方はやっぱり少ないでしょ。どうなってるんだろう、東京はって思ったもん(笑)。何かあったのかと思ったよ」
香川「オレたち、解散なんて言ってるどころじゃなかったもんなぁ(笑)」

「ツアーに出て妙なプロ意識がなくなったよね」

――今回のツアーで意識が変わった？
西山「だからライブとかも今までは〃こうしなきゃいけない〃〃客はこういうのを求めてるんじゃないか〃って思ってたんだけど〃この方が楽しいな〃って方に重点をおくようになったんだよな」
香川「そうそう。自分たちが楽しむのはアマチュア時代の基本だったんもんね。ただ、アマチュア時代は自分たちだけが楽しんでたって感じだったけど、今はその楽しさを客に伝えられるようになったって感じ」
奥野「今までちょっとわざとらしいショー・ビジネスだったかもね」
香川「ステージでもムリやり前に出ちゃったりしたもん(笑)。やっぱり妙なプロ意識があったのかもね」
西山「今までスタッフのことを気にしてたりしてたけど、結局ステージに上がるのは4人だけでしょ。それを実感したね。このセリフ、クサイっすか(笑)？」
――いえいえ。やっぱり東京を離れて、自分たちをみつめ直せたのがよかったのかもしれないという。
香川「だって、東京とはライブハウスの反応も違うんだよ。もう客の顔が笑ってるもん。〃うれしいーっ!!〃って素直な反応がかえってくるよね」
奥野「かわいいよね」
香川「純粋なアンコールだもん。〃もう1回聴きたいっ!!〃って感じ」
奥野「こっちもうれしくなるよ。ライブハウスは大阪がどんどん客が増えてったんだよね。神戸でもいつも80人ぐらいだったのが250人ぐらいになって、ライブハウスが揺れたっていう。スカッとしたね。西山は地元だし、うれしかったでしょ」
西山「超満員で、親が見てる場所がわかんなかくて、よかった(笑)!! 親がいるのがすぐにわかると〃あっ!! オレって旅芸人!?〃って思うじゃない（笑）。
あと、良かったのは〃トーク・ライブ〃。あれはすごくためになった。〃トーク・ライブ〃って衣裳も着ないし、生身のまで、リラックスしてしゃべるでしょ。トーク・ライブとステージの境界線をひくことないなって思った。ほら、ステージってなんか別人になりきろうとするところあるじゃない!? それがオレの場合悪い方に出てたと思うのね。固かったっていうかさ。トーク・ライブやって、飾らない自分をステージでも出せるようになったっていうかね」
奥野「ライブやってても、笑いが多くなったよね」
香川「ある、ある。気どってたよね。ステージでは笑わないし、しゃべらないし。最初は〃トーク・ライブ〃なんて、ロック・ミュージシャンがやるの!? って感じもあったけど、やってる内に〃次、何言ったらウケるかな!?〃なんて考えるようになっちゃってさ(笑)」
奥野「オレはMCでしゃべるけど、ファンにしてみたら香川や西山がギャグ言うなんて信じられないでしょ」
深沢「オレも恐そうにみえるしって!? オレはおいしいところ全部みんなにとられちゃってます。トーク・ライブは(笑)」

そんなわけで、ローグは確実にひとまわり人間が大きくなっていたのだ。肩の力が抜けたというヤツだろうか。ローグの爽やかさ、すがすがしさが前面に出ているアルバム『VIVA』を聴いても、そのことは感じとれると思う。『VIVA』にリキみのようなものは感じられない。なんといったらいいか、空に流れる雲のように大らかで抜けているのだ。ファイナルの武道館ライブに関しても、ファンの心配をよそに、彼らはギャグをかましてくれた。

「武道館はみんなの方が緊張したりしてね」

――ところで武道館もそろそろ。
奥野「うん。もう去年から言ってるもんね(笑)。今までは言われるたびにドキッていうのがあったんだけど、今はもう普通にやろうと。今までのライブハウス・ツアーが大成功だったから、それを見せられる形がいちばんいいんじゃないかと。だから、武道館らしいことはやめようと思ってるんだよ。ミラーボールがまわるとか、レーザー光線をとばすとか、そういうのはナシ」
西山「単独行動の一応ファイナルなんだから、急に違うことをやってもしょうがないでしょ。だから普通のライブとおんなし気持ちでやりたい」
奥野「なごやかにね」
香川「まあ『VIVA』の中の曲が加えられるぐらいで」
西山「ただ、ステージのはしとはしが長いから間奏は長くなるかも(笑)」
香川「何10mもあるっていうからね」
西山「だから、ステージのはしからはしまでが長いっていうのがヒントね」
――でも、ローグのファンは、けっこう心配してると思うよ。武道館が終わったら、気が抜けちゃうんじゃないかとか。
西山「うん。でもさ。それがまた出発なんだよ。今度はホール・ツアーに出るわけだしさ。まぁ、でもファンは当日、緊張しちゃうでしょうねぇ」
香川「みんな緊張するよ!! キャニオンの人なんて絶対緊張する(笑)」
奥野「〃奥野、だいじょうぶかな。ステージで転ばないかな!?〃なんて(笑)」
香川「最初にわざと転んじゃえば緊張ほぐれていいかもよ(笑)」
西山「全員、前転しながらステージに登場するってのはどう(笑)!?」
奥野「パッタンパッタン出てくる」
――
西山「でも気が抜けるってことはないよ。今だってツアーなくてがっくりしてるし。アルバムも早く次のを作りたいっていうきもちなんだよ」
香川「作れば(笑)!? でも、今は何でもできるっていうきもちだね。武道館は思い入れあるけどね。終わったら武道館クラスの酒、飲みたいね。ちょっとエラくなったから座敷貸し切りかな(笑)」

JUSTY NASTY

ジャスティー、最初で最後のホコ天に挑戦!!

「ロックの原点みたいなものを再確認したね」

7月2日㈰原宿ホコ天に、JUSTY NASTYがいきなり現われ、ライブを行なった。メジャー・デビューしてからホコ天に初チャレンジ!と、他のバンドとは全く逆のパターンをやってみせたジャスティーは、予想以上の収穫があったようだ。その辺のところを、ヴォーカルのRODに聞いてみた。

才能というものは、その人の持ってるキャパシティの広さと強さに関係してくるんじゃないかと思う。要するに、どれだけのものをとり込んでいけるかという"広さ"と、それを消化、処理してはき出す"強さ"。音楽という自由な表現方法においては、このことはけっこう重要だ。

JustyNastyのボーカル、RODに初めて会った。もちろん彼のキャパシティがどれだけのものかというのは、まだはっきりとはわからないけど、その広さと強さを示す、いくつかの言葉を引き出せた。

その音楽性や、メロディメーカーとしてのセンスは、彼らのメジャー・デビューアルバム『CRASH』を聴けばわかるのだけれど、そこから派生するいくつかの興味や疑問は、直接話してみなければわからない。そこでじっくりRODに語ってもらおうというのが今回の狙いだ。

ところで、さる7月2日の日曜日。彼らは何とあの"原宿ホコ天"でライブを行った。アマチュア・バンドひしめくあの場所でプロのバンドがやること自体珍しいし、何よりJustyにとって初めての試みだった。彼らにとって"ホコ天"ライブというのは、どういう意味を持っていたのか。そのへんから話をすすめてみることにしよう。

インタビュアー/関根章喜
撮影/松崎信彦(本誌)

◇　◇

――あのホコ天ライブは、見る側としてはすごく面白かったけど、やってる方としては正直にどうだった?

「やっぱり面白かったですよ、刺激的で。後ろの方でいきなり"ROD!"っていわれるのってライブハウスじゃないでしょ(笑)。それにお父さんが子供をかかえて見てたりね。ああいうのはすごく好きなんですよ」

――インディーズの頃からあそこでやりたいとかはあった?

「いや、それはなかったですね。とりあえず似合わない場所だと思ってたし。俺達って太陽がサンサンと輝く中でとかって似合わないですからね(笑)。どっちかというと、曇り空とか大雨とかの方が似合う(笑)。やっぱり日焼けしたくないですから(笑)。でもすごく気持ちよかったですよ、外でやるっていうのは。それで9月に日比谷野音でやるんですけど、それが楽しみですね」

――じゃ、いい経験になったという?

「もうすごくやってよかったなというか、やって正解でしたね。だからたとえば、バンドをやり始めた頃の気持ちというのが、忘れていたわけではないんですけど、いざああいう所に立つともう一度再確認するという。ロックの原点みたいなものがね。アマチュアの時って、みんなああいう状況が悪い所でやってるわけでしょ、PAとか。そういうことってメジャーになったらクリアされるわけだけど、その気持ちは忘れちゃいけないだろうしね。だから勉強にもなりましたよ」

――やる方はやりたいからやる、見る方は見たいから見るっていう、そういう自然な集まりではあるよね。

「そうですね。そういうものっていうのは変わらないし、変えることもできないと思うし。それに今までずっとバンドをやってきたなかで、あのホコ天というのは一番印象が強いんですよ。あのインパクトの強さもあるし、あそこの空気というかにおいには独得のものがありますよね。音楽をやる人間としては、あそこでやる気持ちはすごくわかりますよ」

――またやりたいと?

「いや、何回もやるとそれはそれで違うかなと。一度あそこでやったというのが面白いんだろうし。それにまたやるなら、他の場所で何かやりたいですね」

「俺たちの基本勢はインディーズ時代から変わらない」

——なるほど。それではここで話題を変えて、バンドを始めた頃の話を聞きたいんだけど、RODは初めからボーカルだったわけ?

「最初はギターだったんですけどね。それでその頃はビートルズの「デイ・トリッパー」とかをコピーしてたんだけど、俺はギターへたくそで(笑)。で、ガキはガキなりにどうすべきかを考えるんですよね。そこで俺はギターへたくそでオモロないと(関西出身なので、時々関西弁が混じる)。だから歌をうたうっていって。それからですね」

——最初からボーカルだったわけじゃないんだ…?

「だから何で選んだっていっても、理由はないんですよね。要は気持ちいい、楽しいから始めたって感じで。その頃はでっかいボーカリストになろうとも思ってなかったし。単にみんなと音を出せたらいいって感じでね。それでずっとやってきたわけですけど、やっぱりやめられないんですよ、楽しくて。ホンマに。うたうのが面白くなってしまったら、他のパートがメじゃないぐらい面白くて。もちろん他のパートも楽しいんですけど、ボーカルって、うまいへた以前の所で自分をすごくアピールできるという。そのへんにものすごくひかれていきましたね」

——それがプロになるというのは、どういう気持ちの変化があった?

「高校に入ってから、やっぱりこれから先どうしようって考えた時に、やっぱり俺はうたいたいなって思ったんですよ。音楽もバンドもやめたくなかったし。俺には声を出すしかない、いつまでも声を出していたいと。それしかできないというのが正直なところでしたけどね。でもその時って、まだ世の中知らないから、変な自信があるんですよ。絶対プロになれるみたいな。ちっぽけな自信なんですけどね。でもやっぱり自信がないとやっていけないですよ、絶対に」

——それで今、メジャー・デビューをしたわけだけど、〝うたう〟ってことに対してのこだわりみたいなものってある?

「こだわりというか、ただ自分はうたいたい、いい曲をうたいたいだけであって、べつに客席の人にメッセージをぶつけるわけでもないし…そんな器用なことできませんからね(笑)。ただホンマに好きやからという、それだけのことで」

——それが『CRASH』に出てるんだろうね。

「だから詞に関してもメロディに関しても、自分自身の気持ちにしても、常にストレートなんですよね。回りくどいいい方はしたくないし。結局ストレートに伝えていって、それを聴き手がどう捉えるかはかまわないという」

——でもその基本にあるのは、みんなが聴いていいと思えるものという感じだよね。たとえばメロディに関しても。

「そうですね。メロディを大切にするっていうのはインディーズ時代から全然かわってなくて。とりあえずみんなが覚えやすいというか、すぐ耳に入ってくるというものにしようというのはあったから。だからよく変わったといわれるんですけど、メロディとその基本姿勢、ポリシーは全然かわってない」

——メロディがしっかりしてると、その分ボーカルの説得力とかも大切だよね。

「それは大事でしょうね。でもさっきもいったように、うまいへた以前に何というか……何かこいつオモロイとか、何かすごいなとか、ボーカルってそういうものだと思うし。音楽っていうのは、全然決まりのない世界で、自由で、誰の心の中にもあるものですからね。うまさだけを伝えるんじゃなくて、人の持ってる感情というか、そういうものがストレートに伝わって、それでお客さんが喜んでくれたりしたらそれに越したことないと思うんですよ」

——それがメジャー志向にもつながってくる?

「俺はやるからには売れたいと思って…。日本で一番をとるには結局売れなアカンのですよ。それは音楽じゃなくても何でも、上にあがらなアカンと思うんですね。そのためには、やっぱり自分が今まで積み上げたものに、もっといろいろ積み上げて可能性を広げていくしかないですから。世の中にはいい曲ってたくさんあるし、それを自分で吸収してでかくなっていければみたいな。そういう部分でも、Justy Nastyの音楽はこうだっていうのは作りたくないんですよね」

THE ALFEE

U.S. CAMP DRAKE ASC 1989.8.13

直前緊急インタビュー

「フェンスが取り払われた跡地に、自由の歌が響きわたる」

アルフィーの夏、イベントの夏がやってきた。それにしても何たる暑さだ、今年の夏は！　8月13日まで、あともうちょいだけど、直前講座的に彼らの言葉をしっかり予習し、体力つけて、熱い熱い8／13になだれ込め!!

インタビュアー／渡辺孝二（本誌）
撮影／松崎信彦（本誌）

梅雨の終わりに近い一日、アルフィーのメンバーは埼玉県朝霞市にある米軍キャンプの跡地に立った。間近に控えたイベントの下見のためだ。

そこは、〝都心からこんなに近い所なのに、これだけの土地が……〟と、しばしボー然とさせるような広大な土地だ。長い間ほったらかしになっていたため、荒れ放題。芝生らしきものは30cm以上ものび、かつては手入れが行き届いていただろう並木はジャングル状態。コンクリートのすき間からは、日本じゃお目にかかったことのない（オット、ここは日本だった）妙な形をした巨大な草がつきぬけダンゴのような花を咲かせている。ふと草一本生えていない東京の道路だって、何10年もほったらかしておいたらこうなるのかと思い、自然の生命力の強さに驚かされる。もしかしたら人間のいなくなった地球は、こういう経路をたどって、本来の地球の姿に戻るのかもしれない。

ここがもうすぐ、草が刈られ、木が切られ、巨大なステージが組まれるわけだけど、今の状態からは、その映像はとても想像できない。数日後、メンバーにイベント直前の感想を聞いた。

＊　＊　＊

──実際にその場所に立ってみてどうでした。

桜井　広かったね。航空写真でしか見てなかったから。実際行ってみると、本当に広いなあって。

坂崎　日本にもまだあれだけ広い所があるんだよね。しかも埼玉といっても、ほとんど東京ですからね。

桜井　前は米軍キャンプだったんだなっていうのがあるからね。どうしても見方が普通の広場見てるのとはワケが違うよね。フェンスとか建物とかを見てると、中にあの時代のいろんなものがしみ込んでるんだろうなって。でも、あのままにしておいても、自然になっていいかもしれない。

──地面のコンクリートの下から草や木がぼうぼうに生えてましたもんね。

桜井　あそこの木で酸素がどれくらいできるんだろうって、みんなで話してたんだけどね。

坂崎　トカゲ見たんだよ。ヘビもいるって噂で(笑)。

桜井　坂崎がトカゲを好きだっていうのは知ってたけど、あんな姿初めて見た。だっていきなり地面にはいつくばるように「トカゲ、トカゲ」って探してるんだもん。普通、ここに一万円落としちゃったんだよっていうのと同じくらい夢中になってるの。一瞬〝ゾーッ〟としちゃったけどね(笑)。

坂崎　確認したかったんだよね、何トカゲなのか。もしかしたらアメリカ人が持ってきたトカゲがずっと生きてたりして……。まっ、当日は結構ニギヤカになりそうなんで、ヘビやトカゲには迷惑をかけるかもしれない(笑)。

──ああいうジャングルみたいな所に、

これから別世界が生まれるわけで、それがイベントの楽しみでもありますね。

坂崎　元々が人の集まる所じゃないからね。

高見沢　全然整地されてない状態ですからね。あそこに通信基地があって廃墟になった施設がまだ残ってるんですよ。その中にはいってみたんだけど、まだマイクの台があったりとかして、ここでFENが流れてたんだなって思ったりして。

まず日常的なボーダーラインを取り払え

――それと、今までは戦争のための施設として使われていたが、今度は逆の目的に使われるわけですからね。

高見沢　フェンスというボーダーラインのこちら側とあちら側が、全く世界が違うからね。今でも日本の各地にそういうのはいっぱいあるけど。

僕の場合は日常的なボーダーラインとしてとらえてるのね。国境とか思想的なものじゃなくてね。男と女とか、教師と生徒、親と子とか、そういうボーダーラインは必ずどこにでもある。そういうのをとっぱらうものとして、今回のイベントがやれたらいいと思う。その中で、なぜああいうフェンスが出来てしまったのかということも、考えられると思うんだよね。単純に戦争に負けたからとかじゃなくてね。

そのフェンスの向こうから聞こえてきた音楽にあこがれて僕らは音楽をやりはじめて、バンドを組んでさ……そのフェンスが取り払われた跡地で我々の音楽ができるというのは、〝自由〟を感じるね。我々の音楽で聞いてる人たちの心のボーダーラインが解けたらと、そういう精神的な部分で、あそこでやる意義は大きいですよね。

――あの基地は何年頃から使われてないんですか。

高見沢　'61年から。で、最後に残ったのが通信だったんだよね。

――もう30年近いのか……。

高見沢　ただ気をつけなきゃいけないのは、そういう場所が日本にまだ沢山残ってることだよね。沖縄なんて逆に強化されて、極東最重要基地になってるわけだし。だからといって、そこだけでとらえて欲しくはないんだけどね。ミュージシャンとしては、それは違うから。

音楽はフェンスとは関係ないんだよ。フェンスがあったおかげといっちゃなんだけど、日本にいながらアメリカの番組を聞くことができたんだし。音楽だけは思想や人種に関係なくはいってきた。

――そういう意味では基地の跡地でやるのとは逆に、現在使われている基地内でやったとしたら、それはそれでまた別の意義があったかもしれませんね。

高見沢　そうだね。でも結果的に跡地で良かったと思う。やっぱり監視された状態でやるよりは自由だし、何の検閲もないわけだし。でも、今回、最初予定してたところがダメになって、なかなか決まらなくてね。もし、こういう場所でできなかったら、今年はやめようと思ってたんだ。僕らは毎年夏にずっといろんな場所でイベントやってきたけど、僕らなりの意義のある場所でしかやってないんですよ。他の人は誰も使ってないし。僕らしかできない処女地――バージン・ランドでやるというのはおもしろいしね。でも、もう場所もなくなってきてるしな。

久しぶりなんでまい上がっちゃうかもね

――何年も続いてくると、ファンにとっては一年一度のお楽しみなんですよ。「またアルフィーのイベントの夏がやってくる」みたいな。一つ一つの思い出の中に、「何年の夏」じゃなくて、「日本平のあった夏」とか「ベイエリアをやった夏」といったふうに刻み込まれている。

高見沢　僕らが最終的に夢を見てかなきゃダメなんだよ。どんなに攻撃しかけてもキープになってしまう。これはベテランと言われてる者にとっての宿命かもしれないけど。だからといって、ここでこういうことやりたいというのをあきらめちゃうと、元も子もないから。

――今回お楽しみは、どのあたりですか。

高見沢　いやあ、とりあえずビートボーイズの反動でしょ(笑)。うずうずしてたからね。それは僕らも楽しみだよ。こういう楽しみ方って久しぶり！

――そうかぁ。楽器もってライヴやるってのは久しぶりだもんね。

坂崎　久しぶり久しぶり(笑)。

桜井　綱渡り的だよ(笑)。

高見沢　おまけに野外でしょ。

坂崎　自分達が新鮮。

高見沢　なんかデビューするって感じ。

――なるほど、そりゃ楽しみだね。

高見沢　あがるという状態をね、経験できるかもしれない(笑)

坂崎　まいあがっちゃう。

高見沢　去年4ヵ所やったでしょ。後半はなれてくるんだよね。それはいいことでもあるんだけどね。でも僕はギリギリの状態の方がテンション高くなる。違うプラス・アルファの力がでてくるような気がする。火事場のクソ力ってやつ(笑)。

――それは意外な楽しみだなぁ。

桜井　さっきから思いっきり客観的に盛り上がってやんの(笑)。

――こっちは見る方の立場だから(笑)。

坂崎　今度は演奏面とか歌の面とかで普段感じないプレッシャーがあるもん。

――じゃあ、ビートボーイズがゲストに出るってことはないですね(笑)。

高見沢　出ない出ない。

坂崎　そんな余裕ないって。

――イベントのもう一つの楽しみは、新曲が聴けるかなってことなんだけど。

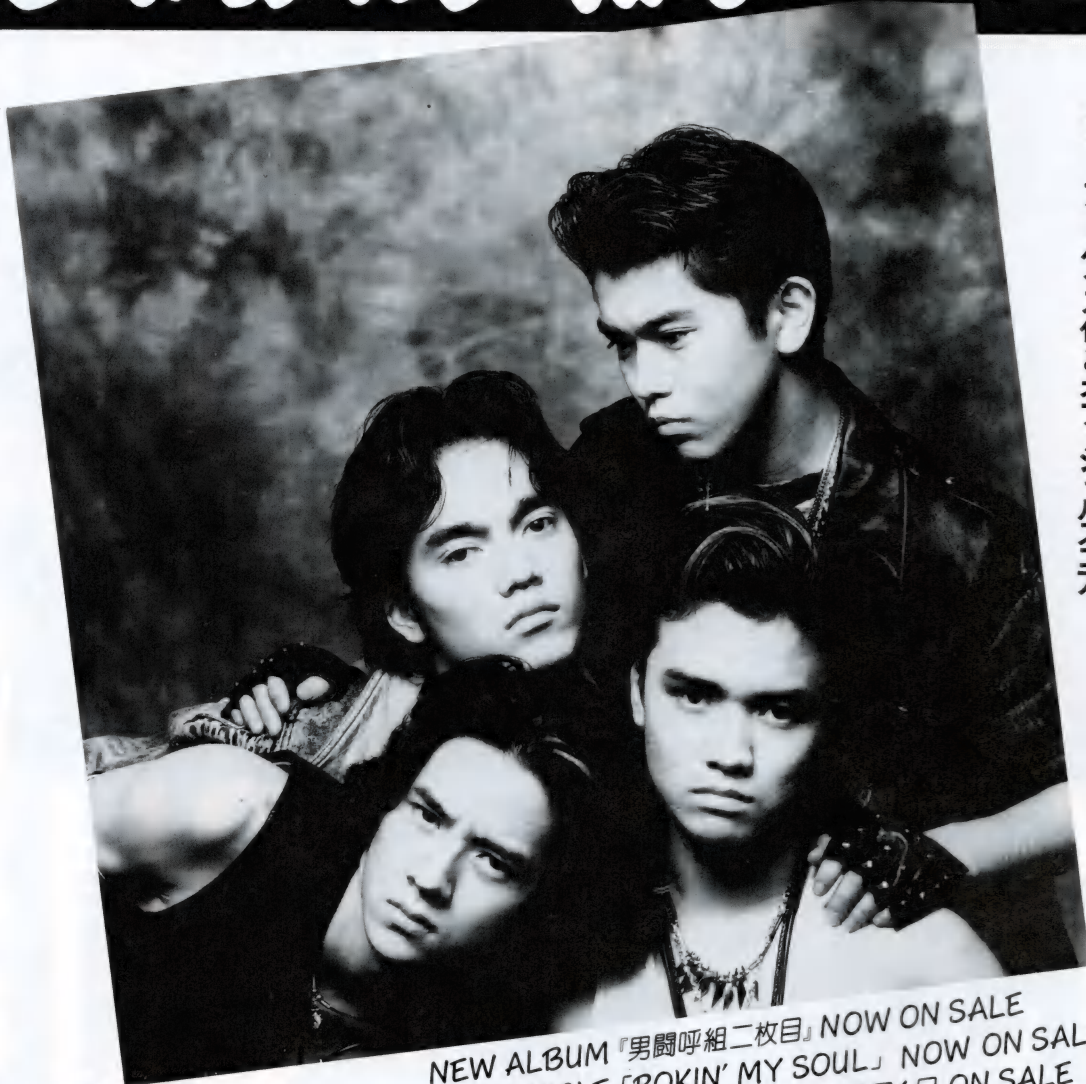
高見沢　そうですね、出来たらやります。

桜井　古いんだって、これから覚えるのは一緒だから新曲みたいなもんですよ、だって(笑)。

坂崎　やり直しだから(笑)。

「男闘呼組写真集〜ロック派宣言LIVE ライブらいぶ」に続く第2弾メモリアルブック。

ARENA37℃10月号 臨時増刊 **男闘呼組責任編集!**

男闘呼組 写真集 BREAK THE SILENCE

東京ドーム、神戸ワールドでのライヴの模様の他、広島〜松山〜高知への密着レポート、トークセッション、スタジオ特写、メンバーのアイデアによって構成されたコーナーなど盛り沢山の内容で、まさにデビュー1周年を飾るにふさわしい写真集です。別冊付録は、ニュー・アルバム収録曲他、全13曲のワンポイント・アドバイス付きオフィシャルスコア。

NEW ALBUM『男闘呼組二枚目』NOW ON SALE
NEW SINGLE「ROKIN' MY SOUL」NOW ON SALE
NEW VIDEO『ENDLESS TRIP』9月6日 ON SALE

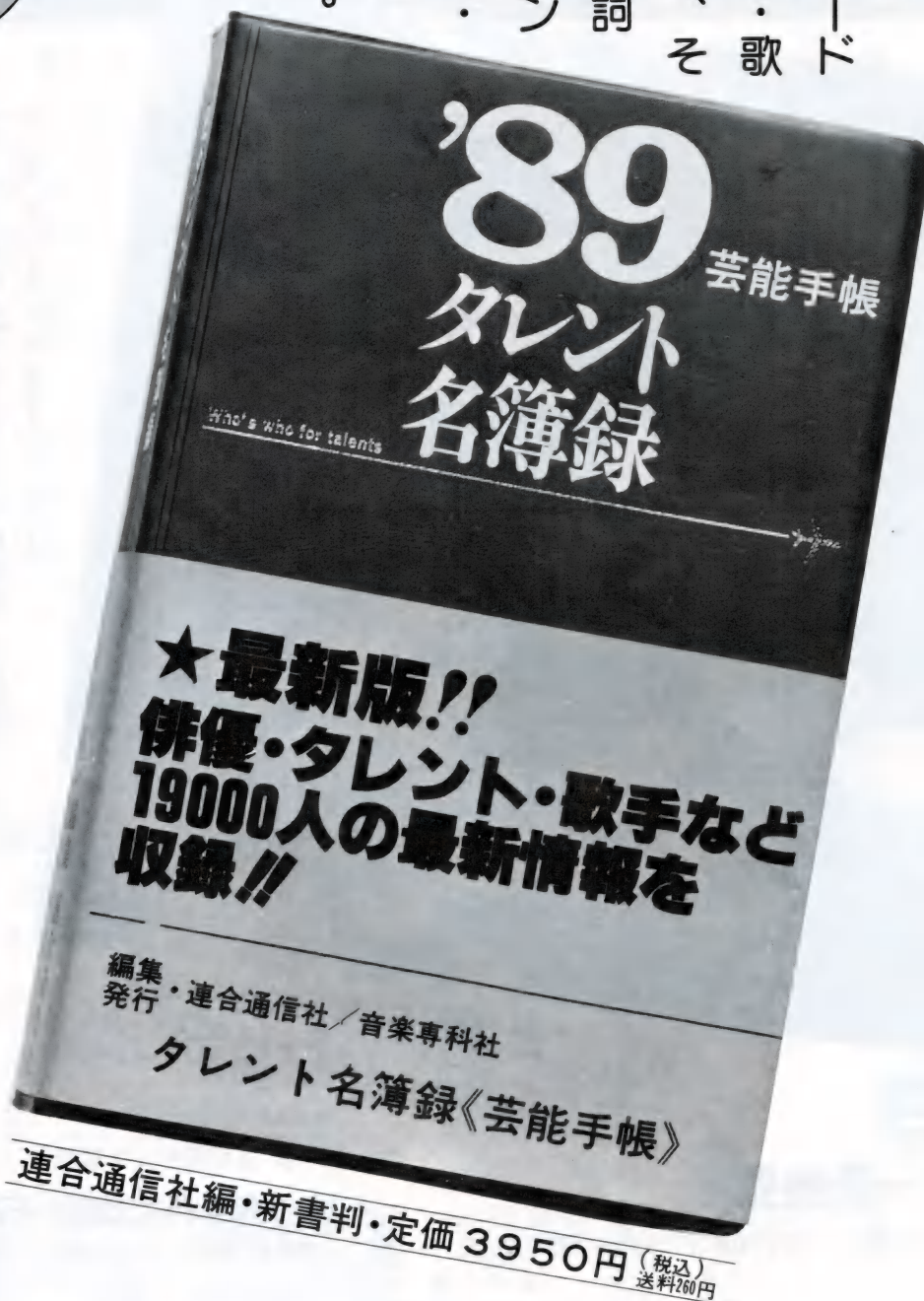
9月27日
全国書店にて一斉発売!!

定価1,600円(本体価格1,553円)　A4判全100頁(オールカラー)別冊付録32頁

▼お問い合わせ
〒104 東京都中央区銀座5-1-7 数寄屋橋ビル5F
㈱音楽専科社☎03〜574〜0201
☆下記注文書を添えてお早目に書店にご予約下さい。

キリトリ線

雑誌予約注文書

●誌名				●部数	●書店名
アリーナ37℃ 10月号臨時増刊 雑誌01594-10	男闘呼組〜BREAK THE SILENCE 9月27日発売 定価1,600円 (本体価格1,553円)				
●注文主	●TEL	●預り金	●出版社名 ㈱音楽専科社		

ラヴ・アフェアー
「どうしようもなく恋愛」に続くヒット・チューン！
花王ソフィーナ・イメージ・ソング
ハートではKISSしてる
村井麻里子
Mariko MURAI
HEART DEWA KISS SHITERU coupling with My Prayer
・CD Single : R10A-112 税込定価¥937（税抜¥910） Single : RAS-576 税込定価¥659（税抜¥640） Single CT : B10T-504 税込定価¥937（税抜¥910）
New Single
NOW ON SALE
TRULY
MARIKO MURAI
絶賛発売中
2nd ALBUM
（大ヒットシングル「どうしようもなく恋愛」収録）
「TRULY」
CD : R32A-1048/CT : RAT-8867/LP : RAL-8867
helóu
Mariko Murai
村井麻里子の
デビューアルバム
「helóu」
CD : R32A-1037/CT : RAT-8857/LP : RAL-8857
BURNING PUBLISHERS
RECORDS
いつも新しい、レコード会社です
BMG
BMG VICTOR, INC.

MIYOKO YOSHIMOTO from L.A.

NEW ALBUM ON SALE

'Power of Love'

1. SECRET PASSION
2. BAD BOY…
3. No more telephone
4. BE MY HERO
5. Two To The Power of Love
6. Haute couture Love
7. Hey there L.A.
8. Sweet Reverberations
9. Heartbreak Juliet
10. YOUNGER THAN I

CD:30CH-409税込定価¥2,812(税抜価格¥2,730)
MT:U4BC-115税込定価¥2,637(税抜価格¥2,560)

ARRANGED BY:STEVE KIPNER & STEVE LINDSEY/ENGINEERED BY:PAUL ERICKSON & DAVID SCHOBER & SHOZO INOMATA/MIXED BY:DAVID SCHOBER/DUET WITH:STEVE KIPNER/MUSICIANS・DRUM:JOHN ROBINSON/GUITAR:MICHAEL LANDAU & JAMES HARRAH/BASS:BOB GLAUB/KEYBOARDS:STEVE LINDSEY & STEVE GOLDSTEIN/BG VOCALS:KATE MARKOWITZ & DONNA DE LORY & LIZ CONSTAINE/ASSISTANT ENGINEER FROM CHEROKEE STUDIOS:JACK BENSON & JOHN BOGOSIAN & TOM NELLEN/STUDIOS:STEVE LINDSEY STUDIO & C/O VILLAGE RECORDERS & STUDIO 55 & CHEROKEE STUDIO

NEW SINGLE ON SALE

"BAD BOY…"

c/w **Two To The Power of Love**

CDS:CARC-12税込定価¥937(税抜価格¥910) SC:10SH-141税込定価¥937(税抜価格¥910)

エジソン BIG INDIES

MAIL ORDER OK!

KENZI&THE TRIPS

BEST LP「〆(しめ)」
8/21発売¥2560
Boys Color/Sweet Dreams Baby/Diana/Cheeselita/爆竹Girl (Live)/Rock 'N' Rock The Roll (Live)/Love Vacation/君が必要/Work Away/Another Birthday/Bravo Johnnyは今夜もHappy!/傷だらけのEvery Day/逃げ出しそうなX'mas/黒猫/ラララ

♡

EARLY SINGLES
「'84〜'86」
8/21発売¥2280
Leostar 8/Bailey/Hotニキメチマエ/爆竹Girl/リーダーをつぶせ/裏切りのうた/Oh!My Cat/Remember Blues/UKモドキ/Crazy Summer

♧

上田ケンジ
「BAD AT LIFE」
1st.ソロ CD SINGLE
8/21発売 ¥910
Bad At Life/Oh Help!

エジソンSPECIAL PRESENTS!

KENZI & THE TRIPS解散!にともなって、エジソンではこの夏、"KENZI思いでの夏パック"を用意しました。デビュー後の作品によるベストCD「〆」(しめ)と、INDIES時代のシングルを集めた「'84〜'86」(CD)の2枚を、KENZIスペシャルCDバッグに入れて合計¥4840で販売します。数に限りがありますので(2000セット)、お早めにどうぞ!!
絶賛予約受付中(全店にて)!

MOTHER GOOSE

1st. MINI LP
「RED LIMIT」
8/21 ON SALE!
¥2000

破壊BEATが大脳を刺激する!サイバー・ゴシック・サウンド、MOTHER GOOSEの6曲入りミニLP。遺伝子レベルから浸食していく!

DNA直撃!

TOKYO DEAD LINE

氷山の一角!

オムニバスLP ¥2500
7/21発売!
5年前ならポジティヴ・パンク!
今やTOKYO DEAD LINE!!
東京はいいなあ....

16TONS

1st LP絶賛発売中
「冒険者たち」
¥2500

有頂天

VIDEO+CD

¥3800

発売延期スミマセン
9/10〜シャイコナ、エジソンにて

※VIDEOは前作「GUN」から3曲(20min.)。CDは新生有頂天による新録音!初回3000本ポスター、特製つぼキーホルダー・プレゼント!!

Import records, goods & indies.

新宿 03(369)3708
〒東京都新宿区西新宿7-15-14

新宿	03(369)3708
札幌	011(271)0166
大阪	06(365)6583
広島	082(245)3692
福岡	092(721)5930
新潟	0252(41)9200
青森	0177(35)5393

Violent Grind
03(411)9892
名古屋 G.R.スウィンドル
052(251)7200
千葉ミュージアム
0473(22)0609

渋谷マンドレイク・ルート
03(463)8566
前橋 ROODY STREET
0272(24)5165
高崎名曲堂
0273(25)0053

※7月より、サービス・カードでCDも交換できます。

通信販売専用電話
03-365-3531

※通信販売送料
・LPサイズ、CD、VIDEO 何枚でも¥600(宅急便)
・EPサイズ、カセット 何枚でも¥350(郵便)

ノースウエスト17便で7月21日、成田に着いた
LÄ-PPISCHに直撃取材を敢行

帰国直撃取材

LÄ-PPISCH

インタビュアー／関根章喜　撮影／有賀幹夫

「レコーディングも順調だったし、全てに関して充実していた」と狂市は、日本茶をすすりながらいった。

5月29日から7月21日の期間で、NYレコーディングをしてきた音は、9月13日『KARAKURI HOUSE』のタイトルで発売される。

14時間の飛行機の旅の後、成田に着いたレピッシュのメンバーは、エラク元気で、さっそく濱田屋と称する和食屋に入り、日本食に舌づつみをうっていた。"こういうの食べたかったんだよ" といいつつ、幸せ一杯の顔をしていた。

LÄ-PPISCH

「アルバムもよくできたし、ライブも良かったし、いい人にもたくさん会えた」(狂市)

最近、また大きな飛行機事故があったりしてちょっと心配だったんだけど、レピッシュの面々が無事に元気にNYから帰ってきてくれました。約2ヵ月にわたるNYレコーディングの間、彼らに何が起きてたのか!? 9月13日にリリース予定の新アルバム『KARAKURI HOUSE』の詳しい内容については次号にゆずるとして、今月はそのNY滞在中行状記(?)なるものを、帰国したばかりのメンバーに聞いてみよう。

というわけでやって来ました、成田エアポート。そう、まさに帰国したばかり、飛行機を降りたばかりの彼らにインタビューをしようとしたわけ。ところが…、ちょっとした手違いが重なって、メンバーを空港で2時間も待たせてしまった…。飛行機に揺られること14時間(！)、やっと着いたと思ったら迎えの車が来てない、おまけに取材者が遅れて2時間待ち…。この超、超悪条件でのインタビューになってしまったのだ…(このことを頭に入れて以後を読んでください)。

さぞやご立腹かと思ったら、メンバーは何と元気に明るく接してくれました。(サスガにレピッシュ、人間がデカイ！)それだけNYでの生活が充実していたのでしょう。(その笑顔は多少ひきつり気味だったけど)少しホッとして、さっそくインタビュー。

◇　◇

——お疲れのところスミマセン…。

上田現(以下"現")「いや、事務所が悪いんです」

TATSU「事務所に愛されてないバンドですから…(笑)」(TATSUくんが言うと妙に真実味がある…)

——でもNYは充実してたでしょ？

狂市「もう充実しまくりでしたよ」

現「ほんの14時間前までは完璧に充実してたけど(笑)」

——(狂市くんが和食を食べてるのを見て)和食の味はなつかしい？

狂市「日本食は食ってたんですけど、微妙にしょぼかったというか」

現「しょぼいんだけど量は多い(笑)」

——大体の生活パターンはどういう？

狂市「まず目がさめるまでねてて(笑)」

TATSU「トッド(今回のプロデューサー、かの有名なトッド・ラングレン氏)を待たせて…」

現「トッドが怒ったあたりでそろそろやり始めて…、で、トッドが眠くなったあたりで止めると(笑)」

狂市「まさにその通り。だから原始人と同じような生活ですね」

——トッドさえ待たせちゃう？

現「いや、悪気はないんですけど、ただ眠くて。あの人はキチンとしてて、ちゃんと朝に目ざめるタイプらしいから(笑)」

トッドがうめぼしを盗んでいった(笑)

——トッドっていろいろな評判があるけど、実際はどんなタイプ？

現「学校の先生みたいな感じ」

——世代の違いとかは感じた？

MAGUMI「イヤ、ないです。向こうも気を使ってやってくれてるから」

狂市「はっきりしたことは、フーは好きだけど、リビング・カラーはキライ」

現「イヤ、リビング・カラーは好きなんだけど、歌詞がキライなんですね。で、ビートルズは大好きなんだけど、人間はキライだって(笑)」

——ずっと一緒にいたんじゃないでしょ。

現「でも、寝る部屋が違うだけで、となりに住んでるからずっと一緒ですよ。で、我々は事務所が用意した食事とかを食べるんだけど、彼はコンビーフにマヨネーズかけて食べてたり。時々こちらのゲストハウスにソッときて、うめぼしを盗んで帰るという(笑)」

——スタジオ(トッドの個人スタジオ)はすごい田舎にあるんでしょ。

現「田舎というか大自然で。環境はバッチリ。大声出しても誰も文句いわないし」

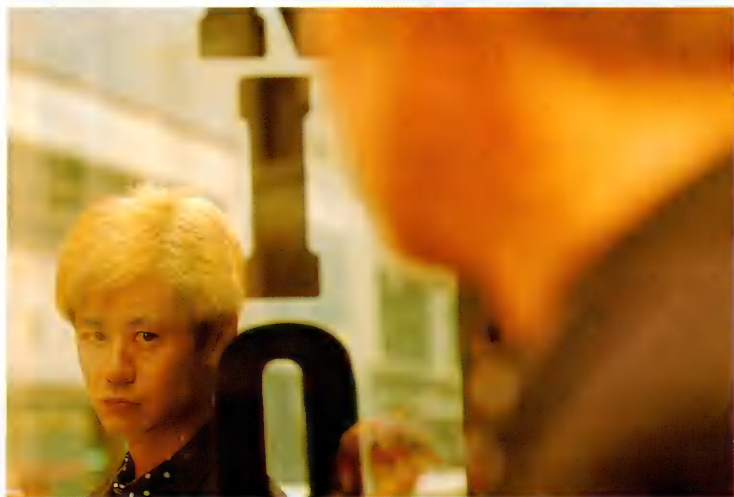
——環境のギャップみたいのはない？

狂市「ギャップどころかオアシスですよ」

MAGUMI「あんないい状況でレコーディングできたの初めてだから」

——いや、周囲がのんびりしてると、緊張感を保つのが大変じゃないかと？

MAGUMI「要するに、音楽に集中できる環境なんです。東京だとキャンペー

LÄ-PPISCH

ンとかが入って、どうしても集中できなかったりするから。部屋も一人ずつだし」

狂市「センズリはかける環境で(笑)」

現「あんな大自然にいたら、花見ながらセンズリかけますよ(笑)」

――(笑)…、向こうだと音の伝わり方も違うとか?(話を無理矢理マジにする)

狂市「空気感の違いは確かにありましたけど、驚くほどではないみたい」

――トッドはポイントは押さえるけど、そんなにアレコレ言わないんでしょ?

MAGUMI「録る前に作曲者とミーティングをするところでポイントを押さえて、録音に入ってしまえばほとんど…。ただ意味不明の日本語については歌詞のチェックは入りましたね。あの人のポリシーとして、こういう歌詞がきたらイヤだというのがあって、そういうものではないっていうことを確認するんです」

――やっぱり言葉は一番大変だった?

現「でも通訳はちゃんといたから。ただこっちが直接しゃべりたくてイライラするぐらいですね」

――他に大変だったこととかは?

MAGUMI「別になかったですね」

狂市「本当に全てが順調で、できすぎぐらいですよ。毎日ゲラゲラ笑いながらやってましたよ」

CBGBのライヴじゃバンドが一番盛り上がる

――あき時間には何をやってたの?

狂市「野球をしたり、プールで泳いだり、詞をかいてたり。それから次の作業のこと考えたりね」

――メンバー全員での休日は?

狂市「ありましたよ、2日間」

――どこかへ行った?

TATSU「ショッピング・センターに行ったり」

現「あとトッドとボーリングに行った」

狂市「あの人が唯一できるスポーツ(笑)」

――遠出とかはしなかったの?

現「カナダに行きましたよ。ナイアガラを一周回るヘリコプターがあって、それに最初に乗ったもんだから、超ゴキゲンになっちゃって(笑)」

MAGUMI「カナダは本当に観光地だから、夜中に歩いてても危険じゃないし」

――じゃ、本当に開放感に包まれながらって感じだね。

MAGUMI「まさしくそうですね」

――ところで、帰国直前にNY・CBGB(マンハッタン1のライブハウス)で初めて海外でのライブをやったとか?

狂市「ぼくら含めて、ニューヨークスカバンドが5バンド出たんだけど、出番が何とドベ(最後)だったんです。だからお客が50人ぐらいしかいなくて(笑)」

現「でも盛り上がりましたよ」

MAGUMI「バンドの連中が一番盛り上がってた(笑)」

――でもレピッシュの音って向こうでもうけやすいという評判だよね。

現「日本語でやってるうちは無理だろうけど…。でもインディーズ・レコード会社から声かけてきましたよ(笑)」

狂市「契約しませんかって(笑)」

――それはすごいですよ。じゃ、やっぱりまたやりたいという想いはある?

一同「やりたいよね」

――最後に今回のNYの感想、手応えを。

狂市「音楽をやりに行ったという上では完璧に満足してるから…。だからアルバムもよくできたし、ライブも良かったし、いい人にもたくさん会えたし。何の問題もないってやつですよ」

雪好「ラルフ(トッドのアシスタント)の目が印象的でしたね。すごくいい人で…」

MAGUMI「ちょうどバント的にも(NYは)いい時機だったという感じですね。あと、ホタルがおしりにとまってパッと光ったのが一番うれしかった(笑)」

現「基本的には狂市と同じで、本当に楽しい2ヵ月でね。楽しいというのは、遊んだってことじゃなくて、充実したっていう意味で。あと、今まで抱き合って別れるような外人の友達っていなかったから、それが作れたのがすごくうれしい」

TATSU「長いバカンスが終わったという感じですかね」

リレー対談 1本勝負

JUN SKY WALKER(S) ◆JUN SKY WALKER(S) ◆JUN SKY WALKER(S) ◆JUN SKY WALKER(S)

寺岡呼人 VS 花岡憲二（憂歌団）

KENZI HANAOKA

ジュンスカのメンバーがそれぞれ〝今、なにはなくとも一番会いたい〟という人と対談しようというこのコーナー。第2回は呼人が、憧れの憂歌団ベーシスト・花岡憲二氏を迎え、よろこびいっぱい。呼人いわく「嬉しいなあ、今日は花岡さんと朝まで飲み明かすぞー」だってさ……。

出逢いは今年の3月1日、憂歌団の中野サンプラザ・ライヴ終演後の楽屋だった。それ以前にもYOHITOは憂歌団のライヴに何度も足を運んでいたのだから、いずれ出逢うはずの二人だったのだろう。かつて憂歌団のライヴについて〝大人の男の人を泣かせてしまうようなブルースなんだ〟と、その素晴しさを語ってくれたYOHITOと「この商売（音楽業界）何の保障もないのやから、人を見る目だけは持っとかんとな、ほんまや」とアドバイスする花岡さんの人生談議はなごやかなムードの中で始まった。

「（憂歌団の）ベースとかスティックだけ持って、ありものでポーンと（ツアーに）行けるような感じに憧れますよ」（呼人）

「機材にこだわる奴は自信がないからや。自分を持ってたら、どんなアンプでも自分の音になるんや」（花岡）

呼人「憂歌団はツアーで、場所によっては細かい所にも行ってますよね。僕なんかもツアー回ってるけど、憂歌団は普通だと信じられないようなところとか行ってらっしゃるでしょ。そういう時、呼んでくれるのはイベンターじゃなくて、その青年団とかでしょ。〝来て下さい〟って。それに対して〝じゃあ行くよ〟って行くスタンスがすごくうらやましいですよ」

花岡「いい人達だから行くんだよね。時時自分達で、何でこんなところでやってるんだろうって思うことあるよ。本当にやる場所がなくて、大きめの喫茶店を借りたりして。自分達でも信じられないけど、実際やってるからね。それにお客さんが喜んでくれてるし。そうすると、こっちも嬉しい。コンサートにない楽しみ方っていうか、原点に戻って、ね。僕らはいくつになっても、そういうの持ってるから」

呼人「僕らはやっぱりライヴハウスから始まってはいるんだけど、〝この照明〟〝この音響〟って、いつの間にか出来上がって

「憂歌団の花岡さんとしてではなくて、人間としての花岡さんと話ししたいし、色々教えてもらいたいんです」（呼人）

て。ツアーをやるでしょ、そうすると〝この音響〟が入らないホールだったら、その小さい会場より大きなホールでやるっていう。だから少しずつ崩れてきてると思うんですよね。例えばベースとかスティックだけ持って、ありものでポーンと行けるような感じに憧れますよね」

花岡「自分の楽器があったら俺はアンプはどこのメーカーでも、そこらに転がってるのでも、何だっていいわけ。なぜかと言えば、毎日空間は変わるわけ、人も音もアンプも。だけど自分を持ってたら、自分の音がするわけ。自分の音ってあるやん。からだで覚えてる。チョイチョイと目盛を変えたら自分の音になる」

――そう思い始めたのはいつ頃ですか？

花岡「20代から。自信があったからね。だから楽器や機材にこだわるなら、自分をつくってからやと思う。機材にこだわってる奴は自信がないんや。このギターじゃなきゃダメ！このアンプじゃなきゃダメ！と言うのは甘えてるんや。だってPA通せば同じじゃないか」

呼人「あ〜〜〜、そうですよね」

――今回のJ(S)Wのツアーでは1ヵ月間地方へ行ったままというのがありましたけど……

花岡「うわ〜〜！体こわすよ。若い時はいいのや。30を越えてふと振り返った時、俺の人生何やったのやろって考えるよ（笑）」

呼人「でも振り返った時に、20何歳の時にスリーピー・ジョン・エスティスなんかと、すごくいい出会いをしたな――とかは？」

花岡「あー、あれはすごかったな。あの時は本気で音楽に取り組もうと思った。今までレコードで聴いてて、その音が横に、そこにあるんや。あの時は、ノリというのを（レコードじゃなくて）その人からからだで覚えたからな。スリーピーとやってから他のバンドの音がもの足りなくなった。そう思って俺らの音をみたら重いナと思って。ドッシリして、ゆったりして、包み込む。クラシックもそうやね。速そうでゆったりしてる」

呼人「そういうのって、普通経験できませんよね」

花岡「うん。スリーピーとか、マディ、アルバート・コリンズ、BBキングとかね。つまり、いいものを本当に理解できるようになってきたんだよな。BBキングって名前を聞かなくても、音を聞いて、ああいいナってね。僕が初めてBBキングを見たのは17の時だから」

呼人「どこで、ですか？」

花岡「大阪のサンケイホール。お客さんガラガラや。俺にとってはBBキングはスターやから、超満員やろな思って、1000円のチケットを買って行ったんや。行ったら客がいない！ 1番後ろのチケットで1番前まで行って見たんや（笑）」

呼人「その頃の外タレ（外国人アーティストの略語）のチケット代って？」

花岡「1番安いところで1000円ぐらい。最高で3000円ぐらいやな。J(S)Wはいくらぐらい取るの？」

呼人「うーん……」

――2500円から3000円ですね。

花岡「安いなあ（笑）。でも、その方がええなあ」

「芝居見て、映画見て、スポーツやって……何でもやったらええんや。そしたら自分が音楽やってて意識がでてくる」（花岡）

「休みの日は、早起きして草野球やったりしてるんですよ」(呼人)

呼人「花岡さんはオフはどのようにすごしているんですか?」

花岡「ヨメさんと買い物行ったり、皿洗ったり、たまにカレーライスやスパゲティ作ったり、あとは近所の店に行って呑んだり、プロレス見に行ったり、バーベルをあげに行ったりね」

――理想的な1ヵ月のライヴ本数は?

花岡「俺は10本でも15本でもいいの。でも15本やるなら残りの15日は休みにしてほしい。まず1ヵ月のスケジュールの中でヨメさん孝行の買い物の日とか、家の仕事の日とか学生時代の友達と会う日とか決めておくわけ。ところが、そこに急に仕事が入ると、俺の中の流れが崩れてしまう。〝ヨメさんと買い物〟の日はどこへ回せばいいんだろう!(笑) そうなってしまう。でも、その買い物があると、ないとでは、ヨメさんの1ヵ月の笑顔も違うわけや。音楽させてもらうには、ヨメさんを大切にせな。そしたら呑みに行くにも〝呑んでらっしゃい〟ってなるわけや(笑)。呼人はオフの日は何しとるの?」

呼人「昔の友達に会ったり……。休みがせっかくあっても、何も考えないでいると何もできないから、この日はこれをやるって決めておく方ですね。友達が芝居をやるって言うと、それを見に行くとか、高校の時の友達と会う、とか……。映画を見たり……」

花岡「芝居を見て、映画見て、スポーツをやって……って何でもやったらええんや。おもしろいよ。そしたら自分が音楽やってるって意識が出てくる」

呼人「僕の友達のバンドとかは、夜中の3時なんて普通って人いますけど……」

花岡「いるでしょ。そういう人達は昼頃起きるんでしょ。ボク、それキライなの。朝早く起きる! 大体8時。休みの日でも! 夜おそいからって、昼ダラダラ起きるの嫌いなわけ。だから音楽やってる人は、そう見られる。近所の人にも、朝は〝お早ようございます〟って言いたいわけ(笑)」

呼人「J(S)Wは取材とかツアーがあるけど、逆に(休みの日には)自分から草野球とかやってるんですよ。朝早く起きたり、友達と会うように時間つくったりしますね。草野球では会社の徹夜あけで来てる人がいたり、野球が終わってまた仕事に行く人がいたり、俺なんかよりずっとハードでスゴイですよね!」

花岡「うん、すごいよね。俺らなんて甘ちゃんよ」

呼人「そうですよね。時間って大切ですよね」

花岡「そうや。俺は学生時代は無遅刻、無欠席だよ。学校スキでスキでしょうがないから、26歳まで学生やってた(笑)」

呼人「大学院行ってたんですか」

花岡「そうや! 大学院2回もやってた」

(一同爆笑)

――ツアーやイベントで重なることはないにしても、J(S)Wと憂歌団は今後も活躍し、お互いに注目し合ってゆくことと思いますが……

呼人「って言うか、入口は憂歌団だったけど、憂歌団の花岡さんっていうより、花岡さんと話をしたいナと思いますね。会った時に、J(S)Wがどーのこーのじゃなく、普通に話したいですね」

花岡「人間としてね」

呼人「はい。この前、野音の憂歌団のライヴを見に行って、打ち上げに友達3人で行ったんだけど、花岡さんはしゃべってても、大学生や社会人の人がそこにいても、全然音楽の話とかはしないから、皆に通じるんですよ。皆〝うん、うん〟ってうなずけるんですよ。僕がJ(S)Wやってるから、僕だけ話に入れるとかじゃなくて、皆楽しめて」

花岡「(YOHITOの肩をポンポンとたたいて)わかってんなぁ(笑)、呼人とは友達になれそうや。ええやっちゃなぁ。わかっとるなぁって。おごりもないし、素直やし、純粋やし、まじめやし。ええよね! 俺の場合、10人いたら5人は俺の味方で、あと5人は俺のこと大嫌い言うと思う。でも、イヤな奴におべっか言って好きになってもらいたくないし。だから、10人おったら5人と友達になれる。あとの5人は自然に着いてくるやろ」

呼人「バンドも同じですよね。皆に聞いてもらおうと思って自分達の個性曲げるよりは、その中の半分でもいいからわかってくれたら、あとは着いてくるかナって思いますね」

花岡さんの奥さん自慢から結婚観など約1時間半の対談のあと、YOHITOに感想をたずねてみた。

呼人「感想は僕の胸の中で……」

花岡「カッコエエな(笑)」

「呼人とは友達になれそうやね。おごりもないし、素直やし、純粋やし、物事わかってるよ」(花岡)

●**花岡憲二(憂歌団)**
'75年、「おそうじオバチャン」でデビュー(1週間で放送禁止)、以来10数年に亘って本物のブルースをやり続ける、大阪が生んだ日本屈指のブルース・バンド・憂歌団のベーシスト。プロレスとお酒とおくさんをこよなく愛し、〝本物の男〟を感じさせるその人柄で多くの人を魅了する。'53年7月27日生れの35才。

生き埋めは誰だ!?

こんな事するのは
やっぱカズヤだった(笑)

VACATION

in

OKINAWA

メンソ〜レ沖縄

7／15、沖縄スクランブルにてLIVEを行なったジュンスカ。なんとその後、3泊4日のオフへと突入！ 沖縄の照りつける真夏の太陽、どこまでも透明な美しい海と、しっかり南国の夏を満喫してきたのだ。

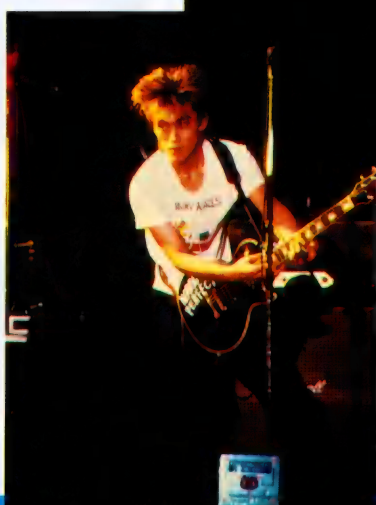
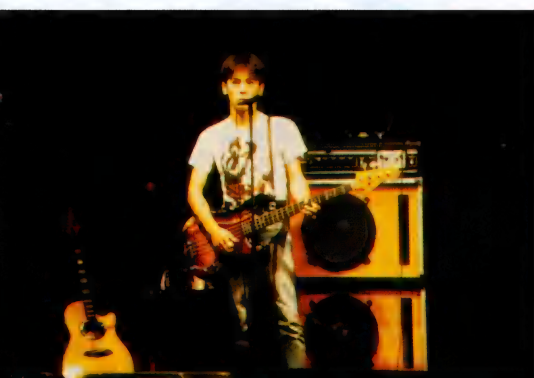
◆7／15に行なわれたスクランブルでのライヴでは、久々のライヴ・ハウス(と言うよりディスコって感じなんだけどね)でメンバーもお客さんも大盛り上がり！ 熱気充分なのはいいんだけど、あまりの熱さに、ライヴ後、メンバーはダウン寸前だったってさ。

◆2日目からはメンバー、そしてスタッフも待ちに待った楽しいオフ・タイム♡ この日は、スキューバ・ダイビングの一日体験コースにチャレンジ！ クルーザーに乗って、30分程行った離島で生まれて初めてのダイビングを全員でやったんだけど……マネージャーに言わせると「ジュン太は昔、県大会に出たりしてたぐらい水泳が得意なんだけど、スキューバでは恐がってたみたい。サメがいるよとか脅されてね」だって。

でも当人のジュン太に言わせると「俺とかは結構すぐ潜れたんだけどね。若干一人、二人なかなか潜れなくてジタバタしてる人がいたよね。な、小林」とこうなる。

本当のところはどうなんでしょ!? とりあえず小林くんに言わせると「もうスキューバなんて二度とやんない！ ほんの10分か20分講習受けただけで、いきなり10M位のところ潜らせるんだもん。〝耳ぬき〟ができなくて、ちょっと潜ったところでジタバタしてたら、インストラクターが上から押すんだもん。〝無理、無理〟って言ってるのに」だそうです。

◆その日はジェット・スキーやジェット・バイクにも挑戦。ジェット・バイクの後ろにロケット型の浮輪をくっつけて、それにしがみついて海を疾走したり、と色んな遊び方で楽しんでいたみたい。もちろん一番盛り上がってたのは、スピード狂の小林くん。でも一人だけ参加しない人もいました。誰だって？ それは乗り

沖縄での初ライヴ。とにかく熱気充分の大盛り上がり大会。

なにがそんなに楽しいの？

エプロン姿も悩ましい!?

海では食事が最高の楽しみ

青い空、青い海、
そして海に似合わない男(笑)

あれ、ビデオ・カメラで女の子撮ってたのは
ジュンタだったかな(笑)

どこのヤンキーじゃい(笑)

物に弱いジュン太でした(笑)。

◆ジェット・スキーやジェット・バイクで遊んだあとは、離島でバーベキュー・パーティー。あいにく雨が降ってきて、肉も野菜もビショビショに…、でもおいしかったってさ。

◆食事のあとは（雨のため）あまりの寒さにたき火大会に早変わり。ヨヒトとマネージャーの門池さんの二人は、どちらがいっぱい薪を集められるか、薪集め競争に余念がなかった(笑)。

◆帰りのクルーザーではなんとマサユキくんが船長に!? と言っても時間はほんの数分。本物の船長に「やってみるかい」と帽子をかぶせられて、マサユキくんが舵を握ったんだって。難破しなくて良かったね(笑)。

◆3日目はムーン・ビーチでフリー・タイム。カズヤはスタッフのビデオ・カメラを持って海辺のギャルに「どこから来たの?」とか映しまくってたとか(笑)。

◆ムーン・ビーチ・ディスコ占拠事件＝「ホテルのディスコに行ったら、いきなりドアが閉っていて〝アレッ!?〟とか思ったら、たまたま通りかかった従業員が〝お客さんですか、すいません〟ってドア開けてくれたんだ。でも、もちろん人っ子一人いないの。金髪のスタッフとか(笑)メンバーとか七〜八人位だったんだけど、その後も誰もお客さん来ないの。ドアの所でみんな覗くんだけど恐がって帰っていっちゃうんだ(笑)」（ジュン太）

◆と、久々のオフを満喫してきたジュンスカ。でももっとすごい笑い話は、〝沖縄に取材旅行だ♡〟とずっとはしゃいでいたアリーナ編集者。どたんば3日前になって結局航空チケットがとれてない事が判り（他人に頼んでたんだ）、楽しい旅行計画(笑)がオジャンに。その後でメンバーに会わす顔もなく、情けない…。

無邪気な小林君(笑)

加山雄三みたい(笑)……嘘

RANMARU NO WAGAMAMA

連載——第7回　澄み切ったうたからの誘導

らんまるのわがまま

文・佐伯 明／撮影・伊藤恵美

㊫「ストーンズって、すごい好きなところとさ、ちょっと反発したくなってくるところと両方あるんだよ。」

レコードを聴いたり、ライブを観たりして、それらについてのエクリチュール（創文）を自分の仕事にすると、そうした作業が慢性化して、レコードを開ける時の、

〝これから聴くぞ!〟的感覚や、ライブ会場の前まで来たときの、〝着いたぜ!〟的思い入れが、徐々に薄れて行くのは、自分でも悲しいのだがいかんともしがたい。

高校生の頃、僕のリスニング・ルーム（!）は物置小屋であった。年中デカイ音でレコードをかけているので、半ば隔離されていたのである。

夏場は当然クーラーなんて物はなく、窓は一つで、空気が澱みやすかったので扇風機はプリメイン・アンプの後ろに置いて、アンプの熱を逃がした。

それでも（というかそれだからこそ）、日中は部屋の中にいて、音を聴けるような環境ではなく、デカイ音を求めてロック喫茶に何度となく出掛けて行った。

店のレジのところには、簡素な（ライブを告知する）パンフレットが置かれてあって、気にいったのがあれば、プレイ・ガイドに走るかライブ・ハウスまで買いに行った。

終わってみれば、まだくすぶっている感覚が残るライブも（当時）多かったが

※ローリング・ストーンズのギタリスト、故ブライアン・ジョーンズの20回忌にあたる7月3日、芝浦インクスティックで「The Anniversary of BRAIAN JONES」というイベントが行なわれた。ブライアン・ジョーンズをしのぶために、この日だけ結成されたバンドのメンバーは、ギターが蘭丸とシャケ、ベースがジェームス、ドラムスはハウンド・ドッグのブッチャー橋本、ヴォーカルはジギーの森重とシェイディーのユウジとレッズのユカイ。ストーンズのナンバーを次々と演奏し、最後は大友康平らのゲストを交えて全員がステージに出て「ホンキー・トンク・ウィメン」等を演った。

ライブの現場で得る快感は他に代替できなかった。狭い範囲にしか通用しなくても高密度の快感がそこにあったような気がする。7月3日の芝浦インク・スティック・ファクトリーには、それがあった。
そして、狭い楽屋には蘭丸がSGを持ってソファーの横に腰掛けていた。

× × ×

佐「ローリング・ストーンズのキース・リチャーズは、オリジナル・メンバーでキャラクター的にもある種〝不動〟ってところがあるじゃない？でももう一人のギタリストは、ブライアン・ジョーンズの死後、ミック・テイラー、ロン・ウッドと変わったよね？やっぱり、ブライアン・ジョーンズに一番思い入れがあるのかな。」

蘭「どうなんだろうなあ、ストーンズはやっぱストーンズっていうかね。」

佐「ブライアンが死んだ時、残ったメンバーがロンドンのハイド・パークで追悼コンサートを演ったけど、そのときってリアル・タイムで知ってるの？」

蘭「知らない。後から、フィルム・コンサートみたいな催しで観た。」

佐「ブライアンって、ストーンズの中では曲とか書いてなかったよね？」

蘭「うん。一曲も書いていない。」

佐「やっぱりそれがストレスとかになってドラッグ漬けになっちゃったのかな。」

蘭「どうなんだろう？知らない。」

佐「……。（苦笑）でも今日みたいなこういうライブを演ってもいいかなって思えたその気持ちの底辺にあるモノは？」

蘭「だからローリング・ストーンズ、ブライアン・ジョーンズっていうより、早い話シャケ（レッド・ウォーリアーズのギター／木暮武彦）から誘いがあってさ。毎年演ってるみたいだし、今年はオレの方も時間があったんで……」

佐「じゃあ、いいかなと。」

蘭「うん。演りたいなあ、そんじゃ演ろうと。」

佐「逆にこれは本末転倒というか、ちょっとヘンな質問なんだけど、ストーンズって蘭丸の中でけっこう大きな存在だったのかな、今改めて。」

蘭「いや、おっきかったんじゃないかなぁ。」

佐「クリームとかから入って、まずは〝エレキ・ギターが、ガーン〟みたいな衝撃があって…」

蘭「何だよ、それ？」

佐「いや、だからいわゆるエレキ・ギターの音にショックを受けたんでしょ？」

蘭「あっ、そうそう。〝何かギターにガーン〟じゃさ……」

佐「〝ダンスにゴン〟みたい？」

蘭「……」

佐「だからさ、クリーム以降、ストーンズに出会ってなるほどと思ったこととかある？」

蘭「やっぱ、バンド・アンサンブルの妙とかカッコ良さじゃないかな？ブルースにもストーンズみたいなバンド・アンサンブルってあんまりなかったからさ。ブルースとかリズム・アンド・ブルースの消化の仕方が、すげえカッコイイところにまでいってるなと思って。そのまんま演らないし。」

佐「ストーンズって当然のことたくさんアルバムが出てて、今度9月にリリースされるニュー・アルバムが、通算34枚目とからしいけど、その中から〝一枚選べ〟と言われたらどのアルバムを選ぶ？」

蘭「むずかしいなあ。『ゲット・ヤー・ヤー・ヤズ・アウト』かなあ。あれはかなり聴いたからね。」

佐「デッカ時代（ストーンズが自らのレーベルを設立する前に在籍していたレーベルがデッカ）は好きなの？」

蘭「うん。あの辺の感じはね。」

佐「きょうみたいなイベント性の強いバンドで演奏すると、アンサンブル何かは当然スライダースのそれとは変わると思うけど、蘭丸は受け入れられるんだ？」

蘭「ストーンズのカバーだけど自分のスタイルで演奏したいんだよ。」

佐「ストーンズのコピーをただ無心に演ってた頃と、今はこういう機会でもなけりゃそんなに演ることもないと思うけどまあ実際にプレイしてみて、でてくるモノが違ったりします？」

蘭「ずっと聴いてきてさ、すごい好きなところとさ、ちょっと反発したくなってくるところと両方あるんだよ。」

佐「それはギターで？」

蘭「あと、まぁ、リズムにしてもさ。」

佐「きょうのライブって、ジャム・セッションじゃないのかな？」

蘭「そうだね。ステージに立つ人がそれぞれにもっているストーンズの思い出みたいなもんを曲を通して表現するっていうかね。」

佐「ただのナゾリではない、と。」

蘭「オレだってさ、ミック・テイラーに対して〝こうは弾かねーよ〟ってとこがあるわけよ（笑）。」

佐「スライダーズって普通のコンサートとかのリハーサルでストーンズのナンバーを演ったりしないの？」

蘭「しないねえ（笑）。でも聴いてるだけで出てきちゃうんだ。キース・リチャーズとミック・テイラーが一緒に弾いてると〝ミックはもっとキースにくいこまなくちゃダメじゃないか〟とか思っちゃうんだな、これが（笑）。」

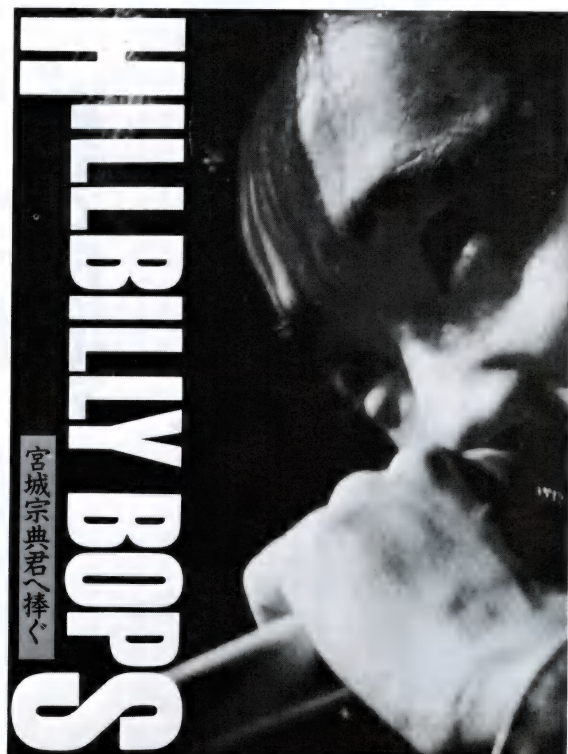
ステージで蘭丸はストーンズの曲に自分の技を瞬時にセレクトしながら食い入っていた。「MONA」のワウ・カッティングを聴いたとき、

「蘭丸のギターは独自に結晶したな。」と思えて、何故か少し嬉しかった。

ARENA37°C
単行本&写真集

大増刷!!

発行＝(株)音楽専科社
〒104東京都中央区銀座5－1－7数寄屋橋ビル5F
☎03(574)0201

若くしてこの世を去ったロックンローラー
宮城宗典君の青春の軌跡――

MEMORIAL BOOK
HILLBILLY BOPS
――宮城宗典君へ捧ぐ――

定価1240円（税込）

▶ヒルビリー・バップス結成から、'88年5月5日、日比谷野外音楽堂追悼コンサートまでの完全ストーリー／幼少年期の宮城君の想い出のアルバム／アリーナ37℃掲載記事再録／年譜／全曲解説／関係者による証言集／父・宮城城次の詩／ほか未公開写真多数

The Street Slidersの蘭丸と、
写真家・おおくぼひさこのスリリングな共演！

「蘭丸」
おおくぼひさこ写真集

定価2060円（税込）

▶アリーナ37℃誌上で88年5月号から12月号まで8回にわたり連載され、毎回大反響を巻き起こしたシリーズ「蘭丸」の作品群から、未公開写真と、新たに撮り下ろした作品を加えた集大成。

［購入方法］
＊書店に在庫がない場合は、もよりの書店に出版社名（音楽専科社）と書名を言って注文し、取り寄せて下さい。小社に直接注文する場合は、送料が一冊につき260円（2冊以上は310円）かかります。申し込み方法は、定価金額＋送料を、切手か現金書留、または小為替で、御自分の住所、氏名、電話番号を明記のうえ、〈〒104東京都中央区銀座5－1－7数寄屋橋ビル音楽専科社経理部○○係〉(○○の中には希望の書名を入れる）までお送り下さい。

シーナ&柴山俊之

SHEENA & THE ROKKETS『DREAM+REVOLT』

ロックンロールの永遠のテーマ "夢と反逆"

**8／21リリースの
シナロケの新作を
シーナと、作詞&共同プロデュースの柴山氏に聞く！**

シーナ&ザ・ロケッツのニュー・アルバムに、柴山俊之が、全曲の作詞、そして、共同プロデューサーとしても参加した。ウンチクしない。とにかく読むのが早い。『DREAM+REVOLT』は強力だ。

――これほどヴォーカルが全面に出たのはなかった。

柴山　それは、ヴォーカルがいいけん。

シーナ　ロケッツって、演奏を録るとき歌も一緒にやるでしょ。で、そのときのヴォーカルをそのまま使ったりというのが、ほとんどだったの。

――それは、最初からの狙い？

柴山　当然。いちばん最初にきちんと歌えれば、それでいい。レコーディングでは、整えることはいくらでもできる。もちろん、それはわかってる。だけど、シーナはそういうことをしなくてもいい歌手だからサ。まこちゃん（鮎川誠）と俺の思い入れの違いかもしれないけど。

シーナ　彼（鮎川誠）の場合は、例えば「ジャングル」だと、もっともっと強く叫べ！（笑）曲に対しての思い入れが強いから。

柴山　別に、俺はシーナが何回歌おうと構わなかったよ（笑）。シーナがよければいい。詞だって、俺が書いたのと同じイメージで歌えるということはないわけ。だから、本人がこれでいいと思ったら、それでいいわけ。俺は、プロデューサーといってもなにもしてないわけサ（笑）。

――本当ですか？

柴山　本当に。だって、技術的なことは本人たちがすればいいわけ。精神的なことだけだよね。プロデュースというものは、そういうもんだよ。ちょっと余計なものがあったり、邪魔になったりすることがあったら、それを交通整理するというぐらいよ。ただ、迷ったときには結論を出してやればいいわけで。

シーナ　人にゴチャゴチャ言われるのは好きじゃないし。

柴山　言われてできたって、自分のものじゃないけんね。それが当り前よ、ロックなら。アイドルみたいなのが多すぎる。だから、ヴォーカルをつぶしてしまうようなものさえ作らんとけば、後は、自分らで好きにやればいいという感じ。

――柴山さんがプロデュースに加わるというのは、歌詞を重視するということから？

柴山　いや、そうじゃなくて、シーナを重視するということ。今までのアルバムも悪くないんだけど、サウンドの嵐を背負って歌っているみたいな感じがしたから。サウンドとしてはよかったのかもしれないけど、カーッとなれて気持ちいいのかもしれないけど、俺が聴くと、シーナの、可愛かったり、女ぽかったり、強かったり、やさしかったりという、ニコニコしよるところがあったり、悲しそうにしよるところがあったりという、いろんな面を持った魅力がサ、もっと出てもいいんじゃないかと思ったわけ。

シーナ　今回やってみて、また、歌って本当に大切だな、と思った。

――アルバム・タイトルが『DREAM+REVOLT』。夢と反逆というバシッとしたテーマがついてますよね。

柴山　うん。『DREAM+REVOLT』というタイトルのものを作りたかった。5年以上前から、そういうのを作りたいというのを言ってたから。よくトータルなイメージとか言うけど、何がトータルなイメージなのか、さっぱりわからんかった。一曲一曲違うけど、俺なりにトータルというのを考えて、最初からタイトルを決めて作ったアルバム。

――「夢と反逆」って、そのままシーナ&ロケットや柴山さんの生き方に通じる。

柴山　でも、俺とかシーナから、こういうふうに生きろとか言うわけじゃないからね。説教はしたくないから。どうしたって、優等生みたいなことは言えない。いるだろ、わかったようなことを言ってるヤツが？　俺はサ、気持ちは犯罪者。

――エッ。

柴山　いや、どうしたってロックから抜けられないから。シーナだって家出したこととかあるわけ。

シーナ　世の中のことに『冗談じゃないわよ』って思ったり。

柴山　だけど、反逆といっても、弱い者が何かに噛みつくようなのとは違うからね。自分は自分で鍛えて、それで、もっと大きいものに対しての反逆だから。

――歌ってて、どうでした？

シーナ　本当にやりやすかったのよ。なんで私のことをよく知っているんだろう、という感じで。詞に入り込みやすかった。いろんな色が頭の中に浮かんでくる。歌に、好きな色を塗れたという感じだったし。

柴山　レコード作ってて大したこと言わんかったけど、俺たちは、なれあいとは違うけん。

シーナ　でも、本当に心強いものがあったよ。

ロックの歌というものをよく知っているシーナと柴山俊之。ロックはビート、だけじゃない。サウンドと歌が一体になったときのロックは、何にも負けない力を持つ。頑とした手応えがあり、なんとも愉快なインタビューだったぞ。

インタビュアー／高橋竜一
撮影／松崎信彦（本誌）

G.D.FLICKERS

Interviewer：大島暁美 Pix：松崎信彦（本誌）

俺達けっしてライヴ・ハウスは忘れないよ！

イカ天バンドに怒る(笑) J♂Eに直撃!!

もうすぐ梅雨が明けそうな7月中旬のある日。G.D.FLICKERSのヴォーカル、J♂Eくんに、会った。なんだか、すごく久し振りっていう感じ。デビュー前は、あちこちのコンサート会場や打ち上げの席で顔をあわせていたのに、最近は全然会わない。聞けば、デビュー以来ものすごく忙しくて、オフがほとんどないという多忙な日々を送っているのだそうだ。「でも、この商売、売れてるうちが華だから」と過酷なスケジュールにもめげず元気一杯なJ♂Eくんが、最近考えていることは……？

――キャンペーンはどうだった？

J♂E　とりあえず、あっちこっちへ行って来ました。わりと、どこでも歓迎してくれたから良かったんだけど、たまに「ちょっとねー」っていう所もあったね。あんまり僕達のことを知らないみたいで、変な質問をされたりとか。そうすると、俺、すぐ黙りこんじゃうから、そういう状態になると、代わりにハラが（ギターのハラちゃん）答えてくれるわけ。それはもう、絶妙のコンビネーションだよ(笑)！一度なんか、あるラジオ番組に出てその最後に「これからもメンバーチェンジなんかをしないで、この仲間でずっと頑張っていきたい」って、いったんだ。そしたら、アナウンサーの人が「じゃあ、ダーク・ダックスめざして、頑張って下さい」って(笑)。俺、もう何もいえなくなっちゃって。

――代わりにハラちゃんが答えてくれたの？

J♂E　うん、そう。でも、なんか違うよね、俺達とダーク・ダックスじゃ……。その人は「メンバーを変えずに、長続きするグループになって下さい」っていう意味でいったんだろうけど、ちょっとね――。

――最近、あんまりオフがないみたいだけど、暇な時って何してるの？

J♂E　うーん、何してるんだろう。本はあんまり読んでないし、映画もほとんど観てない。俺、戦争映画が好きなんだよね。特に、ベトナムものが好きで、たいてい観てる。ちょっと前のになっちゃうんだけど、「グッド・モーニング・ベトナム」っていうのが、すごく良かったよ。DJがでてきて、昔のロックをかけたりするんだ。だから、音楽もすごく良かったなあ。

――テレビは見ないの？

J♂E　見ない。テレビって嫌いだから。うちのテレビは、ビデオを見るために存在してるだけなんだ。あ、だけど「イカ天」だけは、結構見てるね。見るたびに、腹がたつけど…。

――え、どうして？

J♂E　だってさ、ああいう番組に出たバンドが、パッと人気者になって、すぐライヴハウスを満員にしたりしちゃうでしょ？　俺、そういうのって、違うんじゃないかと思うんだ。俺自身、ライヴをやり続けて、やっとここまでこれたんだっていう気持ちがあるわけ。もちろん、まだまだだけどさ。最初は無名の小さなライヴハウスで演ってて、やっと新宿ロフトの昼の部に出られるようになって、ロフトの夜の部に出られた時なんか、ものすごく感動したよ。もしかしたら、この前の渋谷公会堂に出た時よりも、嬉しかったんじゃないかと思う位。それ程、俺の中では新宿ロフトっていう所に対する思い入れが強いわけ。だけど「イカ天」に出て、すぐデビューしちゃうようなバンドは、何をやってもそんなに感動できないんじゃないかな。もちろん、中には地道にやってるいいバンドもいるけど、たいていは屁みたいなバンドばかりでしょ。もちろん、そういうバンドと俺達は違うっていう自信はあるけど、知らない人が見たら、同ライン上にあるわけだから。俺達だって人にイバれる程うまいわけじゃないから、同じように見られちゃうことに対して、すごく腹がたつんだよね。でも、そういう怒りをバネにして、頑張ろうっていう気持ちを奮いたたせるために、せっせと見てるっていうとこもあるんだけど(笑)。

――新宿ロフトの名前が出たけれど、J♂Eくんにとっては特別な場所のわけ？

J♂E　うん。とりあえず、毎晩のようにたまってたからね。世話にもなったし、今、俺のアドレス帳を開いてみると、電話番号が書いてある友達のほとんどが、ロフトで知りあったヤツなんだ。ずいぶん前、俺以外のメンバーが全員バンドをやめちゃって、困ってた時に助けてくれたパーソンズも、ロフトの仲間だしね。いろんなヤツがいたし、いろんなことがあったからなぁ～。そういう思い入れやら感謝の気持ちをこめて、今月から毎月、ロフトでライヴをやっていくんだ。

――え、狭くてファンが入りきれないんじゃない？

J♂E　限定250人でやって行こうと思ってる。毎月やってるんだから、入れなかったら、また次の月に来ればいいし……。もちろん、ホールのコンサートはやるけれど、やっぱりライヴハウスは俺達のホームグラウンドだからさ。自分達自身ライヴハウスで汗びっしょりになって演奏するのが、大好きだしね。武道館でやれるようになっても、俺達決してライヴハウスは忘れないよ。

パール兄弟

サエキけんぞうの ペーパーDJ

時代は『色以下（イロイカ）』、男はサエキ。4曲入りのパワー歌謡が、いと楽し。

構成／小林由明
撮影／松崎信彦（本誌）

どうもこんにちは、パール兄弟のボーカルと作詞担当サエキけんぞうです。僕達の4枚目『TOYVOX』はもう聞いてくれましたか？ そうそれはよかった。

あのアルバムは、元号とか政治も含めて時代が確実に変わりつつある過渡期に製作していたので、そうした空気が音の中に自然に取り込まされています。買ってくれた人も、きっとその辺りをわかってくれていると思います「タンポポの微笑み」に対する反響も凄かったりし。ありがとうございました。

自分としても作品として出すことに一区切りつきました。そこで、というわけじゃ別にないんですけど、9月6日に4曲入SCDを出します。『色以下（イロイカ）』っていいまして、タイトル曲のほかに「TOYVOX」のエナジーミックスも入って大きさは普通のCDと同じ。多分、ピクチャーディスクになるんじゃないかな？

これは一種のファンサービスといいますか、曲として八ダカで聞いて欲しい曲を集めたもので、1曲1曲がパワー歌謡のように飛び出ているのが楽しい。昔あった4曲入りシングルと、まあおんなじようなもんですね。遊びはあるしバカボン（鈴木）の説教は凄いし。何も考えないで聞けます。素直に作ったから。

そうはいっても、一応メッセージは伝えているつもりですけど。『色以下』だと、Hからピュアなものに移行する瞬間の温度感覚を訴えたいというのがメッセージとははっきり言えます。でも世間一般でいうメッセージと一緒くたにされるとちょっと困るかな。言った口調が強ければ、メッセージになりうるみたいな言い方も、見てるとできるんじゃないかなって気がしますからね。

曲かけたいところなんだけど、今の印刷技術じゃ難かしいだろうなぁ。

まぁいいや。同じ9月にはビデオも出ます。内容は『TOYVOXツアー』のライヴで監督は手塚さんです。音がイジョーに良くてですね、スタジオより良いんじゃないかという話もあるくらいに良い。サエキが言うから間違いないと思いますけどね。お金の余裕があったら、こちらのほうもよろしく。ということで。

〈CM①〉
〜パール兄弟の「TOYVOXツアー」ビデオ、9月下旬発売予定!! 予約はお早めに!!

せっかくだし、パール兄弟の姿勢についてちょっと話そうと思います。僕達は別に難しいことをやってるという考えは毛頭なくて、音楽の部分はベーシックに追求してます。いつだってこっちは開かれているという気持ちをもっているんです。だから特別なものとして扱って欲しくない、常にスクエアに、同列線上で聞いて欲しいと思っています。

特別なものと思って下さる人はそれはそれでとってもありがたいことではありますが、パール兄弟には皆さんの思い入れと違う方向もあることを念頭においてもらえるとうれしいですね。

パール兄弟は今までイベントには出たことありませんね。ほんとはどんどん出るべきだと思ってますけど。ただ、ああいうイベントのよくないのは、10バンド出たとして記憶に残るのは1〜2バンドしかないことなんですよ。本当は10バンドともよいはずなんだけど、知らず知らずのうちに比較してその中から1〜2つを選んでしまってることは、人間誰でも持っている習性から明らかなことなんです。

ある月にいいCDが集中しちゃってるとお金の都合で買いそびれたり、逆にダメな月はダメなりに比較して結局ダメなものを買っていたりするのと根っこは同じなんですよ。それが恐い。もしイベントに出なかった理由があるとすれば、そういう聞き方をして欲しくないからでしょうね。

〈CM②〉
〜サエキけんぞう著『ヌードなオニオン』河出書房新社より絶賛発売中!!1500円だョ〜〜〜〜〜〜ン!!

もうひとつ話したいのは、僕はポップスが好きで、ポップなものについて語りたいということです。私著のエッセイ集『ヌードなオニオン』にもそういうことが書いてありますので、都合が良ければそちらもよろしくお願いします。

一言で言うならポップスとロックは違うってことかな。う〜ん。言葉にすると何言っても誤解になってしまうからなぁ。

要はポップスというのは、白人のフィルターを通した、産業としての音楽の概念なんですよ。ブルースにせよソウルにせよレゲエにせよ黒人独特の生命を白人が学んで、フィルターを発見して初めて、それらはポップスになるわけです。アスワドを見てもわかるとおり、生のレゲエではポップスとして存在できない、そういう産業構造になっているわけです。ジプシー・キングスはポップスだと思います。

じゃあロックは何かってことになるけど、これは表現したいことがどうのよりも、有無をいわさずチャック・ベリーのところで10年間修業するみたいな、徒弟制度みたいなところを感じますよね。キース・リチャーズが映画の中で、チャックから同じフレーズを何10回もやり直させれるシーンがあるんですけど、あれがロックなんだと思います。7月5日のパワーステーションで、かまやつひろしさんとやらせていただいてわかった感じがしたのは、そういったルーツの追い方みたいなことをかまやつさんもしたんだなってことです。

ポップスはもっと表面的というか産業的なものだと思います。そこにあるポップスの普遍的な概念につながるようなことをパール兄弟はやっていきたいと思っています。

あっもう時間ですか。この続きは優しいアリーナの方がきっと作って下さることでしょう。それじゃあさよならー。8月27日夜9時からのFM東京（他全国25局）パワステ・ライヴも聞いてねー。

TV-WILDINGS

インタビュアー／山本弘子

危機を乗り越えTVウィリングス(悪ガキ)が放った新作『NEW DAYS』

気持ちいいことやらなきゃ、一生後悔する!!

まず!! 葛城哲哉は〝爆弾がおちても恐くない〟と思えるぐらい元気だった。災い転じて福になるというヤツだろうか。ギターの烏丸哲也が抜けて3人で新しいスタートを切ったことは彼らにとって、いろいろなことをふっきるひとつのきっかけになったようだ。いや、というよりももともと彼らがマイナスをプラスに変えてしまうパワーをもっているバンドだったんだろう。

6月30日、新宿のパワーステーションのステージに彼らは〝TV WILDINGS〟として立った。晴れのステージにギターをかかえて登場した葛城はナント裸足だったのだ。

——まず、新しいバンド名の由来をきかせてほしいんだけど。

葛城「WILDINGSっていうのはうちの小林(マネージャー)が考えたんです!! 3人になってから本格的に名前を変えようとは思ってたんだけどね。小林がある日、名前を思いついてオレたちがアルバムのレコーディングをしてるスタジオに〝TV WILDINGS〟って書いた紙を貼ってたんだけど、誰も気づかなくてさ(笑)。レコーディングが終わった頃に〝オイ、もしかしてこれバンドの名前!?〟って(笑)」

——不良っていうニュアンスがこめられてるの?

葛城「ハーレムで子供たちが万引したり、ショットガンぶっぱなしちゃったりするのを〝WILDINGS〟って言うんだよね。子どもたちがワケわかんない悪さをしてまわることみたいな。で、カッコイイなぁと思ってさ。でも別に〝オメエら、学校がよォ〟みたいな不良じゃないワルさね。オレの頭にあるのは夏に向こうのガキが消化栓ぶっこわして〝コラーッ〟て怒られて逃げるイメージ(笑)。ああいう罪のないワルさね」

——アルバム『NEW DAYS』はTV時代よりメロディがずっとポップでわかりやすくなってる。和泉さん(アレンジャー、中森明菜も手がけている)と組んでどうだった?

葛城「だから今回は、和泉さんにアレンジを一任したから、他人が見たオレらって感じも出てるよね。もちろん〝これじゃロックじゃない!!〟ってゆずれない部分は主張したけどね。

和泉さんはとにかくボクの声が気にいってたみたい。男クサくて汗クサイ声だから、逆に男クサイことを歌ったらはまりすぎるって言ってた。で、今回「GIMME SOME LOVIN」に〝青空みたいなおまえ〟ってフレーズが出てくるんだけど、昔だったら詞を見たときに〝ざけんじゃねえよ!!〟って言ってたと思うの(笑)。でもオレが歌えばイメージも違うと思ったのね。そういう部分を和泉さんは変えてくれた。カッコつけないで情けない部分を素直に出してもオレッていう人間は伝わると思えるようになったのね。

——守ってた部分を壊したんだ。

葛城「うん。垣根をとっぱらったってことは大きかったね。メンバーが抜けて今、いろんな反応があると思うんだけど、そういう反応が気にならなくなったよね。昔は歌っててもカッコよくみせたいから気になったよ。〝今、眉が八の字になってねえかな!?〟とか(笑)。でも、今は歌うときは顔をくしゃくしゃにしなきゃ歌えねぇなとかさ」

——見てる方はそういう顔が良かったりするんだよね。

葛城「そういえばね。昔からオレ、好きなアーティストの二枚目ぶってる写真好きじゃなかったの。どっちかっていうとライブで顔がねじ曲がっちゃってるのが好きだった。それぐらいのめりこんでるから、そういう顔になっちゃうんだよね。はだしで演ったのも、昔ははだしで出てたからね。〝カッコ悪いと思うヤツは思え!!〟みたいな感覚で。プロになってから〝売れなきゃまわりに悪い〟とかいろいろ考えすぎてたんだよ。名前変えて、いちからスタートしたのがホントによかったみたい」

——近沢さんや五十嵐さんも?

葛城「うん。変わったんじゃないのかな? 昔はそんなこと思わなかったけど、今は尊敬できるっていうか、〝オオッ!! あいつらカッコイイ〟って思えるんだよね。オレの見方も変わったのかもしれないね」

——本当にNEW DAYSだね。

葛城「だから今、アマチュア時代とおんなじきもちなんだよ。カラスが抜けたときは〝いったいどうしよう〟って考えたけどね。就職をけってここまで来たんだから、売れるためだけじゃなく〝気持ちいいことをやらなきゃ一生後悔する!!〟って思ったんだ。今は他のバンドのことも気にならないんだよね。大切なのは自分を見失わないことでしょ。そろそろTV WILDINGSのスタイルができてくるんじゃないかな。ーでも今バンドがすごく前向きに転がり始めたから本当、よかったあ!! 一時は解散かと思ったからね」

プロになると、バンドにはいろいろな意味でさまざまなプレッシャーがかかってくる。ときには〝がんじがらめ状態〟になることも多い。彼らは今、その段階をのりこえたのだろう。顔をくしゃくしゃにして新曲を歌う葛城の歌は、確かに胸の奥まで届いたのだ。

THE MINKS

8・21、遂に待ちに待ったフル・アルバム『THE MINKS』発売

これが青春だ！

——汗と涙と希望とH（笑）、熱血ハート溢れるファースト・アルバム

ミンクスのアルバムが遂に出る！あの、ゴーカイで一本気で真面目で馬鹿正直で冗談好きで素直でナイーヴで男らしくて感動的で……何言ってんだ？つまり愛すべき4人組、ミンクスの1stアルバムが出るのだ。

彼らのライヴは性格がサウンドに魅力となって溢れ出る。デビューはライヴ・ビデオだった。そして初のレコーディング。3ヵ月がすぎた今、彼らはどんな作品を仕上げたのだろう？はっきり言って興味しんしんであったりする。

と、いうわけで当然の事ながら今回はアルバム・インタビューだ！ちっきしょー、クソ暑いのに熱くなってキタぞ!!どうしてくれるっっ?!

——シングル・カットした「ハッシュ」がアルバムではバージョンが違うという話なんですけど…

龍一「どこが違うかワカッタ？」

ヨシアキ「スゴイよー」

松橋「あんなんでよくアルバム・バージョンだなんて書いたよなー」

——？？

松橋「頭ん所に、最初に〝ヘイッ〟って入ってるでショ、そんだけ」

ヨシアキ「シングルは入ってないの。それがアルバム・バージョン（笑）！」

——！！！

ヨシアキ「深く言えばね、録音場所が違うの。レコーディングは青山なんだけど、ヘイだけは伊豆で録ってんの（笑）」

——何かイミあんの？それ。

松橋「アルバムとシングルは違ってやろうと色々考えた結果、ヘイになって（笑）」

——色々考えた結果…まーいいや。ところで今回のLPだけど、一曲一曲で全然感じが違うね。歌い方一つとっても色々やってる。

ヨシアキ「そう。バリエーションにとんだボーカリストですから私は（笑）。っていうか思い方によって歌い方も変わってくるんだよ」

——じゃあ、例えば「ダーリン」は？

凄くワイルドな感じがするけど。

ヨシアキ「本当にとってもセックスがしたいと思ったら自然にワイルドになったとゆう」

——結構エッチに歌ってんだ。

ヨシアキ「ラブ・ソングってさ、カッコ付けたのばっかりあるでしょ？でも本当の本音みたいな〝お前とやりたいんだよ！〟っていうような歌だからね」

——なる程…。

ヨシアキ「だからムッツリスケベなんじゃなくて、思いっきりスケベ。へんにやらしくないの」

——他のみんなは？つられて思いっきりスケベに演奏してるとか。

龍一「僕は全然ないです。サトリを開いてますから」

ヨシアキ「ウソをつけ（笑）!!」

——曲のイメージとかは4人で固まっているのかな。

龍一「基本的に各パートで気持ちのイイ音を出すって所から始まって、みんなで固めていくからね。音的に噛み合わないとかはないよ」

吉田「トータルで合わせた時に自分の思ってたイメージと違うことはあるよ。でもそれが良かったりする。大まかな所はみんなでやって、細かい所は松橋が固めてくれた」

松橋「細かい所ウルサイかもしれない。音的なコトはね」

——役割が各自で分担されている？

ヨシアキ「レコードとか音とかね、深い所まで追求する為に役割分担っていうか、あそこはアイツにまかせる！とかね。スケジュール的に凄くアタフタしてたんだけど、そうやって乗り切っていいものを作ったね」

——そういえばハード・スケジュールだったものね、ライヴもあって。

ヨシアキ「まあ一発録りだしね。ライヴのノリで」

吉田「曲も今の俺達のベストっていうか、馴れ親しんだ曲だしね」

——でもアレンジ変えてたりして。

龍一「チョコチョコっとね」

吉田「でもほとんどライヴと変わんないんだよね。何が違うってさ、ホラ俺なんかライヴでもやりたいこととかあって頭ん中にあるんだけど、おっかなくってできないこととかあるじゃない？そういうのがレコーディングでノッてきてできたりとかさ。そういうのが上手く出た時に、ライヴと違ったモノが出るのかもね。でも俺もイキナリそういうことするからさ、みんな困ったりなんかして」

——打ち合せナシでイキナリやるワケ？

吉田「そうそう。3テイク位録るでしょ、みんなアレンジ違うの（笑）。でもみんな大して困んなかったよね」

一同「なんてヤッー（笑）!!」

龍一「でももう馴れちゃったね（笑）」

——今回のアルバムはライヴ・バージョンも入ってるわけだけど、普通に考えたら凄く意外な並び方で入ってるよね。

ヨシアキ「それはね、LPをライヴの流れで組んだらそういう順番になったの。あと曲間が凄いセマいでしょ？ライヴの様に聴けるという」

——あとライヴ・バージョンはお客さんの声とかも入ってるね。

ヨシアキ「やっぱお客さんもどんどん出して行きたいしね」

大体どんなアルバムが出来上ったかコレで予想がついたかな？みなぎるパワーでツッ走るミンクス。よかったらみんなも聞いてほしい。

Interviewer：中込智子
Pix：かやばしのぶ

NEWEST MODEL

Interviewer:ケニー高橋（本誌）、Pix:かやばしのぶ

アリーナなんて恥ずかしくて読めんよ
くだらないバンドが多すぎてね——大胆不敵、ロックを愛する中川隆の爆弾発言

アルバム『SOUL SURVIVER』リリース——ロックの本質を教示した一枚

メジャー第一弾・通算三枚目に当る『SOUL SURVIVER』を発売したニューエスト。前作とガラリと表情を変えたこのアルバムは、ルーツ・ミュージック、ファンク、ブルース、ソウル…などといった言葉の羅列が阿呆らしくなるほど、ロックの楽しさ・本質を教示してくれる一枚だ。随所に散りばめられたヒネリも楽しみつつ、とりあえずは頭を無にしてホットなビートに身を委ねて欲しい。

——今回、驚くほど黒人にドップリいってしまいましたね。

中川「完全にアメリカ寄りになったというか、今まで完璧にブリティッシュのバンドやったからね。まあもともとタテになってたものがヨコになってきたと」

——もうこれで行こうみたいなのはいつ頃からでてきたんですか。

中川「僕はずっと好きやったんですよ。ただメンバーそれぞれ趣味もあって、できる範囲や許容範囲がね。そういうのが自然になってきたから」

奥野「でも全然想像できへんかったよ(笑)」

中川「(笑)もう勝手に一人で決めてしまうからね。ころころ変わるしね、サイケや言うてみたり、バンドや言うてみたり、ニューオリンズや言うてみたり、ストーンズや言うてみたり…可愛相やね、メンバーは(笑)」

——今、もう指向が変わってたり…

中川「いや、このレコードに関してはもう何回聴いても自分の思った通りいってるから、なんも言うことないですわ。今までとは較べもんにならないですよ。もう満足してます。ただ、やりたい事はいっぱいあるよ。でもいきなりは無理、できへんもん」

——先の構想はいっぱいある、と。

中川「先まで見えるというよりも、やりたい事が漠然とね…音楽が一番好きやし、ミーハーやしね。もう頻繁に聴いてるし、そういうのが自然にでてくれば言うことないですね。

僕、コピーとかせんしね。馬鹿らしいでしょ、その人のライン盗んだって。聴きまくってれば自然とでてくるもんやしね」

——詩がすごくいいですよね。けっして高所から見ず、等サイズの視線で身近な物に例えつつも含みがあって……。

中川「結局全部つながってるんですよ、僕の歌詩は。みんな一緒(笑)。何が必要で何がいらんかってはっきりしてるからね。言いたい事はそれ。結局同じになってしまう」

——一つの主題のみで作れるっていうのは、観察力あるんでしょうね。

中川「見るようにはしてる、色んなものをね。ツアーでもあまり寝んと外見てるしね。見とったら、興味持たんかった事でも段々興味湧いたりするしね。考えさせられる事多いし。でも詩に関しては日本はホンマしょうがないね。サウンドや機械や、服装とかは(笑)西洋からいい部分を受け継いだけど、詩は全然やね」

——でもストレートな表現しませんね。

中川「苦手なんですよ。誤解招いたとしてもストレートな方が絶対いいと思うんやけど、ブルーハーツみたいにね。出来ないんですよ、出来た方がいいんやけど。まぁ性格です。でもズバリ歌ったら、しょっちゅう右翼にやられるバンドになるかもしれんし(笑)。恐い、いやや(笑)」

——ところで今回もろヨコのりになった事で〝ソウル・パンク〟という認識を持ってる人にはつらいんじゃないかと、特にメジャー第一弾ということで考えませんでした。

中川「あの言葉自体は僕が作って、いいふらしたんだけど、ビート・パンクとか括られるの嫌やしね。よくわからへんもん。結局ビート・パンクってラモーンズやブルーハーツの物真似でしょ。まぁ今となってはソウル・パンクもクソもないけど(笑)。

でも大丈夫でしょ。難しい事やってるわけやないし、俺だってストーンズとか中学の時から好きやったもん。今、やっとみんながロックに馴れてきてね、バンド・ブームになったと。まぁ関係ないですよ、僕はずっとやるしね。ただ色んな音楽を聴いてればね、最終的にその人自身にいい結果になると思うからね。ラモーンズばっか聴いてるよりはね(笑)」

奥野「前ので出会うより、このアルバムで出会った方が長い付き合いできると思いますよ」

——今のバンド状況とか中川さんにとっては苦々しいんじゃないですか。

中川「くだらんバンドが多いですよ。今の日本にロックなんてないでしょ。もうみんなスタイルだけ。キース・リチャードの真似したりとか、アホみたい。お笑いやね、子供しか騙されへんわ。写真ばっかでイメージつけて、インタビュー読んでもほとんど喋べんない馬鹿なバンドとかね」。

——今は聴き手が歌謡アイドルの代替品としてロックを促えてる部分あるし、それを煽るマスコミも明星版ロック雑誌だもんね、僕を含めて(笑)。

中川「そうや、マスコミが煽るから。もっといいバンド載せなきゃ駄目ですよ。アリーナなんか恥ずかしくて読めんもん(笑)。読んでるとこ誰かに見られたら恥ずかしいわ(笑)。なんかカッコだけのバンドばっかりでしょ。やっぱミュージック・マガジン位だよ。これからは変わらないけないですよ。それも若い奴らだけでね」

音楽（ロック）を愛してやまない中川。やっぱり世間は今、こういう逸材を待っていたのだ。何故って!?危機は既に僕等の日常を取りまいているのだから、ね。

BL-WALTZ

洋楽体験を生かした期待の大物バンド

7／21、SWITCHから1stアルバム『GARDEN AFFAIR』リリース。ビートもの全盛の今の音楽状況の中で、本当に新しいタイプのバンドが出る。BL-WALTZこそNEXTを狙えるグループだ。

取材／高木一人
撮影／松崎信彦（本誌）

ピュアな感覚と斬新な響きを持ったニュー・ウエーブ・アーチストをここで紹介したい。

BL―WALTZ。

名古屋出身で、バンド結成は約5年前の84年という。

「初めは5人組で、僕（リーダーの松岡基樹）はギタリストだったけどメンバーチェンジの後、今の4人組になり、僕はボーカルもとるようになりました。BL―WALTZという名前は、ギタリストの田口裕司とつけたんですけど、"BL"はBLACKとかBLUEとか、よく使うスペルだし、"WALTZ"は、個人的にヨハン・シュトラウスが好きだったから、そのふたつをくっつけてバンド名にしました」

バンド名からは、やっている音楽はちょっと想像しにくい。が、ジェフ・バクスターが彼らを絶賛したという話を聞いて、なるほど、と何となく分かるような気がした。

ジェフ・バクスターは、元スティーリー・ダン、ドゥービー・ブラザーズのメンバーで、長年に渡り活躍してきた。そして最近、復活したドゥービーの人気ぶりはここで触れることもないだろう。

その彼とBL―WALTZの出会いは87年12月に行なわれたアマチュア・コンテストのときだった。ジェフが審査員をしていたそのコンテストで、BL―WALTZは準グランプリを獲得したのだが、そのときジェフはこういった。

「彼らの音楽はほかのバンドにはないものを持っている。オリジナリティーに溢れ、形容出来ない。彼らのサウンドは文字どおりジャパニーズ・ロックだ」

冒頭で、ピュアで斬新なバンドといったのはそういうことで、当時はパンク系のロックンロールバンドが全盛だったことを考えると、ジェフには流行を追うバンドよりも、彼らの音楽のほうがユニークに、そして魅力的に聴こえたのかもしれない。

メンバーの田口裕司は当時出演していたライブハウスの状況をこう語っている。

「新宿ロフトに出るヤツらは、ほとんどがパンクかハード・ロックで、僕たちのようなバンドはいませんでしたね。人間的には、スゲエなって思えるヤツもいたけど、音楽的には何か違うなって思ってましたよ。だから、対バンやるような状況なんかなくてね、困りました」

しかし、そんな状況は自分たちが作ったわけではなくて、音楽をジャンル分けし区別したがる周囲によって勝手に作られたものだと彼らは反発する。

しかし、その口調は穏やかだった。

「ビート系が流行っているからやるんじゃないし、その逆に違うことをやってやろうと考えたこともありませんね。とにかく音楽は何でも好きだから、いろいろやりたいし、たまたま書いた曲がアコースティックな感じが合うと思ったから自然にそうなったんです」（松岡）

自分たちのやってきたことは間違っていなかった……、彼の言葉にはコンテストで好成績をあげ、新宿ロフトの推薦バンドになったという自信が強く感じられる。彼らの地道なライブ活動はさらに続いた。

そして、バンド結成から今までの5年間の集大成が、7月21日にリリースされたアルバム『GARDEN AFFAIR』に収められているというわけだ。

ライブでも人気の高い彼らの代表曲『Something Happy』など、特定の音楽ジャンルにこだわらず、肩のこらない楽しい歌と演奏を存分に聴かせてくれている。

この1枚だけで断言は出来ないが、いわば、60年代のマンフレッドマン、キンクスなど。また70年代前半のウエスト・コースト系ロック。あるいはプログレ、最近ではXTCやトーキング・ヘッズ。さらにはジャズまで幅広く聴いてきたというリーダーの松岡クンの洋楽体験が、そのままBL―WALTZの豊かな音楽性を物語っているようだ。

「ライブ見ていいなって思っても、レコード聴くとつまらないってことがよくあるでしょ。ファンの子が歌を覚えるカタログ的なレコードより作品として世のなかに残せるものを作りましたよ」（七瀬ミチル／キーボード）

「僕たちの音楽はタイムマシーンみたいなもので、歌を聴いてくれた人が過去にも未来にもいけるように夢がいっぱいつまっているんです。そんな楽しいサウンドにしました」（小西昭次郎／ドラムス）

なんでも、デモ・テープを作る段階でジェフがエンジニア的なアドバイスをしてくれたとかで、そんなところにも彼がBL―WALTZに大きな期待を寄せているのがよく分かる。

「今後、チャンスがあればジェフに本格的に参加してもらおうと思っています。とにかく次もオレに手伝わせてくれないかとうるさいですからね（笑）」（松岡）

と、意外に余裕のある返答に、早くも大物の風格さえ感じる。まア、なんとも今後が楽しみなニュー・バンドが登場したことだろうか。

聖飢魔II

えっ?・これがアノ聖飢魔II

世間をあざむく噂のシングル「白い奇蹟」の謎のすべて!

8月2日に聖飢魔IIの小教典「白い奇蹟」(作詞・デーモン小暮/作曲・エース清水)が発布された。とにかく聴いてビックリ!!のこの小教典。これまで聖飢魔IIにはなかった全く新しいタイプのバラード・ナンバーなのだ。

デーモン「我々にしてみたらこのバラードは何も驚くことはないのだが、第三者から見れば〝今までの聖飢魔IIサウンドとは違いますね〟とか〝どうしちゃったんですか〟などという反応が多いサウンドだろうが、しかし第五大教典からの流れからしてみれば決して大きな変化ではないのだ。『THE OUTER MISSION』を制作している時も小教典を「WINNER」に決定した時も、次の小教典はバラードにしようという話は計画的に決まっていたことだったのだ」

――またどうしてバラードなんでしょうか。

デーモン「まずミサにおいてバラードの評判が大変よいということ。そして、我々に対する一般社会のイメージがヘヴィ・メタルやハード・ロックに片寄りすぎているということだ。ヴォーカルとしてのデーモン小暮の声質にしてみても、実はガンガン、ノリノリの張り上げて唄うタイプの曲とはまた違ったスタイルとして、対極的なバラードでの声質というのもかなりハマっているのだ。なんというか聖飢魔IIの持ついくつかの世界を片寄ることなく信者、もしくは信者以外の者にもしらしめるためにも小教典にバラードを選んだワケだ」

――それにしても壮大なイメージの広がる美しすぎるほど美しいバラードですよね。

デーモン「構成員それぞれが曲を書き持ち寄ったのだが、最終的にこの曲が選ばれたのだ。作曲者エース清水の意向により、かなり壮大なアレンジがほどこされたのだ。

日本のハード系のバンドがバラードを演ると、だいたいパターン化してしまっているのだが、様式美は様式美としてそれは他のヤツらにまかせておくとして(笑)。我々聖飢魔IIの曲がハード系のバラードに新風を巻き起こすであろう楽曲であることはまちがいないだろうな。

しかし、みんなが言うほどの変化は聖飢魔IIにはないし、ちゃんと前大教典、前小教典での布石はあったのだが」

――小教典ということで意識したことはありますか?

デーモン「大教典というのはそこに収められた曲すべては統一感(トータリティ)を持たせたいというのがあって、やはり1曲だけ突拍子もない曲を入れたりはしないのだが、小教典においてはやはり冒険ができると思っている。いちばん自由な発想を盛り込める場所だからな。で、今回のシングルはその極端な例が出たのかもしれない」

――極端な例と言えば、B面の「怪力熊男」も相当なモノですが(笑)。

デーモン「タイトルからしてスゴイだろう(笑)」

――とんでもないって感じ。タイトルだけで笑えた。

デーモン「B面は無法地帯だな。しかも最後に♪聞く耳もたん!♬とまで開き直ってるという」

――B面が出来上がるまでのいきさつは?

デーモン「A面もB面も詞に関しては何の教えもといていないというのが唯一の共通点なのだが、B面の曲は実は2年前の冬にできていた曲で、「ステンレス・ナイト」と小教典を張り合ったというまでの曲だったのだ。あの時は今ひとつハマる詞がなくてボツになってしまったが、我々の間では曲のイメージもあってずっと〝怪力熊男〟と呼ばれていた曲でね。まさかホントに本タイトルになるとは思わなかった」

――笑いすぎておなかが痛くなるくらい大笑いしてました、私。

デーモン「B面の帝王としては、またしても笑いに走ってしまったという(笑)。妙に盛り上がってしまったワケだな、我輩も」

――今回の小教典は問題作でしょうか。

デーモン「我々としてはまわりの反応が楽しみだな。いちばん似合わないと思われているような曲を小教典で発布したワケだから。いったいこれから聖飢魔IIはどうなってしまうなんて思ってるヤツもいるだろうが、これも聖飢魔IIである、と」

――それから、すごいビデオ(『THE OUTER MISSION』)が出ましたねぇ。

デーモン「これは我輩が原案を出して、手塚真クンが監督をしたのだ。巨費を投じて製作した大SFスペクタクル巨編なのだ」

――いろんなSF映画のパロディがはいってますね。

デーモン「SF映画からTVの子供向けの怪獣番組までいろいろパロってるぞ。それに手塚クンはすごい監督でな、普通我輩が案を出すと、仕上がりが予想できるのだが、手塚クンはその予想を上回って、いろいろなアイデアをつけ加えてあるのだ。たいへんな才能の持ち主だ。」

――構成員のインタビューや、メイキングまではいってますね。

デーモン「買って絶対ソンはさせないビデオだぞ」

インタビュアー/松浦靖恵
撮影/中村ノブヲ

▶聖飢魔IIのビデオ『THE OUTER MISSION』(CBSソニー/Ⓥ38ZH-248、Ⓑ38QH-248/3914円/22分)は本誌のビデオ通販でも取り扱っています。80ページの申込書で注文下さい。

▲TAKAAKIRA GOTOH (G)

▲ATSUSHI MIKI (Ds)

Live at Nissin Power Station, 7／10

▲HIDEFUMI YAMAMOTO (Vo.B)

DOVE

〝だから、今やりたいのは『DOVE』の音〟

6／21、CBSソニーからアルバム『DOVE』でデビューしたDOVE。この重い詞、曲に込められた思いを初めて語る。

取材／関根章喜

'87年のCBSソニー・オーディションでグランプリに輝き、6月21日にアルバム『DOVE』でデビューしたDOVE（ダヴ）。山本（B、V）、三木（Dr）、後藤（G）の3人という最小ユニットからつむぎ出すサウンドは、聴く人の耳にズシンとヘヴィに響いてくる。まるでバレーボールを受け取ろうと構えていたら、それがいきなり鉄球だったように…。

ビートバンド、POPバンドが勢いのあるなかで、DOVEのようなうなりとキレのあるサウンドは、異端なのか衝撃なのかはわからないが、One of themのバンドでないことは確かだ。彼らは何をしたいと思っているのだろうか？

◇　◇

——最初から3人でやってたの？

山本「CBSオーディションの本選の前までは4人だったんですけど、本選前に3人になって、それからずっと3人でやろうと」

——広島出身ということなんだけど、広島にいた頃からプロ志向は…？

山本「プロ志向というか、高校卒業してアルバイトをしながら広島でライブをやっていて、それでオーディションに出てみんかって話になって…。だからあれが初めて受けたオーディションだったんですよ」

——サウンドは初めからこういう？

山本「4人だった時は、普通の8ビートもあったんですけど、本選前に1人抜けた時に〝どういうものでいくか〟って話をして、そしたらこういう感じだったら3人でできる、これがいいって話になって…」

——具体的にどういう音楽をやっていこうという？

山本「最初は詞の面で、コンセプトを考えながらやろうというのがあって。曲はこういう雰囲気でというのはなかったですね」

——詞の面でいうとどういうことを歌っていこうと？

山本「そうですね、だからメッセージソングでもないし、こうしろ、あしろともいってないんですよ。ただやっぱり、社会にある矛盾とか不条理とか差別とか…、そういうものを淡々と、それでいて突き刺すっていう詞の世界というか」

——サウンドの方は？

山本「その詞に合わせるというか……、曲によっては詞からできるものもあれば、ギターのフレーズからできるものもあるんですけど、このフレーズがかっこいいからっていうんじゃなくて、曲のイメージをどんどん作っていくっていう作り方ですね。たとえばリズムが淡々としてて音が広がれば疾走感のある曲ができたり」

——ある種、ビートバンドとかがはやってる反発みたいのもある？

山本「いや、気持ちいい曲っていうのはもちろん好きで、広島の頃にそういうのもやってましたけどね。ただ実際には、たとえばいきなり出てきて総立ちっていうのは好きじゃないし…、だから今やりたいのはこの『DOVE』の曲だっていうのをわかってほしいですね」

——それではそのDOVEの音っていうのを、これからどう追究していこうと思ってる？

山本「完成したものをどんどん作っていくっていうんではなくて…。たとえば作る段階で一番気にしてることは、パッと聴いた時の、その曲の大きさというか。ただ部屋で聴き流すっていうのではなくて、部屋で聴いててもいろいろな景色とか映像が出てくるような曲を作っていくという。だからコード感もあるし、リズムもあるし、音色もあるっていうのを作る時に一番考えてますね」

——頭に浮かぶ映像がわかるかどうかが大事だと。

山本「そう、だから詞が難しいとかいわれるんですけど、そういったことではなくて要するにそれを聴いて自分なりにイメージをふくらませていけば、絶対わかると思うんです」

——それでは後藤くん、アルバムの仕上がりとかはどう？

後藤「曲の世界というか、〝空間〟が思ったより入っててよかったと思ってますけど。体で聴くんじゃなくて、頭で聴くみたいな」

——ギターはシャープでいいよね。

後藤「ぼくのやりたいスタイルというのは、俗にいうギターバンドの音じゃなくて、考えさせるというか…。たとえば単にAメロ、Bメロ、サビがあってソロがあるっていうんじゃなく、そのつどギターが歌中で生きていたなと。だからギターの存在感というよりも、詞があってその詞にいくまでの状況……たとえば悲しい曲でもその悲しみにいくまでの気持ちで、周りの壁とか天気とか、そういうしめった状態を表したいんです」

——要するにその悲しみにいく過程においての〝皮フ感〟だよね。

後藤「そう、それを表したいんです」

——三木くんはどう？

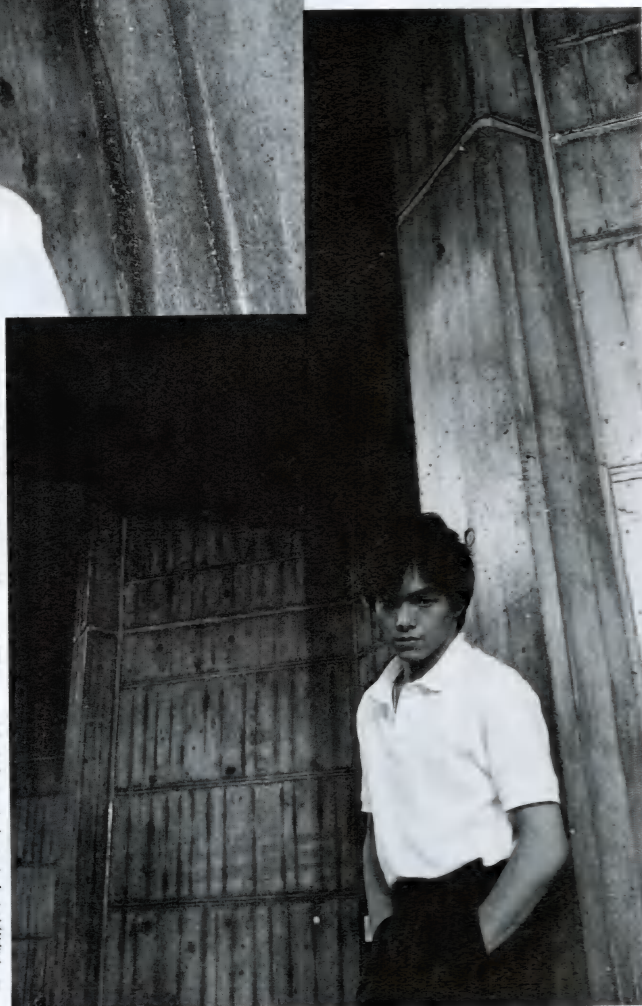
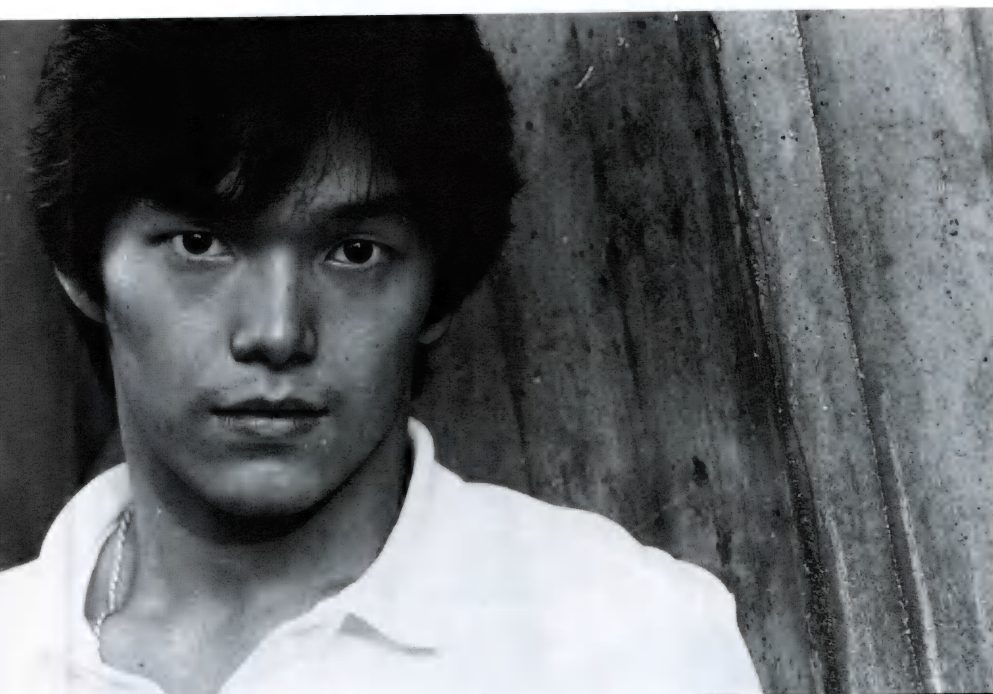
三木「一曲一曲の仕上がりはかなり高いと思ってます。たとえばタイトルがあると、そのタイトル通りの詞と音があるというか」

——どういう意識でたたいてる？

三木「…たたいてる時は、喜怒哀楽とかを意識して、その曲に応じた気持ちとかを入れるって感じですね」

池田政典

今、自分の新しい可能性にチャレンジ

後をふり返らず、常に前に向かって走りつづける――。

「以前からバンドのメンバーと一緒に曲作りにトライしてたんですけれど、ここにきてちゃんとアルバムに自分の曲が収録されることになって、やっと実感がわいてきたんです」

早くも4thアルバムのためのレコーディングに突入していた池田政典が、ついに！というかやっと!!というか、念願かなって自作曲をアルバムに収録。ツアー、学園祭、イベントと超過密スケジュールの合い間をぬって、着々と彼の計画（!?）は進行していたのであった。

「デビューした当時から自分で作りたいっていう欲求は強かったんだけど、なにせコードがわからない、キーボードは弾けない、いったいどうやればいいんだっていう状態だったから（笑）。もう、ただただ頭ん中のメロディをテープに入れて、鼻歌みたいな感じでラララなんて歌ってたんです。メチャクチャな英語でコード進行なんて無視してましたね（笑）」

――少しずつ曲作りのコツを覚えたという感じ？

「そうですね、少しずつだけど自分なりのやり方を、失敗しながらもやり続けてた。で、今はバンドのメンバーをパートナーに引きずり込んでデモ・テープを作ってるんです。一緒に作ってるっていうか、オレの中にあるものを引っ張って表に出してくれるんですよ。ここはこうした方がいいよとかアドバイスもしてくれるし…、ホントにパートナーって感じ」

――オリジナル第一号作品はいつ頃作ってたの？

「デビュー当時だから…もう3年くらい前。これがもうスゴイのなんの!! 悪いけど人には聴かせらんないくらいスゴイ（笑）。とんでもないメロディなんですよ、これが。今も部屋のどこかにテープはあると思うんだけど、恥ずかしくって自分でも聴けない（笑）」

――ハハハッ。で、今やってるアルバムには、あれから3年の月日を経て、実力のついた作品がついに収録されるという。

「やっぱり嬉しいですね。2曲入るんだけど、自分で言うのも照れくさいけど、2曲共すごいイイ曲なんですよ」

――実感わいてる？

「もう大変!! でもこれがまた歌詞カードに作曲・池田政典なんて印刷されてるのを見たら、もっと実感わくんだろうけど」

――作曲はいつも家でやってるんでしょ？

「キタナイ部屋でね（笑）。山積みされたCDにうずもれたベッドの上でいつもやってるんです」

――ギターで？

「ええ。足のふみ場がないから必然的にベッドの上に避難するしかないんだけど、なんか落ち着くんですよね、ベッドの上って。で、ウダウダとギターを弾きながら、カセットをまわしながらやってるんです。ダレてくるとギターをかかえながら寝っころがったりしてるけど（笑）」

――リラックスしてるって感じじゃない（笑）。

「今夜は曲を作るぞ、なんて頑張っちゃう時って絶対にできないんですよ。なにげなくボーッとしてたり、適当にギターを鳴らしている時の方がいいメロディが浮かんでくる」

――今回の2曲もそうなの？

「うん、もとになる、まだまだ未完成のメロディなんだけど、2曲ともベッドの上で作った曲ですね。で、それをメンバーと一緒にひとつの形にしていくの。でもメンバーの家にはあるていどの機材が揃ってるんだけど、遠いんですよねぇ。千葉なんですよ。それだけが難点と言えば難点。夜中に行って朝までやってそれから家に帰ると身体ヘロヘロですもん（笑）」

――でもガンバッちゃうんでしょう。

「自分の曲だからね。カワイイんですよ、やっぱり。どんな風に育って大きくなってくれるのか生みの親としては気になるもので（笑）」

――生みの親!?

「そうですよォ。子供の成長を楽しみにしてるんですね、これが。で、この曲たちがレコーディングされたり、ライヴでみんなに聴いてもらえるようになったりすると、ひとまわりもふたまわりも大きくなってくれるんですね」

――ホントに親みたいな発言してるね。

「自分でも不思議なんだけど、結局曲にしても、詞にしても、自分で書くってことは自分の中から生まれてくるって感覚なんだなって。特に今回は自分で書きためていた時以上にみんなの前で発表されるわけだから緊張もするだろうし、もっともっといい作品を書きたいという欲求も生まれてるし。親としてはもっとしっかり自分が何を歌いたいのか、どんなサウンドを演りたいのか、もっとしっかり自分の中でわかっていなくちゃいけないって思ってるんです」

――4thアルバムは10月末発売予定だから、ちょっと先の話だけど……。

「ライヴでは新曲を演ろうと思ってるんです。夏のイベントもワンマンも次のアルバムへの予感を感じてもらいたいなと思ってて。まだずいぶんと先のリリースだけど、すごくカッコイイアルバムだからってことだけは保証するから」

インタビュアー／松浦靖恵
撮影／松崎信彦（本誌）

構成／渡辺孝二（本誌）
撮影／堤あおい

川村かおり

ヨーロッパの旅から得たものは何か?

ロンドン▽西ベルリン▽スペイン▽ローマ、また、かおりは成長したね——。

今月はかおりの旅の話をするね。6月11日から約1ヵ月、ロンドン、西ベルリン、スペイン、ローマと回ってきたんだ。目的は高橋研さんと作っているセカンド・アルバムのミックスと、ビデオ撮影のため。

最初はロンドンのエアースタジオでミックス・ダウン。ここは『ZOO』の時も使ったんで、一年振りとはいえ、ガードマンも電話交換手のお姉さんも覚えてくれてて、よく来たねって歓迎してくれたし、ミキサーのスティーブもスタジオにはいったとたん「ワーオ!」って（笑）。このスタジオは相変わらずプリテンダーズとかミック・ジョーンズとか有名どころが使っていました。ミックには会いたかったんだけど、会えなくてね。研さんは会えて「ただのオヤジだよ」なんて言い方するんですよ（笑）。

ミックス・ダウンにはかおりはあまり立ち会う必要なかったんで、すぐビデオ撮影にはいりました。ビデオは4ヵ国で1本づつ撮った。

前回はシベリアの氷原で凍死しそうになったけど、今回もあぶなく死にかけたんですよ!今度は落馬……。

ロンドンから車で3時間かかって森の中にポツンとある、私の高校に行って、そこで馬に乗ってるシーンを撮ったんだけど、猛スピードで走ってる時に……落馬したんですね。落馬すると、フツー、骨折るか、死にます。たいてい片足がはずれなくて引きづられたりとか、落ちた瞬間に馬にふまれたりとか……足あたりだったらまだいいけど、おなかふまれたら内蔵ハレツ。

この時は足がきれいにスッポリ抜けた上に、腰から落ち、かおりも瞬間的に草によけたから奇跡的に踏まれなかったですよね。落ちる瞬間が3秒も4秒もあったような感じがする。瞬間のハズなんだけど、いろいろ考えてた。"これで踏まれたら死ぬな……お願い踏まないで!"とか、"死んだら、雑誌なんかで「2枚目のアルバムで終る」とか載るのかなぁ～"なんて（笑）。

落ちたあと何分かまっ白で何も見えなくて。かおり、森中にひびき渡る大声あげたんだけど、泣かなかった。みんなに迷惑かけるからね。まっ青な顔をしながら、ギャグを飛ばしていたらしいよ。その後の馬の顔が忘れられないね。「ゴメンネ」って顔でずっと見てんの。この馬はかおりが学校に行ってた時に、乗馬クラブで乗ってた馬だったんで、8ヵ月ぶりに会って、あいつとの友情もまた深まったかな。帰り道、馬をなでながら「気にしなくていいよ」って言ってあげたんだ。

▼ベルリンの壁

西ベルリンといえば東西を分ける壁だけど、イメージしていたのとは違ってた。「スイート・リトル・ボーイ」の世界のように、こげ茶色のきたなくて、すごく高く、相手の声も聞こえるようなうすい壁をイメージしてたんだけど、実際はブ厚いコンクリートでできていて、パルコの壁のように、メッセージがカラフルにアートされていた。そして、こちら側の壁があって、その先20mぐらい何もない空間があって、その次に東側の壁があるんですよ。そっちはまっ白で間に見張り台があって、東の兵隊がこっちを双眼鏡でのぞいてる。昔はひとつだったでしょ。だから、大通りとか線路とか川が、いきなり壁で分断されてたりする。とっても不思議な光景。

西側に、東側から逃げようとして殺されてしまった人たちの十字架が飾られているの。それを見ていったら一番新しいのが1989年2月6日。2月なんてかおりが東京でノホホンとしてる間に、生死をかけて自由にあこがれた人がいたんですよね。

その日、街にパレードがあって、西側を守ってるイギリス、フランス、アメリカの戦車が、とぎれるすき間なく何10台も走っててね。すぐ近くで戦車の地響きを受けながら、何が悲しいのか分からないけど、かおりは涙を流してました。

▼スペイン・生と死

スペインでは闘牛を見た。最初は残酷だなと思ってたけど、ここでもかおりは認識を改めました。野外の広い円形劇場の満員の客の前で、大きな牛と小さな人間が、五分五分の気合を入れて闘い合う。やっぱりそれは美しいなと。男のロマンだし、闘牛士が少年達のあこがれの的だと言われるのも分かるような気がした。

▼ローマの休日

ローマでは、古代の遺跡で撮った。トレビの泉とかにも行ったんだけど、ほとんどが8月の観光シーズンに向けて工事中。コイン投げようと思ったら水がないんだもん（笑）。

ローマの街は古代の遺跡をすごく大事にしてる。道がちゃんと遺跡をよけて作られてるんですよ。街中にそういう遺跡がいたるところにあるから、ふと今はいつの時代なんだろうって錯覚におちいってしまう。

旅は好きです。

旅へ出るたびに、旅へ出る前の自分に、プラス・アルファで新しい要素の加わった自分になっている。

旅から帰って、歴史の本や年表をみて思ったんだけど、年表はそこで切れていても、今も続いているんですよね。みんな誰でも歴史上の人物なんだ。そんなこと考えていたら、自分が地球で生きてるってことに胸張れるなって。

▶かおりのＦＣ『KAORI KIDS CLUB』が出来たゾ。入会希望者は住所・氏名・年齢そしてKAORI KIDS CLUB入会希望と書いて62円切手を貼った返信用封筒を同封の上《〒151渋谷区代々木1-10-1第2ライオンズマンション202「KAORI KIDS CLUB」入会希望係》まで送って下さい。

ああ、"イカ天"中毒‼

TBS平成名物TV6代目イカ天KING

JITTERIN' JINN

11|23㊍日本青年館

OPEN 17:30/START 18:00/全席指定¥2,266(税込)　8|6㊐一斉発売

チケットぴあ03(5237)9999／チケットセゾン03(5990)9999／丸井チケットガイド03(363)9999／CNプレイガイド03(257)9999

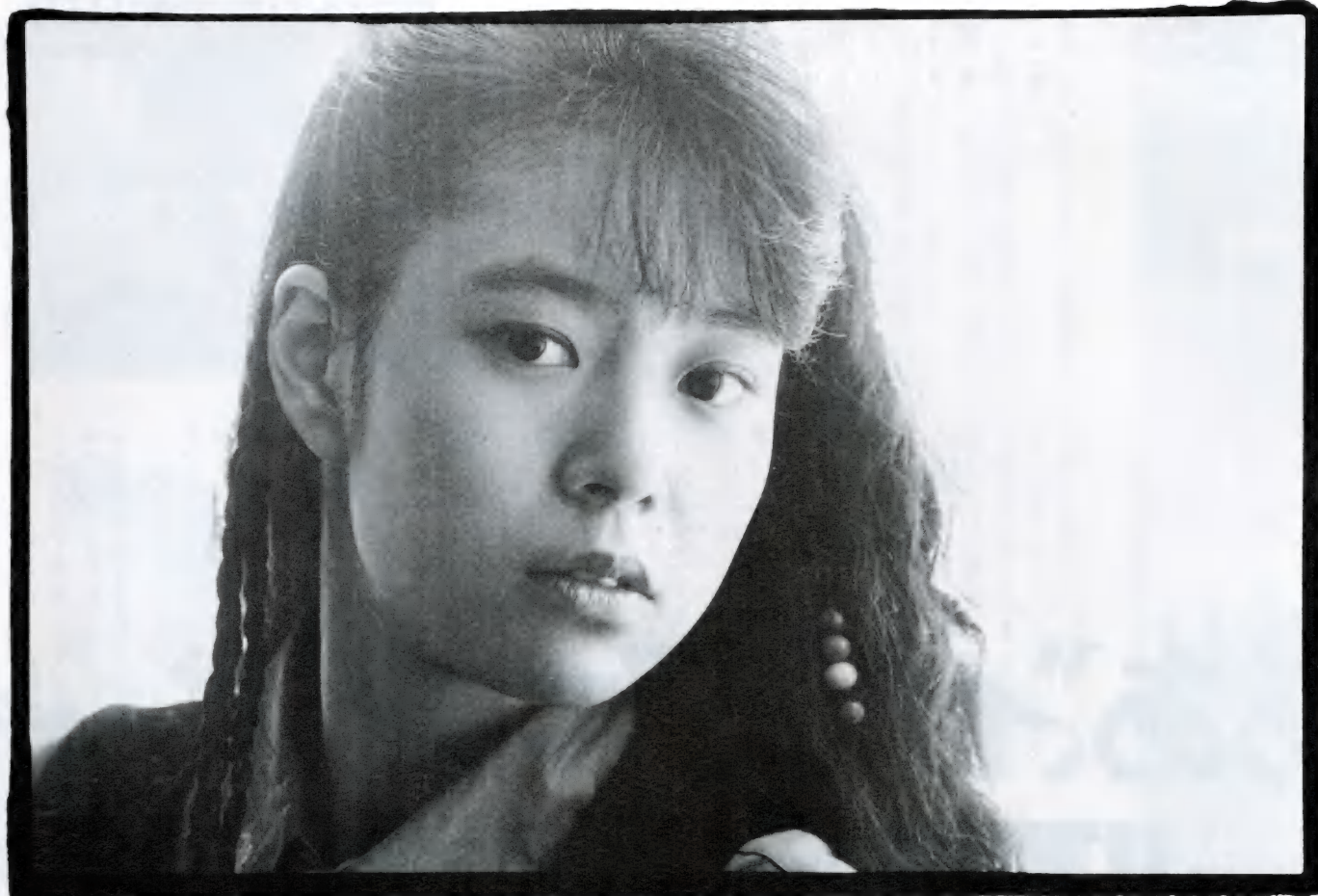
春川玲子(Vo)

破矢ジンタ(G,Vo)

浦田松蔵(B)

入江美由紀(Dr)

仲村知夏

インタビュアー／紺持人
撮影／植田　信

大きな可能性を秘めた18歳、今しか歌えないROCKもある。

「もっと作曲や作詞にも挑戦したい。やりたいことがどんどん増えてるから…」

デビューを目指してチャンスをうかがっている連中が今たくさんいると思う。バンドで、ソロで、そしてアイドルで――。

チャンスは全員に平等にあるとは限らない。ましてや、グレイトなラッキーには、めったにお目にかかれない。

ずっと思い続けたひとつめの夢を今、やっとかなえてスタートラインについた女の子のロッカーがいる。

仲村知夏――彼女は16でデビューして、そしてずっとロックする事を願い続けていた。いくつかのチャンスとラッキーを彼女の情熱は手ばなさずにいた。

氷室京介、吉田建、ホッピー神山、De―LAX、ロッカー達の協力を得て、彼女はようやく思い続けた自分自身のスタート・ラインにかえってきた。

＊　＊

――まず年齢と出身地を教えて。

「18歳になったばっかり。生まれたのは沖縄です」

――デビューのきっかけっていうのは何。

「ずっとね、歌いたいって思ってたんだ。だけどね、もう子供の頃から沖縄だったから、なかなかチャンスっていうのがなくって。待っててちゃだめだなって事で、まず歌とかダンスとかアナウンスとかのスクールに入ってレッスン受けて……少しでもいいから、そういう機会のありそうなところでまず活動を始めたっていうか――そこのオーディションで入賞できたのがきっかけ」

――やっぱり沖縄に住んでると、東京っていうのは遠かった。

「うん、遠かった。距離とかじゃなくてね。もう、情報とか何もないから、レコードを出すとか、デビューするとか、そういう世界はすごく遠いって思いました」

――東京へ出ていって、まず始めようとかは思わなかったの。

「だってまだ中学生だったもの(笑)」

――あっそうか。で、そのスクールってどんなところだったの。

「レッスン受けてる人はすごくたくさんいて、歌とか芝居とか――あっ、あと話す事のレッスンもあった」

――何だそれ?

「もちろんアナウンスとかってクラスなんだけど、標準語の練習をしたりね。私は歌のレッスン」

――どんなレッスンだったの。

「ピアノの前で発声とか、そういうのじゃなくて、もう基本的には自由。歌いたいナンバー持っていって勝手に歌うの。それで変なクセとか、発声とかをチェック受けるってスタイルで――すごく自由だった」

――でも、それなりに厳しかったんでしょ。

「受ける方の気持ちの問題もあるかも知れない。けど――すごく自主的だったから、私はキビしいってあまり思わなかった」

――プラスにはなってる?

「うん。最近特にそう思う。なんとなくって事じゃなくて、ちゃんとやってきたっていう自信にもつながってる気がするし」

――あっわかるなその感じ。好きな歌うたってって事だけど、影響受けたアーチストとか、このシンガーの歌よくうたったって人とかいるの。

「影響を受けた人っていうのは具体的にはいないと思うけど、やっぱり土地柄かいつも洋楽がまわりにあって、そういうのには何か影響受けてるかも知れない」

――今さ、土地柄って言葉出たけど、沖縄って何か独特な雰囲気あるよね。

「どうかな。私から思うと、ただの田舎って気もしちゃうけど(笑)」

――今『Aサインデイズ』って沖縄舞台の映画とかつくられててさ、文化とか、音楽とかにすごくオリジナリティがあるように思うんだけど。

「本土から入ってくるものじゃなくて、アメリカから入ってきたものとか、そういうのにパワーがあったりはするのかな」

――ライブハウスとかはどうなの。

「本物だなみたいな人が多いな。すごくエナジーがあるとか、歌にしても楽器にしても、きちゃってるっていうか――」

――今あるバンドブームとかはどうかな。

「よくわからないけど、これは私も含めてだけど、テレビとかじゃなくても、やっぱりツアーとかで、どんどんコンサートで沖縄へも行くと伝わるんじゃないかな。ただ、すごくオリジナリティを見る人が多いから、ハンパじゃ無理かも知れない。かっこうだけとかじゃないところをすごく見られそうな気がするから、かえってこっちが勉強になるかも知れない――」

――なるほどね。今、ツアーって事出たけど、またライブハウスでのツアーが始まるね。

「ええ。すごく楽しみなの。初めて東京へ来て歌ったのがコンベンションとかで、最初はすごく嬉しかったのね。でも、青年館でオムニバスでアイドルって人達とやったあたりから絶対これじゃないって。去年からはエッグマンとかマンスリーではじめて――今年は地方にも行けるし、バンドのみんなともうまくいき始めたのが自分でも分かるし――楽しみ。やっぱり今は反応がすぐに伝わってくるスペースが一番楽しいな。だからこれからはもっともっとマイナーっていうか、狭いライブ・ハウスでもやって行きたい」

――新しいアルバムのナンバーでまわるの楽しみでしょ。

「もう最高。デモ・テープで驚いて、歌入れて大満足で、ライブアレンジに直すとまたいろいろ発見できて。自分でつくったやつも、考えてたより良くなっちゃうし――どんどん試していこうって思ってるな、今はすごく」

＊　＊

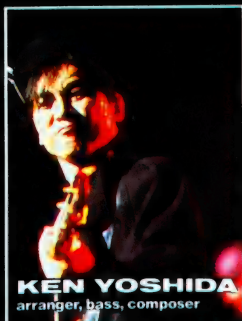
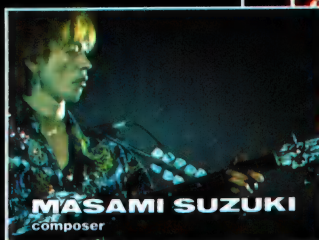
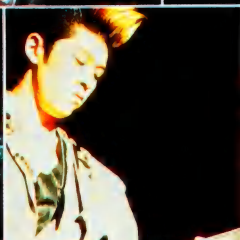
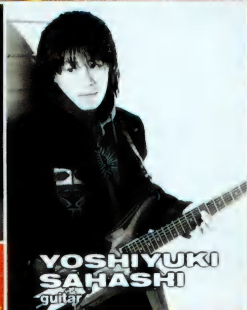
16歳でデビューして、18歳になった彼女。

彼女の夢のカタチとユクエを確認したいと思う。これからは詞や曲もどんどん創りたい、立ち止まっていたくないと言った彼女。仲村知夏のビートが、ライブハウスではじける事を、僕はすごく楽しみにしたい。

NEW ALBUM 8・21 ON SALE

CD: 292A-46/税込定価 ¥3,008 (税抜価格 ¥2,920)
MT: 256T-46/税込定価 ¥2,637 (税抜価格 ¥2,560)

chika nakamura

STREET ANGEL

ロッカーは、彼女を指名した！

17歳から18歳へ。もっとも敏感で繊細な時期に
彼女は夢の始まりへと踏み出した。
より自分の感受性に近い場所へ、
素直な自分へ──。
そんなひとりのヴォーカリストを「彼ら」が耳にとめた。
彼女の夢の始まりと重なり合う形で、
ひとつのロックン・ロール・ドリームを描いた。
これがはじめのいっぽ。
彼女はロックを歌ったのではなく、
自分へいっぽ踏み出したのだ。
まだほんの18歳、
ロックはあとからついてくる。

NEW SINGLE NOW ON SALE

天使は眠っている

作詩：森正和
作曲：氷室京介
編曲：吉田建

CD:091X10009/税込定価 ¥937 (税抜価格 ¥910)
MT:091S10009/税込定価 ¥937 (税抜価格 ¥910)

RADIO/(SUN.) ON AIR !!
FM富士：毎週日曜23:00〜23:55
〔仲村知夏のBEAT KIDS NIGHT〕

●発売元
キングレコード株式会社

世界の中心で愛を叫んだけものたち

De-LAXの2ndアルバム『NEUROMANCER』が8月2日に発売された。5人のアイデアとパワーが結集された、密度の高いアルバムに仕上がっている。De-LAXの近況と新作を語ってもらった。

去年僕は彼らのライブは強いと書かせてもらった。

こだわり続けるスタンスとスタイルを武器に、彼らはアッという間に自分達の居場所をシーンの中につくってしまった。

バンド・ブームといわれる最近。ロックっぽい、そしてアイドルっぽいバンド達がひしめきあう中で、彼らはきちんとロックンロールをくり返しながら、他とは違う本物の香りを確実に身につけ始めている。

5人で居る事がDe-LAXさ。

よく語られるパターンではあるけど、僕は彼らDe-LAXだけは、本当にこの5人だからこそやりとげていける数々の可能性を持っていると思う。

他とは違うどこかで、彼らは輝き始めて、そしてその可能性の具体化、2ndアルバムを僕達の前にたたきつけてきた。

一曲目の「SPIRITS A GO-GO」から、彼らのシーンを無視したオリジナルなスタイルがはじけとぶ。

札幌のイベント帰りの彼らをつかまえた。

——久しぶりで……元気でしたか?

全員 イェーッ(いきなり大盛り上がり)。

——札幌のロックサーキットはどうでした?

マコト 地方での大きなイベントは初めてだったんだけど、もう一曲目からスゴクてさ。楽しかったよ。

マサミ いろんなタイプのバンドがいるんでこっちも楽しめたな。笑えるのもあったし。プライベーツとかスゴクかっこ良かったな。

——確かに今年の札幌は沢山バンド出てたみたいだよね。で「負けるもんか」みたいな意識ってあった?

宙也 そういうのはなかったなァ。どこでも自分達は自分達だし……。

京極 良いステージはできたと思いますよ。もう少し時間ほしかったけど。もっと演ってたかった。

——オフステージでもまた盛り上がっちゃったんでしょ。

マコト そんな事ァないよ。

京極 ウソでしょそれ、まことさん(笑)。

マサミ そうだよ。まこっちゃんまた某バンドのドラマー呼びつけて説教始めたッ。

マコト ………。

——あっ、そっちのパターン行きましたか(笑)。と、まぁいうところで、イベントでは新曲もやったの?

宙也 うん。何曲かやった。ま、良い意味でイベントだしって事で自分達のノリの確認の意味も含めてね。

——どうでした、自分達の反応は。

ヒデキ レコーディングしてた時からこうかなって思ってた以上に、自分達にもガンガンきたな、スゴイッすよ(笑)。

——でね、そのレコーディングだけど、今回は全部新曲じゃない、アルバムって。前作はさ、ライブで演り続けてたナンバーも含めての作品だったわけで、そのへんでも意識的な違いとか、プレッシャーってあった。

マサミ プレッシャーはあんまりなかったけど、この5人でDe-LAXですよって奴にしたかったからさ。そのあたりはすごくうまく行ったんじゃないかな。

ギリギリまで遊んでたまったアイデアをバッと

——選曲していく段階のあたりの事聞きたいんだけど、De-LAXって全員曲書くじゃない。まずは個々でテープを作って行く時、何かこれといった意識はそれぞれにあったのかな。

ヒデキ 僕としてはとにかく音数の少ないソリッドなナンバーを創っていこうって思ってた。そういうのがDe-LAXに必要とかって事よりも、すごく個人的な希望で今回は創ったかな。

宙也 俺はさ、全体像とか詞とかね、そんな事考えながらやってたんだけど、曲作ってくレンジに今あんまりストック多くなかったしね。けっこう今回は皆にまかせた的なところがあったね、うん。

マコト 俺は曲創りってあんまり自信ないんだよね。マサミにしろヒデキにしろすごいメロディメーカーだなって思うし、こりゃ勝てねーなって(笑)。けどまぁ、トライして行くうちにこれは良いって自分で思えるのができたらラッキーじゃん。トライは続けます。

マサミ 今回俺はさ、曲出しの日、締め切りギリギリまですごく遊び歩いてたわけよ。どういうの作るって事よりもグッてたまったアイデアを短期間でバッて出して瞬発力っていうかさ——。

——そういえばヒデキ君が「なんでマサミさんってあんなに遊んでて曲できるんだろう」って言ってた(笑)。

ヒデキ 言ってないっすよ、そんなこと

De-LAX

インタビュアー/紺 待人　撮影/岩切 等

（笑）。ただ、曲創り始めてすぐの頃、マサミさんとこ行ってアイデアとか話してさ、いや、すごい人だなと――。

マサミ　ホントかよ（笑）。

――京極さんは。

京極　僕の場合は根が暗いもんで（大笑い）。結構普段からちょこちょこ一人であ作業して曲創っててさ、今回は残念ながら入らなかったけど、その分レコーディングでふっきれてやれましたから・・・。

マサミ　そうだよね。京極一番きてたでしょ、今回。

――そうそう。だからさ、今回ってプロデューサーが途中で病気しちゃったからマサミさんがプロデューサー的に動いてたじゃない。そういうわけでバラバラに30曲以上も曲あって、それを一枚にまとめてくって結構大変だったんじゃない。

マサミ　どうかなって少し思ったけど、ある意味じゃこれがDe-LAXのファーストってところあるじゃない。さっきもいってたけど全部新曲なわけだしさ。でも去年沢山ライヴこなしてく中で個々の個性ってすごくもうよくわかってたからさ。だから思ったんだよね。この5人だからこそって部分が出れば勝ちだなって。曲のバリエーションが広がっても音の粒のバランスさえまちがえなければ、それはすべて俺達5人のものだからさ、確実に――。

京極　今回は僕もすべてクリアな精神状態だったな。無駄な音入れたりとかして考えずに〝ここに自分のこれがはまる〟みたいなさ。

マサミ　ねっ、やっぱり京極、今回変ったよ、すごく。

京極　気持ち良いしね、今すごく。

酸欠で倒れないように ライブには体力をつけて来い

――というわけで、いよいよツアー始まるわけだけど、パワーステーションでの5回ウィークリーも含めて、またライブハウスでやるって事に結構こだわりあったの。

宙也　こだわりっていうかさ、ねっ。

マサミ　ホールでやりたくなったらもちろんやるだろうけど――。

宙也　何ていうかさ、俺はすごく混沌とした感じって好きなのね。たとえばホールとかで今やったとしても、すごく整理されちゃってるのが結構嫌なんだ。この間も渋谷公会堂へ日本のバンド見に行ったんだけど、お客さんがすごくアイドル・コンサートのりしててさ、みんな反応が一緒なんだ。で制服着た警備員がいてさ、なんだかシステムの上ですべて順番、台本通りみたいな感じ。何だかあいうのって何も生れてこない様な気がして怖い気さえするよね。もっと皆勝手で良いと思うし。俺達なりの空気みたいなのがさ。

ヒデキ　確かにそうですよね。うまく言えないけど「感じ」っていうか感覚的な事ってすごく大切にしたいし――。そういうのがここのところすごく粗末にされてる気がする。

マコト　俺はね、ライヴハウス大好きなんだけど、何にしても来る奴には体力つけて来いっていいたいよね。皆酸欠で倒れすぎだ（笑）。

マサミ　そうだね。それはあるよね。せっかくそれなりのお金はらって来てくれてるんだもの、もったいない。

マコト　まぁ勝手に倒れてんだから結局しょうがないんだけど――。

――あんまり宣伝してく事じゃないんだろうけどさ、確かにMZAとかでやってもあれだけの人数が倒れちゃってさ。KOバンド日本一かも知れない。

宙也　でもパッてステージの上で我にかえっちゃうのは俺としてはつらいな。何かすごく現実にかえっちゃう。

――ホールでのコンサートの予定は？

マサミ　一応まぁ考えてるけど――。

京極　その前にパワーステーションあるし、今そっちで頭いっぱいかな。

ヒデキ　だってパワーステーションの最終日（8月31日）は男オンリーなんだもん。色気ないっすよ（笑）。

＊　　＊

と、いうわけで僕達はインタビューの後飲みにでかけた。

楽しい夜だった事はいうまでもないんだけど、パワーステーション見に来る様に書いとけよといわれて調べてみると、すでに全ての日がソールドアウトとの事。やれやれ。

彼らのライヴは楽しくて強い。おまけに今彼らは大きな自信と確信の上に立って皆をすごく会場に誘っている。

今後ライブハウスでは、ホール展開した後もやりたいと言っていた彼ら。けれど同じステージはいつだって2度とない。今、彼らを体験する事は、すごく大切な事だと、僕も今、自信を持って言える。

De-LAX

De-LAX

好評連載 De―LAXのロック・クレイジー対談──第二回

構成／司 透 撮影／植田 信

京極輝男 vs 土屋昌巳

京極「自分をコントロールすることって、大切なことなのかなあって最近思ってるんです」

土屋「大事だよね。人から何を言われようがボーッとしてるとかね（笑）」

VS TSUCHIYA

先月号からスタートした『De―LAXのロック・クレイジー対談』。早くも大反響を巻き起こして"次は××さんと○○さんの対談をして"なんてハガキがバンバン編集部あてに届いてるゾ。みんなの意見も参考にしてナイスな人選をしてゆくんでよろしく。さて、第2回目は京極輝男サンの御指名で、土屋昌巳サンとの対談が実現した。

京極にとって土屋昌巳とは「ずーっとファンだったんですよ」という、あこがれのミュージシャン。ソロになる前の一風堂、もっと古くは大橋純子のバックバンド"美乃家セントラルステーション"時代からのシンパ。でも、顔を合わせて話したのはこれが初めて。最初キンチョー気味の京極サンだったけど、いざ対談がスタートすると、すぐに打ちとけ、話がどんどんはずんでゆく。よほどお互いのバイヴレーションが合っていたんだろう、終わった頃には、10年来の友人のような2人になっていた。

ちなみに、9月1日に土屋昌巳のニュー・アルバム『TIME PASSENGER』がリリースされる。その話題も含め、対談は最近の音楽事情から環境問題まで幅広く展開した。

京極 土屋さんの新作の中の、エジプトのヴォイスを使った曲（「太陽とラムセス」）を聴かせてもらって思ったんですけど、歌とか声とかっていうものは凄くリズミカルなものなんですね。

土屋 それは、もの凄くそうだよね。

京極 僕は民族音楽が好きなんですよ。'80年ぐらいにニューウェイヴが流った頃トーキング・ヘッズがアフリカン思考だったんで聴きだしたんですけど。最初はアフリカン・ビートとかカリンバの後に載ってる声を、変な音階だなって思いながら興味半分で聴いてたけど、最近は全然変じゃなくなってきて、一番当り前だっていう感じがしますね。喜びとか悲しみとかを全部凝縮して歌ってるわけでしょ、凄いなーって思いますよね。

土屋 ロックの本質的な答えっていうのが一番出てるのがアフリカの音楽なんだよね。音楽の〈アティテュード・姿勢〉っていうものが、なぜ歌うのかっていうものがそこにあるんだよね。いまはいろんなバンドが出てきてその辺が変わってきちゃってるでしょ。みんな先に商品になることを考えちゃう。イカ天の審査員をやってる時にも"商品になろうとしてる"っていうのが見えて悲しくなったのね。

京極 なんか妙なフット・ワークの軽さを感じますよね。

土屋 やっぱり、なぜギターを持つのかっていう姿勢・アティテュードだよね。僕がなんで本質的な部分で民族音楽から離れられないかっていうと、そこへ行くとすごく反省しちゃうからなの。自分のやってることが"だからどうした"になっちゃうの。それと、これは少し危険な発想だけど、あの人達は自分が願う以外の人に聴いてもらおうなんて意識がないんだよね。そこがすごく大事なんだよ。

京極 たぶん自分のためですよね。

土屋 うん。自分のため、家族のため、食べるため、恐怖のため、たとえば恐いから歌っちゃう、歌うことで救われるとかね。それをまた、世界中の人に聴いてもらおうなんて全然思ってない。

京極 だからアフリカの音が好きだって言っても、自分の中に入ってくる音が好きなんであって、それをどうこう分析しようなんて全然思わなくなってきますね。

「好きな部分があったら、同じくらい嫌な部分があるはずなんだよね」（土屋）

土屋 それはすごく深いんだよね。僕も前は、自分の好みとかを選択とかすごく大

KYOGOKU

事だと思ってたけど、まだ選択してるうちは青いんだよね。これはすごく誤解招くんだけど真実だと思う。だから全体を見られるようになるといいなと思うね。恋愛にたとえるとすごく簡単で、好きな部分があったら同じくらい嫌な部分があるはずなんだよね。その両方を同次元で捕えて、全体の中で本当に愛してるかどうか判断できるわけだし、それが僕の理想だし真実だと思う。音楽だって同じで嫌いなものの中にも絶対にいいところはあるはずだし、なんで嫌いなのかって考えればもっと深いところへ行けるしね。

京極　嫌いなものって、実はその存在が自分の中で気になってるからなんですよね。だからそいつは存在してるんですね。話はかわりますけど、昔から土屋さんの音楽を聴いて思ってたんですが、土屋さんの中に大地とか自然とかありません？ 特に、水を感じるんだけど……。

土屋　すごくある。水はね、小さい頃から河とか海が好きだっていうのもあるんだけど、いまはなんで水や河に固執するのかっていうのがだんだんわかりかけてきてる。たとえば今回のアルバムにこじつけちゃうと、『TIME PASSENGER』っていうのを自分なりに訳すと〝時間の乗客〟っていうか、人間は過去から未来に移動している何かの上に乗っかってる旅人でしかないっていうことなんだよね。で、その辺を説明するおもしろい話があるんだけど、ある国の偉い人がパリの美術館を回ってるときに大きな骸骨を指してこれは何だって聞いたんだって、そしたらナポレオンの頭蓋骨だって答えた。しばらくすると今度は小さな骸骨が出てきて、またこれは何だって聞いたら、それはナポレオンの子供の頃の頭蓋骨ですって答えたんだって（笑）。でも、それはありえないわけじゃない。つまり過去って物理的には存在しないんだよね。時間もそうなんだね。流体なんだよね、時間って。手に取れないし、眼に見えないし、でも存在してるわけだし、それがあって初めて僕らがいるわけだし。で、それに一番近い存在が水じゃないのかなあって気がする。水と時間がないと人間って存在しないし、それを否定したり嫌いになったりしたら自分を否定することのように思えちゃう。だから、僕にはいま恐くてとてもいとおしいものだよね。たぶん人間の機能も、水が悪くなるとどんどん悪くなる。だから大変だよね水が汚れていくのは。

京極　環境破壊っていうのはすごく大変ですよね。先日、ロンドンへ行ってきたんですけど、ロンドンって凄く緑とか公園を大事にしてるでしょ。いまのロンドンにはそれほど興味なかったんだけど、フォトセッションでメンバーひとりひとりのショットがあった時に、僕は丘があって湖か池があって橋があるとこがいいって言ったんですよ。そしたら、そういう場所へ連れてってくれて、地名は忘れちゃったんだけど、凄くいいんですよ。それに、今年は異常気象で暑かったから、テムズ河の河辺で日光浴してる人とかたくさんいて、その人達がきったないラジカセから流れてる曲に合わせて陽気に歌ってるんですよね。それを見た時に外国だなーって思ったのと自然を大事にしてるなーっていうのを感じたんですね。

「ツアーで地方に行くと、そこの名所へ行ったりするのが好きなんです（笑）」（京極）

土屋　やっぱり、いまイギリスで何がお勧めかっていったら名所旧跡だよね。

京極　そう。そういう伝統の力って凄いですよね。

土屋　パリに行くともっとショックを受けるし、エジプトなんか行くと立ち直れないけど（笑）。日本の文化が凄いとか、日本国民が優れてるなんて誰かに暗示をかけられたりしてるけど、とんでもないよね。だってチョンマゲ結って人を切ってた時代に、法律とかちゃんとあって人権が守られてたりとかね。特にエジプトなんて三千年後の人類が興味を持つことを知ってて、自分達のことをちゃんと明記して三千年も残るように作ってるわけでしょ。だから、いろんな事を考えたり、細かい事を気にしててもダメみたいね。

京極　そうですね。でっかい公園に行った時に、ハアーってふ抜けの状態になってるのが一番いいなーって思った。なんにもないんだけど凄く暖かいんですよね。

土屋　そこで凄く大事なのが、自然の中で自分の存在を確認できることなんだよね。で、ひとりだっていうことが凄くわかるじゃない。その時に何を見て感動してるのかとか、自分の本質っていうと大げさだけど、分析しやすいよね。音楽の話に戻すと、いまはいろんな人がいろんなことやってて、いっぱい情報があって、誰見てもカッコ良く見えるじゃない。で、そういうものと照らし合わせて自分のものもチョイスしちゃうじゃない。カッコイイなって思ったバンドがあったら、楽器は何を使ってるんだ、音は、エンジニアはって、きつい言い方だけどそうやって自分達の音楽を作ってるのが現状じゃない。でも、本当はそうじゃないっていうのがよくわかるのね。ヨーロッパからなんでとんでもないアーティストが周期的に出てくるかって言うと、やっぱり照らし合わせてる対象が自分自身だからなんだよね。そこの差は凄く大きいね。そこがもう一歩、ワールド・ワイドに行けない理由だよね。だから、自分を作品に照らし合わせていく、それこそライフ・イン・ミラーズですよ。

京極　なるほどね、そういう意味でも自分をコントロールすることって大切なことなのかなーって最近思ってるんです。ムリするときにはムリしても、何もしないときはしないとか。

土屋　大事だよね。人から何を言われようがボーッとしてるとかね（笑）。変な話だけど、リハーサルってあるじゃない、あれ絶対に気を入れちゃダメなの。スタッフに迷惑をかけない程度に気を抜くの（笑）。これは歌舞伎の猿之助さんに聞いた話なんだけど、あの人は出番の5分前位まで寝てるんだって。会場をいつも裏にホテルがあるとこにして、その部屋で寝てて。ギリギリにバーっと走って来てステージに出る。そこまでは気を抜くんだって。で、リハーサルで出しきって、一回集まった気が抜けちゃうと6時間たたないと戻ってこないんだって。

京極　なるほどね。さっきの名所旧跡じゃないけど、僕は日本でもツアーで地方へ行くと、そこの名所へ行ったりするんですよね。周りは観光好きだってバカにするけど、でもその間は何も考えないで頭カラッポにできるからいいですよね。コンサートのことも考えないで済むし。

土屋　名所はいいですよ。だって、何百年もの間いいって言われ続けてるわけだし、途中で飽きられるようじゃ名所にならないんだから、名所に関しては疑っちゃダメ（笑）。だから、コンサート前の名所めぐりはいいよね。

京極　そうですよね。これは続けよう（笑）。

S-VHS 高画質S-VHSビデオソフト、続々登場。

星の王子ニューヨークへ行く
PSF-1006

ミラグロ・奇跡の地
USF-1005

プレシディオの男たち
PSF-1005

カジュアル・セックス?
USF-1004

クロコダイル・ダンディー2
PSF-1004

ニューヨーク東8番街の奇跡
USF-1001

危険な情事
PSF-1003

アンタッチャブル
PSF-1002

ビバリーヒルズ・コップ2
PSF-1001

■ドラグネット/正義一直線 USF-1003 ■ゾンビ伝説 USF-1002 ■ブルースが聞こえる USF-1006 ■結婚の条件 PSF-1007 8月16日発売 ■ミッドナイト・ラン USF-1007 9月22日発売

各¥14,830(税抜)
発売元:CICビクタービデオ

いこかもどろか
税込 ¥15,275
税抜 ¥14,830
SVM-2
発売元:TBS

ザ・ガッド・ギャング デジタル・ライブ
税込 ¥9,672
税抜 ¥9,390
VAS-0068
発売元:ビデオアーツジャパン

快盗ルビイ
税込 ¥15,275
税抜 ¥14,830
VSG-384
発売元:ビクター音楽産業㈱

アキラ
税込 ¥11,330
税抜 ¥11,000
BSES-001
発売元:㈱バンダイ

これらのS-VHSビデオソフトのご注文・お問合わせは…
料金無料のフリー・ダイヤル 0120-28-1111(なお、S-VHSビデオソフトはレコードショップ、ビデオレンタルショップでも取扱っております。)

ミュージシャン参加の生活必需マガジン
ARENA37℃
アリーナ サーティセブン

1989年9月号 No.84 定価570円(本体553円)送料76円
発行人＝荒井敏行 編集人＝福島昌実 発行所＝株式会社 音楽専科社
〒104 東京都中央区銀座5—1—7 数寄屋橋ビル5F
☎03—574—0201(代) FAX03(574)8548
印刷所＝凸版印刷株式会社
●万一、製本上のミスがありましたら、お取りかえします

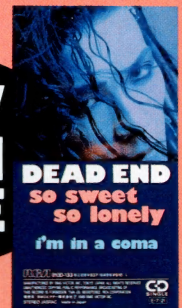
CONTENTS

●アリーナ37°C定期購読のご案内

毎月確実に『アリーナ37℃』をお求めになりたい方には定期購読が便利です。次の要領で実施してますのでヨロシク！
①希望月号と購読期間を明記
②購読期間は6ヵ月、12ヵ月とします。料金は6ヵ月が3420円、12ヵ月が6840円。ご予約期間中に定価改正があった場合も別途請求はいたしません。なお送料は当社でサービスいたします。
③申し込みは必ず現金書留か小為替でお願いします。
以上、①の必要事項をご記入の上、〒104 東京都中央区銀座5—1—7数寄屋橋ビル5F 音楽専科社経理部アリーナ37℃係まで、お申し込みください。

●STAFF

編集＝黒川良、渡辺孝二、梅原祐子、Kenny高橋、金子貴昭、遠藤直子▶表紙撮影＝梶木則男▶デザイン＝塩崎勝利▶フォト＝松崎信彦(本誌)、梶木則男、吉田恒星、大西基、関山一也、植田信、かやばしのぶ、佐志素子▶イラスト＝塩崎勝利、岩下みどり▶協力＝角野恵津子、星野京子、松浦靖恵、佐伯明、山本弘子、中込智子、関根章喜、川村恭子、藤野洋子、藤野ともね、小島智、野口顕、古川裕子、高木一人

DEAD END
9.21 NEW ALBUM
ZERO. ON SALE
CD:R32H-1083 税込定価 ¥3,008（税抜価格¥2,920）
CT:RHT-8604 税込定価 ¥2,637（税抜価格¥2,580）
NEW SINGLE
so sweet
so lonely
NOW ON SALE
DEAD END
so sweet
so lonely
i'm in a coma
CD SINGLE●B10D-133
税込定価¥937（税抜価格¥910）
9.9 SATURDAY・
at 日比谷野外音楽堂
DEAD END
act d.
●開場17:30 ●開演18:30
前売¥3,090
当日¥3,605
問い合せ：バックステージTOKYO
☎03(499)7357
BMG
BMG VICTOR, INC.

NO.84
アリーナサーティセブン
9月号
昭和58年1月20日第3種郵便物認可
平成元年9月1日発行第84号（毎月1回1日発行）
発行人 荒井敏行
編集人 福島昌実
発行 音楽専科社
〒104 東京都中央区銀座5－1－7数寄屋橋ビル5F
☎(03)574－0201(代)

雑誌 01593—9 Printed in Japan 凸版印刷株式会社 定価570円（本体553円）送料76円